Funabashi, Seiichi
Kitamura Tōkoku

舟橋聖一著

北村透谷

中央公論社

序

折にふれて、明治時代の文人のことを思ふと私達はまだまだ、恵まれてゐるのだと思ふ。

一葉も、樗牛も、啄木も獨歩も、みな、若か死だつた。もつとも華かだつた尾崎紅葉でさへ、三十七歳といふのに、もう世を去つてゐる。北村透谷は、更に、それより十年も夭い。貧乏と病苦と失戀は、まるで明治の文人には、つきもののやうである。

私は、數年前、「岩野泡鳴傳」を、脱稿した。泡鳴も亦、貧乏と戰ひ、妻を三度も代へ、四十八歳で、急病で斃れた不遇の文士であつた。透谷は、之に劣らぬ薄倖の人である。

しかし、こんどの作品は、嚴密な意味では、傳記とは、いひ憎い。可成りに、私の創作家としての作用が、はたらいてゐることを、御承知ねがひたい。

殊に、この本を上梓する前、一夜、島崎藤村先生によばれて、麹町の御宅に參上した折、いろいろと、御親切な注意を頂いたことは、私の非常な光榮であつた。先生は、私の作品中、特に二つの點を指摘された。一つは、透谷と、文學界同人との間に、感情的なジグザグがあつたやうに書いた點について、私の潤色が稍〻誇張的であるといふこと、第二は、透谷と齊藤冬の愛情の燃燒は、疑問であるといふこと――この二點であつた。

私としては、第一に關しては、「文學界記傳」その他を參照し、第二に關しては、相馬黑光さんの「默移」等を參考にして、その上に、私の想像力を加へたものであつた。私は藤村先生の御言葉を頂いて、直ちに之を抹殺しようと思つたのであるが、家にもどつて讀み直してみると、自分の書いた一行一句に、猶、戀々たる未練がのこつて、なかなか、オイソレとは、首打ち落とす勇氣が出て來なくなつたのである。

先生の言に背くやうで、甚だ申譯がなかつたが、竟に、思案の末、私は私の文章に不憫を加へて、そのまゝ、公刊することにしたわけである。こゝに、あらためて、先

生並びに江湖の諸君の御諒解を請ふ次第である。

さういふわけで、傳記と小說の中間的存在であるが、私自身は、この作品のおかげで、透谷なる古今の天才の、胸奥ふかく參ずるを得て、文學者としての覺悟の上に、非常なプラスを加へることが出來たのである。

尙、透谷未亡人、北村美那子さんは、今も尙、お元氣でゐられる。私は、再三、お宅へ伺つて、したしくお話をうかゞひ、之を、作中に盛つたのである。又、透谷夫人を私に紹介して、この作品のスタートに、力を貸して貰へたのは、透谷夫人の敎へ子である蛭子八重子さんであつた。この機會に、感謝の意を表したい。

小田原のことでは、その鄉土資料に關して、圖書館の石井さんや川崎長太郎君の御世話になるところ大であつた。そんなわけで、素材の上では、能ふ限りの便宜を得たのであつたが、大體に於て、透谷に關する傳記の材料といふものは、頗る寥々たるものしかなかつたのである。資料の點では、泡鳴の場合より、三倍ほどの苦勞をしたのであるが、それにもかゝはらず、私の筆力がその物足りなさを、掩ひ切れてゐないの

は、私の恥である。

私は最後に心から、御高齢の島崎藤村先生と、北村未亡人の御長命を祈つてやまない。透谷の佳き妻及びその佳き友として、御二人のいのちが、私には、國の寶のやうにさへ思へてならないのである。

昭和十六年初冬

聖一しるす

北村透谷

第一章

一

北村透谷は、相模國、國府津在前川村、長泉寺で、病を養つてゐた頃「一夕觀」といふ隨筆を書いたが、その終節に、
「漠々たる大空は、思想の廣き紙に似たり。彼處にホーマーあり、シェーキスピーアあり、彗星の天系を亂してゆくはバイロン、ボルテーアの徒、流星の飛び且つ消ゆるは、泛々たる文壇の小星。吁、悠々たる天地。限りなく、窮りなき天地。大なる歷史の一枚。是に對しても暫く、茫然たり」
と誌して筆を擱いた。ところは海近き鄕、時は秋深く天淸く、蟲聲、縷の如く彼の耳朶を穿つた。
「大なる歷史の一枚」とは、この、情熱と誠實に打貫かれた天才の短い一生を呼ぶのにこそ、大へん應はしいものではないであらうか。

しかし彼の生れた土地は、國府津から海岸つゞき隣の小田原である。その小田原へわたしがはじめ

て行つたのは、たしか小學校へ上らぬ前のことであつた。そのとき、わたしは祖母と二人の旅であり、小田原へ一泊して、その翌日、熱海へ湯治にゆく途中であつた。年寄りや子供の足弱は、熱海にゆくには、その時分でも二日掛りであつた。何といふ旅館だつたか名前は忘れてしまつたが、煎餅蒲團が堅くつて、碌々安眠が出來なかつたことだけを憶へてゐる。多分、早川口に近い、十字何丁目かの小さい旅籠屋ではなかつたらうか。しかし、このときは小田原熱海間の交通はもう輕便鐵道の頃で、レールの上を、小型の箱樣の車を人夫が二三人で押してゆく豆相人車鐵道の時代ではなかつた。人車鐵道が輕便鐵道に進化したのは、明治三十九年十月だといふから、わたしがはじめて小田原へ泊つたのは、人車が輕便になつた翌々年でもあらうか。ところが、どうも私の茫寞たる記憶のなかには、たつた一度、人車に乘つたことが有るやうに憶へてゐるのである。これも或は、そのとき小田原で人車の廢物を見せて貰ふなり、それへのつけて貰ふなりしたのが、幼時の記憶の中に、うつすらと殘つてゐるのかも知れぬ。或は、そのときよりもつと前、まだ物心のつかぬ頃に、熱海へつれて來られたことがあつて、そのときの模糊たる記憶の斷片であるかも知れぬ。

この間、透谷の生家の跡を見ようと思つて小田原へ出向いたときにも、偶々この人車の話が出て、私と同年輩位の小田原人は、やはり人車にのつた記憶がないといふ話であつたから、私の記憶もあてにはならぬのであつた。しかし、御幸の濱にある養生館といふ旅館の主人の話によると、そこの先代

は、廢物になつた人車を引取つて來て、それを物置代りに使つてゐたといふやうな話であつたし、又、私の懇意にしてゐる熱海の某旅館の主人は、私と大して年輩はちがひはないが、人車にのつた經驗はたしかにあるといふ話である。

そんなわけで、私達は人車に乘つたか乘らないかを昔話にする程度であるが、これから私の書かうといふ透谷は、人車どころか、更にこれより四十年も昔の、明治元年十一月十六日、まだ舊藩政下にあつた小田原の唐人町、今の萬年町四丁目に生れたのである。

——私は、いろいろのつてを求めて、小田原の町を歩いて見たが、なかなか之といふ資料もないままに、やゝ疲れた體を舊小田原城二の丸馬出曲輪跡にある小田原圖書館の椅子にかけて、そこの石井さんといふ主任の方に逢ひ、鄕土資料について話をきいてゐると、偶然やつて來てゐる川崎長太郎さんを見かけた。で、恰度いゝ幸ひに、聲をかけ、それから長太郎さんに案內して貰つて、透谷のうまれた町といふ唐人町を見に行つた。

唐人町といふ町名は、小田原のやうな傳統的な城下町にはそぐはない名前であるが、之は、遠く北條氏政の時代に、三浦三崎へ南京船が漂着したことが有つた。船には綾羅綿繡をはじめ、種々の燒物、沈水香、奇南、麝香、珊瑚樹、瑠璃、馬腦などを積んでゐたので、之らを小田原にはこばせた處、四五日の中に忽ち賣切れてしまひ、船主は思ひがけぬ利益を得たといふ。このとき唐人の中に、小田原

に留つて、商業を營み度いと願出た者があつて、氏政はこれに屋敷を與へたのが唐人町の起りである。爾來、小田原には、南京落雁とか南京おこしなどといふ菓子も出來、唐線香、唐木綿、唐紙、唐織などが流行し、町の名には唐人町といふ名が出來たといふ。北條早雲が小田原城を奪取して以來、北條五代の根據地として、その頃の小田原は、鎌倉にとつて代つて、關八州の文化の中心であつたから、舶來の品物でも何でも、羽根が生えて賣れたのであらう。

私は、前にも述べた通り、ごく幼少の頃、祖母につれられて、小田原に一泊して以來、熱海箱根の途すがら、小田原といふ土地は、幾度となく通つたが、いつも驛から一本道の國道を塔の澤の方へ通りすぎるだけで、舊小田原城の天守閣趾も、明治六年に畏くも　明治天皇が行幸遊ばされて以來名づけられた御幸の濱も、黒船襲來に備へたといふ臺場の濱も、つひぞ見物する機會に惠まれることがなかつたのである。長太郎さんや石井さんの話によると、江戸の文化は、畢竟小田原から受けついだといふが、よく考へて見れば、あながち御國自慢だけではないかも知れない。このたび、透谷のことで、箱根の表玄關としてだけの小田原でない小田原を、それも土地の人の案内で、着物の袖が黒塗の板塀やよごれた下見にすれすれになるやうなせまい横町や路次をあるいて、この古い城下町の匂ひをかいだのは、思ひがけない仕合せであつた。

舊記によると、豐臣秀吉は、小田原陣のため石垣山に城を築いたが、この城は一夜にて成り、地の

利を得てよく小田原を一望の下に瞰下したので、北條方は士氣俄かに挫け、遂に闘志を失ふに至つたとある。

嗁き立よ　北條山の　ほとゝぎす

といふ一句は、一夜城の上に立つて、大きな獲物を前に會心の笑を洩した豊太閤の名吟であるが、戰すでに終つて、勝利は秀吉の上に輝いたとき、彼は家康にそつくり關八州を與へて、太腹を見せた上、實は德川代々の根據地である三河から遠ざけようとする一石二鳥の手を用ひた。

このとき、家康は、然らば居城は、この小田原に定めたいといつた。といふ位であるから、當時の小田原が、鎌倉よりも江戸よりも重要都市として認められてゐたことは明らかである。然るに深謀遠慮の秀吉は、いや、もう小田原は舊い。それより、二十里ほど行くと江戸といふ土地がある。昔太田道灌が城を築いた處で、周圍は平地だが、北條の滅亡でもわかる通りこれからの戰爭には、四方の敵を遠く防ぐ必要があるから、江戸を君の新興首都と定めた方が得策だぞと、忠言した。家康は、さすが太閤の見通しのいいのに驚きもし、敬服もして、江戸を都と定め小田原の方はあきらめたのであつた。

いろいろな話になるが、その頃の小田原を詠んだ歌に、

なるこ引く賤が小田原見渡せば

又、

箱根山あくる雲ゐの郭公
　　みちさまたけの一聲もうし

などといふのがある。いかにも靜かなみのり豊かな村らしく、一面に小さい田の原であつたところから小田原と稱されたものであらうか。一說には、小田原は昔、小淘綾（こゆるぎ）の里といはれたが、やがて小由留木となり、更に之を草書で書いてゐるうちに、誤つて小田原とよみちがへたのだともいはれる。

更に太田道灌よりも古く、私達が、昔の小田原をしのぶとすれば、更級日記や十六夜日記があり、それよりもつと古くとなれば、萬葉集の歌となる。

今もいつた通り、小田原は足柄下郡の中心地であるが、この足柄地方を詠んだ萬葉集の歌のうちで、代表的なものを拔き出して見ると、

○あしがらの　遠面此面（をてもこのも）に　さす罠の
　　かなる間靜み　兒ろ吾（あ）れ紐とく

○あしがらの　箱根の山に　粟まきて
　　實とは成れるを　あはなくもあやし

○あしがりの　土肥の河内に　いづる温泉の
　　世にもたよらに　ころがいはなくに

などがある。殊に第一の歌は、若い男女が山野に狩をしつゝ、暇をぬすんで、互に紐を解き、愛慾の夢を追つた古俗を表現したものであらうが、上古の民の生活の實感がしみじみと私たちの胸につたはつてくるやうな、すぐれた歌である。

また、更級日記の著者、右中辨孝標の女は、父と共に上總に下つたが、長ずるに及んで、文學に心を惹かれ、治安元年十三歳にして志を立てゝ京に上つた。この時の道すがらの思出を、のちに日記文章に書き綴つたのが更級日記といはれるもので、このとき、足柄山の麓に泊つたことが見えてゐるが、これは多分、小田原ではなくて、坂本驛に泊つたものと考へられる。

「足柄山といふは、四五日かねて、恐しげにくらがりわたれり。やうやう入りたつ麓のほどだに、空の氣色はかゞしくも見えず、えもいはず茂りわたりて、いとおそろしげなり。麓にやどりたるに、月もなき暗き夜の、闇に戀ふやうなるに、あそび三人、いづくよりともなく出で來たり（中略）髮いと長く、額いとよくかゝりて、色白くきたなげなきに、聲さへ似るもなく歌ひて、さばかり恐しげなる山中にたつて行くを、人々飽かず思ひて皆泣くを、幼き心地には、ましてこの宿をたゝむことさへ飽かずおぼゆ。

また曉より足柄を越ゆ。まいて山の中の恐しげなる事いはむかたなし。雲は足の下にふまる。云々」とある。後世德川時代になつて、東海道がひらかれてからでも、箱根の雲助、酒匂の追剝と、二つの名物であつた程なのに、まして王朝末期の足柄路が、いかに荒廢をきはめ、晝尙暗き密林地帶を、或は上り或は下り、四五日かねて、恐ろしげにくらがり渡つた嶮難の道中がどんなに不氣味をきはめたかは想像するに難くない。それにしても、彼女のとまつた坂本らしき宿には、旣に旅人相手の遊行女婦が跋扈してゐたらしく、色も白ければ、歌聲もなかなか美しかつたといふ。王朝時代の遊女といへば、誰しも江口、神崎あたりの遊び女を想起するであらう。大江匡房は遊女記なるものを書いて、「門を比べ、戶を連ね。人家絕ゆる無し。倡女群をなして扁舟に棹さし、舶を看檢して以て枕席を薦む。聲は溪雲をすぎ、韻は水風に飄ひ、經廻の人、家を忘れざるは莫し(中略)蓋し天下第一之樂地なり」

と、その蕩々たる嬌艷の風を敍してゐるが、無論、江口神崎の盛況はないにしても、天さかる阪東路に於ける遊女賣色の歷史は、先づ坂本あたりに、その濫觴を見るのではなからうか。しかるにこれに程近き小田原では、珍しくも、長い間遊女の婬をひさぐを禁じられてゐたのであるが、この話は又後段に述べることにしたい。

更級日記から下つて阿佛尼の十六夜日記になると、小田原近在のすがたはやうやく、はつきりして

くる。

「二十八日（建治三年十月）伊豆の國府を出でて箱根路にかゝる。いまだ夜深かりければ、

たくましげ箱根の山をいそげとも
なほあけがたきよこ雲の空

足柄山は道遠しとて箱根路にかゝるなりけり。

いとさかしき山を下る。人の足もとゞまりがたし。湯坂とぞいふなる。辛じて越えはてたれば、又麓に早川といふ川あり。まことに早し。木の多く流るゝを、いかにと問へば、海士の藻しほ木を、浦へ出さんとて流すなりといふ

あづま路の湯坂を越えて見渡せば
しほ木流るゝ早川の水

湯坂より浦に出でて、日暮れかゝるに泊るべき所遠し。

伊豆の大島まで見渡さるゝ海面を、何處とかいふと問へど、知りたる人もなし。海士の家のみぞある。

あまの住むその里の名も白浪の
よする渚に宿やからまし

丸子川といふ河をいと暗くてたどり渡る。今宵は酒匂といふ所にとゞまる。明日は鎌倉へ入るべしといふなり」

こゝに出て來る丸子川といふのは、後の酒匂川のことで、早川も亦、今日のやうな乏しい水量の川ではなく、海士の藻しほ木をどしどし海へ流し出す程の大きな川であつたと見える。「海士の住む其の里の名も白浪の」とある如く、小田原も淋しい漁村だつたと見えて、名を聞いても「知りたる人も」なかつたのである。しかし、伊豆の大島まで見渡される海だといひ、そこからすぐ、丸子川を渡つて酒匂に泊つたといふのだから、その名も無き里といふのは、小田原のことにちがひない。

こんな風に、うら淋しい一介の漁村であつた小田原が、關八州の文化の中心地にまで進出したのは、前にものべた如く、風雲兒伊勢新九郎長氏、のちの北條早雲といふ怪傑の力であつた。彼は機を見れば、電光石火の如く、又、機を得ざれば、十年一日の如く雌伏しうる非凡の精神をもつてゐた。

彼が小田原城を一夜にして劫奪したときは、表に狩獵を裝ひ、晝は鹿狩を函嶺に行ふと見せて、夜に至れば、猛牛の角上に炬火をつけて、不意討に小田原に殺到したのである。鎌倉幕府滅亡以後、暫く關東は政治上の中心點を失つてゐた形であつたが、伊勢新九郎が目的のためには手段を擇ばぬ魔手をふるつて小田原を劫掠したおかげで、漸く小田原は、勃興のチャンスにめぐまれたわけなのである。

さて透谷の出生地を説かうとして、思はずも小田原の歴史に及んだが、しかし不思議なもので、却

つて古い時代のことより、透谷が生れ、育つた明治十年前後の小田原については、これといふやうな文獻がないのである。それといふのも我國未曾有の政治の變動であつたゞけに、人々の心にさうした記錄をのこさうとする餘裕は殆どなかつたのであらう。とすれば僅かに殘存する故老の話を、その朧げな記憶の薄闇から引出してくるほかないのである。

二

透谷の父は、北村快藏といひ、母はおゆきさんといつた。その又父は、北村玄快といひ小田原藩主大久保加賀守につかへて、藩醫をつとめ且つ儒をかねたといふ。透谷の尊屬については、先づこの祖父さんまでがわかつてゐる。

恰度、透谷の生れた前後は、わが日本は、驚天動地の改革が行はれて、當然、小田原藩も諸藩同樣、明治二年六月に於いて藩籍を奉還しなければならなかつた。透谷の誕生日は前にも誌した通り元年十一月十六日であるから、その約一月程前に、畏も　明治新帝は、鹵簿肅々、東京遷都の御途上、小田原を御通過あらせられたのである。そして本陣清水金左衞門方に御駐蹕御宿泊あらせられた。

時代の變動は、しきりと大きく搖れうごいた。

ついで藩主大久保忠良は、小田原藩知事を命ぜられ、子爵をたまひ、華族に列したが、翌々明治四

年には、廢藩置縣となつて、小田原縣が置かれ、更に同年十一月には足柄縣に屬することとなり、その範圍は、箱根、足柄以東、相模川以西といふことで、足柄上郡、下郡はじめ六郡を管轄し、長き藩政にとつて代つて郡縣政治がはじめられたのである。この足柄縣が現在の神奈川縣となつて、小田原支廳を設置したのは、更に數年の後、明治九年あたりになるのではないかと思はれる。

舊藩の侍たちが、俄かに扶持にはなれて、生活の資に困んだことは、日本全國どこでも同じであつたらうが、透谷の祖父の玄快も、激しい變革の嵐に洗はれ、一夜にしてその環境を全く異にし、以來大いに浮世の辛酸をなめたことは、想像するに難くない。一人息子の北村快藏は既に藩政時代に、大河内家から、おゆきさんといふ娘を迎へて結婚し、間もなく長男門太郎、次男垣穗を生んだのであるが、これも時代が時代なので、今迄のやうな、のんきな部屋住の生活をつゞけてはゐられなかつた。

かくいふ筆者の祖父も、處はちがふが、これは伊達藩の儒者で、明治初年、廢藩と共に、忽ち貧乏士族の仲間入をしたものであるから、當時の佐幕系の俄浪人といふものの困惑ぶりは、筆屋幸兵衛の芝居を見なくても、推察がつくのである。小田原藩は、前にもいつた通り、德川家康が自分の居城にしようかと思つた程の土地であるから、無論彼が腹心中の腹心、直參中の直參に、之を授けんとしたのは當然であつた。乃ち、小田原陣に拔群の働きのあつた寵臣大久保忠世に小田原城を與へ、采地四萬石、のちに五千石を加增したといはれてゐる。この忠世の弟に、有名な大久保彥左衞門忠敎がゐた

ので、兄忠世と共に、德川家興隆に忠勤をいたしたことは、なみなみではなかつた。

この大久保家が、二世忠隣の時本多正信と確執を生じて改易となり、その後、小田原城は番城として諸侯が交替に城主となる定めとなつたが、將軍家光の頃、稻葉正勝が封じられた。併し稻葉氏は僅か三代にして越後に國替となり、再び大久保家に、花咲く春がめぐり來て、忠隣の曾孫忠朝が、藩主となり、出でては老中として、江戸幕府に重きをなし、將軍綱吉の寵をうけた。それ以來、明治維新まで、小田原は大久保家の治むる所であつたが、その歷代藩公のうち、殊に、名君と稱されたのは大久保忠眞で、よく人材を拔躍し、文政三年酒匂河原で、孝子節婦奇特者表彰を行つたとき、その中に二宮金次郎が入つてゐたので有名である。

さういふわけで、大久保家は、昔より德川の直參であつたから、幕府が崩壞した時には、非常に苦しい立場に立ち、義に於いては勤王、情に於いては佐幕といふやうな板ばさみになつたのである。又、事實、朝に佐幕を唱へ、夕に勤王に轉じたといふやうな、變革期にありがちな激しい波にふり廻され、藩論が猫の目の玉のやうにひつくり返つて、そのたびに少からぬ犧牲も出たわけである。所謂箱根戰爭といふやうなものも、さうした藩論の去就の間に生れた副產物であつた。が、幸にして藩士中垣秀實が、藩の重臣らを向うに廻して勤王を說き、幕府三百年の恩は恩とし、大義名分に向ふべき所を力說したゝめ、遂に小田原は開城と決し、藩主は謹愼して罪を待つこととなつたのである。たゞ、惜し

むべきことは、その際些か走りすぎ、謹愼意思表示として、早雲以來の名城たる小田原城を取りこはしてしまつたことである。

斯ういふ立場にあつたから、藩士一同明治新政府に對しては何といつても繼子氣分で、勤王藩の藩士たちより、俄浪人の辛苦困憊は、よけい骨身に應へたにちがひないのである。そのまつ只中で、舊藩士の子として呱々の聲をあげた透谷であつて見れば、いはゞ、生れ落ちるなり、時代の重壓と、生活のなやみに直面したやうなものである。

藩醫兼儒の北村玄快が、すばらしく嚴格な武士であつたことは、後年、透谷が石坂美那子に宛てた私信の中に、くりかへし力說してゐる所によつて知らるゝのである。が、性來、嚴格のところへもつて來て、俄かに祿にはなれ、新時代には迎へられぬ不平欝憤が、幼時の透谷の目には、たゞもう恐ろしく嚴格なおぢいさんとして映つたのではないだらうか。

「明治六年、生の父母は、生を祖父祖母に托して、東都に去れり。

十一年まで五年間、生は全く祖父母の膝下に養育せられけり。此の貴重なる時日の教育につき、一言せざるべからず。

生の祖父、凡そ世に珍しき嚴格の人にして、活潑に飛はねる事を好む少年を、こらすの術に苦しみたること、今もしばく祖母の物語に聞きうる事どもなり。また祖母は、今でこそ至つて溫順なれど、

其頃は生にとりて餘り利益をあたへしとは覺えず。

何となれば、彼は實の祖母にあらずして、生に對しては、繼祖母たる人なればなり。生の天性は不羈磊落、我儘氣隨なるに、此のやかましき祖父と、我が利益にはあまり心配せぬ祖母との間に、養育せられたるなれば、此に生が淡泊なる小兒思想は、或る奸曲なるむづかしき想像心にからまれて、物事に考へ深き性情を作りたるの事實は、決して蔽ふ可からざるあとなりとす（云々）」

以上は透谷が明治二十一年八月十八日、石坂美那子に送つた私信の中の、自傳的要素ある一文中の一節である。

これによつて見ると、明治六年、門太郎が、六歳の時、快藏ゆきの兩親は、彼のみを祖父母の膝下に置去りにして、上京したものと見える。明治六年といへば、畏くも　明治天皇が、皇后陛下御同列で、箱根宮の下溫泉に御入湯の途すがら、小田原に御駐輦あそばされた年で、廢藩以來、萎微沈退しつゝあつた小田原の民心も、これによつて漸く、氣分を一新することが出來たのである。これより先き、門太郎少年五歲の時、ヂフテリアにかゝり、家傳、龍奢散を用ひて快癒したと傳へられるが、詳かにしない。島崎藤村氏が、透谷を語る言葉のうちにも

「まだ、透谷が小さかつた時分、兩親は彼を祖父母の手に託して置いて東京に出た。彼は十一歲の時まで小田原にゐて、非常に嚴格な祖父の教育の下に成長した。祖母といふ人は溫順の婦人で、少年の

彼に對しても優しくあるべき人だが不幸にして實の祖母ではなく繼祖母であつた。この祖父の非常にやかましかつたことと、祖母の彼に對する愛情のうすかつたことゝで、後になつて彼が氣鬱病を發した一番の根本はそこから起つて來た……―

といつてゐるほどで、このとき門太郎は、自分をおいてきぼりにし、弟の垣穗だけをつれて上京した兩親の仕打を、あまり快く思はなかつたことはあきらかである。この垣穗といふ弟が、のちに畫家となつて、丸山古香といひ、「桃紅日錄」といふ透谷の自傳を、兄の死後無斷で持出し、加之も、大震災の時、淺草の十二階下で燒失してしまつた男であるが、兄門太郎とは、その性質を全く異にし、氣輕な才子肌で、世間からも親しまれ易く、後年は文展などにも出品したさうである。門太郎はそれと正反對の、考へ深い、むしろ偏屈な程の性情だつたと自白してゐる通りで、兩親ばかりか、近所の者や親類のものも、やゝもすれば、門太郎より垣穗の方に、チヤホヤしたであらうことは、推察するに難くないところである。「桃紅日錄」は雁皮紙を四ツ切にして五分位の厚さに綴ぢたもので、「奴さん、やつてるな。また畫寢か」といふ書き出しであつた。アメリカから歸朝した美那子未亡人が、百方手を盡くしてこの日記の行衞を探したが、わからなかつた。これが、誰かの書棚の裏に、塵にまみれてゞも隱れてゐるなら、いつかは篤學者の手によつて拾ひ出されまいものでもない。現にわが國の古典書が、長く數世紀を土藏の隅に捨てられてゐて、思ひもよらぬ時發見され、學界のセンセイシ

ョンとなることは、屢々、聞くところだか、震災の火にかゝたのでは、先づ絶對に再生する方法はないわけだ。

門太郎の母、おゆきさんについては、後段に詳しく說きたいが、先づ、彼を六歲から十一歲まで、育て上げた祖父玄快の嚴格さといふものは、何としても、二宮金次郎を生んだこの土地の傳統であり、更に古く追求すれば、北條早雲の治世方針にまで溯ることが出來るかも知れない。門太郎は、祖父玄快から、何かにつけて、二宮尊德の話や孝子佐太郎の話をきかされたに違ひないが、北條早雲二十一ケ條の敎訓も幾度となく敎へられ、なかばは强制的に、之を暗誦させられたのであつた。早雲といふ男は、目的のためには手段を擇ばぬ獨裁政治家で、いざとなれば、約束も道義も人情も、弊履の如くふみにじつてしまふが、一度び、領土を收めて一城の主となれば、よく民政を施し、人心を收攬する術も心得てゐた。搾取すべきはあくまで搾取し、多年わが蓄積した財貨は子孫二代を支へうるなどと傲語したが、その搾取法は、極めて賢明で、みだりに領民の怨みを買ふやうなヘマは決してしなかつた。早雲の寵を得た連歌師宗祇は、

「早雲といふ人は、非常に吝嗇で、針をも藏に積む人だが、是と思ふ武事には、珠を碎いても使ふ人だ」

と批評したさうである。祖父玄快が、我藩の武士道精神は、北條早雲の不撓不屈の鬪志にはじまる

とばかり、門太郎少年をつかまへて、くりかへし說教した二十一ヶ條のモラルのうち、主なるものを拔萃してみると次の如くである。

一、神佛を信ずべきこと

一、朝は早く起くべし。遲く起きぬれば、召使ふものも油斷し、公私の用を缺くなり

一、水はあり物なればとて、唯嗽ひし捨つべからず

一、家の內なればとて、高く咳ばらひすること、人に憚らぬ體にて聞きにくし

一、少し隙あらば、物の本、文字のある物を懷に入れ、常に人目を忍びて見るべし

一、寢てもさめても、手馴れざれば文字忘るゝものなり

一、歌道なき者は、無下に賤しきことなり、學ぶべし

一、よき友に交り、惡き友を除くべし。よき友とは手習學問の友、惡友とは、碁・將棊・尺八の友なり

一、夕には臺所、中居の火の廻り、我と見廻り、堅く申付け、其外、類火の用心をくせになして、每夜申付べし。女房は高きも賤しきも、左程の心持なく、家財衣裳取りちらし、油斷多きことなり。人を召仕候共、萬事を人にばかり申付くべきとも思はず、我と手づからして、樣體を知り、

後にはさするもよきと心得べきなり

などである。干戈殺伐の戰國時代の武將の言としては、意外に文を尙ぶ風も見えて面白いではないか。蓋し、北條五代の政策として、小田原が關東文化の中心となり、特に工商の發展を致したのも、或點では首肯し得らるゝのではないかと思ふ。二宮金次郎が、背中に大きな薪を背負ひ、手には書物を持つて、讀みながら歩いてゐる銅像や繪は、今日でも人口に膾炙してゐるが、早雲遺訓の一つなる「少しの隙あらば、物の本、文字のある物を懷に入れ、常に人目を忍びて見るべし」とあるに、一部のヒントを得たのではないかと思ふ。門太郎も祖父玄快から口やかましく聞かされた早雲遺訓の中で、文に關する綱領は、大いに之を德とし、祖父の目を忍んで、しきりに稗史小說を讀みふけつた。前揭の私信の一部にも、

「その頃生の最も好みたる小說は、楠公三代記、漢楚軍談、三國誌等にして、日夜是らの小說を手離すこと能はざりし程なりき」

と、書いてゐる。

三

現在、透谷の生れた唐人町の家は、うすよごれた自動車屋のガレーヂになつてゐる。隣家は大きな

材木屋さんで、この方は堂々たる構へである。この材木屋さんに、同じく明治元年生れのお婆さんが、まだ健在で、この老婦人の話によると、父快藏さんのことも祖父玄快さんのことも、また、おゆきさんのことも、皆知つてゐる。名前は小島たつさんといふ。しかしおたつさんが小島家に嫁に來たときは、既に透谷は東京に出てゐたので、門太郎少年が、七つ八つの時分のことは、このおたつさんと雖も、知つてゐないわけである。

透谷の生家は、何でもごく安く賣られてしまつたのだが、それでも震災前までは殘つてゐて、川崎長太郎さんなども、うろ覺えに覺えてゐるさうだ。間口は今のガレーヂのある間口と同じ位で、すゝけた格子障子が二枚はまつてゐる貧弱なしもたやであつたといふ。屋根は昔風の小田原葺であつた。小田原葺は震災後は、すつかり影をひそめてしまつたもので、今は古い寫眞によつて知るのみである。舊記によれば、天正十七年に北條氏規が五代氏直の代理として上洛したとき、洛中の家作りが、皆板葺であつたのを、美しく印象して歸つて、大いに氏直にすゝめた處、それまで草葺であつたのを全部葺きかへるわけにもいかぬといふので、表通りの商店街の庇だけを板葺に改めさせたことから、傳統してゐるのである。小田原の故老片岡永左衛門の著した「明治小田原町誌」によると、その小田原葺といふのは、先づ、竹で下地をつくり、其上に巾二三寸に長さ一尺程の薄い杉板を横にならべ、又、割竹にておさへとし、銅の細針金にて締付けた屋根で、小田原の町に、亞鉛引の鐵板や瓦葺の屋根が

用ひられるやうになつたのは、明治二十七八年頃からのことだといふことである。

そこで大體、これ以上に、透谷の生家を偲ぶよすがはないので、私は歩を轉じて、海岸に出て見た。海岸の眺めは成程壯大である。何故なら、海に向つて右側に長く突出してゐる半島は伊豆の連山であり、その根元には双子山をはじめ、駒ケ岳や箱根外輪山の山々が聳えてゐるからである。折柄、冬の入日が、双子山の頂き近く落ちかけてゐて山裾はうすく霞につゝまれ、海の色もやはらかい淺黄色に染つてゐた。海近く、かうした高い山々が聳えてゐる景色は、海そのものが大きくなくとも、全體の構成に非常に何か、强い浪曼的な印象をもたらすものである。目を轉ずると砂丘の終るところには丸石をたゝんだ大きな防波堤が出來てゐる。昔は無論こんなものはなかつたにちがひない。その防波堤の下に、うす赤い枯芝の名殘がところどころに見えてゐるが、昔はこの芝土手が、自然の防波堤の役目をしてゐたのであらう。更に、やゝ低い臺場をなして、こんもりと松林の植わつてゐる所が、舊砲臺跡でこれも明治初年に、取毀されたものである。大體、門太郎少年が遊んだ海岸は、この邊であらうと思はれる。

藤村氏の「春」によると、透谷の青木は、前川村の海へ飛びこんで盛に泳ぐ處があるが、海で育つた透谷が、山で育つた藤村より、遊泳の術に於いて一日の長であつたことはいふまでもない。しかし、故老の話によると、門太郎少年は、土地つ子の中では、あまり泳ぎの達者の方ではなく、皆で海へ入

る時も、何とか彼とか口實を設けては、泳ぐのを避けたといふことである。さういふ時は、大てい、海岸へ脫ぎすてゝゆく友達の着物の番をしてゐるのが門太郎の役目であつた。腕白盛りの友達は、ドンドン沖へ出てゆくが、門太郎は、着物の傍でジツと坐つて、友達の泳ぐ青い海を眺めてゐた。既に彼のメランコリックな文柔の風は、幼年時代より芽生えてゐたものと察しられるが、しかしこの表面の憂愁は、內部に烈々たる浪曼精神を養ふ素因にもなつてゐたのである。

透谷は上京してから、數寄屋橋畔の泰明小學校に上つたことは有名であるが、小田原にゐた時は、何といふ小學校へ上つたかは、どうもはつきりわからない。神崎淸君の北村透谷略傳によれば、「門太郎このころより寺小屋に上りしならん。啓蒙學校、綠學校に通ふ」とある。そこで又、小田原の教育史を一應考察して見る必要を生じ、「足柄下郡史」をひもといて見ると、小田原の教育の濫觴ともいふべきは、大久保忠眞によつて創始された藩黌集成館であるといふ。大久保忠眞が、大久保氏歷代中、最も名藩主として光彩を放ち、殊に二宮金次郎を登用したことで名聲嘖々たるを得たことは前にも述べたのであるが、この忠眞は、幕府に於いても、老中より御勝手職を兼ね在職二十年、首席老中たること四年の久しきに及んだといはれ、藩政に於ては、專ら教育に銳意したと傳へられてゐる。その家集に「春鶯集」があり、歌道にも心を致したものらしい。

斯くて明治以前の教育機關は、この集成館に限られ、他は、僅かに寺子屋で、僧侶の手により、初

等教育、といつても、習字を主とし、讀書、算術、作文の初步を、有志の子女に授けたにとゞまる。やゝ進める者で、實語教、今川庭訓などを學習し、四書五經を學ぶ者は極めて希れで、習字も、いろは名題、商賣往來、都路江戸町づくし、小田原町づくしなど、算術は八算見一等であつた。ところが、明治四年に文部省が置かれ、翌七月に新學制が發布せられたので、集成館の組織を變更し、一部を小學校として四民に入學を勸誘したのが明治六年である。しかし、故老の談によれば、その時町家より之に應じたものは三四名にすぎなかつたといふから、門太郎がすぐ小學校へ上つたかどうかは、明かでないのである。しかし、小學校は年々歲々その生徒數を增加していつたといふし、啓蒙學校といふやうな名で、新設されるものも出來て來たのであるから、無論、上京以前、この土地が初等教育を受けたことだけは、間違ひがない。若しや、門太郎と同級生だつたといふやうな老人の殘存するものはないかと、私は一通り當つて見たが、之は徒勞であつた。しかし、當時に於ける近所の人や親類の老人たちが、多く啓蒙學校へ上つてゐることからして、恐らく門太郎少年も學齡期に達すると共に啓蒙學校へ入學したものではないかと、推察することは出來るのである。

四

前掲の私信に又曰く、

「其頃生の最もよろこびをる遊戯は、多數の小兒を集めて軍事をまねる事にてありし。生は常に自ら軍師となりて、進退運轉を司どりけり。是らの遊戯は、わがやかましき祖父の最も嚴禁する所にてありしにもかゝはらず、淸く快よき濱邊の砂上にあつまりて、かしこのつゝみ、こゝの丘に、城堡を定め、伏兵を隱す可き場所をも見極めて、軍略をめぐらし、智勇をふるひ、砂礫をとばして銃丸に代へ、長短の棒片は、刀鎗に代用せり。

この遊戯は、即ち生の祖父に對する不平を慰む可き單なる快樂にてありけり。

然れども之を以て全く生を慰むるに足らずして、欝々快々として月日をすごしたれば、生は最も甚しきパッショネートの人物となり、又、極めて涙もろく、考へつめてはなか〳〵に、いやすべくもあらぬ困りものとなりたる事も明かならん。

何にかにつけて、生は涙をこぼす事多かりし。

又、口惜しくて口惜しくてたまらぬ時は、殆ど正體なく、泣き狂へり」

と。

この遊戯は、子供の好む戰爭ごつこであつたらうが、特に彼は、軍師を氣取つて軍略をめぐらしたといふ處に、特徵がうかゞはれる。その上、これはやかましやの祖父に對する不平を晴らすための淸涼劑であつたと告白してゐるのは面白い。

今も見る小田原の海岸の、うす赤い枯芝のところどころは、成程、門太郎少年が軍略をねつた戰ごつこの古戰場であるかもしれぬ。彼はひとり、腕を撫し、刀をふるつて、心ひそかに、祖父に對する反感と不平の思ひを慰めたのであらう。祖父玄快老人が、この少年の心理を反映したか否かは知らぬが、しきりにこの遊戲を、禁斷しようとすればする程、門太郎少年はその目を盜んで、濱の少年らと殺伐の遊戲にふけつたものにちがひない。そして、

「門太郎はどこへ行つた」

と、玄快老人がこはい顏をして祖母に訊ねるとさういふ時、祖母は決して、門太郎に有利な證明を與へてはくれなかつた。

「さうか。又、やつとるのか。あれ程、堅くせえつてるのに――」

玄快老人は赤くなつて腹を立てた。夕方家へ歸つてくると、門太郎は散々に、油をしぼられた。彼は默つて神妙にかしこまつてゐたが、內心では、決して見つかりつこないやうにしてやつてゐるのに、それが祖父にわかるのは、やつぱり祖母の內通によるのだと、反感をもやしてゐた。冷淡な祖母は、直接門太郎を叱つたり虐めたりすることはなかつたが、一度でも門太郎に、積極的な利益を與へてくれたことはなかつたのである。さういふ時、門太郎は何といつても、東京へいつてしまつた父や母がなつかしかつた。玄快老人に叱られた晩なぞ、蒲團を冠つて、ソツと、

「お父つちやん」
と呼んで見るやうなこともあつた。しかしすぐ、自分だけを置去りにして、弟の垣穂をつれて上京した兩親の片手落な愛情が、うらめしく、憎らしく、しまひにはたゞたゞ不愉快にたつてくるばかしであつた。
「お父ちやんたちは、垣穗ばかり、可愛がつて、俺らは憎いんだ」
門太郎は床の中で、ひとりで齒がみをするやうな夜が幾度かつゞいた。
「お祖父ちやんは、やかましいし、お祖母ちやんは、何つてつたつて、あとから來た繼お祖母ちやんだ。血筋がつながつてねエんだから、俺らにいい樣にとりなしてくれる道理はねエ――」
門太郎は、自分の周圍が、まるでつめたい氷のやうな氣がするのであつた。このまゝいけば、晩かれ早かれ、自分の一生は凍死する運命にあるのではないかと思ふと、恐ろしい氣がした。何か活路はないかと、模索したが徒勞に終つた。彼は次第に息づまるやうな思ひにかられ、子供のくせに、神經質なやゝもすれば焦らだたしい氣分に引づられ出した。偏狹な武家思想に養はれた玄快老人には、この門太郎に與へてゐる恐るべき影響については、何もわかつてゐなかつたのである。
戰ごつこを嚴禁された門太郎は、こんどは早川や眞鶴の海岸に磯干にいつて、さざえやあはびやとこぶしをとつたり、酒匂川の若鮎つりの仲間に加はつたりしはじめた。玄快老人はさういふ遊びもあ

まり好ましくは思はなかつたが、あまり何から何まで禁止するのも良い結果を生まぬからと考へて、この方は、大目に見てゐた。

「侍の子が何だ、侍の子が」

と、玄快は二言目にはさう叱つて門太郎の神經質で柔弱な感じに焦ら焦らした。世が世なら、北村家の嫡流として、立派に一人前の若侍になるところを、こんなことで、果して多難な前途を切り拔けていけるかどうかと、氣がもめてならぬのであつた。それなのに、こちらの氣も知らないで、門太郎が玄快老人を見るときの、オドオドした、そして、變に反感を閃めかすあの目付が、不愉快でならなかつた。

この玄快老人が、突然、中風で打倒れたのは、門太郎が十一歳の春さきであつた。

急を聞いて、快藏夫婦も東京から歸つて來た。北村快藏はその頃すでに大藏省に出仕してゐたが、中風の老父を置いて再び上京するに忍びなかつたから、一旦大藏省の方は辭めることにして、折柄、郡縣政治の緒についたばかりの足柄下郡々役所上席書記として、郷里にあつて行政事務にあたることとなつたのである。彼は故老の話によると、玄快老人とはうつて代つて無口の好人物であつたから、却つて人々から、愛敬されて、評判はよかつた人だといふ。小兒の時の疱瘡のあとが、うすいあばたづらになつてのこつてゐた。しかるに、後に透谷はこの父を評して、傲慢磊落の人といつてゐる。他

人の見るところと、實子の見るところでは、このやうに少なからぬ相違を生ずるものと見える。
然し、快藏は郡役所に出勤しつゝ、一方、玄快老人の看病に骨身を惜しまなかつた。その效驗あつて、玄快老人の中風は、少しづつ快方に向つて來た。

「すまねェな。東京で立派にお役について、これからつてとこで、老ぼれの俺等のために、勤めを棒にふつて、又、小田原くんだりへ歸つて來てくれたりして。ほんとうに、すまんこつたよ。」

と、病氣以來玄快老人はすつかり氣が弱くなつてゐた。

「駄目ですよ。そんなこと、くよくよ考へたりしちや。何アに、東京では、新政府が、どんどん人材を求めてゐるんです。小田原でこそ、士族は食ふか食はずだが、東京へ出てごらんなさい。官員だつて何だつて、すぐなれますよ。私だつて、いつまで小田原の郡役所の上席書記に埋つてゐるつもりはないんです。もう少し、お父さんの病氣がよくなつて、一人で歩けるやうになつたら、私は又、東京へ出て、一旗も二旗もあげるつもりです」

と、快藏は元氣に答へた。

「さうかい。そんならいいけれど。でもな、病氣になるまでは、俺は何とかして、もう一度死花を咲かしてえと思つて、まあ、いろいろ、無理もして來たが、もうその勇氣もねェよ。これからは、お前や門太がたよりだ。年寄だと思つて、まあ、よろしくたのむよ」

くれ「もう十年もこの湯にゐる。」と語つた。とのことに何時であつたか、門太郎はその生活の記憶のしかたはないと思ふ。

「何ですねヱ。そんな弱音吐いて」
「もうちつとよくなつたら、塔の澤の一の湯にでも、行つて來ようかの。あすこの湯は、昔から、よく利くつてこつたから」
「さうですね。こいつには、湯治が一番だせヱますからね」
父と祖父のそんな、憐れつぽい話をきいてゐると、門太郎も、今まで憎らしがつてゐた祖父のことが何だか氣の毒になるやうな氣がした。
「偖て明治十一年の春となり、我やかましき祖父は中風にかゝりて、其性質は一變し、生を叱責するの性は變じて、生を憐愛するの情となれり。
然れども、生は遂に溫良なる性質を養ふの暇はなかりけり。實に生は溫良なる性質を受くるの道には、一度も接したる事なしといふも不可なかるべし」
と、彼は、私信の中に誌してゐる。祖父玄快の性質は、中風の發作によつて一變したが、祖父によつて歪められた門太郎のメランコリーは、遂に長く、彼の精神にとゞまり、根づよい反抗的魂を養ふ所以となつたのである。
かくして、門太郎の周圍には、今までの玄快老夫婦の外に、兩親や弟がふえて、急に賑やかなものとなつたわけであるが、と同時に、新たなる複雜味を加へたことになつたのである。門太郎と父、門

太郎と母、門太郎と垣穂との、それぞれの關係も亦、一癖も二癖もあるものといはなければならぬが、これは後段に詳しく語りたい。

或る日のことであつた。

門太郎は、手製の竹の釣竿を、せつせとこしらへてゐた。

これは前にも一寸のべた、酒匂川の若鮎つりに用ふる細い釣竿である。長さは約六尺位。ところが一風變つてゐるのは土地の習慣としてこの釣竿の先きに垂れる糸は、普通の糸の代りに、女の髮の毛を用ひたものであつた。それも、未婚の婦人の髮の毛程、强靱であるとされて生娘の髮が珍重された。强靱であるばかりでなく、長さも、既婚者や老年のものより長く、使用に便であつたせゐもあらう。この髮の毛を、二三本編んで、二尺程の長さなら三つにつなぎ、三尺程なら二つにつないで、釣糸の代用品をこしらへるのである。これを、螢になる川むしを餌にして、釣るのだが、鮎といつてもまだごく若いところで、二寸か三寸のものであつた。

うまくつれる日は、相當のびくに一杯になり、すぐ燒いて食つてもよし、ちよつとあぶつたのを串にさして乾しておいて、煮浸しにして食つてもよかつた。

少年の力に、恰度頃合の釣であつたから、當時、小田原町の子供の間には、この釣遊びが、滔々として流行したものだといふ。門太郎も十二三になると、もう、濱の戰ごつこよりは、この若鮎つりの

方が面白くなつて、友達に誘はれゝば、好きな本を讀んでゐる時でも、スグ立つて、川へ出かけた。たゞ、このとき、門太郎を悲しませたのは、自分の身のまはりに、若い娘がなく、女の髮の毛で作る釣糸に不自由することであつた。仕方がないので、普通の糸でもつて間に合せるのだが、そのために、やゝもすれば、友達に負をとるのであつた。でなくとも、はやくも早熟な惡童たちは、俺はどこそこのお何ちやんの髮の毛を貰つて來たと云ひ合つては、それを自慢らしく吹聽するのが味噌であつた。唐人町の南京おこしを賣る店の娘や、高梨町の質屋の娘や、須藤町の扇屋の娘などは、小田原でも評判娘だけに、しきりにみんなから髮を所望され、それが又、娘たちにとつても一種の見榮のやうにもなつてゐた。

なかには無理矢理に、どこそこの娘の髮の毛を引拔いて來たといふやうな亂暴者もあつた。又、髮をくれとたのんで、女からことわられるのは、彼らにとつて無上の恥辱と考へられてゐた。

悲しいことに、門太郎少年には、髮を貰ふ若い娘が見つからなかつたばかりでなく、彼の性質ではどうしても、女に向つて、髮をくれなどといふことは、冗談にも云へないことであつた。

するど或る日、

「ねえ、門太郎さん。あたいの髮の毛、上げようか」

と、向うから申出てくれる奇特者があらはれた。

五

門太郎がよく若鮎を釣りに出掛けたといふ酒匂川は前回に記した通り、阿佛尼の十六夜日記の中に出てくる河川のことで、舊名を丸子川といつたものと見える。

今日では、東海道線が、小田原驛の構内に入る少し前に、酒匂の鐵橋を通過する。ふだんは、磧が川面に露はれて、水流はそのところどころに靑いやたら縞を畫いて流れてゐる。水の流れてゐないところには、赤茶けた枯葦が生えてゐて、南は川口に近く、相模灣の滄海が展け、北は欝然として聳ゆる函嶺を仰ぐのである。

酒匂の鐵橋を、快速力の電氣機關車が通過するばかりでなくて、海岸の白いコンクリートの橋は、湘南を縫ふ新らしいドライヴウェイなのだから、昔こゝが東海道の旅人を惱ました有名な川止めの難所とは到底、想像もつきかねる程である。

無論、昔は、こんな大きな川幅ではなかつたであらう。それにしても、一朝增水となると、河水は堤防にあふれ、濁流滔々と、流域の各地に水禍を及ぼしたといふ話が、何だか有りうべからざることのやうに考へられるが、しかし、二宮金次郎の傳などを見ると、酒匂の水魔が、いかに跳梁をほしいまゝにしたかは、自から明らかである。

「足柄上郡史」の地誌によれば、酒匂川の水源は駿河國富士山の東麓であるといふ。それより須走りの南を經て、竹の下に出で、更に、富士箱根の分水界をなす御殿場町以北の諸水を併せたものと合し、更に、箱根の北麓を繞つて須川を合せ、やうやく、足柄上郡に入つて、河内川を合流する頃から、酒匂川の名が起こる。これより南東に向ひ、皆瀬川を併せ、內川を合し、川村向原で尺里(ひさり)川を入れ、更に南に走り、川音川に會して、上郡中央を南下し、やがて下郡に入つて、狩野川を合せ、小田原町の東、酒匂村に至つて海に注ぐのだ――幹流程は十三里十九町、全川流路の延長七十三里九町に及ぶ東海道有數の大河である。

河名の起りは、日本武尊が、御東征に際して、龍神へ御祈誓あつて、此の川へ御酒をそゝぎ給ふたところ、其の匂ひがながく消えなかつたことから名づけられたと傳へられてゐる。又、一說には、上ゲ潮の時は、水が逆に流れるので、逆川といつたのがはじまりだといはれ、又、一說には、河口が曲つてゐるところから、匂といふ字に非ずして、勾の字を用ふ可きだといふ說もある。この酒匂川を越すのには、大井川や富士川と同じやうに川人足の肩にかつがれて、川越えをしたのである。それが增水四五尺に及ぶと、川止めといつて、交通が杜絕されるのであるから、殊に長雨で、幾日も川止めがつゞくやうなときは、小田原宿は搔入日で、本陣脇本陣をはじめ、多くの旅舍の賑ひは一入であつたらうと想像される。

一體、大井川にしても酒匂川にしても、長い間、架橋工事が顧られなかつたのは、一つに德川政府の軍事政策によるものであつた。將軍家は一朝事ある場合に備へて、江戸に至る道筋の大河にはすべて架橋を許さぬといふ方針に出たのである。だから、大井川も酒匂川も、ある意味では、江戸城の外濠としての役目を持つてゐたのである。やむを得ず、旅人は渡船或は人足の助けを受けて川越えをやつたが、東海道盛んなりし頃は、その定額川人足は、三百名以上の多數にも及んだと相模風土記に見えてゐる。明治初年の頃には、まだ、大きい橋は架けられなかつたが、酒匂橋を架けるための準備工程は次第にすゝめられてゐた。

川の傍に小舍があり、假橋のための橋錢をとつてゐた。故老の話によると、橋錢は一錢だつたといふが、其の頃の一錢といへば相當の値打で、たとへば、髮結錢が當時の小田原で、銀杏返しが一錢五厘、丸まげが二錢、島田で三錢といふ時代であつた。もつとも明治以前でも、冬期、河水の淺い時は土橋を架けて、川越えの便を圖つたことがあるさうだが、川人足は、忙しい時はそれでもいいが、閑になると、橋が仕事の邪魔になるので、夜陰に乘じて、橋をこはし河水に流された態にして、商賣の繁昌を圖つたものだといふ。酒匂橋に電車が通じたのは、ずつと後のことであるが、門太郎が鮎釣をした明治十二三年頃には、川名治兵衞といふ男が、既に神奈川小田原間に、定期の馬車乘合を開業したといふことだし、おそくも明治二十年七月に東海道線が國府津迄開通した翌年には、國府津小田原

湯本間に小田原馬車鐵道の營業が開始されてゐる。橋梁工事も逐年に進歩して、川止めの騷ぎも、濁流の氾濫も、すべては一片の昔物語と化してしまつたのである。

酒匂川の話の序に書くと、二宮金次郎が小田原藩主大久保加賀守忠眞に見出されたのが、酒匂河原であつた。文政元年十一月、忠眞は、領内の孝子節婦奇特者を、酒匂河原に召して表彰したが、この時、二宮金次郎が入つてゐた。彼の運命は實に酒匂川に負ふ所が多く、大洪水で堤防が決潰し、父祖の田地が一夜にして流失荒廢したのも酒匂川のためだし、堤防工事の夫役に志願し、刻苦勉强して、藩公に表彰されたのも、酒匂川であつた。今も見る酒匂堤防の兩岸には、金次郎が植ゑたといふ松の木が並んでゐて、往時を懷ふよすがとなつてゐるが、至誠・勤勉・分度・推讓と、二宮の高唱した四大モットーは、門太郎少年も、玄快老人から耳にたこが出來る程、聞かされたものであつた。

　麥蒔けば　麥の草生え　麥の花
　　開きて麥の　みのる世の中

とか、

　めしと汁　木綿着物は　身をたすく
　　その餘はわれを　責むるのみなり

とか、

とかいふ有名な歌や句はもとより「人道は一日怠れば忽ち廢す」とか、「人道は私欲を制するを道とし、田畑の草を去るを道とし、堤は築立て、堀はさらひ、橋はかけ替へるをもつて道とす」などといふやうなアフォリズムについても、門太郎は、なかば强制的にこれを覺えこまされた――。

しかし、實をいへば門太郎は、二宮尊德のアフォリズムを暗記することよりも、酒匂川の若鮎釣りの方に夢中であつた。やかましい玄快老人の目を盗んでは、しきりに釣の工夫を凝らしてゐた。

仲間のうちでも腕力がつよく、餓鬼大將格の萬次といふ少年は、何かといふと文柔の門太郎を小馬鹿にして、しきりに侮辱を與へた。通りすがりに、わざわざ、門太郎のビクをのぞきこんで、

「何だ、おい。晝間からやつてゐて、まだ、たんだ、五匹きや、つれねエのか。どうでえ、おいらのは、一時間で、これビク一杯だ、見ろ」

と、自分のビクを見せびらかした。成程、萬次のビクには、二三寸から五寸までの美事な若鮎が一杯とれてゐる。釣竿の先きからも二つ結びで、七尺近い豪勢な女の髮の毛が、細身の竹にからんでゐる。

「オイ、何てつたつて、若鮎つりは、絲によるんだぜ。若い生娘の髮の毛でなくつちや、鮎が寄つちやア來ねエんだ。おいらのはな、南京おこしのお金の髮だ。昨日、否應なしに、十本ばかり貰つたの

よ。お利益はこの通り、あらたかだぜ」
「へエー。お金ちやんのかい」
「さうか。羨しいか、門」
「…………」
「負け惜しみ。何でえ、おめえなア。そんな縁で、酒匂の鮎が、つれてたまるもんか。どうして、おめえだけは、娘つ子に縁がねエんだ。親類にだつて、一人ぐれいは、阿魔がゐるづら」
「ゐるよ。ゐるけれどね」
「ゐるんなら、貰へばいいぢやねエか。小田原の若い娘なら、二つ返事でくれる筈だア」
「でも、俺ア、いやなんだ」
「何がよ」
「娘つ子に、髮の毛くれなんて、男がそんな、そんな、だらしのねエことは、どうしてもいへねエんだ」
「チエツ。變な奴だな、門は」
「鮎がつれねエでも仕方がねエ。だからつて、女に頭下げて、そんなもの、貰ふなんて、俺アいやだ」
「阿呆」

「阿呆つていはれても、俺アこの方がいいんだ」
「いつまで、坐つてたつて、釣れつこはねエぞ」
「いいんだよ。そのうちに、きつと、釣れるやうになるよ」
「チエツ、生意氣いつてやがら」
と、萬次に口穢く罵られたが、門太郎は默つて忍耐するほかはなかつた。彼は夕方まで、ジツと、堤の上に炭俵をしいて、坐りこんでゐたが、果して萬次のいふ通り、ビクの中に獲物は一向入らなかつた。
彼は、シヨンボリして、家路についた。彼は、自分の周圍の綠の黑髮をもつてゐる若い女性たちの顏を、ボンヤリ思ひうかべた。そのうちの一人に賴みさへすれば、明日からでも髮の毛は手に入るにちがひなかつた。
しかし、家へ歸つて、自分の部屋に坐ると、やつぱりそんなことを云ひ出す決心はつかないのである。萬次に辱かしめられるのと天秤にかけて、女に物を乞ふ恥の方が、門太郎には、つらかつたのだ。
――門太郎は、それでも十尾あまりの鮎を、ソツと燒いて、玄快老夫婦に知れないやうに、三國誌か何かを讀みながら、ボリボリ喰ふのがたのしみだつた。

六

徒然草のなかに「女は髪のめでたからむこそ人の目立つべかめれ」といひ、又「されば女の髪筋にて縒れる綱には、象も能くつながれ」といふ文句があるが、酒匂川の若鮎も、女の髪の毛の不思議な魅力にひつかゝると、殺されるのも知らずに、群をなして集つて來るのであつた。成程、萬次のいふ通り、それが酒匂の鮎釣の御定法で、門太郎のやうに、普通の釣絲で釣つてる分には、競爭にも何にもならぬのである。しまひには、門太郎は、女の髪の夢を見るやうにまでなつた。暗い濠端の柳の葉が、ふと女の髪に見えることもあつた。城下町の夜、行きずりに、洗ひ髪の女が、洗ひ立ての髪の匂ひを立てゝ通るのを、門太郎は我知らず立止つて、見送ることもあつた。

斯ういふ矢先きに、突然、自分の髪を提供しようといふ奇特な女があらはれたのであるから、門太郎も長い辛抱が、はじめて報はれたやうな氣がした。女といふのは母のおゆきのところへ、仕立物の使ひにくるおせんといふ十七の少女であつた。おせんは、同じ唐人町にある相當の身代の呉服屋の娘で、その呉服屋は、隣町の高梨町にある遊女屋への出入りを專門にしてゐたから、自然、仕立物の多くは、遊女のつける帶とか裲襠とかゞ多かつた。

「ありがたう。おせんちやん」

感じ易い少年の目には、はやくも涙が光つて見えた。
「だつて、みんな外の子は、いろんな手立で、髮の毛を貰つてるのに、門ちやんだけが、いつも、普通の糸で釣つてるんでしよ。いろいろ、評判が立つてるのよ」
「評判？　評判つて？」
「男らしいつて、ほめる人もあるわ。中には、生意氣だつて、くさす人もあるけれど」
「男らしいのでも、生意氣なんでもないよ。俺らは口が下手なんだ。それだけの話なんだ――」
「うゝん。あたいは前から知つてんの。門ちやんはね、女なんかに頭を下げて、髮の毛なんか貰ふなア、そんな、だらしないことはきらひなの。さうでせう」
「…………」
「さうにちがひないのさ。そこが又、あたいは氣に入つたのよ。だから、あたいの方から、すゝんで、髮、拔いたげるわ。みんなの鼻を明かしておやり」
「でも、萬次は、俺らがおせんちやんの貰つたと聞くと、きつと又、おせんちやんとこへ、ねだりに來るぜ、あいつ、性惡だぜ」
「大丈夫よ。萬次なら、內證ごとを、あたい聞いてるのさ」
「內證事？　誰から」

「山本樓の或る華魁からさ。それをちよつと、せつてやれば、萬次なんか、靑茶に鹽さ」
「そいつはうまいね」
「でも、門ちやんも、もう三四年すると、華魁に可愛がられるやうになるね」
「そんなこたアねエよ」と門太郎は赧くなつた。
「だつて、この間もね、萬次を頭に、三四人でまだ十五六の子供のくせに、もう山本樓へ遊びに上つたんだつてさ。門ちやんだけは、そんな子の眞似を、おしでないよ」
「あゝ、おいらは、いつまでも小田原なんぞにゐはしねエんだ。そのうち、お父つちやんたちと、東京へいくんだ」
「まあ、東京、いつちやふの。門ちやんは」
「こんどは、垣穗だけつれてくつても、俺ら、肯かねエんだ。誰が何てつても、俺らもついていくんだ」
「でも亦、いい若い衆になつたら、小田原へ歸つてくるんだろ。小田原でお嫁さんを貰ふんだろ」
「そんなこと、考へても見たこたアねエよ。それより、俺ら、本當の勉强がしてエよ。小田原の家には、讀みてエ本がちつともねエし、このまゝ大きくなれば、阿呆になるばかしだ」
「やつぱり、門ちやんは、あたり前の子とはちがふよ」

「そんことはねエさ」
「だつてほかの子は、そんな、夢みたいなこと、考へてる者はありやアしないもの」
「さうかな。夢みていなことかな」
「さうだとも。そんな小田原にないやうな本を讀みたいなんて考へてさ。そいで、小田原、いやになつて、東京へ出たいなんて――夢のやうな話にちがひないぢやないか」
「でも、お父さんだつて、夢を抱いて東京へ出て、すぐ、大藏省にお勤めに上つたんだ。東京へいくなア、御一新このかたは、決して夢ぢやアなくなつてるんだ」
「さうかねエ。東京へいくには、どうしていくのかい」
「横濱まで、もうぢき定期の乘合馬車が、通ふやうになるてこつた。今でも、國府津までいけば、乘合が出る。横濱からは、蒸氣車だ。急げば一日で行けちまふ」
「蒸氣車つて、素敵だらうね。あたいも一度乘つて見たいよ」
「垣穗の奴は、弟のくせに、蒸氣車を知つてるんだから癪に障るよ」
「さうさう。肝心のものを、話にまぎれて忘れちやつては大變さ」
と、おせんは、指を自分のつむりの中へ差し入れたが、
「アツ、痛い」

と、仰山な聲を立てゝ、顏をしかめた。
「どうしたの」
「ソラね、痛いと思つた、三本も一度に、拔かうとしてるんだもの」
さういつて、出す指先きには、黑い毛が三本程からみついてゐた。
「門ちやん、拔いてよ」
「よし――」
門太郎は、はじめての經驗に胸を痛くしながら、おせんのふさふさした髮の中に手を入れた。
「痛い！」
と女は又、低い悲鳴をあげたが、それでも一息に一本拔けた。
「御免よ。痛かつた？」
と、門太郎は上氣した顏を心配さうに、おせんの傍によせた。おせんも赤い顏をして、胸のあたりを、着物の上からでもわかる程、はづませてゐた。
拔けた髮は、優に三尺五寸はあつた。光澤もあり、張りもあつて、これなら若鮎どころか、もつと大きな魚でもかゝつて來さうな氣がするのだつた。
一本では足りないので、二本、三本と拔いた。二人は段々に馴れてきて、拔くコツも、拔かれるコ

ツもわかつて來た。おせんは、門太郎の胸に、柔くもたれて、ジツと目をつむるのだつた。

「その代りね、門ちやん」

と、おせんは、拔き終ると、ちよつとあらたまつていつた。

「何だい」

「外の女の子の、貰つちや、いやだよ」

と、おせんは門太郎の胸の中で、につこり笑つた。その晩、門太郎は、からだ中が溫まる思ひで、おせんの髮を、結んだり、編んだりして、はじめてする御定法の釣支度に、夢中だつた。萬次をはじめ、町の惡童どもが、之を見て何といふかと思ふと、ゾクゾクする程小氣味よかつた。カラリと晴れた酒匂河原に、特別仕立の釣竿をかついで出掛けてゆく明日の日の得意さは、まことに思ふべしであつた。そしてその間にも、ジツと目をとじて、髮を拔かせたおせんの白い顏が、悩ましくソコら中にちらついてゐた。

第二章

一

おせんの家が、出入してゐた高梨町の遊女屋のうちでも、主なるものは、前記山本樓、或は大阪屋などであつた。從つて、透谷の母のゆきが引きうけた華魁の帶や裲襠も、主として山本樓と大阪屋の遊女のものが多かつたのではないかと思はれる。ゆきが、針仕事に長じてゐたことは、小嶋材木店のおたつさんの話にも出たし、故人になつた新井ぎんさんの話にも出た。ゴリゴリした厚い帶や、ふきの大きい厚織の着物や裲襠を、精出して縫ふと、冬などは、指先にあかぎれを生じて、始終、血をふき出してゐた位であつたといふ。又、ゆきは夫快藏と明治六年に上京した時も、日本橋の照降町に小さい呉服屋をひらいたことがあつたさうで、働き者のゆきの性分が、さういふ所にも、よくあらはれてゐるのである。つまり、ゆきが遊女達の身につけるものを縫つたといつても、別に門太郎の家へ、山本樓や大阪屋の遊女が出入りしたわけではなく、おせんの家に註文された新らしい衣裳の仕立に應じたゞけのことであり、おせんがその橋渡しの役目を演じてゐたわけである。しかし、それにしても遊

女のつける金襴の裲襠が、始終、北村家のせまい部屋の中に持込まれてくるのだし、仕立上れば、衣桁に引つかけたりもするのだから、御一新前の地味な藩醫の生活から見ると、まさに隔世の感があつたに相違ない。その何がなしなまめかしい風景は、門太郎のうら若い官能にも、少なからぬ影響を與へたものではなかつたらうか。

舊記によると、小田原は古來公娼制度の許可がなかつた土地であるといふ。前記した更級日記によると、すでに王朝期に、坂本の宿には遊び者がゐて旅人の慰みとなり、驛路の賑ひを來たした旨の記錄があるが、小田原に、公然と飯盛女が許可されたのは、德川期も中期以後の文政年間であつた。無論その頃、他領の三島宿や沼津宿はつとに宿場女郎で有名であつたし、それらの宿々に飯盛女の名目で陰の賣笑の行爲をしたのは、恐らくよほど以前からの事であつたに違ひない。「明治小田原町誌」の筆者、片岡永左衛門氏の話によると、これより先き、享和年間に、小田原宿が、風水害その他のために、町民が困窮した救濟策として、旅籠屋に、飯盛女を置くことを特に許し置かるゝやうにと藩公に出願したことがあつたさうである。他の宿々は、宿場女郎で大繁昌を來たしてゐるのだから、當宿でもせめて、飯盛女位は置いて、旅人の足を引きとめたいといふ趣旨のもとに出たものであつたらう。でないと、旅人達が少し位の無理はしても、女郎のゐる宿驛に泊つた方が、面白いと考へるのは、爭はれぬ人情でもあつた。然るに、藩政府は斷然この出願を却下し、當小田原は北條早雲治世以來、婬

風のあらざるを以つて、誇りとしたのであるから、今更、そんな醜業を營ませることは絶對に反對である。若し、たつて、宿場が疲弊してゐるといふなら、藩から貸下金を與へるから、それで、經濟を補ひ、決して飯盛女を置くといふやうな、不埒な考へを出してはならぬぞと、きついお達しがあるのだつた。で、そのときはそれで納まつた。しかし、時代の大勢には、遂に抗し得ずして、文政度には小田原の旅舍にも、他領並に飯盛女が置かれるやうになり、幕末へかけて交通の頻繁と共に、逐年、盛況に赴いたのであらう。やがて飯盛女が、一人前の遊女となり、下女兼用を解かれ揚屋と置屋が區別せられるやうになつたのは、恐らく安政以後のことであつたらうか。それとても、いろいろの制限や條件が附せられてゐて、たとへば、遊女屋に立入ることの出來るのは、東海道筋の旅客か、他領内の者に限られ、御領内のものは之に近づくのを嚴禁されてゐた。若し、この法度を破る者があつた時は、直ちに入牢を申しつけ、五人組はもとより村役人にも累が及んだ。その代り、領主が抱へ金を出して、遊女を抱へるといふ奇拔な制度であり、從つて抱へ金も極めて低く、この風習は、明治以降にも及んで、明治初年の抱へ金は、三ヶ年で七、八圓といふ低廉なものであつたと傳へられる。

無論、藝妓も置かれず、女郎が三味線を引き、置家から揚家まで、寢具をかついで出かけたものださうで、それでも遊女のあるのとないのとでは、小田原宿の繁昌には大影響があつたのである。

これが御一新によつて、藩政府がつぶれ、全國劃一の新政府に統合されたので、小田原の遊女屋も、

天下晴れて、土地の人の出入りが許されるやうになつた。今迄、禁斷されてゐたことが、俄に許される、となつたのだから、その人氣は素晴らしいもので、舊領内の百姓下級士族はいふまでもなく、その他上級の人士も、半ば珍しいものずきに、押しかけたから、忽ちにして、超滿員といふ景氣になつたのである。しかし、もともと、幾多の故障を排して辛うじて經營されてゐたものだけに、他領の宿場とは異り、一つところに、遊女屋が集つてゐるといふ風のものでなく、素人屋や旅籠屋の間々にはさまつて、遊女屋がボツボツと點在してゐたのが一つの特徴であつた。大體に於いて、高梨町が中心であり、現小田原の萬年町三丁目附近の所であつた。

透谷の生れた唐人町とは、だから恰度、背中合せであつた。小田原女郎のもつとも豪勢を極めたのが、あとにもさきにも、その禁斷撤廢直後の明治初年であつたとすれば、透谷の少年時には、恐らく毎夜のやうに、さんざめく嫖客たちの醉態や嬌態が、耳許近く聞えてきたに違ひないのである。おせんの話に出て來た如く、萬次たちの惡童共が、まだ年齒もゆかぬのに、登樓して、世間の顰蹙を買つたのも、舊藩禁壓政策の反動とも見られるのであり、また、明治開化の行過ぎでもあつたのである。現在は、舊東海道表筋の遊女屋は、全く影もとゞめず、町外れの新玉四丁目に移つて、新遊廓となつてゐるのである。

これに次ぐ、娯樂機關としては、桐座といふ芝居小屋があつた。この座の起源は非常に古く、北條

氏時代より、傳統したといはれてゐるが、果してどんなものであらうか。

門太郎の母ゆきは、玄快老人にまさるとも劣らぬやかましやではあつたが、それでも桐座だけにはよく出かけたので、門太郎もお伴を仰せつかつた。

しかし、大久保藩公のストイシズムは、芝居小屋も亦、婬風の一つとして排斥して、辛うじて郊外足柄村なる寺町といふ所に於いて、その興行を許した。寺町といふと、今は東海道の酒匂鐵橋に近い邊鄙なところで、緑三丁目より更に、鐵路を越えて北寄りの土地である。芝居を見るにも小田原の人は、一々、隣村まで出張しなければならない位で、況して遊女屋の如きは、旅ゆく人の遊興ぶりにも、指をくはへて傍觀を餘儀なくさせられたのであつた。

しかし、小田村の桐座は、その界隈に、有名で、江戸の千兩役者も、一度は小田原の舞臺を踏まなければならぬとまでいはれたものであつた。

桐座といふ名前の芝居小屋は、其の頃、東京にもあつたが、兩者は別に關係があつたのかなかつたのか、詳細を得ない。東京の桐座は、江戸時代には、市村座の控櫓として、同座が休業した場合だけ興行する例であつた。中頃、座元で、俳優を兼ねた市川團之助が、經營難のため自殺して、それつきり斷絶してゐたのを、明治六年、三世市川團之助の子市川團彌の名義で再興し、四谷荒木町で開業したものである。小田原の桐座も、明治になつてからは、交通の便によつて、江戸役者の興行する度數

も多くなり、小田原町内の人はもとより、眞鶴、國府津、乃至、熱海あたりの人でも、泊りがけに、桐座見物には、よく出かけたものであるといふ――。

文學好きの門太郎が、どうして、この桐座見物をとりにがす筈があらう。小田原に讀む可き本のないのを嘆じた彼は、せめて、桐座によつて、少年の空想と知識慾を滿たさうとしたのは當然である。しまひには、新しい興行の度毎に、門太郎の方から母のおゆきを誘ひ出す程になつた。

そのある日。

彼は一番目の幕合で、正面棧敷に、おせんが仲間の娘達三四人と、一張羅を着飾つて見物してゐるのを見た。門太郎は急に胸の高鳴るのを覺えて、人知れず、頰を染めた。おせんの方では、まだ、こちらに氣がついてはゐないやうだつた。

二

中幕がすむと、やうやく、戶外は暗かつた。

門太郎はソツとおゆきの傍をはなれて、便所に立つた。

すると、木戶のところで、何かゴタゴタやつてゐる人聲がした。何だらうと思つて近づくと、ハツとした。萬次をかしらに小頭分の虎や八郎たちが、木戶番の親爺と、云ひ爭ひをしてゐる最中であつ

た。恐らく、顔で入れろといふのに、木戸番の爺さんが、それを拒絶してゐるにちがひなかつた。萬次は、おせん達が、見物に來てゐるのを知つて、あとを追つて來たのかも知れなかつた。門太郎は、見つかつては拙いと、いそいで體を、人混みの中にかくした。

用を足して出て來ると、恰度二階から下りてくるおせん達にぶつかつた。南京おこしのお金や、はじめて小田原で牛肉屋をひらいたといふ中宿町の三河屋の娘たちと一緒で、いづれも小田原で評判の娘たちであつた。門太郎もみな見知越しの女だつた。

「あら、門ちやん、來てゐたの」

と、おせんは一寸顔を染めながら、明るい聲で呼掛けた。

「誰と？　おつ母さん？　何處にゐるの」

「うん。し、下の高土間さ」と、門は少し吃りながら答へた。

「今日は。門太郎さん」

と、南京おこしのお金もすぐ傍へ近よつて來て會釋をした。

「知つてる？　三河屋さんのお樂さん」

「うん。知つてる」

牛肉屋の娘は、おせんの向うから、首を下げた。やや年嵩で、一人だけお光に結つてゐた。ほかは、

みんな、派手なてがらの結綿だつた。しかし、舊藩時代は嚴格な儉約令が始終出てゐたので、小田原の娘たちは、うつかり髮も結へないくらゐであつた。享和二年に、絹布類の着用禁止令が出て以來、一般町民は平常は羽織をつけず、半天を着て代用し、袴も襠高なのは、町役人さへ禁じられ、襠の極めて低い、平袴を着用した。この習慣は、明治に入つて、風俗上の自由を得たのちも惰力として殘されて居り、一部のものが、舊慣を破らうとするのに對して、やはり批難の目を向けたものである。片岡永左衛門氏の記された所によると一疊付の下駄は、御一新少しく前から、桐の臺に鋲で疊を打ちつけたるものを使用する者少々ありしが、極めて希にて、鼻緒にも、天鵞絨などは用ゆることを許されず、中以下の町人は、多く藁竹皮の草履を用ひ、下駄の緒も竹皮を縒り合したのを、わら緒と稱して、專ら之を使用し、子供は、薄き松杉の臺に、藁疊を打合せ、木綿眞田の緒を着けたる草履下駄を使用した」とあるのを見ても、いかに當時の小田原風俗が、節儉を旨としたものであるかゞ想像される。

自然、髮も大ていは、自分の家で、自分で結ふなり、母子互に結ひ合ふなりして、女髮結に、わざわざ結つて貰ふやうなことは、大へんな贅澤とされたのである。維新以後、交通の發達と共に、贅澤風が次第に東京の方から吹いて來て、おせんやお樂たちのやうに、若い娘が、張羅を競ひ、髮飾りにうき身をやつすやうになつたのも、時代の大きな推移を物語るものであつた。現に、お樂の家で、はじめて賣り出した牛肉も、横濱開港當時は、ごく少量の牛肉の味噌漬を、藥用として珍重した程度で

つたといふ。

「今ね、萬次や虎が、木戸で何か、ゴタゴタいつてゐたから、おせんちやんたちも、用心した方がいいぜ」

と、門太郎はいつた。

「まあ、萬次が又、來てるの。顏で入れろつて、かけ合つてるのね」

「さうらしい」

「いけない奴。突出してしまへばいいのに」

と、おせんは眉をしかめた。今日はいつもより結綿がよく似合ひ、ずつと女ぶりが上つて見えた。

「きつと、おせんちやんたちが、やつて來てるの知つて、押しかけて來たんだよ」

「さうかしら。こはいねエ」

と、お染がからだを顫はした。

「何アに、萬次なんかに、何が出來るもんか。木戸の様子を見てくるから、待つてゝよ」

負けぬ氣のお金ははやくも木戸の方に行きかゝる。

「見つかるといけないよ」

「大丈夫よ」

「ぢやア、あたいも行つて見てくる」

と、お樂もそのあとに從つた。で、やうやく門太郎はおせんと二人つきりになれたのであつた。おせんはいそいで訊いた。

「どうだつた。釣れた？　鮎」

「あゝ、ありがたう。釣れたとも」

「さうかい。それはよかつたわ。でも、萬次たち、何かいつた？」

「はじめのうちは氣がつかなかつたのさ。夕方になつて、足輕屋敷の八郎が見つけやがつて、みんなして、誰に貰つた？　貰つたつて？」

「まあ、そんなことといつて？」

「いはなきや、そいつをふんだくつてしまへつて、萬次の下知だ」

「そのうち、萬次が、いきなり俺らの手から、釣竿をふんだくらうとするから、俺らはいつてやつたのさ。この釣竿だけは、金輪際離すこつちやアねヱ。これを取りたけりや、俺らの生命をとつてからにしろつて、俺らの顏が、よつぽど一生懸命だつたんだらう。萬次の奴も、さすがに、飛びかゝつちや來なかつた。その代り、ハ、ン、讀めた。その髮は、門の阿母のだらう。阿母から貰ひやがつたんだらう。あんた婆さんのぢや、若い鮎はいやだヨーつて、はやし立てゝ、みんなして、手をうつて、

ワイワイいひながら……。俺ら口惜しかつた。よつぽど一思ひに、俺ら、おせんちやんに貰つたゞつて、いつて退けたかつたけれども、若し、又おせんちやんに、迷惑が掛つちや大變だと思つて、俺らは、泣きながら我慢した……」

「口惜しいね、こんど逢つたら、あたいからいつてやるわ。あれはね、おせんの心をこめて、門ちやんに、あたいの方から賴んで使つて貰つたんだつて。萬次なんかに、指をさゝれてたまるもんか」

——おせんの目は、亢奮して薄紅く光つてゐた。

「でもね、おかげで、ビクに一杯とれたもんだから、阿母やお祖母さんにまで、はじめてほめられたよ。みんなして夕飯に燒いて食つたのさ。この次は、ソツクリおせんちやんちへとゞけるよ」

「あゝ、ありがたう」

「でも、おせんちやんとこぢやア、鮎なんて珍しくも何ともないんだらう。俺らの釣つたんぢやロに合はねエだらうな」

「そんなことありやアしないよ」

「食べてくれつかい」

「食べるともさ。欄干橋の西洋料理より、門ちやんの釣つた鮎の方が、あたいには甘味しいのさ」

と、おせんは、色つぽいしなをして、いつた。

欄干橋の西洋料理といふのは、小松屋といふ家のことで、明治三、四年頃にはじめてこの家で西洋料理が開業されたといふ記錄が見えてゐる。

もともと、小松屋といふのは、馬車宿であつた。明治初年から、横濱の外人らが、馬車に乘つて箱根に遊ぶ途中、小田原で一泊する際、西洋料理の需要多きを察して、この馬車宿が試みにはじめたものであつた。だから、專ら外人用であつて、小田原町民には緣のうすいものであつたが、それでも土地の新らしがりやは、小松屋の洋食を食ひ、三河屋の牛肉を買ふのを以つて大いに見榮と心得るものも少くはなかつた。

三

當時小田原は、外人ばかりでなく、新政府の高官達も、しきりに箱根へ入湯に出かけ、そのたびに、必ず小田原には宿泊したもので、昔の參勤交代の時代はすぎたが、小田原の旅籠は、又新らしい話題に惠まれた。三條とか木戶とかいふ明治維新の大立物はもとより、山縣、伊藤、大隈、西園寺の歷々も、よく、小田原に馬車を駐めた。伊藤はその後滄浪閣を立てゝ、しばらく、小田原に移居したことがあるくらゐである。

藤公詩存に、

己丑十月、辭樞府移居相海之濱
結茅截樹以居焉
巖谷誠卿送滄浪閣三字　揭諸門楣援筆自題

とある。己丑といふのは明治二十二年のことであるから、門太郎のゐた頃にはまだ滄浪閣は存在しなかつた。恰度、西村氏の養生館の一軒おいて西隣りだつたさうで、明治二十五六年の頃の「小田原繪圖」には、伊藤邸の存在が明示されてゐる。この滄浪閣で、日本の民法が起草されたことは有名である。當時帝國大學教授であつた穗積陳重、梅謙次郎、富井政章の三法學博士は、民法起草委員となつたが、伊藤公は、滄浪閣を三博士に提供し、靜かにその想を練らしめたのである。これはかつて伊藤公自身が、三浦半島の金澤の夏島に立籠つて、帝國憲法を起草した思出に倣つたものであつた。

そんな次第で、舊弊な小田原人は、牛肉を喰つたり、洋食を食べたりするのは一種の異端であつたが、どんどん東京からお客さんが入りこんでくる以上は、牛肉も必要だし、洋食も食はせなければならなかつたであらう。小松屋も三河屋も、自然、外人のためなり、遊山客のためなりの應待設備としてのみ存在理由かあつたわけだし、牛乳の如きは、特に明治五年、勸農局から乳牛三頭を貸下げられて、奬勵されたといふ。しかし、何分にも、少數の外人や高官のためだけの商賣では、繁閑の差が大

きいので、やつていけるものではない。

小松屋の如きも、一時は流行したが、地元の客に地盤がないので、次第に凋落し、やがては店を閉ぢた。建物が洋館だつたので、そつくり、それを警察署に賣却したのも皮肉である。

その後、西洋料理は、三河屋の方に引ついだが、この方も料理の出來る日と出來ない日があるやうな始末で、小田原に於ける西洋料理はかくて明治末年まで、一進一退の有樣をつゞけた。そんなわけだから、小松屋の西洋料理より、門太郎の釣つた酒匂の鮎の方が甘味しいといはれたのは、大變な讃辭といふべきであつた。

そこへ、お樂とお金が歸つて來た。

「やつと、歸つていつたのよ。木戸番だけぢや、押返されさうなんで、樂屋番の松つあんまで出て、とう〳〵、歸したの」

「いい氣味さ」

と、お樂は笑ひながら、門太郎とおせんの樣子を、いゝ、うろん臭さうに見た。

「大丈夫かしら。歸り道。待伏せをしてゐるといけないけれど」

おせんは心配さうにいつた。

「大丈夫。迎ひがくるから」

「さうさう。三河屋さんとこの若い衆がついてくれば、こはいものなしね」
と、おせんは安心した。
「門ちやんも一緒にお歸り」
「でも、俺ら、阿母が一緒だよ」
「いゝぢやないの。小母さんも一緒で。みんなして、賑やかにいけば、余計、安心だもの。竹の花までいけば、もう、こはいことはないさ」
「ぢや、さうしよう。その代り、俺ら、大喜利の所作まで、全部、見て歸るんだよ」
「あゝ、いいとも」
高く柝が鳴つた。二番目の世話物の幕があくのだ。出し物は、近頃東京で流行の散切物である。門太郎とおせんたちは歸りを約束して、上と下に別れた。
花道に近い東の高土間では、おゆきが門太郎を待ちあぐんでゐた。
「どうしたのさ。どこへいつたのさ。おつ母さん、隨分、探したよ」
「おせんちやんに逢つたものだから」と、門太郎は正直に答へた。
「おせんちやんに――おせんちやん、どこに來てるのさ」
「あすこさ。正面桟敷さ。三河屋の娘たちと並んでゐる」

「えゝ、どこ」

と、おゆきは正面棧敷を見上げた。向うでも氣がついてゐて、上からおせんが、小腰を上げて挨拶した。おゆきも、あわてゝ首を下げた。

「大層、まあ、おめかしで。お化粧すると、さすがに綺麗だね。あれで、十七かい、十八かい」

「十七でせう」

「お前も仲々詳しいんだね。若い娘の年まで知つてるなんて」

「だつて、阿母さんが訊くからさ。鎌をかけたのかい。いやな阿母さんだなア」

——しばらくして叉母のおゆきがいつた。

「さういへば、お前んとこにある釣竿ね、あの髮は誰に貰つたのさ。この間まで、なかつたのが、急に、あゝして誰のかは知らないが、貰つて來たらしい」

「よしとくれよ、阿母さん。俺ら、娘つ子にそんなもの貰ふ程、まだ根性が成り下つてやしないよ」

「そりやアいい。貧乏はしても、お前だつて、武士の伜だ。でも、そんなら、どうして手に入れたのさ」

「くれつていつたんぢやねエ。向うから使つてくれつて、わざわざ、くれたんだ」

「おせんちやんだね」と、おゆきは圖星をさした。

「でも、まあ、そんならいい。これが若し、門の方で、頭を下げて、汚らはしいぢやないか、そんな女の頭のものなんぞ、貰つたりしたと聞いちやア、このおつ母さんが承知出來ないからね。わたしはそんな意氣地のない子を生んだ覺えはないんだもの」

「いいよ。わかつたよ。さあ、幕が明くよ」と、門太郎は舞臺の方へ向き直つていつた。

大喜利は、常盤津の所作で、賑やかにハネた。

戸外は、靑い月夜だつた。晝前からの芝居見物に、すつかり亢奮した頭に、川の方から吹いてくる風が、ひいやりと心よかつた。

木戸を出て、二三間先きに、おせんたちが待つてゐた。

「お母さん、今晩は」と、おせんの方から聲を掛けた。

「おや、おせんちやん。面白いお芝居でしたね」

「小母さんもお芝居お好きね。でも〇〇はやつぱり、うまい役者ですね」

「東京でも見ましたよ。新富座でね。そりや豪勢なものですよ」

みんなは連立つて歩いた。門太郎はおゆきとおせんの間にはさまつて歩いた。お樂の傍に、三河屋の店の者が、用心棒格でついてゐた。

さうさう。明日　仕立物を又お願ひに伺ひますわ」とおせんがいつた。
「はい。いつも御世話さんでござんすね」
「こんどはね、大阪屋のお職の誂文で、わざわざ、京都まで染めにやつたものなんですよ。柄も思ひきり奇抜だし、染上りもとても綺麗に出來ましたよ」
「まあ、そんなお値打のもの、私なんぞに縫へますかしら」
「あら、小母さんたら、何だつて大丈夫ですよ。小母さんに縫つて頂くの、華魁たちみんな大人氣ですつてさ」
「おせんちやんも、口がうまくおなりだね」
と、おゆきは照れていつたが、惡い氣はしなかつた。門太郎は歩きながら、何となく樂しい氣持ちで月のある青い大空をながめた。

四

石坂美那子に宛てた透谷の手紙の一部に、
「生の父は、封建制度の下にありて、嚴格なる式禮の間に成長したる人たるにはあらず。傲慢磊落の氣風あれども、或る一部分に至りては、極めて小なる所もあり。明治十一年、祖父の中風病にかゝる

や、直ちに官を辭して郷里に歸り、爾後七年間、孝養をつくして怠る所なく、是がため、僅かの財産も消費し去れども、意に介せざる如きは、其の小心なる一例なるべし。

又、生の母は、最も甚しき神經質の恐るべき人間なり。

一家を修むるにも、唯おのれの欲する如く、己れの畫き出せる小さき模範の通りに、配下の者共を處理せんとする六ケしき將軍なり。

さて、生の神經の過敏なる惡質は、之を母よりうけ、傲慢不羈なる性は、之を父より貰ひたり。言を換へて之をいへば、丁度、五分と五分の血を父母より受けて、此の世にあらはれたり。（略）生の血統中には、溫良なる性質をもつ者は一人もなし。況や、生の父は傲慢磊落の人にして、生の母は極めて甚だしき神經質なるに於てをや――」

と、書いてゐる。父が傲慢磊落で、母が神經質の恐るべき人間であるとは、くりかへして述べるところであつた。この手紙は、明治二十一年の八月十八日のものであるから、透谷はこのとき二十一歲になつてゐる。そして美那子と戀愛の最中にあつて書かれたものとすれば、その兩親觀が直ちに幼少時のそれをそのまゝに傳へたものであるかどうかは疑はしい。現在の戀愛問題によつて、微妙に支配されてゐる目で、昔の父を見、母を語るのであるから、そこには、多少ならず歪曲的な見方になるのは、止むを得ぬことかも知れない。おゆきさんを目して、六ケしき神經質の將軍と評するのは、昔の

母に當る言葉か、現在の戀愛問題を通して、透谷と對立し易い女將軍を評する言葉か、そのへんは單純にいかないものがある。

先日も透谷のわすれ形見である堀越英子さんの話を聞いてゐると、透谷をして青年文豪たらしめたものは、一にも二にも、おゆきさん、つまり英子さんのおばあさんのおかげであり、透谷の傳記をものするなら、是非、この母の影響といふ點を强調して貰ひたいといふことだつた。私も、遺族たちの、この信念のある傳說を、大いに率直に認めることに、吝かではない。

しかし、さういふ積極的な影響があつたことは認めるとして、それが透谷の胸にまつすぐに響くこともあり、響かぬこともあり、時には、あの强い支配力に抵抗しずにはゐられなかつたこともあれば、心中ひそかに不快の念を禁じ得なかつたこともあつたらうといふことは、察せられるのである。この手紙を書いた頃は、石坂美那子との戀愛問題で、殊に利害を異にしてゐたので、可成り思ひ切つて、おゆきさんをこき下してゐる個所もあるが、その誇張をいくらか割引して考へても、幼少の透谷がおゆきさんの嚴格な仕打を、そのまゝ、ありがたいと心得てゐたかどうか。やゝもすれば、

「お母さんは、おらアより、垣穗の方が可愛いくつてなんねエんだ」

と、不平を洩らし、苛々した氣持ちにさせられたりすることが多かつたのではないか。だから遺族達の傳說は根本に於いて正しいとしても、透谷自身の主觀では、しかく信じ、しかく服し、自己の成

人をすべて母の丹精一つによるものとして感謝の念を藏してゐたか否かは、隨分怪しいものであつた。

透谷の手紙は更に續けて曰く、

「生の父母は祖父を助けんとして（註、明治十一年、祖玄快、中風病にかゝりたるによりて）東都より歸り來れり。

生の活潑なる心に仇することとは、生の母の神經質より甚しきはなし。

又、生の母は普通のアンビシヨンを抱けり。

則ち生をして、功名を成さしめんと思ふの情切なりければ、毎夜十二時頃までも、窮屈なる書机に向はしめ、母自身は是れが看守人たり」

と、口をきはめて書いてゐる。普通のアンビシヨンとは何をいふのか。透谷自身の主觀するそれは、恐らく特別のアンビシヨンであり、その頃の一般的な、世間的な野心、出世慾、功名心等をさして、普通のアンビシヨンといつたものであらう。おゆきさんの人柄は、几帳面で、やり手で、努力家であつたから、門太郎少年に、生來文柔の風のあるのを、面白からず思つたことは、侍氣質の玄快老人と同樣であつた。かういふ少年を、將來、一かどの人物として大成させるためには、何よりも、きびしい鍛錬を加へることが必要だと信じてゐたおゆきさんは、やゝもすれば門太郎の心に巣喰ふ自由とか不檢束とが怠惰とかいふ惡德が、最も禁忌すべきものとされたのである。

毎夜十二時すぎまで、窮屈なる書机に、とある如く、それも侍の子弟らしく、袴を着用させて、板の間に正坐せしめるのを常とした。北條早雲、二宮尊德、大久保忠世、中垣秀實らの故事が、鄕里の美談として、いつも門太郎の頭の上にのしかゝつて來た。文柔の少年の魂に、これらの美談をふきこんで修養の資たらしめようとするのが、おゆきさんの念願であつた。門太郎の目に、毅然たるおゆきさんの態度が、女看守人の如く映じたのも無理からぬことたつた。

「また、母は、婦女子の性として、活潑なる擧動、遊戲を好まずして、生を束縛して、殆ど諸ろの頑童らとの交通を絕しめたり。

生のもつとも苦しく思ひしは、彼の戰鬪戲をなすことを得ざるにこそ。

生の歷史小說（ヒストリカル・ノベル）を好むや、英雄豪傑の氣風を欽慕して、寢ても起きても、其事ばかり思ひつゞけて、いつも己れの一身を、是らの英雄の地位に置かんことを望み居けり。

且つ又、生は既に考へ深かき小兒となりたれば、諸兒の如く、笑ひ興じて愉快に、光陰を送るとい ふ事出來ず。

最も爽快にして豪放なる遊戲にあらざれば、樂しみと思ふこと能はざりし」

とある白白によつても、既に透谷が、年少にして、英雄浪曼の志深く、やゝもすれば自分の一身を、英雄の地位に置いて考へたがるやうな、後年の透谷の文學精神を髣髴させる壯烈な創造の魂が、こゝ

にも夙に芽生えてゐたことを知るのである。
鋭敏なるがために客觀的には、文柔の風と見えた門太郎の胸奥には、文柔とは懦弱にあらず、寧ろ英雄のほだ火を藏してゐたのであつたが、玄快老人もおゆきさんも、そこまでの深い觀察はし得ないで、たゞ、近所の子供と交際することで碌なことは覺えない。うかうかしてゐれば、早熟な子供にそそのかされて、御一新以來の文明開化の新風をはきちがへた、自由放埒の懦夫となることばかりを懼れたから、先づ、さういふ頑童らとの交際を遮斷し、從つて、彼の好む戰ごつこも之を嚴重に禁壓しなければならなかつたのであつた。
又、其の私信に曰く、
「生は父母、祖父母、みな、愛情にうすき人々なりと思ひこみたれば、生を親愛する者一人もなく、人生の價値とすべき所なしと考へ居けり。是れ則ち、後に生をして氣鬱病を發せしむべき最大なる原來なるべきか」
と。更につゞけて、
「此に記憶すべき一種の幸福なる事あり。其は他ならず。生の母は、生が小説を好むの癖あるを嫌つて、堅く之を禁制せり。若し生にして依然小説を讀むの權力ありて、全く身をアンビションの極度に踏みこましめば、其結果は、實に如何ぞや。

諸ろの英雄の少時によくある例なる自死を試みるに至らんこと、必せり」と、自ら大いに戒めてゐる。則ち、おゆきさんが、透谷に小説を禁じたのは、むしろ勿怪の幸ひであつたので、彼の年少時に、若し、思ふ存分、小説を讀みふけり、自己を歴史的人物、小説的英雄になぞらへる極端な野心的空想に心を奪はれてゐたら、透谷の自殺は、恐らく更に十年の壽命を縮めたのではないかと、彼のこの一文に揣らずも、その後に起つた運命の破壞を自問自答してゐる形である。或は然からん或は然からざらん。

五

門太郎は、英雄崇拜家であつたから、桐座見物に行つても、二番目の世話物の舞臺よりは、一番目の時代劇か、中幕の傳說的、空想的材料による歷史劇の方が好きだつた。世話物のうちでは、濡れ場の多い人情ものより、キビキビした白浪ものの方が見ごたへがあるやうな氣がした。玄快老人やおゆきさんの嚴格な躾によつて侍氣質に反感をもやしてゐる門太郎は、助六とか、幡隨長兵衛とかいふ俠客が、侍を向うに廻して、痛快な啖呵をきるのを、まるで自分のことのやうに、共鳴してゐるのだつた。

桐座見物の翌日、おせんが前の晩の約束通り、大阪屋の華魁の新らしい衣裳をもつて來たときも、

「どうも芝居を見るのもいいけれど、門太郎が、すぐ役者の眞似をするんでね。そら、兒雷也の早替りんとこね。今朝も何してゐるのかと思つたら、印をむすんで縁側から飛下りるんですよ。ほんとうに困つた子です」

と、おゆきは不相變口小言をいふのであつた。

華魁の衣裳は、ごりごりした地のいい縮緬に、大膽な色をつかつた花模様の、目のさめるやうな染上りで、やがてそれが美事に仕上つたときは、大きな衣桁に打懸けて、中風で寢てゐる玄快老人までが、物好きに匐ひながらのぞきに來るといふ騷ぎであつた。地もよし、染もよし、それにもまして、おゆきの針は、一寸一分のゆるみもなしに、ぴつたりとこくのある縫上りを見せてゐた。どんなもんです、と、おゆきの鼻は高かつた。

「滅法、素敵な衣裳だ」

と、郡役所から歸つて來た快藏も驚いてゐた。

「ほんとにさ。大久保樣の時代とは、すつかり世の中も變つたもんだ。女郎がこんな贅澤なものを、身につけるやうになりやアがつたんだから――」

と、玄快老人は床の中で述懷した。

「この一二年こつちは、素町人でも誰でも、羽織をつける、袴をはく。雨がふれば、すぐ蛇の目をさ

したがる」
　と快藏も相槌をうつた。
「さうさ。あの蛇の目は、昔はお前、侍でも身分のある者に限つてゐた。町人は、番傘で結構なのさ。日傘だつてお前、町役人に限つて、翳扇つて奴をお前、つまり尺の長げえ扇さ、それをかざして歩いたもんだ。坊主は竹の笠よ。町人は頬冠りをすりやアそれでお前、苦情をいふことはなかつたものさ」
「何しろ、御天守もこはせ、黒船に備へた砲臺も取外せつて、時代ですもの。女郎の氣位も、昔とは大分ちがつてゐませうな」
「ほんとにさ。しかしあんまり、華魁の悪口も、大きな聲では云へねエのう。華魁たちの納襠のおかげで、今ぢや食ひ扶持の足し前をしてゐる次第なんだから」
「さういへばさうですね」
「ほんとにさ、はゝゝ」
　と、玄快老人は、淋しさうに笑つた。
「就いちやアね、お父つあん」
　と、快藏は一膝のり出した。
「何だね」

「實はこの間から考へてるんだが、まあ、今の分ぢやアお父つあんの病氣も、大分いい鹽梅になつて來たやうだし、私もこのまゝいつまでも、足柄下郡々役所上席書記で、埋まつてしまふなア、殘念だしするから……」

「…………」

「もう一度ね、東京へ出て見たいと思つてるんですよ」

「さうか――」

玄快老人の聲は、しかし、何故か深い感慨が潛むやうに響いた。いつも、自分の病氣のために、大藏省をやめさして、息子を小田原へつれ戻したのを、口では、すまねエ、すまねエといつてゐながらも、骨身を惜しまぬ息子の看病が何よりもうれしくつてたまらず、そのせゐで、頑固一徹の性格までが、少からずやはらいだ程の玄快であつて見れば、息子が再び東京へ出るのを、理性では喜べども、感情ではたゞ、悲しい、佗しい溜息が出た。透谷もいつてるやうに、全く、中風罹病以來、玄快老人の性質は一變した。人なつこい年寄のこの未練が息子や孫に別れともないのである。で、

「さうか――」

といつたまゝ、しばらく、親子の間には沈默が流れていつた。やがて、

「そりやあ、お前の身のためだ。でなくとも、俺はお前にすまねエと思つてゐる。老ぼれの役立たず

の看病に、若い出世盛りの身體を棒にふらしたなア、何とも申譯がねエ。日頃から、さう思つてる」
「お父つあん。そんなことをいつちや、困りますよ」
「いや、よく、看病してくれた。おゆきも、よく働いてくれた。おかげで、病氣も大分、輕くなつた。そのうちには、塔の澤の一の湯へも行けるこつたらう。さうときまつたら、一日も早く、東京へ出るがいいよ」
「ありがたうございます。お父つあん。それぢや、氣持ちよく、又東京へやつて貰へますか」
「氣持ちよくも何もありやアしない。心のこりなく、東京へ出て、思ひきり、働いておくれ。で、東京ぢや、何ぞ、仕事のあてがあるのかい」
「四五日前でしたが、大藏省の友達から手紙が來て、自分の方の課が、今、人不足で困つてゐるしするから、若し、貴公に復職の意志があるなら、自分の方で、然るべく、斡旋してやつてもいい――そんな意味の知らせがあつたのです」
「さうか。そりやア渡りに舟だ。さういふ折を見はぐつちやアいけねエ」
「と、實は、私も考へたもんですからね」
「それにしても、家はあるか」
「そいつが、又、一難題ですが、こんど住むとしたら、日本橋よか、煉瓦ですな、思ひ切つて出ると

とへ出ないことには、やつぱり、快腕をふるふわけにいきませんから」
「煉瓦たあ、豪勢だな」
「ところが、大したことはないんですよ。どうせ、內職がてらだから」
「ふうん。それもよからう。子供も大きくなつて、手がかゝらないのだから」
「まあ、こんどは、內職といつても、あんまり骨の折れないものを考へるんですな。煙草屋ぐらゐがいいんぢやないでせうか」
「ほんとにさ。おゆきだつて、あんまり、我精（がせい）に働かせるなア、氣の毒だ」
「何アに、あたしのは、性分ですから、働いてないと、氣分がふさぐ位ですから」
と、それまで默つて傍にゐたおゆきが、このときはじめて口をひらいた。
「それに、こんどは、門太郎も連れていかうと思つてゐるんでね」
「さうかい。門もつれていくのかい」
「急にみんなで引上げちまつては、ほんとに、お父さんもお淋しいだらうけれど――」
と、おゆきが如才なくいつた。
「その代り、あれは弟とちがつていろんな氣風や流行に、感染し易い性質だから、よつぽど、監督を嚴しくしなくちやアいけないと思つてますよ」

「そりやアさうだ。垣穗とちがつて、門はなかなか、神經が立つ方だから、東京の惡い風に染まると、一たまりもねエやうなことになるぜ」

「何しろ、今だつて、なかなか、親の目を盜む方ですから。よつぽど、几帳面に育てないと、とんでもないものになりかねませんよ」

「しかし、お前みたいに、がみがみいふのも、よしわるしさ」

と、快藏がちよつと横槍を入れた。

「どうして、どうして、門はね。あなたの考へてるやうな、大人しい兒ぢやありませんよ。變な小說は讀みふける。女の兒ともつきあつてるし、默つてゐて、何を考へてるか知れたもんぢやありません。あゝいふ子は、始終、監督の目を休めずに見てゐないと、ちつとも油斷は出來ませんよ。あたしも口がすつぱくなる程、隨分いつてきかせ、もつと、堅儀の、几帳面な性質になほしてやらうと思つてるんですけれど、ほんの三日坊主でね。すぐ、又、もとへ戾つちやふんですもの」

「いや、いや、又、東京へ出れば出るで、氣が變つて、それもよいかもしれんて、東京はどこの小學校へ上るのかね」

と、玄快老人はとりなすやうにいつた。

「數寄屋橋のそばに、大變いい小學校がありますんで。そこへ入れゝばいいと思つてます」

「さうか、そりやアいい」

「泰明つて小學校ですがね、新式の教育法を施してゐます。校長の谷口といふ人が、東京で、先づ第一等の教師としての評判をとつてゐる位ですから」

「門太郎も、さういふいいお師匠について、學問をしたら、惡いところも矯め直すことが出來ませうよ」

と、おゆきが云つた。

「さうか、それぢや何だね。こんどの東京行は、快藏自身のためばかしでなく、門太郎の身のためにもなることつた――こりや大變、芽出たいこつちや」

と、玄快老人も大いに滿足していつた。門太郎は父母と祖父のこのときの話を、實は途中から隣りの間で、立聞きをしてゐた。再び東京へ――煉瓦路に家を持つ――門太郎もつれて行く――泰明小學校――谷口校長――東京で第一等の先生。

そんな言葉が、矢つぎ早に、襖の向うから洩れてくるのだから、門太郎の胸は、わくわくして、忽ちにのぼせ上つた。

多年の待望が、こんどこそいよいよ實現されさうだ。こんどは誰が何といつてもついてゆく。弟の垣穗にばかり、うまい汁を吸はれてたまるものか。

素晴らしいぞ。

いよいよ自分も東京へ出て、新式の教育をうけるんだぞ。貧弱な材料をもとにして空想だけで娯しんでゐた今迄とは違ふんだ――門太郎は身内がふるへた。ふと、おせんの顔がうかんだ。あの人とも、おさらばだ。門太郎はもうすつかり決心のついた氣になつた。

六

さういふ相談は出來てゐたものの、いざ實行となると、家も見付からなかつたり、大藏省の話も、おいそれとは渉らなかつたりして、又、半年ほどが、荏苒とながれていつた。玄快老人は、すでに足腰も自由になり、始終口ぐせにいつてゐた塔の澤の一の湯へ湯治に出かけた。

明治十三年も既に秋の終り近い或る一日、例の如く、夜更けてまで門太郎はおゆきの監督の下に、袴をつけ板の間に坐して、福住正兄の「二宮翁夜話」を讀まされたが、やつとそれを讀み終つて、門太郎が窮屈机の前をはなれようとすると、おゆきはいよいよ近々に東京に出ることになつたからと、いひ渡した。

「東京へ？　何時？」

思はず門太郎は、につこりしていつた。

「年が明けたら匆々に行きたいと思つてゐるんだよ。京橋の彌左衛門町といふ處に、恰好の煙草屋が、居抜きで譲りたいといふ話があつたもんだから」

「ぢやア、春になつたらすぐだね。俺らもつれてつてくれるんだね」

「今度は、つれてつて上げますよ。そして東京の泰明小學校に上るんだね」

「泰明小學校、いい名前だな。俺ら、精出して勉強するぜ」

「偉くなつて、官員さんになつて、新政府のために御奉公しなけりやいけないよ」

と、おゆきはそれをいつた。透谷のいふ母親のアンビションとは、即ちこれのことだつた。東京——學問——官員——出世——新政府——これらは、明治初年の人々の功名心の合言葉に違ひなかつた。

翌日の夕方、おせんが又、仕立物の華魁の帶をもつてやつて來た。門太郎はおせんの歸りがけを、裏口の方から廻つていつて呼止めた。

「おせんちやん。一寸、話していことがあるから、海岸へいかねエか」

「海岸?」

と、おせんはいひ返して、何となく躊躇する氣配だつた。

「用があるのかい」

「用つてほどぢやないけれど、——一寸頼まれものがあるもんだから——でも、まアいいわ、海岸へ

いつて、門ちやんの話、聞きませう」
「さうかい。そいつはすまねエね」
二人は、肩をならべて歩き出した。
「頼まれものつて、どこへいくのさ」
「うゝん。郡役所の人に、一寸、渡すものがあつたから」
「郡役所、やつぱりさうか。郡役所の人つていふのは、栗本さんのことだらう」
おせんはびつくりした顔をして、返事もせずに、門太郎を見つめた。
「知つてるよ。おせんちやん。隠したつて駄目だよ。郡役所の栗本さんとおせんちやんと、この頃、いろんな評判が立つてるの、俺らも聞いて知つてるのさ」
「まあ、いやだ。評判て何さ。どんな評判さ？」
「萬次もいつてた。俺らのおふくろもいつた。俺らの親父は、栗本さんの上席だし、おふくろのいふには、おせんちやんとなら、お似合の夫婦だらうつてさ」
「あら、好かない。あたいなんて、素町人の娘だもの。栗本さんのやうな士族の奥さんなんぞになれるもんかね」
「そんなことはないさ。御一新この方、四民平等の世の中なんだから、町人の娘だつた誰だつて、お

せんちやんの家位、お金持ちなら、よろこんで貰つてくれるよ」

「萬次は何ていつてたの」

「萬次かい。あいつはね――お前なんざおせんに惚れたつて駄目だよ。おせんには栗本て、チヤキチヤキの若旦那がついてゐるのを知らねエか。下郡役所の書記になつて、これからいよいよ出世する一方だもの、おせんが襟につくのもあたり前だつてさ」

話しながら、いつか二人は、暮色蒼然たる海邊に出てゐた。冬の海には、舟の影一つなく、伊豆の岬々の先端は、もう薄暗い夕闇に包まれてゐた。つい口がすべつて、こんな話になつたけれど、栗本書記とおせんの噂は、もう二三ケ月も前から、門太郎も知つてゐて、何となく、平らかならぬ心持がしてゐたのである。とはいへ、別におせんに對して、それをどうかういふやうな、積極的な野心が動いてゐるわけではない。第一、年が違ふ。

しかし、おせんがこれまで陰に陽に示してくれた好意を、門太郎が尋常以上のものとして、感じてゐることは、本當である。殊に、酒匂川鮎釣りの髮の毛のこと以來、門太郎はおせんの情に、熱い感激を覺え、いつしかそれが甘い空想とからみ合つてゐることは、否み難い。阿母のおゆきからも、何となく、怪しげな目で見られ、萬次たちからも、變な意味にとられて冷やかされたりすればする程、子供心にも、おせんのことが忘れられなくなつてゐた。女に對しての、はつきりした官能にめざめる

もう少し甘く愉しい感情として、門太郎の胸に、一つの夢を投げてゐたのである。だから、おせんが、このごろ急に栗本書記と往來してゐるときかされた時は、門太郎と雖も狼狽と動揺の色をつゝむことは出來なかつた。それを見て、萬次は、してやつたりと、痛快がり、おゆきは、何がなし、ホツと安堵の胸を撫でたのである。栗本の家は、三の丸の侍屋敷の中にあつた。事實、門太郎は或る日の午下り、茶壺曲輪の方から城の石垣づたひに下りてくる道で、箱根口御門を外へ出ようとしてゐるおせんの姿を見かけたことがあつた。いつもなら、そんな處で、おせんを見かける筈がないので、その時も、あゝ、やつぱり、栗本書記との噂は眞實だなと、門太郎は胸をとゞろかしたものであつた。嫉妬といふべくは稍々色淺い、一種の失意の如き感情が掠めるのであつた。そしていつもならすぐ、おせんちやんと、呼止める處であるのを、門太郎は、妙に卑屈に押しだまつて、却つて自分の姿を、傍の松の木の影に避けたのだつた。

「そりあ、俺だつて、おせんちやんが、士族の奥さんになるなあ、うれしいよ。お父つあんの話ぢや、栗本さんもいい人だつていふし、おせんちやんも、惡くは思つてねエ人なんだろ」

「いやだね、門ちやんまでそんなこと云つて――あたいは、栗本さんより、門ちやんの方が好きさ」

「ちエ、うまくいふぜ」

の
と、門太郎は、ませたいひ方をしたが、胸の奥を何か激しい炎のやうなものが、灼きつけて通るのを感じた。しかし、おせんは又いひ返して、
「そりや門ちやんより、あたいは年上だし、奥さんなんかになれないけれど、……」
「それに俺ら、近々に東京へいくんだ」
と、門太郎は高飛車にいつた。おせんはびつくりして、そこに立止つた。
「ほんとかい」
「ほんとだよ」
「まあ――」
おせんは砂の上にぺつたり坐つた。門太郎も並んで坐つた。沖はもう暗かつた。
「いつ行くの」
「お正月すぎたらな。家も、丁度都合のいいのが見つかつたんだ」
「何處に？」
「京橋だつてことだ」
「京橋つていへば、御江戸の眞中ぢやアないか」
「だからね、今日は實は、おせんちやんに、別れをいはうと思つて呼止めたんだ。子供の時から、一

人つぽちの俺らを、ほんとによく庇ひ立てしてくれた御恩に、有難うつて、心から禮をいつて、小田原を立ちてエんだ」
門太郎も胸がつまつた。おせんも膝の上に重ねた袂に、白い雫が落ちて來た。
「小母さんたちも行つちやふのかい」
しばらくしておせんが訊いた。
「うん、皆、行くんだ。當分は小田原の海も見られねエ。少くとも、十年は歸つて來ねェだらう」
「十年つていへば、もう、あたいなんておばあさんだね」
「まさか」
「門ちやんの方はいい若衆になつて、あたいなんかに鼻も引つかけないだらうね。東京育ちの、パリパリのハイカラさんだらうから」
「何をいふんだ。そんな、ハイカラなんて、眞平さ。俺ら、うんと勉强して、歷史的人物になるんだ」
「でも、そりや田舍にゐての考へよ。東京へ出れば、自然、お洒落にもなるし、ハイカラにもなるわ」
「何あに、俺ら、そんな輕薄な文明開化の風には染まらねエさ。そんなの、大きれひだ」
「それに、東京には、美しい女子が澤山ゐるさうだから、門ちやんは、きつとすぐ、女の友達が出來るよ」

「いいや、斷じてそんなことはないよ。小田原ぢや、男の友達に、碌なのはゐねエから仕方がなかつた。けど、東京には立派な男がどつさりゐる。有爲の靑年、少年が、風雲をのぞんで、みんな一旗あげようと集つて來てゐる。俺ら、東京へ出たら、女の友達なんかこしらへねエで、どんどん、男の友達を拵へるよ。時代のうごきは、躊躇を許さぬ時だ。靑年であればある程、働き甲斐の强い時代だ。俺ら、東京へ出たら見ちがへるやうにやつて見せるよ」

と、昂然として、門太郎は眉をあげた。おせんはじつと動かなかつた。——ふたりはいつまでも、この懷しい思出の渚を立去りかねた。晩秋でもやはらかい風の吹く濱邊、磯の香り、そして白い砂の上には、薄闇が下りてゐる——今日ばかりは思ふ存分、この感傷の中に、ひたりこんでゐたいと門太郎は思つた。

「とつぷり暮れたわね」

「家で待つてやしないかしら」

「いいの。もう少し、かうしてゐたい」

おせんもなかなか腰を上げる樣子がなかつた。——實際のところ、門太郎は、その手紙にもあつたやうに、自分の父母祖父母を悉く愛情の薄い冷靜酷薄の人と思ひこんでゐたのであつたから、愛情といふものに飢えてゐたのである。その上、少年の、ロマンチックな夢や理想を語るやうな、理性的な

男の友人にも悳れなかつたのであるから、せめてこのおせんを、時には戀人のやうに慕ひ、時には、肉親の姉のやうに懷しみ、時には無二の親友のやうに信愛したのも、まことに自然のいきほひといはねばならぬ。しかし、門太郎が、旣に尋常一樣の少年でなかつたことは、今おせんと別れ、いよいよ自分が孤立無援となることを、別に女々しく悲しんでゐるわけではなかつたことでわかる。彼は旣に、自分は自分で自分を生かす外はないといふ、孤獨の精神をつかんでゐた――彼は、愛情うすき父や母と共に、一旦、東京へ立つものの、東京では、更に一層、孤獨の勇氣が必要であり、本當に孤獨に徹することで、却つて、未知の有爲の青年や同志と、正しく心を通じ合ふことが、出來ると信念しはじめてゐた。獨往邁進して、はじめてそこに、正しく己れを知る者の心と結び合ふものであることを、はやくも彼は、看破してゐたのである。それにしても奮ひ立つ冷靜な勇氣の前に、少年はこの戀人の如く、姉の如く、信友の如きおせんに對する哀別の感傷を抑へ難かつたのである。實際、このまゝ一晩中でも、おせんの傍に坐りつゞけてゐたいやうな、なまなましい純情も、青春直前の門太郎の身うちに、ふつふつと湧き立つてくるのであつた――。

七

それから間もなく、玄快老人が一の湯から歸つて來た。門太郎は、箱根細工の筆入を土産に貰つた。

玄快老人は、おゆきや門太郎をつかまへて、しきりと箱根の話をした。塔の澤や宮の下の溫泉場が、こゝ僅か四五年間に、非常な發展をとげたこと、これから先きも、いよいよひらけるばかりで、將來の繁昌が思ひやられること、これも一つに、明治六年、畏くも明治天皇が皇后御同列で、宮の下溫泉に御入湯を賜はつた大御影によるものであること、爾來、明治新政府の大官連の來湯するものも多く、このごろでは、來朝使節その他の外人まで、東京近縣の遊覽地として、先づ箱根に足を向ける關係から、自然、設備も發達したこと、日本中に溫泉も多いけれど、東京に最も近い距離を有する點で何としても天下一品の名湯であること、しかし、一の湯の主人は、堅儀の舊弊人であるから、昔の客を粗末にするやうなことはなかつたこと、明治になつても、舊小田原藩士だけは、特別に安く賄つてくれ、決して不法の勘定を取るやうなことがないこと、——などを話してきかせて、老人の機嫌は、上々であつた。

——舊記によると、其當時の箱根の湯治賄料は次の如くであつた。

御　賄　料

上　等	一週間	金貳圓
中　等	同	金壹圓七十五錢
下　等	同	金壹圓二十五錢

右、炭、油、寝具料共
但し席料浴料は別に頂戴仕候
明治九年八月
箱根堂ヶ島
奈良屋
大和屋

これを、當時の東京の下宿料と比較して見ると、
下宿料
一ヶ月　金貳圓五十錢也
但し賄料並に座敷料を含む
賄方は
朝　鶏卵一粒、味噌汁、實豆腐位
晝　生魚皿平の肉
夕　煮豆又は適宜のもの

（座敷六疊一間に付、御二人のこと。八疊は御三人。八疊二人の時は二圓六十錢宛なり）

とある。東京の下宿が、一ヶ月で二圓五十錢で居られたのに、箱根の奈良屋は、一週間で賄だけが二圓といふのであるから、相當の高額といはなければならない。一の湯も奈良屋に遜色なき舊家であつたから、父快藏が玄快老人にそこでほんの暫くでも病氣養生させることが出來るのは大變な孝行であり、老人自身もそれを非常な得意としたのは當然であつた。

ところが、それから二日ばかりたつた朝だつた。老人は不淨を出て、手水鉢で手を雪がうとした拍子に、突如第二囘の發作がおこり、くらくらと、緣側に倒れた。

門太郎は、何か異樣な物音に、部屋をとび出して見ると、老人は、うつぶしになつて倒れてゐる。

「おい、大變だ。又おぢいさんが、ぶつ倒れた」

と、門太郎は大聲をあげて叫んだ。父の快藏もまだ、郡役所へ出る前のことだつたので、門太郎の聲に、驚いて出て來た。

しかし、こんどは、もう如何ともすることが出來なかつた。門太郎はすぐ、須藤町の醫者のところへ急を告げたが、醫者が來たときは、既にこと切れてゐた。

門太郎は、祖母の死は知らなかつたので、肉親の死は、このときが最初であつた。愛情のうすい、やかましやの祖父ではあつたが、中風の發作以來、その性質が一變し、殊に最近は、門、門、と、隨

分、可愛がつてもくれ、現に數日前にも筆入の土産ものを貰つたばかりであつたから、門は玄快老人の死を目のあたりにして、ふかい悲しみに襲はれた。

「おぢいちやアーん」

門太郎は、骸となつた祖父の身體にとりすがつて、涙を流した。まして、父思ひの、孝行息子の快藏の落膽は、はたの見る目も氣の毒な位であつた。

「父は非常な親孝行で、祖父の病氣のためには、大事な大藏省の勤めの方も、平氣で拋棄して、郷里に歸つたり、その後も、日夜、根氣をつくして、看護にはげみ、僅かの財産も、悉く治療費になげうつて、一向それを意に介さなかつた程であり、寧ろ、さういふ點では、日頃の傲慢磊落に似ず、甚だ小心翼々たるものがあつた――」

といふやうな意味の批評を、後年透谷はその父快藏なる人の人物に加へてゐるが、このときの、父の悲歎ぶりを見てはひそかに思へらく、

「おやぢも、自分ら子供に對しては、冷淡薄情の親だが、自分の親に對しては、なかなか、人情がふかく、正直者の小心者であることを、隱し得ないではないか」

と。その位の感想は抱いたのである。

玄快老人の死は、いはゞ、透谷一家の小田原引上げに、好個のふんぎりを與へたものであつた。就中父快藏は、おのれの志も大事だが、稍輕快に赴いたとはいへ、明日も圖らざる發作のある老病の父をのこして、故郷の地を立去ることはうしろ髮を引かれる思ひだつたに相違なかつた。

玄快老人の遺骸は、國府津在前川村長泉寺に之を葬つた。この寺は、北村家の祖先の墳墓の地であつた。これよりのち明治二十六年、透谷が自分の健康の異常を知つて、靜養の地を鄕里に求めた時も、却つて小田原をさけて、この前川村の長泉寺の一室に假寓したのである。

藤村の「春」の一節には、前川村長泉寺の描寫がある。文中、岸本とあるは、藤村自身のこと、青木とあるは、透谷のことであるといはれてゐる。

「……前川村は相模灘沿岸の漁村で、密柑畠の多い豐饒な谷一つへだてて、國府津の町につゞいてゐる。その漁村には、青木の祖先が眠るといふ寺がある。その寺の一部分を借りて、青木は家內中で引越して來てゐる。萬更、彼も緣故のない場所へ移つた譯でもなかつた。

寺は小高い岡の上にある。(中略)汽車道は斯の寺の境內を無遠慮に橫斷してゐるので、村へ出るには踏切を越さなければならない。石段を下りる、また上る。そこに古い門がある。岡の盡きたところが、丁度、寺の入口だ」

斯くて、門太郎は、兩親に伴はれ、一家をあげて、東京に移りすむこととなつた。小田原の舊家は人手に渡つた。これは震災まで殘つて居て、倉橋達之助氏が住み、透谷庵と號し、裏庭の老梅も毎年昔忘れぬ花をつけたといふ。しかし、隣家の小島たつさんの家は、その後、著々成功して、今日では堂々たる材木店となつてゐるに引きかへ、透谷の生家の方は、油に染まつたうすよごれの自動車屋のガレーヂとなつてゐることは、前回に述べた通りである。

門太郎たちの移り住んだ東京の家は、京橋區彌左衞門町七番地、小さい煙草兼賣藥商の店で、父快藏は再び大藏省に出仕することとなり、門太郎はすぐ目と鼻のさきの、泰明小學校に、希望通り、入學することが出來たのである。

――明治十四年の春であつた。

明治十四年といへば、全國をあげて、滔々たる民權思想の渦巻き流れた時代で、はやくも民選議院設立の聲は、民間の叫びにとゞまらず、臺閣のうちからも、參議山縣有朋、同黑田淸隆らが、これに關する意見書を上り、就中、大隈重信の唱へた國會開設論の急進主義の如きは、天下に轟々たる反響をよび起してゐる眞只中であつた。フランスから歸つたばかりの西園寺公望は、其の年の三月十八日に「東洋自由新聞」を發行し、自ら社長となつたが、忽ちに筆禍を起して廢刊の餘儀なきに至り、同

志は獄に降されたりした。藩閥對非藩閥、國會開設對國會尙早の政治闘爭は、この年に及んでまさに鎬を削つて、絢爛たる檜舞臺にあらはれたのである。俗に明治十四年の政變といはれるのは、この、二つの均衡が破れて、藩閥漸進の立場に立つ政治家伊藤が、國會急設の經綸をかゝげた大隈との初陣の對戰に、まんまと敵の裏をかき、之を一敗地にまみれしめたのをいふのである。

透谷は、この、風雲か雷霆かといふやうな切つぱつまつた十四年の春、はからずもはじめて東京の地を踏んだのであつた。

第三章

一

泰明學校は、育英學校などと共に、現存する東京の小學校では、最も古い歴史をもつ小學校である。しかしその當事の教育方針の實際は、何といつてもまだ、創生期に屬してゐて、基礎の固まらざるものがあり、文明開化の新風と、封建舊幕の遺風とが、ゴッチャになつてゐて、撞着矛盾の多いものであつたに違ひない。

內田魯庵氏の「明治十年前後の小學校」（太陽增刊第參拾參卷第八號）に據れば、

「その頃、小學校では福澤先生の（世界圖畫）を授けられたが、家庭で大學や唐詩選の素讀を教へられてゐた私には、世界圖畫が馬鹿々々しかつた。しかし口調が面白かつたので、飴屋の唄と一緒に暗誦した。（中略）

共の頃は、まだ、教育勅語は賜つてゐなかつたので、修身の科目では、據るべき道德の規範がないために、ありふれた修身道話がくり返された。

が、二十四孝式の親孝行咄では、咄す方も張合がなく、聽く方はもとより退屈して、初めからヒソヒソ咄をしたり、欠伸をしたり、中には大ぴらに、ぐう／＼鼾をかくものがあつても、あまり叱られなかつた。當時、私達の先生は、講釋が好きで、日曜に近所の講釋席へ行くと、必ず先生に出會つたものだが、好きから工風して、修身の時間に太閤記や義士傳の講釋をしてきかせた。

南龍ばりの、ノン／＼、ズイ／＼の修羅場讀みが面白いので、生徒は机に頬杖をついて、口を開いて聽きほれてゐた。が、賤ヶ岳の七本槍や赤垣源藏のやうなものなら、今の文部省でも文句はなからうが、しまひには鼠小僧や國定忠治の話を修身の時間にするやうになつた。修身の時間は、ドコの學校でも、退屈で嫌はれたが、私達の小學校では修身の時間が中々人氣があつた

と記してゐる。魯庵氏は育英學校出身であるが、當時の泰明學校も、無論この記事と大差ない情況であつたらう。たゞ校長の谷口先生といふのが、東京中でも第一等の教師と評判される程の人で、新入學した門太郎を大へん親切に指導してくれたのであつた。門太郎も深く之を德とし、例の書簡にも、

「此學校は、聊か以て生の不平を慰めけり」

と、記してゐる。或は又曰く、

「其人は生の淡泊なる性質を鍾愛し、最も親愛して生を教育せられけり。又、生は人の意表に出づる議論を好みて、文章を造るに、愉快、活潑の氣象をあらはしければ、卑屈コンモンなる數多の教師ど

も、にはかに生を敬愛するに至りたり。

從つて校中の評判、生の一身にあつまり、生の最も得意とするアンビションは、此の學校の生活には全く其功を奏したりといふべし。

この年は、國内政治思想のもつとも燃え盛りたる時なりければ、生も亦、風潮に激發せられて、政治家たらんと目的を定むるに至り、奮つて自由の犧牲にもならんと思ひおこせり。

從來のアンビションは悉くこの一點に集合し、おそるべき勢力を以て、生の心を支配しはじめたり。

この年は、多少、生をして愉快に其日を送らしむるを得たり

と。小田原から、ポツと出て來た新人の田舍の少年としては、東京の學校に才名をうたはれたのであるから、その得意思ふべきものがあつたであらう。

彼が飄然として家を出で、懷中に一錢の金ももたずして、東海道を徒歩し、鎌倉に遊んだのも、この年であつた。

「抑も、鎌倉は詩人にとりてのイタリーの如く、最も生の渇望して一見せんと欲するの土地なりし。何となれば、其頃生の日常讀む所は、重に日本の歷史にして、其歷史中、最も重要の事件は、彼地に於て演ぜられたればなり」（書簡）

と。當時、滿十三歲にも足らぬ少年としては、馬鹿にならぬ識見であつた。彼は鶴が岡八幡の石段

に立つて、日本の歴史を思ひ、政治の闘爭を思ひ、又、遠く、公曉の暗殺にあつた源家の将軍實朝の流血の場面を思ひ描きながら、自分も亦、混沌たる明治政界の風雲に乘つて、大いに憂國の志士たらんとする心をかためた。ふるつて、民權運動の犧牲たらんとする熱情にも勇み立つた。と同時に、後、巖本善治氏が神崎清氏に送つた書簡の中に、

「彼は公曉を題材として、その詩感を、傾盡せんと、長く苦心して居りましたが、終に完結しませんでした。然し、思ふに公曉を中心として、當時の複雜なる事情を詩化することに於て、彼の文才を發揮せしめなかつたのは、如何にも殘念です」

とあるやうな、公曉を主人公とした創作の腹案も、この時亦、ひそかに彼の胸中を去來したものにちがひないと思ふ。

鎌倉ばかりでなく、氣が向けば、彼は獨りでどこへでも出かけた。そんな習慣から、自由黨で有名な三多摩地方（野津田、八王子、森下）を歩き廻つて、後に石坂昌孝を知る機縁をなしたわけであらう。また、千葉縣下にもよく出かけた。熱情が腹に溜まつてくると、小さな煙草屋の二階に居たゝまれなくなつて、田舍の豐富で清冽な大氣が吸ひたくなるのであつた。

かうして、どうやら、小田原時代の不平を恢復した彼の泰明時代も、忽ちに一年の課程を終つて、卒業式の日が來た。彼は、既に、演說の稽古もしてゐたので、其の日はすゝんで演壇に上り、空氣と

水の實驗に關する一演說を試みた所が、非常な好評を博した。「明治日報」の如きは、その雜報欄に、北村門太郎の演說の傾聽に値するところ、まさに奇童といふべしと稱めそやした。天才の風貌は、すでにこのとき十分に伺へたのであらう。しかし、この講演に關する記錄は、震災の火を蒙つて、現在の泰明小學校には、一葉の痕跡ものこつては居らない。

二

すでに、國會開設の詔勅は發しられた。畏くも　明治天皇は、「我祖我宗、照臨して上に在り、將に明治二十三年を期し、議員を召し、國會を開き、以て朕が初志をなさんとす。今在廷臣僚に命じ、假すに時日を以てし、經畫の責に當らしむ」と、仰せられた。在廷臣僚の筆頭は、いふまでもなく、大隈との政戰に勝機をつかみ、時の政府の實權を掌中に收めた伊藤博文である。

伊藤は明治十四年の政變に於いて、ものゝ見事に、政敵大隈を下野せしめたばかりでなく、却つて敵の武器をとつて、わが武器としたのである。乃ち、明治十年以後の、漸進對急進の政爭に於いて、急進黨の以つて最大の武器としたスローガンは、國會開設の要求であつた。しかもこの要求の背後に

は、自由民權の思想が、滔々として、滿天下を風靡せしめてゐた。加ふるに維新以來の不平士族は、その志の酬いられざるまゝに、競うてこれと合流しようとした。このとき、野に在つて、此の風雲を指導したものは、前の參謀板垣で、朝に立つて、この潮流に呼應したのは、時の參議大隈であつた。然るに伊藤は大隈を退朝せしむると同時に、一擧にして、敵黨の大旆を奪つて、之を自家陣中に、堂堂と押し立てたのである。大隈によつてのみ、國會開設の要求は達せらるゝものと信じ切つてゐた急進派の連中は、寧ろ、愕然として、とつさに敵勢を切りかへした伊藤の大膽な戰術に舌をまかざるを得なかつた。

――大詔一下、忽ち局面は一變した。國會開設を、唯一の具體的政策としてかゝげ來つた自由民權派の鋭鋒は、これによつて、まつたく出鼻を挫かれ、氣勢頓みに沮喪した。と同時に、從來やゝもすれば、憲法政治に反對的である如く印象された明治政府は、こゝに至く、憲法の味方たるべき位置を確定し得たのであつた。

かくして、翌十五年三月には、伊藤は憲法取調べの大命を拜して、伊東已代治、山崎直胤、河島醇、平田東助、吉田正春、三好退藏、西園寺公望らを隨へて、歐羅巴にわたり、つぶさに各國の情勢を視察したのである。かくして、憲法草案の起草、國會開設の準備は、着々として、實行に移されていつた。

それでも一方では、十五年四月六日、自由黨總理板垣は岐阜遊說の際、兇漢に刺されんとした椿事があり、これによつて、板垣遭難の報が四方に傳はるや、天下の同情は翕然として彼にあつまり、民權派の勢力は益々加はるの情況を呈したので、政府は十五年六月集會條例を追加し、地方長官（東京府は警視長官）は獨斷にて、演說會を解散し、其の情狀によつては、演說者に對し、一ケ年以內、管內に於いて、政治を講談論議することを禁止し、又、內務卿は更に其の演說者に對し、一ケ年以內內國的に政治論をなすことを禁止することが出來る權能をもつことになつたりして、天下の物情は、なほ一部に甚だ深刻な不安をのこしてゐた。しかし、何といつても、國會開設といふ最大問題が、意外にスムースに解決したのであるから、從來の喧々囂々たりし自由民權の使徒たちは、些か張合拔け、拍子拔けの態であつたことは爭へない。

少年ながら、門太郎も其の一人であつた。上京當初は、自由のために犧牲者たらんと考へた彼も、打ちつゞく、政治情勢の變化は、怪奇な政治家の宿命を見せつけられるやうな氣がした。次第に、彼は懷疑家の風貌を具へ出した。

そこへもつて來て、彼が深く私淑してやまなかつた、泰明學校の校長谷口氏が、事情によつて、東都を去り、北海道に赴くことになつたのである。

それを知つた時の、門太郎の落膽は小さいものでなかつた。彼に父に云つた。

「ぼくは、このごろの世の中のことが、面白くなくつて、仕方がないんです」
「少しばかり、演說なんかして、ほめられたりしたものだから、お前はすぐ、高慢になつて、そんなことをいふ。世の中が面白いの、面白くないのつて、まだ、何にも世の中のことなんか、わかつてはゐないくせに……」
と父からは頭ごなしにたしなめられた。又或日、門太郎は、
「どこか、上の學校へやらして下さい」と母にせがんだ。
「さうだね……」
「このまゝ、煙草屋の小僧になるのは、まつ平です」
「煙草屋々々々つて、お前はすぐ、馬鹿にするやうにいふけれど、煙草屋といつても、場所によりますよ。煉瓦は東京一番の盛り場だし、こんな屈强な場所にある店だもの、今に、この邊は、大へんな權利を生ずるにきまつてゐるんです。みんな、お前たちのためを思つて、お父樣も、無理をなすつて、手に入れなすつたんだ」
「しかし、いくら場所が目抜きでも煙草屋の主人たることは、一代の男子の志にはなりませんよ、お母さん。ぼくは勉强がしたい。勉强して、天下の偉人になりたい」
「それぢやア、どつかの塾へ入つたら、どうですね。この頃は、大分、あつちこつちに、塾が出來た

やうだね」

「ほんとですか、お母さん。塾に入つてもいいんですか」

「とにかく、一度、お父さんに相談して見ませう」

「お願ひです。お母さん」

門太郎は、又新らしい希望の湧き立つのを感じた。しかし、やうやくのことで彼の希望が達せられて、入塾した岡千仞の私塾は、彼の期待を全く裏切つた。

彼は、十五の春の憂愁に關して、次のやうな五ヶ條を列記した。

「明治十五年は生をして殆んど、困死せしむべき程の一年なり。

之等のアンハッピイの第一着は、わが極めて親愛せる善良の教師谷口氏の去つて北海道に行けることと之れなり。

其第二着は、生が新たに入學したる岡千仞の私塾は、實に生をして不愉快に堪へざらしめたり。

其第三は、かつて熱心に盡力したる青年黨の面々、散り〳〵に分離したること等なり。

其第四は、政府の擧動やうやくをかしくなりて、此の神經質の少年をして、憤慨に耐えざらしむる事少からず。

其第五は、生よりも一層甚しき神經家なる我家の女將軍は、生が活潑に、粗暴を交へて動作するを

いたく嫌ひて種々の軍略を以て、生を壓伏せんと企てたり」と。

我が家の女將軍とは、生母おゆきさんのことである。この母の嚴格な躾に對して、門太郎が尙不快の念を禁じ得なかつたのは、一家が東京へ引きうつつてからも、同じことであつたのである。

因みに、彼の書簡に神經といふ言葉が盛んに出てくるのは、その頃、世人が神經といふ言葉を新らしく覺えて盛んに使用し、何でも少し怪しいことがあると、すぐ、ソラ神經質だ、神經病だといつたものである。當時の「繪入朝野新聞」は、柳亭種彥(藍泉)が、神經病を文字つた「怪談深閨屛」といふ、神經から生ずる怪談ものを書いてうけたりした位である。

又當時の私塾は、卽ち私立學校兼寄宿舍のことで、福澤諭吉の慶應義塾、中村敬宇の同人社、三島中洲の二松學舍、杉浦重剛の稱好塾などが、その主なるものであつた。(追記參照)

三

前記五ヶ條の仇敵は、交もごも、彼の心中を惱亂せしめたので、彼の活潑なりし天性は、次第にそこなはれ、「穩着沈默なる、肉落ち、骨枯れたる一少年とこそなりにけり」と、彼は自らいふ。一種の轉換期に立つたのであつた。

「従て、又怯弱なる畏怖心をかもし、年來腹裡に蓄へたるアンビションをして、徒らにをされをのの
く事を知らしむるに至れり。

アンビション果して成すに足らざるか。

生が生活は、何に寄りて過ごさん。

何を目的として世を送らんかなどと考へれば、考へる程、心を病まし、氣を痛め、終日臥床にあり
て、涙と共に一、二ヶ月をすごし、何時癒ゆべしとも思はれざりし。

ここに至りて、生が父は、何の原因より起りし病とは知らねど、氣鬱病とは知るものから、生を放
つて地方に旅行せしめたり。

此はこれ、生が旅行の嚆矢にして、爾後、主に旅行を以て氣欝を慰むるの機具となしたるも端緒を、
此に開きしなり」(書簡)

と、告白もしてゐる。

岡千仭の私塾に失望したる彼は、更に同年五月、本郷なる共慣義塾と稱するものに入塾したが、こ
れ又、彼の意に滿つる能はずして去つた。しかし、かうなると却つて、向學の精神はつよくなつて、
翌十六年三月には、早稲田なる東京專門學校に入塾した。

島崎藤村は透谷を語つて曰く、

「透谷の氣欝病は早く青年時代に彼を襲つたといふ。彼はそのために一月ばかりも床についた。彼のお父さんは心配して、暫く彼を旅に送り、想ふまゝに山野を跋渉せしめた。

私が知つてからの彼は、可成り旅好きで、その事は彼の書いたものにも出てゐるし、（飄遊は吾性なり）と言つて見せた言葉のはじにも殘つてゐる。（中略）

彼の神經質は、感じ易いといふところを超えて、傷み易いほどの程度のものであつた。猫一匹、彼の住居の側に捨てるものがあつても、彼はそれが氣になつて、その家の住み憂くなつたと聞いたことがある。（中略）

透谷は空想の多い青年時代の初期から、政治に行かうとしたり、宗教に行かうとしたり、哲學に行かうとしたりした。

彼は今の早稻田大學が、專門學校といつた時代に、政治科にゐて法律を修めたこともある」と。しかし、彼は早稻田に入つても、普通の學生のやうに教室に出て講義を聞くよりは、寧ろ、書籍室を渉獵して、盛んに古今東西の書史を讀みふけることが多かつた。彼の神經性の氣欝病は、この讀書癖によつて、暫く慰められたのである。

「生は常に、學問の仕方は、自ら修め、自ら窮むるといふ禪宗臭い說を持ち居れり」と、自らも云つてゐる。

この年、彼は宮崎湖處子と相知つた。又、同年夏、富士山に登つた。このことは、後年（二十三年）の作である「蓬萊曲」の序文に於いて、

「囘顧すれば、十有六才の夏なり、孤筇其絶巓に登りたりし時に、余は始めて、世に鬼神なる者の存するを信ぜんとせし事ありし。崎嶇たる人々の行路、遂に余をして、彼の瑞雲横はり、仙翁樂しく棲めるといふ靈嶽を假り來たつて、幽冥界に擬し、半狂半眞なる柳田素雄を悲死せしむるに至れり」

と書いてゐる。

「蓬萊曲」ばかりでなく、彼の評論中の白眉である「富嶽の詩神を思ふ」も、亦、この時の富士登山に胚胎してゐることは明らかであらう。

彼はこの時の紀行を、それより二年後の十八年夏「富士山遊びの記憶」の一文に草したが、公表されずして、そのまゝ筐底に藏されてゐたのを、「明治文學研究、第一卷第四號、北村透谷特輯號」に、その遺稿の一つとして發表された。

その解說に曰く、

「富士山遊びの記憶は、透谷の遺稿の中で、もつとも古い、珍しいもの。美濃判半截の罫紙を二つ折にして、綴り合した稿本で、これを發見したときの興奮は今だに消えがたいものがある。

跋文に、「當分清書せぬ者に候」

とあり、墨と赤インクとで、二三度推敲した跡がのこつてゐる。

桃紅は透谷の古いペンネーム。蓋し、松尾桃青にちなんだものか。（中略）

旅行中の製作は、この時代の青少年の興味あるテールの一つだつたと思はれる。しかしたとへば、青年子規の旅行文が文章の修練を旨としてゐたとすれば、この桃紅處士の旅行文は、自然と生活の豊富な觀察に滿ちてゐる。（中略）

小田原を少年時代の郷土とすれば、自由黨で有名な三多摩地方は、透谷にとつて靑年時代の郷土であつた。この文獻の出現によつて、透谷の足跡が、いくらか、判明するに至つた。」

とある。

彼はこの時、コースを甲州街道にとり、日野、八王子、猿橋、大月を經て、吉田口から登山したのである。文章は、膝栗毛風の戯文體を脱却し得ないが、道中の實景は詳しく、觀察は鋭敏で、大いに珍重するに足る文獻である。

「吾はもとより貧しき書生にしあれば、馬車や車の贅澤は、吾身の分にあらざれば、健康のそこなひなさぬ限りは、杖と語らひたどりあゆむこそ、誠の本意とは申すべけれ」

といふ書き出しではじまるが、その一部を抄記すれば、

「日野の原を打すぎて、橋を渡る馬車の音、ガラ〳〵合圖する間に、八王子、横山町は横街ならぬ繁華場、角喜の角を廻りては、中に目につく遊びやの、昔の心の思はれて、片腹せまき片道を、今日は四の日、市の日にて、二十四日は大祭日、糸や織物は市日にて、山車御輿は祭り日とて、思ひ〳〵の賑やかさ。地方の旅にはめづらしけれ。

されど不の字の差しひゞきにて、山車引くことも制せられ、酒のむ場とても靜かなり。

八王子松田の其名も賣れし滿林は、小兒やたいに入口を、閉門されて客もなく、吾妻や大増、大萬、軒をならべし遊里場、ひつそりしたる夕景色、相模甚九も當八も、小供山車の大皷に、氣の根を止められて、すまし控へてゐるぞ可笑しき（中略）

……遂に頂上につきたりしは午前八時頃とも覺しく、彼の長どてらを被て、手を袖に入れて歩きしが、寒さはしみ〳〵忘れ難き程なり。三月頃の氣候と同じく、地霜柱あるを見たり。笠や杖をどつかと茶屋に寢ころびて、しばしは正體なかりしが、甘酒にて氣力をつけ、再び立上りて、やをら、富士の世界一週と出かけたり。

けんの峯は、富士の西に見える所にして、最高の峯なり。北には釋迦のわれ石といへる高き峠あり。南にも一個高き所ありて、此三ヶ所あるがため、不二の景色の美しきたりと知るべし。されど、之を一週するに、皆巖石を以て成立ち、西の部分は最も険しく梯子にて登る處二ヶ所あり。一つ疲れ足を

踏み損じなば、忽ち駿河の國大宮まで、流星の如く焼け落ちるも知るべからず。けんの峯の東に淺間神社といふあり、又、銀明水といふをくむ。けんの峯の頂上は、則ち富士山の絕頂なれば別して心氣好かりき。

唐詩一つ

自警天地大　恍視山川一樣淸
感情出億外　悠然下瞰白雲行」

大體、こんな調子で書いてゐる。但し、この唐詩については、彼も自ら註して曰く、「右の詩體は、余もはじめにて、不都合多きを實驗せり。讀者諒之」と。唐詩に不都合を自覺したる彼は、やがて、その感受したる詩的精神を表現せんがために、新らしき詩の形態に向つての創造的情熱がうごき出さずにはゐなかつたのであらう。詩的感受から、詩的創造へと、次第に彼は成長しつゝあつた……。この年、何を思つてか、彼は速記術を習つたりもした。

四

明治も十七年となつた。門太郎も十七歲となつた。明治十七年といへば、華族令が出て、公侯伯子男、五百五名の敍爵か行はれた年である。日本に、貴族といふ新階級がはじめて出現したのは、この

年である。この新制度も、參事院議長伊藤の手によつて畫策せられ創設せられたものであることはいふまでもない。之に敍せられたるものは、舊來の公卿及び諸大名のすべてを包含し、且つ、維新の宏業に翼賛したる文武の功臣を之に加へた。かくて新に發生した新貴族の一團が、明治政府の强固なる防壁の役割を果すことになつたのは、當然の理で、すべては伊藤にとつて、會心の政策であると共に、信望やうやく朝野に高く、その權勢は當るべからざるものとなつて來た。

とはいへ、國會開設の逆モーションで、度肝を拔かれた民權派は、この頃になると、又、あちらこちらに、ぶつぶつ餘燼が燃え出してゐた。門太郎は、早稻田時代に、二三の友人を知り、その感化によつて、一旦、鉾を收めたかに見られた政治熱が復活した。則ち曰く、

「十七年は、生をして一度び怯懦なる畏怖心を脫却して、再びアンビシヨンの少年、火を燃え盛らしむるの歲にありし、此の時のアンビシヨンは、前日の其れとは、全く別物にして、名利を貪らんとするの念慮は、全く消え、あはれむべき東洋の衰運を恢復すべき一個の大政治家となりて、己れの一身を苦しめ、萬民のために大いに、計るところあらんと、熱心に企て起しけり。

己れの身を宗教上のキリストの如くに、政治上に盡力せんと望めり。

此の目的を成し遂げんには、一個の大哲學家となりて、歐洲に流行する優勝劣敗の新哲派を破碎すべしと考へたり。其考へは實に殆ど一年の長き一分時間も、生の腦中を離れざりし。

嗚呼、何者の狂痴ぞ、かゝる妄想も、かゝる長き月日の間、包有する者あらんや」（書簡）と。

この友人のうち、最もふかく往來したるを、大矢蒼海、本名正夫とする。彼は文久三年相州栗原村の生れであつたから、透谷より五つ程の年長であつた。大井憲太郎の大阪事件に連坐して、禁獄され、二十二年、憲法發布の大赦にあつて出獄したといふ。

この間の消息については、エッセイ「三日幻境」を參照するに如くはない。「三日幻境」は、明治二十五年、再び芝公園地内にて、執筆せられたるものであるが、以下その一部を抄記すれば、

「われ函嶺の東、山水の威靈少なからぬところに產れたれば、我が故鄕はと問はゞ、そこと答ふるに躊躇はせねども、往時の產業は破れ、知己親緣の風流雲散せざるはなく、快く疇昔を語るべき古老の存するなし。レコレクションのみに其地を我故鄕とうなづけど、ホープは我に他の故鄕を强ゆる如し。

回顧すれば七歲のむかし、我が早稻田にありし頃、我を迷はせし一幻境ありけり。

輕々しくも、夙に若くして政界の知己を得つ、交りを當年の健兒に結びて、鬱勃、沈憂のあまり、月を弄し花を折り、遂には書を抛げ、筆を投じて、一二の同盟と共に、世塵を避けて、一切物外の人とならんと企てき。

今にして思へば、政海の波浪は、自から高く、自から卑く、虛名を貪り、俗情に蹤はるゝの人には棹を役ひ、橈を用ゆるのおもしろみあるべきも、わが如く一片の頑骨に動止を制し能はざるものゝ、

漂ふべきところならず。
然れども我は實に、この波浪に漂蕩して、悲憤慷慨の壯士と共に、我が血涙を絞りたりしなり。醜惡なる社會を罵蹴して一蹶青山に入り、怪しげなる草廬を結びて、空しく俗骨をして、畸人の名に敬して心には遠ざけしめたるなり。この時、わが爲めにこの幻境を備へ、わが爲にはこの幻境の同住をなせしものは、相州の一孤客大矢蒼海なり。
はじめて、この幻境に入りし時、蒼海は一田家に寄寓せり。
再び往きし時に、彼は一畸人の家に寓せり。我を駐めて共に居らしめ、我を醉はしむるに濁酒あり。我を歌はしむるに破琴あり。縱に我を泣かしめ、縱に我を笑はしめ、我素性を枉げしめず、我をして我疎狂を知るは、獨り彼のみとの歎を發せしめぬ。おもむろに庭樹を瞰めて奇句を吐かんとするものは此家の老畸人。劍を撫して時事を慨するものは蒼海、天を仰ぎ、流星を數ふるものは我れ、この三個一室に同臥、同起して、玉兎幾度か虧け、幾度か滿ちし」(下略)
こゝにいふ老畸人とは、俳人秋山地龍子のことである。又、幻境の名は、川口村字森下、小佛峠の下より右に折れて數里の山徑を入つたところであつた。龍子はすでに六十を超えた老俠骨で、「中年家に歸り、父祖の產をつぎたりしかど、生得の奇骨は、鋤犂に用ゆべきにあらず、再三家を出でて、豪俠を以て自ら任じ、業は學ばずして頭領株の一人となり、風流の遊場に立ちては、幾多の佳人を悩殺

し、或時は劍を挺して武人の暴横に當り、危道を踏み、死地に陷りしこと數を知らず」といふやうな激しい精神の持主であつたが、透谷と相知つた頃は、寧ろ、沈靜なる硬漢であり、風流なる田人であり、園藝をわきまへ、俳道に明らかに、義太夫の節に巧みで、又刀劍の鑑定にぬきんで、村内の葛藤あらば、出でて之を調停するに威あり、權ある分別の士であつた。

則ち、透谷は、老俠秋山地龍子、青年政客大矢蒼海と會同して、濁酒をくみ、政事を談じ、維新の志士を氣取つて、更に、破琴を彈じ、或は劍を撫したのであつた。透谷の政事熱のクライマックスは、このときに極はまるのであつた。

自由民權運動の虛脫によつて、その出鼻を摧かれた透谷は、蒼海龍子と相知るに及んで、再び、大いに政治家たらんとする志にかり立てられたのである。前記の書簡にもあつたやうに「一身を萬民に捧げん」とも考へ「キリストの如くに、政治上に盡力せん」とも望み、又、この目的のためには、先づ「一個の大哲學者にならざるべからず」とも決心したのであつた。

しかし、青年と政治熱は、畢竟時代の流行であつた。透谷も亦、その潮流にまきこまれたにせよ、彼の本質が、政治の純情に惹きつけられると共に、政治の俗情に面を背けざるを得なかつたのも、自明である。潔癖で良心的で、正義を愛した彼は、政治といふもののもつ理想と善意の一面に、はげしい共鳴を覺えたのであるが、しかし、政治の他面には、妥協と陋策があり、僞善とごまかしのあること

とが、次第に、彼にもわかつてくると、彼は、大矢蒼海らと、憂國的志士を氣取るには、些か自分が鋭敏すぎるのに氣がついたのである。しかも自分が、萬民のために一身を殉ぜんとしたのは、實に、天下の風潮のために、青春の血氣を賭けんとしたにすぎないのだといふことの反省も、少しづつ頭を擡げてきたのである。

そこで透谷の政治的高潮は、この幻境の會同を峠として、次第に、その勢を低下しつゝあつたが、しからば、自己の本領を生かす道はどこにあるかといふになると、彼はハタと行詰るより外はなかつた。宗教か、然らず。哲學か、然らず。或は又、官僚か、然らず。商人か、然らず。――この自問自答に於いて、彼が、文學を以つて答へ得るには、尙、一兩年を必要としたのであるから、まさに、政治に幻滅したる彼は、殆ど人生に失望したると同じく、當分といふものは、自分をもてあます、憂欝と悔恨の日がつゞいたのである。

五

「三日幻境」は更につゞけて、

「三たび、我が行きし時に、蒼海は幾多の少年壯士を率ゐて、朝鮮の擧に與らんとし、老畸人も亦、各國の點取に雷名を轟かしたる秀逸の吟咏を廢して、自村の興廢に關るべき大事に眉をひそむるを見

たり。

この時に至りて、我は旣に政界の醜狀を惡くむの念、漸く專らにして、利劍を把つて義友と事を共にするの志よりも、靜かに白雲を趁うて、千峰萬峰を攀づるの談興に耽るの思望大なりければ、義友を失ふの悲しみは、胸にあまりしかども、私かに我が去就を、紛々たる政界の外に置かんとは定めぬ。

義友も遂に我に迫らず。

遂に大阪の義獄に與らざりしも、我が懷疑の所見、朋友を失ひしによりて、大いに增進し、この後、幾多の苦獄を經歷したるは、又、是非もなし」

といふ。しかし、彼が大矢蒼海とわかれ、全く政治の興味を捨てるまでには、尙相當の內面的、又、外部的な葛藤を經たことはあきらかで、この精神並びに肉體的彷徨時代は、透谷の傳記中、もつとも不分明の部分であるといはれてゐる。

前記した早稻田の東京專門學校を、中途退學するや、彼はしばらく家をはなれて、英語修得のため、横濱の五十七番館にボーイとなつて、實地的研究をなさんとしたが、之を果さず、止むなく、先年學習した速記術を以つて、神奈川縣會の速記者となることを得たのであつた。

彼が、のちの自由黨代議士、石坂昌孝と相知つたのは、このときのことで、當時、石坂は、神奈川縣會議長の職にあつた。透谷が、この石坂の令嬢美那子と戀に落ちたのも、すべては、彼が速記者と

して、神奈川縣會に雇傭されたことに、因を發するのであるが、透谷と石坂との關係については、後段にまとめて述べることにしたい。

このとき、速記者の日給は貳圓であつたといふ。彼には、生れてはじめての收入であり、ひそかに、政治青年の鬪志を養ふに足りるものがあつたのではないかと思ふ。しかし縣會はやがて、終つた。そこで、彼は更に、英語獨學の必要から、グランド・ホテルのボーイを志願して、首尾よく採用されたがボーイの仕事はそつちのけで、しきりに、圖書室備付の洋書によみふけつた。さうして、稍々、イングリッシュに親しむや、大膽にも、外人の客を相手に、ガイドの役もつとめ、その間に、會話の練達もはかつたのであつた。

しかし、英語研究も速記術も、すべては彼が、政治家たらんとする目的のための手段であつたが、既に明治十八年の頃には、大矢蒼海は、單に、机上空論の悲憤慷慨居士ではなかつた。大井憲太郎らと共に、着々、實際の政治鬪爭場裡に奔命しつゝあつたので、はやくも、門太郎と蒼海の間には、一種の距離が生れてゐたのである。

或日、門太郎はぶらつと、數寄屋橋のわが家に歸つて來た。ぶらつとではない。内心の煩悶をひとり解決し得ず、不安に戰き、焦燥に耐へずして、止むなく自家に立ちもどつたのである。そして、父、快藏にすべてを物語つたのである。そこには、大阪事件の生ま〳〵しい陰謀が　ひろげられた。快藏

は、吃驚仰天した。

「何といふ大それた奴だ。お前のは、政治ぢやない。陰謀だ。政治家ぢやない、陰謀家だ――早く、壯士仲間から脱け出さぬと、お前の一生は破滅だぞ――」

門太郎はすでに、この叱責を十分に豫期してゐた。

すみません。私の間違ひでした。私が、かうして、お父さんのところへ云ひに來たのは、既に私の心が、さういふ企てから、離れてゐる證據です。私は、長い、悪い、夢の中で、無理な身ぶりをしてゐました、と彼は詫びた。

「さうわかれば、早い程いい。一日でもおくれて、千秋の恨みをのこすやうな目にあつては大變だ」

「大矢は、もののわかつた奴です。私を無理に陰謀に引きずりこむやうなことはありますまい」

「それはわからない。あゝいふ壯士仲間といふものは、仁義の堅いものだ。どんな仕返しをされるか、わかつたもんぢやない」

「さうですかね」

「とんでもないことになつてしまつたぞ」

「しかし、大矢がつかまつても、私のことは口を割らないでせう」

「馬鹿をいへ。早く、盟約から脱しなければ、たとへ、子供でも同罪だ。お前のやうな意思の弱い奴

が、囹圄の人となつた日には、生命がない」

といはれて、門太郎も怖毛をふるつた。熱情漢ではあつたが、武装を好まない眞摯の精神は、稍もすれば傷き易かつた。

そして牢獄の想像は、人一倍強烈で、鋭敏であつた。新鮮なだけに一寸とした刺戟にも、すぐ、擦りむけさうになる精神の上皮が、彼をして、畢竟、荒々しい、政治の運動から後退せしめた――。

それに何としても、年が若かつた。

父に激しく叱責されゝば、彼は卒然として、自分の、分際を知らぬ浪曼的彷徨に、恐怖を覺えた。

「どうしたらいいでせうか」

門太郎は、蒼白な顔を、苦しさうに、おしまげてゐた。

「坊主になれ、坊主に」

父の聲が耳の上で、ひゞいた。

「坊主に！」

驚いて、門太郎は顔をあげた。

「さうだ。その髪を剃つて、青い頭の坊主になつて、大矢蒼海に、詫びをいふんだ」

「はい」

門太郎は、感きはまつて、思はず、拳をかためた。さうだ。それ以外にない。自分はすぐ、髪を剃り、筇を曳いて、大矢の家を訪れ、從來の行がかりと盟約から脫し、一切を政治運動と絶縁して、敗北者となるのだ――さう、心に誓つた。さうすれば、大矢とても、この自分を責めることはしないだらう。

「わかりました。やつて見ます」

門太郎はさう答へると、すぐ、とび出して、近くの髪床に行つた。そして、つるつると、青あたまに剃り上げると、その翌日、彼は大矢の所へ出かけた。

これが前記、「三日幻境」の文中にある、第三回の幻境行である。

彼は、自分を何げなし、西行の遁世になぞらへるのであつた。

「靜かに白雲を趁うて、古人の跡をふまんとす」

そんな感懷がかすめた。

彼が後年、殊に、二十三年頃にしきりに「西行傳」を完成せんとして努力した記事が、日記中に見えて居り、又、日頃山家集を愛讀した旨も傳へられてゐるが、若き日に、自ら剃髮して、筇を曳き、大矢蒼海のもとに脫盟の許しを乞ふた思出は、永く彼の胸裡にとゞまつてゐたことと思ふ。

「義友も遂に我れに迫らず」

大矢も、この態を見ては、言を挿む餘地がなかつたのであらう。かくして彼は、辛くも大阪事件連累の厄をまぬかれたのである。

六

しかし、この挫折と後退が、彼の精神を又、はげしく虐めつけたのは當然で、

「十八年、生は全く、失望落膽し、遂に腦病のために大いに困難するに至れり」（書簡）

と記してゐる。腦病とは何か。例の氣欝病と稱する神經衰弱の一種であらうが、その間にあつて、彼は、既に、學校を捨て、今、政治の志を斷ち、義盟の友と別れ、更に父の叱責にあつて、再び煙草屋の二階に閉ぢこもる氣にもなれないのであつた。

彼は、大矢の家を去るや、心を西行の故事に倣ひ、身は現實の處置に窮して、遂に墨染の衣がはりに、紺の法被をまとひ、糸針類その他の小間物の行商をやり出したのであつた。彼は父に書を呈して、幸ひに脱盟の許しを得たことを報告し、ついで、自分は、しばらく、行商を營んで、精神の傷手を、山野の彷徨に醫したい旨をのべた。

彼は、從來の行きがかりから、主として、八王子近在多摩川の流域を行商して歩いた。

そして、この間の、懊惱と煩悶の所産として、彼はやうやく、自分の本質が、政治よりも文學にあ

ることを、はつきり認識することが出來たのである。

書簡に曰く、

「然れども、少しく元氣を恢復するに至りて、生は從來の妄想の非なるを悟り、爰に小說家たらんとの望みを起しけり。

然れども未だ、美術家たらんとは企てざりし。

希くば、佛のヒューゴ其人の如く、政治上の運動を、纖々たる筆の力を以て支配せんと望みけり。

此年、生は、各地に旅行し、風景の賞味家となれり。又、種々の人間に交際して、人情の研究家となれり。

此年の暮、生は全くアンビションの梯子より落ちて、是より氣樂なる生活を得たり。

以上、縷述し來たりたる生の經歷と性質とは、以て生をして自ら小說家たるを得むと自負せしむるに足る者なり。

嗚呼、此の自負は、則ち今、生を苦しむる事一方ならざる由者にこそ。

生は既に自ら生活を營むべき身にてあり。

銳敏に、商政を計るべき一個の、無間暇の男兒なり。

汝をして小說家となるべき企圖を抱かしめんか、汝は一椀の飯をも得る能はざるべし。然れども、

汝の胸中にある、小說家とならんといふ望みは、遂に、奪ふべからざる者なり」
と。
斯くして、彼は、長い模索のうちにはじめて、自分の本當の志ともいふべきものを確立したのである。
彼は晴れ上つた秋の日の午後、枯草の上に尻をおろした絹の法被姿の自分を顧みて、苦笑した。速記者、ホテルのボーイ、壯士、剃髮、行商——さうした數奇の生活、殆ど、狂せるに近い混亂と放浪の過去をふりかへつて、それらのすべてが、一種のはげしい探求的精神、自我の追求であることを知つた。そしてその最後に來た徹底が、遂に、文學であることも知つたのである。
彼は又、昔を思つた。小田原で別れたおせんに、自分は東京へ出たら、女の友達はこしらへまい。小田原には、見るべき書もなく、語るべき友もないので、男の友達より、おせんのやうな女の友達をこしらへたが、東京には、風雲を望んで集る同志の青年が多いことだらうから、自分は斷然、女なんかには見向きもしないで、男の友と交り、互に胸襟をひらいて天下國家を論ずるのだと、語つてきかせ、又、自らもさう心に決した。そのことを、ふと思ひ出した。そして、今はそんな觀念さへ、自分の本質にとつては、不自然な僞裝だつたと氣がついた。
彼は急に、おせんが戀しくなつた。長い間、すつかり、忘れてゐたものが、急に亦、まざまざと、

迫つて來た。それは以前にもまして、嬌激で且つ新鮮な感情である。――

そのとき、おせんの顏に二重寫しとなつて、茫莫とあらはれたのは、一二ケ月前、はじめて、垣間見た石坂昌孝の令孃の俤であつた。

石坂美那子、

彼はふと、口の中に、其名を呼んで見て、ハツとした。自分でも、意外であつた。

それは、チラツと、かすめるやうに去來した瞬間の一瞥であつた。それ以上の何ものでもない。そのまゝ、平凡に忘れてゐた人のことだ。それが妙なことに、おせんを思ひ出した追憶のかげから、いつのまにか、すべりこんで來て、にはかに彼の目の前に、大きな、明晢な、印象を畫いてゐる。

とんでもないことだ、と、彼はすぐ打消した。

向うは縣會議長の令孃だ。ゆくゆくは、板垣參議の拔擢さへあれば知事にもならうといふ權勢の人である。出身も、南多摩郡野津田の豪農の出で、いはゞ、三多摩壯士の大親分格である。その人の令孃とすれば、いふまでもなく高嶺の花であつて、紺の法被に、糸針の行商をしてゐる出來損ひの俄か西行の、逆立ちしても及ぶべきことではないかもしれぬ。それに第一、向うの方が、年上であつた。いくら門太郎が早熟の青年といへ、向うから見れば、まだ、ほんの子供である。

「はゝゝゝ」

と、彼は、うつろな自嘲の笑聲を、我れとわが法被姿に投げかけた。

しかし、その笑聲の消えゆく裏に、彼は不思議な動搖の殘るのを感じた。それは今まで味つたことのない、つよい執着のやうなものであつた。

「………」

彼はジツと考へこんだ。

「俺は、やつぱり、女の友達を求めてゐる。聰明で、美しい婦人を。――小田原のおせんは、たのしい思出を、俺にのこしてゐる。しかし、もう、おせんでは滿足出來ない。もつと新らしい、もつと、智惠の高い……ノーブルで、純潔な處女を俺は求めてゐる。――さういふ婦人と、心から親友の誓ひが立てたいのだ」

いつのまにか、彼はそんなところに、空想をとばしてゐた。

「それには、俺も立派な、素晴らしい小說を書くのだ。頭を剃つて、西行氣取りの放浪などをやつてゐる時ではないかもしれぬ」

彼は急に、大矢蒼海らと會同して、わけのわからぬ政治論を放談し、素姓のしれぬ壯士仲間と、事を同じくしかゝつた過去の馬鹿々々しい妄想から、いよいよ、はつきり、袂別して、新生活のスタートを切らなければならないと、しきりに希望が燃えて來た。彼は野の暮れかゝるのも忘れてゐた。

明治十七、八年、透谷が好んで出入した時代の、三多摩地方の、壯士、博徒の概況についても、もう少し、調べたいと思ひながら、その餘裕が得られなかつた。明治新政府は、十六、七年を期して、徹底的な博徒狩りをやつて居り、その煽りをくつた彼らが、どんな風に動いたかは興味ある對象である。

(三)

京橋區彌左衞門町の透谷の家の跡は、現在、數寄屋橋の交叉點から、尾張町四丁目へ向つて左側、晝夜銀行と道路をへだてた、向合ひのたばこやが、代こそかはれ、その跡とつたへられてゐる。この一帶がもとの彌左衞門町で、松崎の煎餅屋、その隣のつゞら屋などが、古くからの家である。

(四)

共慣義塾——明治六年四月改正。塾主は南部信氏。英學塾の一つ。英學は、敎師に亞人ガタナ。入門金二兩、月謝一兩一分、外一分（塾費）——門太郎は、英語研究の目的のために入つたものと見える。

第四章

一

當時、神奈川縣の縣會議長をつとめてゐた石坂昌孝は、南多摩郡野津田村の代々の大地主であつた。從つて、彼の家に出入するものは、壯士、博徒、破落戸などが多かつた。かういふ環境に生ひ育つた石坂美那子は、いつしか大の壯士嫌ひ、破落戸嫌ひになつてゐた。

美那子には弟と妹がゐた。弟は公歷(マサツグ)といひ、妹は登志といつた。公歷は淺草三筋町の濠西濟舍に學んでゐた。美那子も壯士や破落戸の溜り場のやうな野津田村の家をきらつて、横濱の共立女學校の寄宿舍に入つてゐた。

六月の或日、美那子は久しぶりに、横濱の學校から自分の家へ歸つて來てゐた。恰度そのとき、門太郎と公歷とが、ひよつこり、遊びに來たのであつた。門太郎は昌孝と知り合つてからつゞいて息子の公歷とも、交りを結んでゐたのである。

「姉さん。姉さんも歸つてたんですか。そりやア恰度よかつた。姉さん、今日は珍しいお客さんをつ

れて來たんですよ。姉さんの嫌ひな壯士や政治家とはちがふ、未來の文豪大小說家をつれて來ました。お父さんもよく知つてゐる北村門太郎君です」

と、公歷は美那子に透谷を紹介した。透谷の方では、いつか東京の本鄕の龍岡町にあつた、自由黨の政治運動の祕密本部ともいふべき、樂只園といふ葉茶屋で、父を訪ねて來た美那子を垣間見たことはあつたのであるが、美那子の方では、このときが透谷との初對面であつた。

「この姉さんと來たら、政治家の娘のくせに、政治がきらひなんですよ。今日は親父も留守だし、例のお客さんもゐないやうだから、一つ、三人で文學論でもやりますかね」

公歷はさういひながら、奧の座敷へ透谷を伴つた。

その日は夏のはじめであつたから、透谷は中形の浴衣を着てゐた。蝶が背中に三つ程とまつてゐるやうな、まるで女が着さうな浴衣だつたが、それが瘠せぎすな透谷の身體に、非常によく似合つて見えた。

「何しろ、姉さんも嫁にいかなけりやならん年頃になつたんだから、大分、いろんな申込みになやまされてゐるらしいですよ。相手がみんな、ソラ、劍士とか壯士とかつていふ連中でせう。姉さん、斷じて首をふらない。親父はあの通り、家庭のことなんざ放任主義だからいいけれど、おつ母さんが、なかなか野心家だし、几帳面だし、姉さんも間に立つて、苦勞が多いんですよ」

と美那子が茶をとりに次の間へ下つた頃を見はからつて、公歴がいつた。

「何といつても、三多摩の大親分の令嬢だからね。壯士や劍士が、自分こそ一つ金的を射て、大いに頭株にならうと虎視眈々たるわけでせうね……」

と、透谷も冗談のやうにうけ答へたが、内心はさつきから胸の高鳴る思ひがしてゐた。その淑かな物腰のわりに、自分を見る眼の冴え〴〵しさ。キビキビした應待。明晳な物のいひ方。小さくつて、彈力のある姿態。すべては透谷の心を、グイグイ惹きつけずにはゐなかつた。

この人こそ、天が自分に引き合した幸福の象徵だ！　そんな氣がした。田舍壯士や破落戸共に、負けをとつてなるものか。萬難を排してでも、自分は戀愛の自由を獲得する。さうも思つた。自分のこの強いパッションは、必ず、相手にも通じずには措かない。

――彼はこの間から漠然と戀ひ慕つてゐた對象がにはかに大きくつよく、彼の心に迫つてくるのを覺えた。

こんどこそ、自分にはほんとうの力が出てくるだらう。彼は公歴が何かしやべつてゐるのも、上の空に聞きながら、ひとりで力みかへるのであつた。

夕方になつた。

手うちの蕎麥の御馳走が出た。

「どうです。もうおそくなつたから、一晩泊つていつては。久しぶりに、夜を徹して談じようぢやないか」

と、公歴が云つた。透谷はそれでは無躾すぎるから　おそくつても歸るといつたが、泊り客はなれてゐるから、どうぞ遠慮なく泊つていつてくれと、美那子にいはれると、透谷も、たつて歸る氣はなかつた。

薄暗くなつてから、昌孝夫人のやまが其の母のまよと二人で歸つて來た。やまは石坂家の家附娘であつた。

「へえ珍らしいお客さんですね。北村さんといふと何かしら、縣會の方で速記をしてなすつた方だつたね」

と、やまは聞えよがしに云つた。暫くすると、普斷着にきかへて、出て來て挨拶をしたが、親分の奥さんだけあつて、人を見下すやうな、横柄なところが見え、透谷には好感が持てなかつた。やまの方でも、痔せつぽちで、神經質な顔立ちの透谷を、たうてい好きになれさうもなかつた。そして、みんなが歸つてくると、美那子は透谷の側から引きはなされてしまつた。

透谷は、砂を嚙むやうな氣持ちで、とかく默りこんだ。

「おい。小文豪。どうした。元氣がないぢやないか」

と、人の氣も知らぬ公歴は、透谷の憂鬱さうなのに、反撥していつた。
「臺所から、酒を少し、もちこんで來ようか。肴があるといいが」
「いや、いらん。いらん」
「まあ、一杯のめば、元氣になるぞ」
「美那子さんは酒のみは、一番きらひだといつてゐた——」
「こら、何をいふか。未來の大小說家を志す大丈夫が、一婦女子の言に左右されて一杯の酒をのみ得ずとは、をこの限りだ。今、ソツと持つてくるから、誰にも分りやせん」
と、公歴は足音を盜んで、やがて德利と茶碗を運んで來た。
「うまいものがあつたぞ、阿母が土產に買つて來た、いかの鹽辛だ」
「いいのか、勝手に出して來たりして」
「何に、かまふもんか」
「ねエ、公歴君、僕は今、すばらしい論文の書出しを考へついたよ」
さういつて、透谷は一盞を傾けつゝ雜記帖の一枚を朗誦した。
「天地愛好すべき者多し。而して尤も愛好すべきは處女の純潔なるかな。もし、黃金、瑠璃、眞珠を尊しとせば、處女の純潔(ヂャスティテイ)は、人界に於ける黃金、瑠璃、眞珠なり。もし人生を汚濁穢染の土とせば、

處女の純潔は燈明の暗牢に向ふが如しといはむ。噫、人生を厭惡するも厭惡せざるも、誰か處女の純潔に遭うて、欣樂せざるものあらむ」

一息ついて、又、彼は聲をあげた。

「悲しくも我が文學の祖先は、處女の純潔を尊むことを知らず。千載の孤客をして、批評の筆硯に對して先づ血涙一滴たらしむ。

嗚呼、處女の純潔に對して、端然として襟を正しうする作家、遂に我が文界に望むべからざるか」

透谷の聲は感動にふるへ、目にはキラキラと露が光つた。公歴も、その迸り出る生一本の熱情にうたれて、盞を持つ手を休めつゝ、聞き入つた。

今、一人、これを聞いてゐる者があつた。それは、ソツと隣りの室に忍入つて、誰にも氣のつかれぬやうに、透谷の樣子をうかゞつてゐる美那子であつた。處女の純潔！　それが美那子を對象に、この若い詩人の胸に湧き上つて來た、止むに止まれぬ熱情の塊であることを、美那子自身も、はつきり我が胸にうけとめずには居られなかつたのである。とすれば向うは縣會議長の娘、こちらは名もなき煙草屋の小僧、たうてい高峯の花と、あせりぬいたこの戀愛も、案外に、距離は遠くなかつたのであらう。

「よし、では俺が題をつける。「詩人と處女」はどうだ」

と公歴は酒のまはつた顔をしていつた。

「少しまづいね」

「さうか。ぢやア「處女を愛すべし」「處女の價値を論ず」いくらでもあるぞ。「處女の純潔を論ず」

……」

「あゝ、それがいい。それがいい」

「よし、題がきまつた。あとは酒だ」

しかし、透谷はその晩に限つて、いくら飲んでも、少しも醉つて來なかつた。飲めばのむ程、頭が一冴えて來た。美那子のことで一杯であつた。ガタツと戸棚のあく音がしても、彼の神經は飛上る程に亢ぶつてゐた。

二

その翌朝は、紺碧に晴れ上つた初夏のすが〳〵しい日であつた。

「高幡不動まで、散歩にいくんだが、姉さんも一緒に來ないか」

と、公歴は美那子を誘つた。美那子は母のやまに、行つてもいいかどうかを聞いてゐるらしかつた。

「知らないよ。男の人達と外を歩いたりして。石ぐらゐとんで來るのを覺悟してなくつちやね」

と、やまはやつぱり、いい返事はしなかつた。まだ、その頃は、夫婦でも戸外を並んで歩くことは、憚かられた時代で、うつかりすると、銀座通りでも、石がとんで來たりした。それでも美那子は、支度をして出て來た。

「大分、阿母に油をしぼられてゐたね」

公歴は、並んで歩き出してからいつた。透谷は、一人だけ少しはなれて、先に立つてゐる。

「あゝいふのお母さまの口ぐせね。かまはず、どんどん出て來ちやつたわ」

と、美那子は快活な笑ひ聲を立てた。道は明るい野の中の一本道であつた。一寸散歩といつても、道のりは三里もあるのである。いつしか、美那子を眞中に、三人は肩をならべた。

「このへんは、春だと蓮華草が一杯咲いて、それやア綺麗なんですよ」

と、美那子が云つた。

「去年の春は、無理にお父さまを引つぱり出して、妹達と摘草をしましたの。蓮華や土筆が、籠に一杯でした」

とも云つた。そんな他愛ない話を聞くのでも、透谷は幸福でならなかつた。

話はいつか結婚論になつた。對話は透谷と美那子の間にはづんで、公歴はやゝもすると仲間外れだつた。

「一體　お父さんは、どういふ人の所へ、あなたをやる氣なんですか」
「さあ。別に考へてはゐないのでせう」
「財産家ですか」
「私は、財産なんか、土か芥ぐらゐにしか思つてゐません。財産が何でせう。名譽がなんでせう」
「では、どういふ人が好きなんです」
「名譽もない、財産もない、壯快な男子こそ、私の夫にふさはしい」
と、美那子は、青春を誇るやうに、美しい目をかゞやかした。
「無名無産の壯快なる男子なら、こゝに北村門太郎君有りだね」
と、さつきから仲間外れの公歷は、ちよつと、冷やかすやうな口調で云つた。みんなは朗らかな笑ひ聲を立てた。しかし笑ひながらも、透谷の胸はちよつとした刺激にもはりさけさうな妖しい轟きをひめてゐた。
やがて彼女たちと別れて、銀座の煙草屋の二階へ歸つてくると、彼は又急に淋しくつてたまらなかつた。彼は眠りの足らぬ身體をすぐ蒲團にもぐりこませたが、亢ぶつた精神は一向に鎭靜しなかつた。
このまゝでいくと、發狂してしまひはせぬか。
彼は恐ろしい氣がした。自分で自分の厄介な激情をもてあまさずにはゐられなかつた。

彼はいつまでも寢られぬまゝに、起直つてとう〳〵熱烈な戀の告白の手紙を書いた。宛名は、横濱の共立女學校の寄宿舍であつた。

やがて返事が來た。そこにはやさしい女の氣持ちが滲んでゐた。彼はすぐ其の返事の返事を書いた。かくて二日置き位に、彼は長い手紙を書き送つた。一體、門太郎は何をしてゐるのだらうと、不審を抱いたのは、母のおゆきであつた。しかし、子供の頃とはちがつて、もう、そんなにガミガミ干渉も出來なかつた。

或日、結び文を持つた車夫が、煙草屋の店先に立つて、門太郎を呼んでくれといつた。

「門太郎、お前に用のある方が見えていらつしやるよ」

と、おゆきは梯子段の下で呼んだ。門太郎は、直觀的に美那子からの呼出しにちがひないと、胸をとゞろかした。果して、手紙はさうだつた。本郷龍岡町の藥茶屋槳只園に、父と一緒に來てゐるから、一寸でも逢ひたい――そんな文面だつた。彼は着物を着かへると、母には何の說明もしずに、すぐ、その俥にのつて、出かけていくのだつた。おゆきは、車上の息子の姿を見送りながら、何のことやら譯のわからぬまゝに、不安だつた。銀座藝者、金春藝者が、やうやく、新興の勢を示して、世間の噂をかき立て出した頃であつたから、もしやそんな、商賣女にでも引つかゝつたのではないか。車屋に、

手紙をもたせて、呼出しをかけるやうな女が出來たとすると、うつかりしてはゐられない――そんな心配が、さすがにもろい女親の心をかすめた。

龍岡町の薬茶屋は、前にも記した通り、自由黨一派の政治運動の策動祕密本部で、殊に石坂昌孝の根城となつてゐた。

向うへつくと、昌孝は急に板垣參議からの用事で、他出したあとであつた。美那子一人が、彼の來るのを待つてゐた。

逢ふとすぐ、彼女はびつくりしていつた。

「まあ、どうなすつたんですか」

ジツと透谷を見つめる目が、悲しさうに光つてゐる。

「何んですか」

透谷は何のことかわからずに反問した。

「だつて、あなたのお顏が、一寸お目にかゝらぬうちに、すつかり、衰へなすつたからですよ。一體、何を苦しんでいらつしやるんですか」

「へえ、僕の顏がそんなに衰へましたか。若し、あなたのいふ樣に、そんなに衰弱したとすれば、それはみんな、あなたを思ひつゞけて、毎日、眠ることが出來なかつたからでせうよ」

「………」

美那子は默つてうなだれた。

光るものが、一筋二筋、彼女の頰を傳つて流れた。

「僕は、よくまあ、發狂しずにすんだと、寧ろ不思議なくらゐなんです」

「まあ、そんな――」

「お父さんは何か仰言つてゐましたか」

「全然、さういふ話を、父は取合ひませんの。でも、一言だけ、いひましたわ。さすがに明治の若者たちは、無謀だねつて」

「無謀！」

「母は怒りました。とんでもないことだ。あきれた娘だつて。そしてもう、二人の間を、何か汚らしい仲にでもなつてるかのやうな、口吻でした」

「大體、豫想してゐた通りです。それであなたは、どうなのです」

「私は、あなた次第です。でなければ、あなたを、こんな風に呼び出したりするでせうか――」

「しかし、二人には非常な勇氣が必要ですよ。封建的な古い考へでなく、新らしい明治を意識したつよい信念が必要です」

「自覺はもつてゐますよ」
「兩親に背いてもですか」
「…………」
「そらね。かういふことは、よほど、腹を据えてからでなければ云へないでせう」
「では、若し、二人の思ひ通りにいかなかつたら、あなたはどうするんです」
「氣が狂ふでせう。もし氣が狂はなかつたら、又、坊主になりますよ」
「坊主になる前に、もつと、强く、お父さんに談判して下さい」
と、美那子は、稍もすれば感情的にならうとする透谷を勵ますやうにいつた。美那子は慶應元年の生れであつたから、透谷よりは三つ程年上だつたのである。

三

其の晩、彼が龍岡町の葉茶屋を出た時はもう午前の二時頃であつた。四圍の事情は、全く絶望に近かつた。絶望すればする程美那子が欲しくてならなかつた。美那子の黑い美しい目が惱ましく彼を囚へてゐた。彼は夜の東京を、熱にうはづつた病人のやうに頭をかゝへて、蹌踉として歩いた。神田で一度、馬場先門のあたりで一度、夜警の巡邏にとがめられた。

そのうち又一度彼はどこかへ出かけておそくなつて歸つて來た。そしてそれから三日ばかりといふものは、石のやうになつて默りこんでゐた。食事も碌にしなかつた。母のおゆきは、これはてつきり、金春新道あたりの女と熱くなつて、意志の弱い男に有りがちの、てつきり道行か心中かと、油斷なく監視の目を光らした。しかし、あの時の一度つきりで、呼出し狀の來る樣子も見えなかつた。

石のやうに沈默してゐる間に、彼の理性は、やうやく奔騰する感情を抑へつけた。彼は熱愛する石坂美那子の一生の幸福のためには、何の力も無い自分の慾望を、おさへ殺すほかはないことに、やうやく決意の臍をかためたのである。

それから彼は、遺書のやうなつもりで、三人に宛てた手紙を書いた。公歷と、自分の父と、當の美那子との三人である。そのうち、美那子及び父に當てた手紙だけが、今日、現存してゐるので、先づ、父宛のものから一部を拔書して見ることにする。

「生は我が未だ狂せざるを怪しむのみ。白痴とならざるを奇とするのみ。蓋し、此六月以來、生は自ら驚く程の耐忍力を以て、此の大敗軍に伴ひたる失望落膽を防ぎたり。然れども、此の間に、又、生を救ひたる援兵なきにしもあらざりし。其の援兵こそ、我が親愛なる石坂孃にてありし。

とは能く生を助けて、狂せしめざりし故に、生は去る十七日までは、泰然として毫も自ら恐怖せざりしも、遂に生は、僅か四日間にして落城したり。

十六日の夜、生は石坂孃を訪ふて、二時頃まで其室に對談したり。此夜の談話は一言も己れの不幸に及ぼさず、孃も亦、生を日本人中の、洒落なる人、傲世の客、英雄の末路と評せり。其後三日を經て、十九日の夕景、生は孃を訪ふて三時の樓鐘を聞くまで、對話せり。

生は實に此の四日間に於て、殆ど發狂せんとせり。恰も落城するに近かりし。

かくて生は、石坂孃と交際を絕つべしと決心したり。あゝ我が神經の激烈なる、殆ど生をして自ら驚かしむ。（中略）

抑も石坂公歷（公磨とあるは誤字）は、すべての朋友の上に立ち、志望膽略、巍然として、諸輩を心服せしめ居たり。其の公歷氏が、最も心を置き、最も計り得ざりしは、小生なりき。小生の氣風は、遠く公歷氏の上に在りたり。之れ則ち公歷氏が、生の傲慢不屈なるにも拘はらず、生に結ぶに最も親密なる交際を以てせし所以なり。

又、石坂の一家にて最も公歷氏と意氣相投ぜしは氏の姉なる美那子にてあり。又、美那子と生との交際を結ばしめたる主因は、公歷氏と生との間に存せし親密の交際にてありけりといはゞ、生と美那子との志望の相投ずる所あるをば、推想あるべし。生の傲世逸俗の氣風は、公歷氏及美那子の最も敬愛せし所なりし。

又、彼等の淡泊にして高尙なる思想は小生の夙に欽慕して止まざる所にてありし。（中略）

抑々石坂孃は、教育も高く、智識も持し、加之其父より受けたる榮譽を荷へり。此の榮譽ある孃子は、遂に戀情の爲めに、其身を破らんとせり。孃は實に生を慕へり。生も亦、孃を慕ふの念、日一日に加はれり。生は始めより、敗軍の將なる事を承知し居りければ、是より世を輝かさんとする此の一少女を誤らせんとは決して思はざりし。然れども凡俗の人間、何ぞ良心を全ふするを得んや。兩個の熱愛、其極度に達して、尙五六日を經ば、約婚の契約書も將に出でんとするに至りて、生は最も激烈なる良心の奮鬪を以て、全く其の迷雲を排したり。

嗚呼、孃は、眞の神の敎を以て、衆生を救はんとする有要の一貴女なり。生は實に大敗の餘り、成す所なき一糟粕のみ。

我はかつて、人を救はんがためには、おのれの生命をも犧牲に供せんと企てし事もありにき。況んや區々たる戀情をや。嗚呼、孃をして其目的を達せしむるには、生と結婚なぞと忌はしき志望を脫却せしむ可し。是れ生が斷然、此の交際を破らんと計りし所以なり。此の戀情は則ち石坂孃が世を益せんがための犧牲なり。

石坂の一家の日本人共は、生と美那子とは怪しむべき親友なりと評する趣きを聞きしことあり。又、石坂の老母は、生と孃との交際を絕たしめんと欲する樣にも見へたり。碌々たる未開の頑民、案じ煩ふことなかれ。余と美那子とは、堂々たる紳士令孃の交際に劣る所なかりき。

生は石坂孃と別るゝに當りて、重要なる誓言を約せり。
則ち人生の正路を取つて進むべき事、是なり。
蓋し孃は生の激烈なる性質を知る者なり。誤つて輕率の事を企て、遂に貧苦に陥らんことを前知するに似たり。我れ何ぞ親友の言葉を無にせんや。孃は實に第二の大矢なり。
（註、前掲、大矢蒼海のこと）
生は斯くの如くにして、勇猛にも我痴情に打勝ち、又、我親友の心をも動かして、二人の幸福を恢復し得たると同時に、驚く可き洪水の如き勢力を以て、神に感謝し、神に歸依すべきを發悟せり。（中略）
生の一身上については、冷淡にして御考へなき大人よ。
生は今日、生の云ふに忍びざる所を公言したり。斯く公言する以上は、生が生の生活を選むに、横濱の西洋人の如く專横奸惡なる人の下に、壓抑され居るの望なきを悟り給へかし。
生は既に商業上にて大勝利を博し、分取物の山を積むの見込なくんば、生の商業界に入る可き最初の決心は、全く消滅に歸せしなり。
生の試みたる商業は、實に小さき者なりしかど、生の期せし所は、最も甚しき大相場にてありし。
此の大山は深みにはまらざる内につぶれて去り、此に至つて、生の商業界に立つべき企圖は、全く

敗れたり。何となれば、もと生は商業を作さんがために、商界に入りたる者にあらずして、此の大山を試みんとなしたる故なればなり。（以下略）」

以上は其の書簡の一部である。文章は晦澁で惡文だ。しかし、自分の父に書き送つた手紙としては、相當風變りなものといへる。

かうして、いよいよ、最愛の婦人と絶交といふことに心を決したので、彼はもう、一日も煙草屋の二階に窮屈な生活をつゞける氣持ちにはなれなかつた。思ひ切つて遠くへいつてしまはう。それには、神戸あたりではどうだらうか――さう思ひ立つと、彼は家人の隙をうかゞつて、飄然と、東京をあとにした。このときの別離の決意は、相當深刻なものだつたに違ひなく、石坂美那子宛の書簡の中にも、それがよくあらはれてゐる。

「親愛なる貴孃よ。

生は筆の蟲なりといはれまほしき一奇癖の少年なり。生は筆を弄ぶ事を以て、人間最上の快樂なりと思考せり。然れども、時としては、此たしなみは却ていふにいはれぬ不愉快を感ぜしむる事もあり。其は他ならず。詩文を試みて意想を寫す能はざるの時、書簡を認めて所見を述ぶる事叶はぬ曉、精神

鬱怏として、殆ど人事を忘るゝに至る如き、之れなり。
生は貴孃の風采を慕ふことといと永かりし。而して親友たるの時日は、斯くの如くそれ短し。
生は、貴孃の親友として世を送るを得ば、他に何の幸福あらんと曾て思考したりき。
計らざりき。此の得難き幸福を破つて、遠く貴孃に別るゝの日に迫らんとは。嗚呼天も亦無情なる乎。今や貴孃に別れて、遠く去らんとするに際し、聊か貴孃に懇願するところあり。
其は他ならず、生のミザリイを聞いてたもといふ一事是なり。
貴孃は常に生のハッピイなるを祈り給ふ我親友なりかし。然らば則ち、生のミザリイを察して、心の苦を慰むる術もがな、あらば是れを指示してくれたまふ可き道徳上の義務を持ち給ふ御身なるべし。
是れ卽ち、生が誰にも語らぬ心中の苦を打明けて、貴孃に書き送りまいらす所なり。云々。(中略)
嗚呼、此は是れ、當今、生の暇多き生活にともなひける一種の病氣なるべし。生の身は須らく繁忙なる事業に從はしむべし。是れ則ち此度、生が斷然、志を決して神戸地方に遊ばんとする所以なり。
我親愛なる石坂孃よ。斯くまでに苦しき生が心根を察し玉へ。若し、友の情あらば。
然れども此の病ひは一時のみ。生が去つて彼地に着せしを報ずる時あらば、再び光りかゞやく朝日の下に、幸福なる月日を過ごすと知り玉へ」

これも相當ゴタゴタした惡文であるが、殆どどうにも整理のつきかねる思慕と激情に、悶えてゐる透谷の樣子は、よく出てゐる。

この手紙については、島崎藤村氏も次のやうにいつてゐる。

「透谷を語るには、どうしても彼の早い結婚生活にまで行かなければならぬ。

透谷の亡くなつた後、私はあの二階へ上つて、友人ののこした反古を調べて見たことがあつた。細君が取出したいくつかの葛籠の中からは、種々の反古やら、書きかけの舊い草稿やらが、部屋中一杯になるほど出て來た。

その時、私はあの友人がまだずつと若かつた頃に、石坂孃に宛てたといふ長い手紙を讀んで見た。孃はみな子さんといつて、やがて透谷の細君になつた人だ。透谷の結婚が、終生の好い伴侶を一人の異性に見出したやうな誠意から出發したことは、あの手紙が十分によくそれを證據立てゝゐた。それには自己の少年時代のことが飾るところなく長々と敍してあつて、まるで友人にでも宛てゝ自己の將來の希望を語るやうに書いてあつた。あれは珍しい手紙だ。透谷の戀愛に、多分の友情のあつたことも想像される」と。

――しかし彼は絕交を宣言したものの、所詮は觀念的な判斷にとゞまるものであつたから、たうていそれを押切れるものではなかつた。――彼は又、東京へ舞戻つて來て、美那子を呼出した。

煉瓦路には、もうほろ寒い秋風が吹いてゐた。

京橋の角に立つてゐると、指定した通り、美那子が圓太郎馬車から下りた。美那子は、髪をその頃流行の尖端であつた束髪の朝巻（モーニングトウイスト）に結つて、舶來のスコッチショールを掛けてゐた。着物は、こまかい矢絣の銘仙に濃い紫の半襟が、よくうつゝた。京橋の袂に、突立つてゐる透谷の姿が目に入ると、彼女は、その特徴的な黒い瞳をかゞやかして、小走りに近づいた。

「よく來てくれましたね。あんな手紙をあげた、すぐだから、とても來てくれないかと思つた。立話しも出來ないから、そこの「松田」へでも入りませう」

透谷はさういつて歩き出した。美那子はうしろに従つた。

「松田」といふのは、其の頃、京橋の角にあつた人に知られた料理屋であつた。のちに新橋の博品館になつた處に、「千歳」といふ料理屋があり、當時の煉瓦では、この二軒が流行してゐた。「松田」と向ひ合つて「玉ずし」といふのがあり、ここにもオツな小座敷があつた。「松田」より「千歳」の方が格は上であつたが、「松田」の方は安値で繁昌してゐた。そのころ、二人で五十錢もあれば、料理が三品と酒と御飯がついといふ。晝飯はもつと安く、二品で十二錢位。一品十錢以上のものは、數へるほかなかつたといふのであるから、貧乏書生の透谷でも、どうにか出入り出來たのであらう。

恰度、透谷と美那子が入つていくと、下足番が、

番が、「百番ぢやアーイ」と音頭をとり、それに合せて、皆が鬨をつくるのであつた。

座敷へつくとすぐ、透谷は美那子に云つた。

「こゝの家は、料理よりも便所が綺麗なんで有名なんですよ。途中に噴水があつたり、朱塗の橋があつたり、傍で水車が廻つてたりなんかするんですよ。あとで見にいつていらつしやい」

「まあ、さうですか。鬨の聲にも、びつくりしましたよ」

「あれも、この家の十八番です」

「これからは、お料理屋をするにも、いろんな新工風が必要なんですね」

「舊套を追つてゐては、すぐ、廢りもんですよ。豈料理屋のみならんや。政治も社會改革も、文學も人情も、みな、新らしい時代に應じなければならんでせう」

「人情まで變つてしまふんですか」

「人情だつて、古い、封建的な世界にとゞまつてゐては、駄目ですよ。人情つていつても僕のいつて

る意味は、親友の情をはじめとして、夫婦の情、親子の情、それから、戀愛にしても……」
「それであなたは、また歸つていらしつたんですか」
「さうです。僕は東京へ歸つて來たんぢやない。あなたのところへ歸つて來たんです」
「私もあなたの手紙を讀んで、三日程、ボンヤリしてしまひましたよ」
と、美那子はちよつとはにかんでいつた。

四

實は、初對面のときから、美那子の方でも、透谷には心を惹かれたのであつた。先づ彼には壯士や劍士たちのやうに、粗暴なところがなかつた。粗暴でないと共に、卑屈でもない。どこかに高邁なものが、香つてゐると思つた。それよりも驚いたのは、彼の廣い知識であつた、プラトーを論じ、ダンテを論じ、バイロンについて語り、或は馬琴を語り、西鶴を談じ、さうかと思へば、伊藤を論じ大隈を論じ、松蔭を語り、左内を語る。さういふ時の透谷は、熱があつて雄辯で、美那子は思はず、うつとりさせられるのであつた。はじめはそれで、よほど、どこかの學校で教育を受けた人かと思つた。
然るに、別に、これといふ學校は出てゐないと聞いて、餘計、尊敬したい氣持ちになつた。弟の公歷が二言目には、

「北村は天才だよ」

といつたのが、なるほどと肯けた。自分では、無論、いやがつてゐるが、兩親達は結局、煙草屋をやらせようとしてゐることについて、美那子も勿體ないやうな氣がしてゐた。何としてでも、あの人の天才をのばさなくてはならない。――美那子は彼の獨學の才に敬服すればする程、彼のために、自分を殉じたい氣がつよくなつて來た。無論、現世的な幸福が、彼らを待つてゐる筈のないことは、わかつてゐた。それより、彼の天才を、ほんとうに正しく發展させること――そこから、何か非凡なものが生れ出て來るやうな氣がする。それが、彼女をかり立てゝ、強い氣持ちにさせてゐた。

自分より、三つでも年下であることが、やはり一番氣になつた。

しかし、面と向ふと、とても三つ下の青年のやうには思へなかつた。はるかに、年長男性を望むやうな、尊敬を抱かずにはゐられない。といふことは、透谷がいかに驚く可き早熟の天才であつたかといふことになるのだが――。

「今日、出かけて參るときから、私は決心して參つたのです――」

と、美那子は答へた。

「その代り、勉强して偉い人になつて下さい。そして私にも勉强させて下さい」

「無論です。あなたも普通の嬶になるのぢやないから、結婚しても、學校に通つて下さい。しかし横

濱は遠いから、東京の女學校にして下さい」
「隨分、變つたお嫁さんで、お父さんやお母さんのお氣に入るかしら」
「おやぢや阿母の嫁ぢやない。僕の細君になるんだから、少しもかまはん。これからの女は、男に負けないやうに、絶えず勉强しつゞけなければならないですよ。勉强家夫婦といふ新式の結婚生活をやりませう。舊い奴らの目の玉を、ひつくりかへしてやることですね」
「麹町の女子學院はどうでせう。あすこなら、同じクリスチャンだから、横濱から轉學といふことにして貰へますから」
「そりやいいでせう」
「その代り、月謝位は、自分でかせぎますよ」
「どうしてゞすか」
「家庭教師でも何でもやります」
「それはますますいい」
二人の堅い約束が出來上つた。はつきり、具體的な見通しもついて來た。
瓦斯燈に灯のつく頃、二人は「松田」を出た。透谷は少しばかり微醺氣分であつた。煉瓦路をブラブラ歩いて來たが、別に、石も飛んで來なかつた。

新橋のステーションから、蒸汽車にのつて美那子は、横濱の寄宿舍に歸つていくのである。

それからも、二人が結局、煙草屋の二階で式をあげるに至るまでには、隨分いろんな曲折があつた。第一に石坂家の反對は猛烈なものがあつた。

殊に、まよ、やま、の家附の夫人連が、必死に反對した。唯一人の味方であつた公歷が、その問題が海のものとも山のものとも、きまらぬうちに、アメリカへ行つてしまつたのは大きな打擊であつた。

その間、二人はしばしば、諜し合して逢曳をした。しかし、なかなか好轉の機會は來なかつた。

そのうちに、偶然、彼は、大藏省の津田眞道氏と知合つた。この人は華族で伯爵に列してゐたが、氣のおけない、自由人であつた。彼は、この人にすべてを打明けて、後楯となつて貰ふことをたのんだ。

「石坂昌孝も、自由黨の代議士のくせに、いくら、養子とはいへ、あまり譯がわからなさすぎる。それぢやアまるで、不自由黨の代議士だ」

さういつて、あつさり引受けてくれた。そしてすぐ、透谷の父、快藏をつかまへて、話をした。快藏は、津田眞道氏の引立てによつて、大藏省にも勤まつてゐるのであつたから、津田伯のお聲がかりとなれば、どんなことにも承服しなければならなかつた。

役所から歸つてくると、快藏は透谷を呼んでいつた。
「今日は津田伯から、特別のお話があつた。何かお前は、津田伯に申上げたのか」
「はい。すべて申上げて、實は、媒酌までお引きうけ願つたのです」
「どうも、お前といふ奴は、あきれた向不見だよ。實はさつき、これこれといふお話があつて、私はたゞ、恐縮するばかり、穴があつたら入りたいやうな氣持ちだつた」
「伯爵は、わかりのいい方ですよ。明るい日本の將來を考へてゐる方ですよ。僕らのことにも、十分な理解をもつて下すつて、是非私が媒酌をしてやるから、そのお孃さんを、石坂代議士の手から奪つて來たまへ、つて――そんなことまでいはれるんです」
「どうも、私も伯爵に出られては、何とも反對も出來ない。私は、今日、それでは伯爵に一切おまかせしますと申して來た」
「さうですか、どうも有りがたうございました、お父さん」
と、透谷は思はず兩手をついて、頭を下げた。

明治二十一年十一月三日。
天長の佳節をトしてやうやくにして、透谷美那の結婚式があげられた。媒酌は豫定の如く、津田眞

道氏であつた。

司式の牧師には、田村直臣といふ人をたのんだ。場所は、彌左衞門町の煙草屋の二階である。石坂家の方からは、誰一人の出席者も見えなかつた。

藤村氏が云つてゐる。

「この結婚によつて、透谷は彼の周圍にあつた親しい人々を失つた。彼のはじめた結婚生活は、それらの人々に對して血戰をひらいたやうなものだつた」

と。

かりそめの式場が、又、そのまゝ、新婚夫婦の愛の巢となつた。それでも八疊間一室であつた。その隣りの四疊半に死んだ玄快老人の後妻が住んでゐた。即ち、透谷の義理ある祖母だ。その頃、弟の垣穗は吳服屋に奉公に出てゐたので、家族は新らしい嫁を加へて五人世帶であつた。

しかし、最初の約束通り、花嫁は女子學院に轉學して、每日、麴町まで通學した。そしてその歸りには神田錦町の侍醫をつとめてゐる武井靜といふ人の子供に、國語の家庭教授をやり、その月謝が、三圓になるのであつた。

「さすがは明治だね、かどの煙草屋さんぢや、お嫁さんがお前、每日、女學校へ通つてくださるぢやないか。あんなお嫁さんの走りが來たんぢやいや、おゆきさんも骨の折れるこつたらうねェ」

と、近所のおかみさんたちは、噂をした。

「何から何まで、あべこべになるのが、文明開化さ」

と、まだ丁髷のなつかしい連中が、そんなへらず口をきいた。

五

朝、妻の美那子が、麹町の女學校へ出かけてしまふと、透谷は、窓側の机にかじりついて、一生懸命に原稿を書いた。さうでもしなければ、自分の身體と時間を持てあましてしまふからである。結婚以來、彼はもう、前掛をしめて階下の煙草屋の店先に坐る氣にはたうていなれなかつた。

「一體、お前は何をして、身を立てるつもりなのだい。お店のあとをつぐ氣がないならないで、何とか自分達の身すぎを考へないぢや、困るぢやないか」

さう母のおゆきに、顔を合す度に、チクチクいはれて、透谷も、今までの獨身時代のやうに、平然と聞き流してばかりもゐられなかつた。

何かに背後から追ひかけられるやうな氣持ちで書いてゐるのだから、書いたものも、氣に入る筈はなかつた。一枚書いては破り、二枚書いては、反故にした。よほど氣持ちのいい時で、三枚ほど、机の上に重ねられてあるのが關の山だつた。妻の美那子が、學校のかへりに、家庭教師をつとめて、夕

方おそく歸つて來ると、すぐ原稿を氣にして、覗いた。

「今日は何枚?」

「三枚だ」

それでも、機嫌がいいと、書きかけの詩稿を讀んで聞かせたりもした。それは「楚囚の詩」といふ、透谷の處女作の詩の未定稿であつた。

想ひは奔る、往きし昔は日々に新なり
彼山、彼水、彼庭、彼花に
余が心は殘れり
彼の花! 余と余が母と余が花嫁と
もろともに植へにし花にも別れてけり
思へば、余は暇を告ぐる隙もなかりしなり
誰れに氣兼するにもあらねど、ひそひそ
余は獄窓の元に身を寄せてぞ
何にもあれ、世界の音信のあれかしと

待つに甲斐あり！　是は何物ぞ？
送り來れるゆかしき菊の香ー
余は思はずも鼻を聳へたり

○

倦み來りて記憶も歳月も皆去りぬ
寒くなり暖くなり、春、秋と過ぎぬ
暗さ物憂さにも、余は感情を失ひて、
今は唯だ膝を組む事のみ知りぬ
罪も望も世界も星辰も皆盡きて
余にはあらゆる者皆……無に歸して、
たゞ寂寥……微かなる呼吸――
生死の闇の響なる。
甘き愛の花嫁も、
身を抛ちし國事も、
嗚呼、數步をはこべば卽ち壁

三回まはれば、疲る、流石に、余が足も！

——當時の詩といへば、先づ、落合直文の「孝女白菊の歌」などが代表作であつた。その詩は靑年間には隨分もて囃されてゐたから、美那子もよく知つてゐた。ところが、透谷の「楚囚の詩」となると韻文だか、散文だか全然區別がつかないので折角讀んで貰つても何とほめていいか、面喰ふ外はなかつた。直文の「白菊の歌」が「東洋學藝雜誌」に出て、世間の注目をひいたのは、恰度、透谷が美那子と結婚した二十一年で、これは井上巽軒の漢詩を七五調に譯したものだが、一節をあげて見れば、

橋のたもとに身をかくし
わがこし方を眺むれば
遠里小野の燈火の
影より外に影もなし
下を流るゝ川水の
底の心は知らねども
あはれ悲しきその折りは

といつた調子のものであつた。その他直文は福島中佐をうたつた「騎馬旅行」や「青葉しげれる櫻井の」などの唱歌によつて、壓倒的に流行してゐた。外に、湯淺半月、大西操山、宮崎湖處子、大和田建樹などが、詩人として認められてゐた時代である。

「七五調でなくちや、詩でないと思つてる人もあるんだらうが、情ないよ」

と、透谷は、半分は妻へのあてこすりもあつて、稍皮肉に云つた。

「まあ、見てゐらつしやい。今に、七五調の詩なんて、古くつて、誰も顧ないやうな時代が來るから――」

さう、妻の前で力むでは見たものゝ、今かいてゐる「楚囚の詩」が、すぐ、世間に受け入れられるとは、彼も思つてはゐなかつた。況して、すぐ、それが、原稿料となつて、自分達の生活を支へるやうにならうとは、とても考へられる筈もない。

とう〳〵、或日、彼は悲鳴をあげた。

「ねえ、美那子。僕はやつぱり、速記の方をやつて、いくらかでも、かせぐことにしようと思ふよ」

美那子はその言葉をきくと、激しく胸が迫つた。

「私がもつとはたらいて、あなたにゆつくり、詩を書いて頂ければいいんだけれど。理想のやうにはいきませんわ」

美那子は涙聲でさう云つた。

「いや、あせつても駄目さ。どうやら、この詩も出來上りに近づいたが、やはり、すぐ、金に代へようと思つても、さうは問屋で卸さないからね。實はね一昨日だつたか、煉瓦をぶらついてたら、恰度、白牡丹の前で、堀江さんに逢つたのだ」

「堀江さんて、――あゝ、小田原の方でしたね」

「さうだ。やはり舊小田原藩士だが、今では、イビー博士の「東京演說」を飜譯したり、それの出版名義人になつたりして、すつかり、出世してしまつたんだ。その堀江さんがね、僕をイビー博士に紹介してやらうつていつてくれるんだ。博士のところには、いろんな仕事があつて、筆のたつ人間を求めてゐるし、速記が出來れば、尙のこと重寶するだらうからつて――」

「さういふ、眞面目なお仕事なら、また一つの經驗にもなることですわね」

「そりやさうだ。こんな、せまい煙草屋の二階にくすぶつてゐては、詩的靈感も何も、消えてしまふからね。美那子さへ贊成してくれるなら、僕は明日にでも、イビー博士のところへ出かけて見るつもりなんだ」

「お住居は何處なの」
「麻布の霞町ださうだ。はじめは、堀江さんにつれてつて貰ふしかないが」
――若い夫婦の間には、そんな相談が、まとまつた。誰よりも早く、誰よりも強く、透谷の天才を、直觀し、認識した美那子が、その故にすべての支障とたゝかつて、自由結婚をなしとげ、自分達の愛の力で、彼の天才を大きく發展させようと考へた生活の設計は、かうして先づ、一歩の退却を餘儀なくさせられたのである。しかしさうなればなる程、美那子はますます、透谷を愛さなければならなかつた。
透谷にも、妻の日ごとに、つよく、溫く燃えてくる心が、よくわかつた。
「それにしても、少しも早く、こゝの家を出ることが僕には必要だよ。もつと、環境の靜かな、落ちついた場所に移りたい。が、それには、先づ、金が要る」
と、彼は、隣室の祖母に氣を兼ねながらソツといつた。
「二人だけで、世帶が持てたら、どんなに幸福でせう」
美那子は、その黑目がちの大きい瞳をかゞやかしながら、透谷の傍に身を寄せた。
「無論、さうしなければならん。こんな、二階住みで、皆に氣兼しながら、戀愛生活も詩作生活もあつたもんぢやない。それに、この邊の人達は、まだ、封建時代の感情ののこつてゐる奴が多いから、

半分は岡焼きで、いろいろ、僕らのことをいつてるさうだ」
「まあ、何ていつてますの」
「どうせ碌な噂ぢやない。聞けば氣持ちをわるくするだけだから、聞かない方がいいよ」
「いやですねエ」
「しかし、僕には、戀愛のない結婚なんて、全然、考へることも出來ない。僕の人生にとつては、實をいへば、生活よりも戀愛が大切だつたのだ。生活を失つていいから、戀愛を獲得しようと思つた。だから、果して、獨立した世帶が持つていけるかどうか、自信は少しもつかなかつたが、何より先づ、美那子を僕のものにすることが、第一だつたのさ。確實に、この戀愛を獲得してから、第二の生活の計畫に入らう——さう思つて、やつたのだ」
「ほんとに、人の云ふ事なんか氣にかけたら、とても、貴方んところへ、かうして、お嫁になんて來れるもんですか。何しろ、祝言の晩だつて、石坂の家からは、兩親はじめ、誰一人も、出席してはくれないんですものね」
「まあ、それをいふな、そりや、石坂家からいへば、娘を一人、フイにしたやうに思つてるのだもの」
「口惜しいわ。皆に思ひ知らしてやりませうよ。公歷がゐたら、あの人だけは、きつと、喜んでくれたでせうね」

「公歴君だけは、僕らの味方だつた」

「新世帶をもつたら、早速、アメリカへ知らしてやりませう」

「まあ、もう、半年の辛抱だよ。それまでは、まあ少し位、氣狂ひあつかひをうけても、平氣で、信念を押し通すのだね」

「氣狂ひ扱ひ位は、あたし、はじめから、當然のことだと思つてますよ」

「理想を持つものは、皆、氣狂ひさ」

「女には、理想はなくても、情熱がありますものね。情熱だつて、この邊の人達からいはせれば、氣狂ひでせう」

「理想と情熱の氣狂ひ夫婦か。こりやアいい、はゝゝゝ」

と、透谷は思はず笑つた。

透谷は、急に何かを思ひついて、美那子の傍をはなれると、机の上の筆をとつて、

「情熱は執なり。

放にあらず」

と、手帖に書きつけた。美那子は側から奪ひとるやうにしてそれを讀んだ。美那子はうれしいやうな、恥かしいやうな氣持ちになつて頰を染めた。しかしこの若妻の情熱は、やゝもすれば疲れ易い透

谷の生活にとつて、多くの矛盾を祕めたものであつた。或時は善意に、或時は悪意に、又或時は、それらの混亂の中に――夫婦は周圍の敵ばかりでなく、自分達の内部のものとも、はげしく爭はねばならぬ日が多かつた。

「戀愛には、若干の惡意が必要だよ。それは一種の調味料のやうに、愛情をこまやかにも、鋭くもするのだ。――何の消耗もない戀愛なんて、それこそ味も素氣もないもんだらう」

さうは云ふものの、やはりそのころの二人の生活には、若い夫婦に有りがちの消耗が多かつた。

六

この時代から、透谷は少しづつ、新しい方面の知已を得るやうになつた。既に、宮崎湖處子と相知つたことは前記したが、麻布霞町のイビー博士の家で、櫻井明石氏と知つたのは、結婚の翌年明治二十二年の春であつた。

明石氏は「透谷子を追懷す」の一文の中で、當時の彼を次のやうに描いてゐる。

「透谷子は年齢は予より三歳若く、秀麗な風丰を備へてはゐたが、顏面蒼白、深い物思ひの有る神經質の人らしく見えた。

對談の調子は極めて打とけてゐて、前々から予の事を聞知してゐたかのやうな趣きがあつた。

まだ二十一、二の書生時代であり、家には双親が倶慶であつたが、直情徑行、他の異議を顧みずに、時代の尖端を行つて、早くも自由結婚をしたのであるから、いきほひ、親の助けをからずに、獨立した生計を營まねばならぬ。且つは自分の天職と認めた文藝に從事しても、まだそれによつて、衣食の資は獲ることは出來ない。それやこれやで、何かしら働いて金を得なければならなかつたので、イビー博士の處へも、速記術が出來て、タイプライターも敲ける（或はタイプライターは博士方で覺えたのかも知れぬ）といふ特技が福して、毎日午後（？）通勤してゐるのであつた。

しかし、收入はそれ程でもないので、更に又何かしなければならぬ。後コーサンド氏、ブレスウエート氏、ウツドウオルス氏などの手傳ひ、また一二宗教雜誌の編輯などをしたのであつた」

恰度そのころ、彼は前の年から取りかゝつて、苦吟推敲を重ねてゐた詩稿「楚囚の詩」が出來上つた。彼は自費出版を決意し、印刷を春祥堂に囑した。しかし、いよいよ組上つたところで、彼は急に之を中止しようとした。

「透谷子漫錄摘集」によれば、

「(楚囚の詩) と題して、多年の思望の端緒を試みたり。大に江湖に問はんと印刷に附して、春祥堂より出版することとし、去る九日に印刷成りたるが、又熟考するに、餘りに大膽にすぎたるを慚愧したれば、急ぎ書肆に走りて中止することを賴み、直ちに印刷せしものを切りほぐしたり。

自分の參考にも成れと、一册を左に綴込み置く」（明治二十二年四月十二日）

と、記してゐる。大膽なるを慚愧したといふ理由だけであつたか否かはつまびらかにしない。が、とにかく一旦は、之を中止しようとしたことは明らかである。それにもかかはらず、間もなく、彼の心境は再轉して、同年にこの詩稿は、發表の運びとなつたのである。それ以前に北海道の新聞に小説を發表したといふことが傳へられてゐるが、現存するものとしては、「楚囚の詩」を以つて、彼の處女作品と考へることが至當である。

彼は次の樣な「自序」を、その卷頭にかゝげてゐる。

「予は遂に一詩を作りあげました。大膽にも是れを書肆の手に渡して、「知己及び文學に志ある江湖の諸兄に頒たんとまでは決心しましたが、實の處、躊躇しました。余は實に多年斯の如き者を作らんことに心を寄せて居ました。が、然し、如何にも非常の改革、至大艱難の事業なれば、今日までは默過してゐたのです。

或時は飜譯して見たり又或時は自作して見たり、いろ〳〵に試みますが、底事此の篇位のものです。

然るに近頃、文學社會に新體詩とか、變體詩とかの議論が囂しく起りまして、勇氣ある文學家は手に唾して、此の大革命をやつてのけんと奮發され、數多の小詩歌が、各種の紙上に出現するに至りま

した。

是が余を激勵したのです。是が余をして、文學世界に步み近よらしめたのです。

余は此の「楚囚の詩」が、江湖に容れられる事を要しませぬ。然し、余は確かに信ず。

吾等の同志が諸共に協力して素志を貫く心になれば、遂には狹隘なる古來の詩歌を進步せしめて、今日行はれる小說の如くに且つ最も優美なる靈妙なる者となすに、難からずと――。

幸ひにして、余は尙、年少の身なれば、好し、此「楚囚の詩」が、諸君の嗤笑を買ひ、諸君の心頭を傷くる事あらんとも、尙余は他日是れが罪を償ひ得ることある可しと思ひます。

元より是は、吾國語の所謂歌でも詩でもありませぬ。寧ろ小說に似て居るのです。左れど、是でも詩です。余は此樣にして余の詩を作り始めませう――

透谷橋外の僑寓に於て

北村門太郎識」

この詩に對する批評は、巖本善治の「女學雜誌」に掲載された。前にも記した通り、當時は「孝女白菊の歌」の時代であつたから、透谷の詩は、尙未熟生硬で、一般の鑑賞には耐へないものであつたにせよ、一種の「新」であり、又「獨創」であつたことは明らかであつた。

のちに、山路愛山が、國民新聞に於いて、

「明治廿二年、余の始めて上京するや、偶々銀座の街を歩き、書肆に於て一冊を得たり。題して楚囚の詩と曰ふ。余は之を讀んで、其言の辭恰たるを奇としたりき」

と評してゐるのは、一參考である。因みにこの詩の材料となつてゐる政客は、恐らく、舊友大矢蒼海のことであらうと考へられる。

七

翌、二十三年七月から八月へかけて、透谷は、美那子をつれて、郷里小田原へ旅立つた。いはゞ、遲蒔きの新婚旅行であつた。この年から、斷片的に、彼の日記が遺つてゐる。日記の大部分は、原稿の腹案を記したもので、當時、透谷がいかに創作の野望に燃えながら、苦吟呻吟してゐたかを察するに足りるものである。

殊に小田原旅行の間は、しきりに創作慾に耽けり、「西行傳」「盲目旅人」「天香君」「渡守」「再來浦島」「鼠」などと、大いに腹稿を得たが、いづれも未完成に終つた。

八月四日の日記に

「曉起、筇を曳て、築地を歩む。雲重く、雨を催ふし、風はなく、柳動かず。

「天香君」まさに全局を終えんとしつ、尙わが氣到らず。これは、時經、月歷るにあらでは出來上るまじと思ふ。

つら〳〵思ふに「盲目旅人」「金持乞兒」等の小篇は今年の中に成り、「渡守」の一篇もやがて成るべし、而して「再來浦島」は明年を以て成り、「天香君」は明後年を期すべし。

「西行傳」は折を見て出すことよろし。

「盲目巡禮」は「世にめくら程つらきはなく、又めくら程」云々の句を以て始むべし」などとある。

同十四日　うたひ稽古はじめたり。

同十五日　夕涼に緣先に出て、風を迎ふ。子供らの集りて、花火遊ぶぞおもしろき。芋をかぢりつつあるもの、水菓子ひとへらを、有難さうに、にぎるもあり。花火散りて足元に奔り、逃げ出すどよみの無邪氣なる。

同十七日　夜、われ、早川にうつる。此夜われ、ばばに伴はれて、觀音に詣り、御詠歌をきけり。

同十八日　江の浦まで步みたり。景色よろし、わかき夫婦の六部を見たり。

同二十日　われ、宮の下に行きて歸る。石垣山を越え、湯本におりて行きければ、路なき野山をあさりて、秋の蟲にもしみじみ懇意に成りたり。

同廿七日　東京に歸る。

かくして再び、彌左衛門町に歸つて來た彼は「天香君」出でて演劇詩の可否決すべしとまで勢込んだ小田原の腹案を殆どすてゝ、新たに、「元祿文學の批判」「伽羅枕の批判」等に、鋒を轉じてゐた。即ち、二十三年七月から、紅葉は「伽羅枕」を、露伴は「ひげ男」を、共に讀賣新聞に掲げはじめた。國民の友に、露伴の「一口劍」が出たのも、この年の八月であつた。透谷が、これらの評判作に、少なからぬ刺戟を受けたことは、無理もない。

歸京後の日記のうちより、

「△詩人自ら先づ詩たるべし。

△明治の文學、未だ新哲味なきこと、其甚大缺點なり。如何にして、新文學は起るべき。

△コーサンド氏より書簡來りて、是より同氏の飜譯をなすべき旨を傳ふ（九月廿一日）

△コーサンド氏に行くことを始めたり。歸つて來て、甚だ悲しかりし。緣日にて、おみなが、ほゝづきを買ふべし。お芋もおすきだ（廿九日）

△「蓬萊曲」は、余が最初の作として出づべし。

△「楊貴妃」——われ支那歷史的エピック又はドラマを作りて、白樂天を泣かしむべし。

などが見出される。
又、この年十一月、彼は漸く、普連土女學校に教鞭をとることになつた旨が見えてゐる。イビーとかコーサンドとかいふ外國の宣教師たちの個人的な仕事の手傳ひをやらされて、僅かな收入を圖らねばならぬ生活も、實はもう明らかに行詰つてゐた時であつたから、ともかく學校の教師といふ定職にありついたことは、彼にとつて、一つの安堵であつたに相違ない。
と同時に、もつと彼の生活を明るく、勇氣づけたことは、多年の宿題であつた生活の獨立、移轉の實行であつた。同年の十一月二十三日、フレンド女學校へ就職した三日目に、彼は早くも、彌左衛門町の家をはなれて、芝公園地內、三十八號に新居をトした。

「廿三日、寺門嚴かに、俗塵稍々遠きの處に居をトす。」

と、彼は日記に書いた。結婚後、まる二ヶ年にして、やうやく、透谷美那の生活も、人並みの形式をもつことが出來るやうになつたのである。同時に、內部的にも、彼の詩想は、次第に、爛熟の域に迫りつゝあつた。何かの機會に、それが吹つきれるのを待つばかりであつた。
その年の歲末には、又妻を伴つて、箱根塔の澤一の湯へ出かけ、年を越して、正月三日に歸京する

ほどの、ゆつくりした氣持ちになつてゐた。

就職はする。詩想は湧く。結婚生活は圓熟して來るといふのであるから、先つ透谷の一生を通じて、この歲末位、幸福感にひたれたときはなかつたのではないかと思ふ。例の小田原の村木商の小島たつさんも、この年二度も小田原へ旅しに來た透谷夫妻の姿を、一番印象的にはつきり憶えてゐるといふ——。

「戀愛は人生の祕鑰なり」

彼のこの、パッショネートな宣言が、いよいよ彼の胸底に、つよく信念づけられて來たのも、恐らくは、この年あたりからであつたらう。彼のこの宣言には、當時、木下尙江でさへもが、「恰も大砲をぶちこまれたやうな感じがした」といふ位であつたのだから、それを一々、實行の上に證明していつた透谷夫妻の態度が、周圍の舊弊な人々の目には、どれ程、異端として映り、どれ程、奇行として驚かされたかは、想像するに難くないのである。

第五章

一

「楚囚の詩」に次ぐ第二作「蓬萊曲」が完成したのは翌二十四年の五月であつた。

五月二日　「蓬萊曲」全く脱稿
　十日　印刷にかゝる
　廿九日　印刷成る

と日記に見えてゐる。

彼はその原稿を懷にして、本鄉龍岡町の櫻井明石氏を訪れた。

「今夜は、かねてお話した劇詩の原稿が出來上つたので、持つて來た。君の前で朗讀するから、是非、忌憚のない批評をして下さい」

と、彼はいつた。あきらかに、彼は亢奮を面にあらはしてゐる。
「隨分、大部のもののやうだね」
「何しろ、改作に改作を以つてした、半歳餘の苦心の結晶だからね」
「もう、九時すぎだが、これから、讀むだけでも相當だらう」
「多分、今夜は君を寢かさないだらうから、下の人達にさういつて、こちらにかまはず寢て貰ふことにしてくれ」と、彼は率直にいつた。
「すると、今夜は夜明かしか」
「さうだ」
「どうも、えらいことになつたね」
「何しろ、まだ、誰にも、讀ましてない處女原稿だ。いつも、すぐ、讀んできかせる美那子にさへ、これはまだ見せてゐない」
「それは光榮の至りだね。ぢやア、待つてゝくれ。下へ行つて、家のものに、先きに寢るやうにいつてくるから」
櫻井氏は、この徹夜の强請には、少々辟易しながら、透谷の純情の愛す可きを知つてゐるので、結局、彼の云ふなりに、その夜は、「蓬萊曲」披露のために、共に一夜を徹することになつたのであつた。

賓をいへば、櫻井氏は、前作「楚囚の詩」には、あまり感心してゐなかつた。こんどの「蓬萊曲」も亦、その類ではあるまいかと、內心、怖れをなしてゐたが、透谷が、やがて得意の抑揚をつけて、或は高く、或は低く、或は緩かに、或は急に、且つ文辭の意義に從つて、朗詠していくのを聞いてゐると、次第に、心を惹きつけられていつた。

「ふーむ。こりやア、なかなか面白い。前作に比して、大いに、新機軸、新面目だ」

第一齣、第一場、蓬萊山麓の森の中の場の朗讀が終つて、透谷が一息入れたとき、櫻井氏は、すつかり感心していつた。

「何あに、今までのところは、ほんの發端だよ」

と、透谷は昂然として眉を上げた。

この「蓬萊曲」は、やがて養心堂から出版され、その冒頭に、次のやうな序文が附された。

「蓬萊曲、將に稿を脫せんとす。友人某、來たりて之を一讀し、語つて曰く、蓬萊山は古來瑞雲の靉靆くところ、欒仙の盤桓するところ、汝何すれぞ、濫りに靈山を不祥なる舞臺に假り來つて、狂想者を悲死せしむる。又、何すれぞ、わが邦固有の戲曲の躰を破つて、擅に新奇を衒はんとする。

余は直ちに、之を遮つて曰く、わが蓬萊曲は、戲曲の躰を爲すと雖も、敢て舞臺に上げられんとの

野思あるにあらず、余が亂雜なる詩體は、詩といへ、詩と謂はざれ、余が深く鬪する處にあらず、顗文の戰爭は、江湖に文壇の良將あり、唯だ、余が此篇を作す所以の者は、余が胸中に蟠據せる感慨の幾分を寒燈の下に、彼の蠶娘の營々として、繊糸を其の口より延べ出る如く、余が筆端に露洩せしむるに過ぎざるのみ、然も彼が勤むるは家を造りて之に入らんとするなれども、余が、晝間劇務の後に、滴々半宵の句を成すところの者は、徒に余をして債を起して、價ある白紙を反古と化せしむるに止まらんを知る。

蓬萊山は大東に詩の精を迸發する千古不變の泉源を置けり。田夫も之に對しては、インスピレーシヨンを感じ、學童も之に對して詩人となる。

余も亦、彼らと同じく、蓬萊嶽に對する詩人となれること久し。回顧すれば、十有六歳の夏なり。孤笻其の絕巓に登りたりし時に、余は始めて世に鬼神なる者の存するを信ぜんとせし事ありし。崎嶇たる人生の行路、遂に余をして彼の瑞雲橫はり、仙翁樂しく棲めるといふ靈嶽を假り來つて、幽冥界に擬し、半狂半眞なる柳田素雄を悲死せしむるに至れるなり。

友人再び曰く、然らば汝は魔鬼魅魎の類を信ずるや、余答へて曰く、信ずるにもあらず、信ぜざるにもあらず、悲哀極つて頓眠する時に、神女を夢み、劇熱を病んで壁上に怪物の橫行するを見るが如きのみ。友人乃ち放笑して去る。

此に於て、童子をして燈に油を加へしめ、筆を走らせて談話の概略を記し、以て序に代ふ。

明治二十四年晩春　透谷橋外の小樓にて

蟬羽子識

（この序文にある一友人某とは、多分、坪内雄藏のことであらうと推測される。といふのは、前記の櫻井氏訪問の直後横濱の山手公會堂で、シェークスピアのハムレットが演じられたことがある。當時は劇界にも、しきりに、革新の機運がうごき、所謂、演劇改良論の火の手があがつたばかりの時であつた。次第に飜譯戯曲も、盛になつてくるが、鷗外竹二共譯の「調高矣洋絃一曲」や「折薔薇」などによつて、先鞭がつけられたのも、この頃だつた。

○六月一日　横濱にてシェキスピアのハムレットを演ずるを聞きて行く。中々面白かりき。春のやに逢ふ。

再びガイドたらんと欲してホテルへ相談に行きしも、不都合多くて成らず（註、彼の生活の不安は、尙かくの如きものであつた）

○六月七日　坪內雄藏君を大久保に訪ふ。專門學校にありて世話になりし故。

春のや吾れに語るに、古事記時代を以て、パラダイスロートを書くべきを以てす。

吾れ、清蹊の作を談りしに、彼非常に贊成し、「グランドなり。ゲランドなり」と言へり。

蓬萊曲を評して、第一缺點は、其優美なる場所を取りて、悽惻なる景色を寫したるを以てなり、云々

○同九日　今夜吾れ、つく〴〵音樂なきを悲しめり。

古事記を研究するの念起れり。

などの記事が見えてゐるところから察するに、恐らく當夜逍遙氏との一問一答を、多少の潤色を以つて、「蓬萊曲」の序文に作つたものではなからうか。安政六年生れの坪内逍遙は、透谷からは約十年程の先輩であり、それに對して友人呼はりは變であるが、日記の文を參照すれば、どうも坪内氏らしい。自分が出かけていつたのを、向うから友人が來たことぐらゐの作爲は普通のことであらうし、殊に戲曲のスタイルについて論じ合つてゐるところは、先づ、坪内氏との問答として考へるときに、もつとも要領を得るやうに考へられる。やがて「桐一葉」や「牧の方」を書かうとしてゐる當時の逍遙にとつては、戲曲のスタイルといふことは、最大關心事の一つだつたに相違なく、又、透谷は透谷で、自由なる詩の發想といふ點から、舊來固有の七五調といふものとは、既に長いこと、鬪ひつゞけて來

た重要問題であつたからだ。

しかし、謂ふべくば、透谷の詩に於ける理想は、一時代乃至二時代、早すぎたものであり、當時の詩界は、まだ、七五調を以つて新體詩の基礎を決定するその以前にあつたのである。

明治文學史の著者、岩城準太郎氏が、云つてゐる。

「透谷夙に、詩に志あり。二十二年既に「楚囚の詩」といふ長篇をものし、强て七五調によらざる變調を以てす。事によりて世に出さざりしと雖も（註、これは、前揭の日記を信じたるためで、實際は發兌された旨、岩野泡鳴の「新體詩史」に證明されてゐる）詩界に未だ存せざりし新體のものにて、創始の詩才頗る見るべく、一種の幽韻、當代の珍とすべき者あり。若し、夫れ長篇「蓬萊曲」に至つては、泰西劇詩の體裁を借りて、奔放の詩想を披瀝せし者、三齣八場より成り、長句短句、錯綜して、必ずしも、七五、五七の節奏によらず」と、そのスタイルを論じ、

「世を憤り、戀人を捨て、尙足らずして己の滅びを願ふ憐れの塵の子が、內界に於ける神人二性の戰になやみて蓬萊原にあくがれ步き、危巖削立、雪崩大地を動かす靈山の絕巓に攀ぢて大魔王に遭遇し、其嘲罵に反抗して、物皆滅びよと叫び、憤悶遂に死滅を呼び、巖頭身を躍らして千仭の壑に投ず。これ此の曲の脚色なり。章句散漫にして、渾成の詩體に遠く、間々甚しく散文的にして全體の詩調を破ることありと雖も、其の內容に至りては、想像奔逸、情緖熱烈、透谷が多恨の一生と心裡の煩悶とを、

最もよく代表し、二十七歳の夏に於ける悲慘の最後を豫言するもののごとし」と、評してゐる。

かくて「蓬萊曲」は、世評の毀譽、相半したが、中でも一番手きびしかつたのは、女學雜誌にゐた磯貝雲峯が(註、彼はバイロンの飜譯などをやつた詩人だが、のち、アメリカに渡つて、客死した由)國民新聞で、「蓬萊曲」は、律も不定、韻もなければ調子もない、こんなものは、詩と稱するわけにはいかないと、こきおろした。

岩野泡鳴も、「新體詩史」の中で、「蓬萊曲」を、稍惡評してゐる。內容に多少、奔放熱烈なところがあつても、バイロンの「マンフレッド」やゲーテの「ファウスト」の模倣にすぎないのではないか、といふやうな、冷淡ないひ方をしてゐるが、實際は、泡鳴が透谷から受けた影響といふものは、甚だ大きいのであつて、殊に透谷の詩にあらはれてゐる厭世感、神祕感、悲痛味、苦悶、懊惱、深刻味などは、泡鳴の象徵詩の上に、十分に攝取されてゐると見なければならないのである。そのため、あまり、影響をうけすぎてゐて、泡鳴としては、透谷を論じるのには、氣がさしたと見える個所が幾分あるのである。

二

しかしこの磯貝雲峯の批評は透谷にはよほど、殘念だつたと見え、「戲曲を論じて、雲峰子に質す」

といふ覺書風のノートをつけてゐる。

「○猫は鼠に非ず、故に鼠にあらずと謂はゞ、誰か其愚を笑はざるものあらん長歌の定義を以て、戯曲を判し、其定義に背けるを見て、戯曲にあらずとするは、余が子の博學なるに奇とする所

○テニオハの誤り多しとて、戯曲を排す。新體詩界すらテニオハには……

○戯曲、尤も不規則なるべき戯曲に於て、無理にテニオハを要するか

○君若し戯曲をつくらば如何なるものをかなす。役者をして、一々、樂器に合はしむべきや

○役者のエキスプレッションをして、悉く唱歌とすべきや、マーロー、ベンジョンソン、シェキスピア……

○定調とは如何なるものぞ。多分メテアをいふなるべし。余は未だ、戯曲にメテアあらざる可らざるを聞かず。英國のドラマチストの多くは……

○獨逸のパワーフルのランゲエーヂにして、ミステリアスの事をいふべし……

○舞臺に曲すべきものと、爲すべからざるものとの二種あるを知らずや

○ブラウニング、ゴールドスミス等のドラマを讀め。云々」

かうしたノートの切れはじにも、透谷の先見の正しく明らかであつたことが、よくわかる。戯曲に

ないのを、彼は夙くから感じてゐて、人にも說き、又自分の創作上にも、實踐しようと努力してゐた於いても、詩に於いても舊來の定型を捨てなければ、自由豐富な新らしい詩想を表現することは出來のである。たゞ、この詩の主題となつてゐるやうな、一種の厭世的悲痛觀が、思想として、透谷の内部に既に、圓熟してゐたかは疑はしいところで、まだ、「蓬萊曲」時代に於ける透谷の悲痛味や神秘感には、子供つぽい、生硬なところが、多すぎた。

透谷のよき理解者の一人である蒲原有明さへ、

「透谷には、思想の動搖を統一する信念の代りに、主我的冥想があつた。唯心自性に沈む結果は、早くも、その出世作たる「蓬萊曲」に豫想せられてゐたと見られよう。

曲中には弘誓の船が描かれてある。これらは「神曲」的ではあるが、その弘誓の船は、現實から絕緣せられた實現力のない空想的施設である。

從つてそれは勿論宗教的とは云はれない。透谷をして煩惱熾盛の人生を痛感することから、さまたげたのは、その主我的冥想であつた。それであるから透谷自身の生活に於いても、それが悲慘な運命に行詰つてしまつたのであらう」と評してゐる。

透谷が、後の論敵、山路愛山と相知つたのは、この夏のことで、斯くて當時の文人、詩人の間に、

次第に彼の存在が認められて來た。「國民新聞」第千三百一號所載の 愛山の文に曰く、
「明治廿四年、予の遠江にあるや、友人明石、櫻井君、一書を余に贈れり。題して蓬萊曲と曰ふ。
其夏、余再び上京す。
一日、櫻井氏が本郷の小樓に在り。座上一客を見る。櫻井氏、之を余に介して曰ふ。即ち、蓬萊曲の作者、北村透谷君なり。余が交を透谷君に呈せしは是を始めとす。
余をして遠慮なく白狀せしめば、透谷君は今日に比類なき好人物なり。彼の中には一點の邪念なし。彼は容易に人の言ふを信じ、容易に人の長所に服せり。
彼は人に對して最も深き同情を表しうべき人なり。かゝりしかば、余は心より其人となりに服せざるを得ざりき。かくして二人の交は成れり。
既にして君の文名は、朋友の間に喧傳せり。君は先づ深遂なる批評家として著れ、更に無韻の詩人として著れ、更に、理想的の戯曲家として著れんとせり」と。
又、彼はこの年はじめて巖本善治の「女學雜誌」に投稿した。十一月號に掲載された評論、「二宮尊德翁」がそれである。從來は、二十五年二月の「厭世詩家と女性」が、透谷の處女評論と考へられてゐたが、この稿の發見によつて、訂正された。この投稿を機緣として、透谷は巖本善治に近づき、次第に、文壇の中心にのり出す機會を得るやうになつたのであるが、その代りに、今迄、辛くも糊口の

資となつてゐた、イビー博士その他の、手傳ひ仕事の方が、自然、疎略になつたゝめか、やがて翌二十五年一月匆々、彼は、コーサンド氏からも、イビー氏からも罷免される破目となつた。

○二十五年一月十五日、コーサンド氏より愈々免職の相談あり。

歸途、歩上、作あり。

ぬら〳〵とからをはなれた蝸牛

是よりいよ〳〵文壇に躍出る考へ、專らなり。

○同廿九日　イビー氏方も、亦免職となる。（日記）

とあつて、透谷としても、今や全精力を文學に打込まざるを得ない客觀的情勢となつて來たわけだ。

三

――巖本善治君來たりて、明治女學校に同行を促す。因て往く。君、われに向ひて、女學雜誌に、文學批評の筆を執るを勸む。

之を諾す。

と、明治二十五年二月二十六日の透谷の日記に見えてゐる。

巖本善治――明治女學校――女學雜誌、などといふ固有名詞は、すでに現代では、明治時代の文學に特別の興味をもつ篤志家にあらざれば、殆ど緣もゆかりもない言葉となつてしまつてゐる。しかし、當時の人々、殊に當時の若い女性達にとつて、それがどんなにつよい憧憬の的だつたかは今日よりの想像にはありあまるものがあるのである。

明治女學校ばかりではなかつた。明治の社會も二十四、五年になると、女子教育勃興の熱が急激に目ざめて來て、全國に、いろんな性質の女學校が設立されてくるが、就中、キリスト教の流行と軌を一にして、各所に盛んにミッションスクールが立ちはじめた。主としてアメリカから資金が入り、アメリカ人によつて主宰されたアメリカ式教育であつた。明治時代の若い女性にとつて、この新形式の教育法がいかに魅力に富んだものであつたかは、論をまたない。さういふミッションスクールのなかで、當時の最高峰といはれたのが、横濱のフェリス女學校であつた。何しろ、資金が十分なので、設備はいくらでも手が屆いた。その頃の學校で、地下室に機關庫があり、冬には全校舍にスチームが通り、栓を捻ぢればお湯が出るやうな學校は、外に絕對になかつたといつていいだらう。

設備ばかりでなく、校舍や校庭のエキゾチックな景色も、若い娘の心をとらへてあまりあるものであつた。和蘭の風景畫にでもありさうな風車。赤一色の校舍の壁は、たゞ窓枠だけが濃いグリーンで緣取られてゐた。女學生たちの風俗にも自ら一種のミッションスタイルが出來てきて、たとへ外面的

にしろ、新らしい知識と思想を求める若い情熱の息吹きは强かつたのである。

――はじめ、小石川の同人社、中村敬宇の門に學んだ巖本善治は、當時のクリスチャンの中では、異色のある存在であつた。たまたまその屬する教派がフェリスと同一であり、又、フェリスの漢學教師に、知已の中島湘煙女史がゐたりした關係で、彼は屢々フェリスを參觀したり、講演に赴いたりした。さうしてゐるうちに、彼女はたゞ「女學雜誌」を編輯するだけには滿足出來なくなり、木村熊次氏のあとを引うけて、明治女學校の校長になつたのであるか、この時彼はまだ二十何歳のほんの白面の青年でしかなかつた。だから、明治女學校は、當時、盛んに興つて來たミッションスクールそのものではない。いはゞキリスト教的なるものと「女學雜誌」による新文學精神的なるものとの、混血兒であつたわけだ。學校がさうなら校長たる巖本善治自身が、その混血兒であり、又、そこにつとめて教鞭をとつた若い教師たち、戸川、馬場、島崎などの人々も、或る意味ではその二つのものの混血兒であつた。

巖本善治の「女學雜誌」の前身は「女學新誌」である。これが、名前も新たに、芝西久保の萬春堂といふ本屋から發行されたのが、古く明治十八年七月のことだ。はじめは月二回發行であつたが、時代によつて變り、週刊になつたり月刊になつたり、時には一年程休刊したりもして、それでも明治四

十三年までつゞいて、廢刊になつた

創刊號に、巖本善治は、次のやうな、發行の趣旨を書いた。

「西洋學者の言に、國内婦人の地位如何を見れば、以て其國文明の高下をさとるべしといへり。吾國現今の婦人を見て、日本は尙、開化せし國に非ずといはれんに、今、之を言ひとくべき理なきを憾む。吾等平生、いたく之を慨し、且つ、吾等の母、吾等の姉、吾等の妻の、何故に、かく世に輕ろしめらるべきものなるや憂ひ（中略）專ら婦女改良の事に勉め希ふ所は、歐米の女權と、吾國從來の女德とを合せて、完全の模範を作り爲さんとするに在り」（十八年七月）

けだし、明治フェミズムの典型的な宣言であつた。かくして、巖本善治は、先づ「女學雜誌」を通じ、この宣言の線に沿つて、蓄妾廢止論、公娼制度撤廢論、婚姻條例設置論などの實質的指導を說くと共に、一方では、女性美禮讚をやつて「永遠の女性（イターナル・ウーマンフツド）」とか「戀愛の價値」とかいふやうなアイデアを鼓吹した。前にも書いた通り、時代は女子敎育の擡頭期であり、希望と憧憬にもえた若い明治の娘達が、長い因襲から目ざめて、立ち上らうとしてゐる矢先きであつたから、巖本善治的フェミニズムは、いはゞ、若いヂェネレーションの屈強な足場として非常な人氣と反響を呼んだ。

その當時の、代表的な女性の一人である新宿中村屋の相馬黑光さんなども、遠く仙臺のミッションスクール、宮城女學校の學窓から、東京の新らしい藝術的な女子教育をあこがれ、女學雜誌や、明治女學校の魅力に引かれて、故鄕を飛び出したのであつた。私は今、其の人の著「默移」を讀む機會を得て、當時の若い娘達の驚く程新鮮な探求の精神と情緒とを知ることが出來た。黑光さんはたとへばこんな風にいつてゐる。

〔私の心は最初からさうであつたやうに、また當然の歸結として、明治女學校に急速に走り、いまはもう、以前のやうにその思ひを抑へることが出來なくなつてしまひました。

そこは宗教學校ではないけれど、やはりキリスト教主義により、嚴肅なうちに、思ひ切つた自由があり、藝術至上の精神を實生活に織込んで、實に新鮮で力づよく、月々の「女學雜誌」にあらはれる巖本先生の隨筆の素晴らしさはいふまでもなく、若い先生には北村透谷、島崎藤村、戸川秋骨、馬場孤蝶、平田禿木、星野天知、その得がたいグループによつて「女學雜誌」から分れた「文學界」の高踏的な藝術の華々しさ、また、その崇高さは、私ならずとも、當時進歩的な心をもつた女性の凡てがひとしく讃仰するものでした。〕

或は又、

〔私共はそれらの人々の魂のこもつた文章を讀み、ダンテを知り、ラファエルを敎へられ、ミケラン

ジェロを敎へられ、そして自づと心の底に持つてゐて、それが德川末期の戯作的な文學によつて、悲觀的な色を帶びさせられた女性の思ひ、それをその生のまゝに呼び起され、人生の光輝を鮮かに思ひ知らされるのでありました。

「文學界」を見る時、女性はその最も正しき位置に直ることが出來ました。

ともあれ、大いなる理想を以て、女性を正しく見てくれるところ、それを私は「文學界」に發見し「明治女學校」に見たのであります）

とも書いてゐる。斯ういふ大勢の中で夙に「戀愛は人生の祕鑰なり」と論じ、身を以つて、戀愛結婚を實行した北村透谷が當時のフェミニズムの總本山の觀ある巖本善治と、意氣投合せざる筈はなかつた。同氣自ら相求め、さきに、透谷の「女學雜誌」投稿あれば、今は巖本校長自ら駕を寄せて、彼に囑するに講演を以つてしたのであるから、透谷、之を言下に諾して、そのまゝよろこんで明治女學校に同行したのは當然のことであつた。

四

（私の印象に基いて申しますと、巖本先生は丈高く、血色美しく、うるほひのある大きな鮮かな眼が、

何かを深く凝視するやうな光りを帶びて、いつも靜かに瞬かれてゐました》

と、黑光女史は語る。古い寫眞ではあるが、鬚髯ゆたかな巖本校長の顏には、女性の心を惹きつける强い氣魄が感じられる。

彼は、明治女學校では、スペンサーの敎育學を講じ、そのほかに修身の授業をしてゐた。巖本ファンの若い娘たちは、皆、誰も彼も、校長先生の修身の時間を待ちこがれ、話がすんで、講堂を出てくる時は、生徒は皆、感激に目をかゞやかし幸福の情緖にひたつて、夢のなかにゐるやうな氣がした。才氣も非凡で、辯舌も爽やかだつたのではないかと思ふ。內容も適度にきびしく、適度に甘く、時に、高遠の理想を說くかと思へば、時に世話人情にくだけて、かゆい處に手のとゞくやうな指導ぶりであつたから、年若い生徒たちが、こぞつて彼に傾倒したのも無理はない。《……やゝ厚く、色あざやかな脣、凡そ男性的なあらゆる美を備へた姿を壇上にはこんで、敎を聽く者の眼に、その强い眼を絕えず與へながら語り出される時、その聲が、また、實に沈痛なひゞきを帶びてゐました。さういふ魅力のある先生に對し、魅力の乏しい古い世界から出て來てゐる敎へ子達は、たゞもう一途に憧憬を寄せ、求めてゐた完全なものを、こゝに得たかの如くに安心しきつて、校內の空氣に身も心も委ねてしまつたやうなところがあります》と黑光さんが語る通りであつたのだ。

しかし、この明治女學校といふ學校は、前にも述べた通り、巖本善治の創立にかゝはるものではな

い。之より先き、恰度「女學雜誌」の創刊と同年になる明治十八年九月、明治學院の先生であつた、木村熊次氏の創立になるもので、夫人木村鐙子女史が、初代の校長であつた。日本ではじめての私立女學校といふので世間の注目を惹いたが、第一回の應募生徒はわづかに四名にすぎなかつた。校舍は、最初の頃は九段の牛ヶ淵にあつた。このとき鐙子女史が、自分の仕事のよき協力者として、當時、女子教育のエキスパートを以つて任じてゐる巖本善治を選んだのは、尤もなことで、彼は「女學雜誌」編輯の傍ら、鐙子女史を手助けし、やがて教頭の地位についたのである。しかし鐙子女史は、いくばくもなくして不幸にも、病魔のために斃れた。その後、夫君たる木村氏が、之をつゞけたが、新夫人を得るに及んで、信州の小諸に退き、そこで、又塾をひらいて、信州の青少年教育のために、力を用ひた。これが、藤村によつて名高い「小諸義塾」で、藤村は木村熊次の招聘によつて、後年、信州の自然にしたしむ機緣をもつたわけである。

創立者たる木村熊次の引退によつて、當然、明治女學校は、巖本善治のものとなつた。彼は、その責任と使命を痛感し、全く獻身的な努力で、この仕事に沒頭したのである。彼が、その頃、しきりに、横濱のミッションスクール、フェリス女學校を參觀したのも、すべては明治女學校の新經營に資するところあらんとしたゝめであつた。そのうちに、フェリス女學校の第一回卒業生で、才色兼備の若松賤子と戀に落ちたが、賤子は婚約中に、肺を冒されて、喀血し、巖本はそれを押して結婚したが、妻

の健康はすぐれず、次第に不幸な家庭生活の重壓に苦しみ出すのであるが、あまりに、本題とかけはなれた敍述に移つてしまふので、割愛する。

――はじめ九段に所在した明治女學校は、やがて、飯田町に移り、更に下六番町六番地に轉じた。

この下六番町時代が、いはゞ明治女學校の全盛期で、最初は四名しかなかつた生徒が、その頃は三百人近くにも增加してゐた。恰度、有島武郎氏の邸の隣りで、門を入つて中央に校舍、屋敷のまはりに長屋のやうになつて寄宿舍があつたといふのであるから、恐らく大名屋敷の古いのを、模樣替へしたものであつたのだらう。

先生たちの舍宅もあり、寄宿舍と反對の側に、棟をはなれて、やはり長屋風の建物がそれであつた。透谷や藤村は、自分の家から通つたが、青柳有美とか、櫻井鷗村とかいつたもつと若い連中は、この舍宅に住んでゐたし、又、そこから少しはなれては、巖本校長の住居もあつた。何しろ橫濱のフェリスとはちがつて、大名屋敷の古手であるから、設備もわるく、机も椅子もガタガタで、忌憚なくいへば、教室とか講堂とかいへるやうな、ちやんとした體裁をそなへてゐるものではなかつた。

しかし、若い文學者と、文學好きの女生徒との間に行はれる教育の授受であるから、たとへ教室が汚く、机がガタガカであつたにせよ、又少々位風とほしが惡かつたにせよ、講義が熱してくれればそんなことに誰も頓著はしないのであつた。それに、內容は文學的でも、形式は、ミッションスタイルで

あつたから、戸川秋骨も島崎藤村も、教室へ入ると、まづ本を机の上におき、嚴肅な顔をして、お祈りをしてから、講義をはじめるといふ風であつた。

――透谷が巖本善治の招きによつて、明治女學校の講演に赴いた時、その教員室兼應接間で、彼ははじめて、藤村に會つたのである。

（そのとき、透谷は二十五歳、私はまだ、やうやく二十一歳の青年であつた）

と、藤村は、透谷集の序に書いてゐる。しかし、年は下でも、藤村はすでに、明治學院在學中から、巖本善治とは知合のなかであつたから、明治女學校には透谷より先きに、關係があつたのである。いろいろ話してゐるうちに、泰明小學校のことが出た。

「そいつは、奇遇だ。島崎さんも泰明小學校出身とは驚いた。僕も、あすこを卒業しました。小田原から出てきたばかしの時でしたよ。谷口先生といふ方がゐられてね。僕が出ると、すぐ、やめてしまはれたが――」

と、透谷はなつかしさうに語つた。透谷は氣に入ればすぐ誰にでも打ちとけ、胸襟をひらいて語る方であつたが、殊にこの年少の友には、一面識にしてすでに深い友愛をおぼえた。同じ小學校の出身といふことも、まるで神の啓示でもうけたやうに、心をとらへた。

「今日はどういふお話をなすつたのです」

と、藤村は謙遜にたづねた。

「わが女性觀をのべました。こゝに草稿をもつてゐますが、これはいづれ、近いうちに女學雜誌へ出すことになつてゐますから、是非讀んで下さい」

元氣よくさういつて、彼は草稿のおもてだけ示した。それには「厭世詩家と女性」といふアトラクチヴな題名が書いてあつた。

「是非、讀まして頂きます」

「僕はこれから、ドンドン、書いていくつもりです。勉强もうんとする。もう一年もたてば、硯友社の戯作小説なんか、誰もかへりみるものはなくなりますよ」

と、氣焰をあげた。

それから又、

「さうだなア、僕もあなたのやうに、明治學校の先生にならうか。こゝで眞面目な講義をするのは、非常な勉强になりさうだ。フレンド女學校なんか、單なるミッションスクールで、淸新の氣風なんか、全然ないんですよ。こゝへ來ると、まるで別天地です。目がさめるやうだ。僕はフレンドなんか、いつ罷めてもいいと思ひましたよ」

ともいつた。フレンド女學校の方は、二十三年の秋から、時々教へに行つてゐたが、氣のりうすで

あつた。それにイビーやコーサンドとの個人的交渉が絶えてゐたので、フレンド女學校の方も、何となく、居心地のよくないものになつてゐた。

「そりやア、北村さんなんかに來て頂ければ、この學校もいよいよ充實するし、生徒も大よろこびですよ」

と、藤村にいはれて、透谷も無性に希望がわいて來た。眞理の追求と知識欲に燃えた、若い弾力のある娘達の姿態にも好意を感じたが、學校全體――といふよりも、情熱的な巖本校長のイニシアチヴの下に集つてゐる、若い敏感な文學者たちのグループに對して、透谷は、實にたまらない魅力をおぼえたのである。

「私から、校長によく話して、是非、こつちへ來て頂くやうに、取りはからつて貰ひませう」

と、藤村は歸りかける透谷の背後から、希望づけるやうに云つた。――玄關まで校長も送りに出て來た。その背後には今、彼の講演を聽いた女生徒たちの中の代表者の顔も、二三見えた。

五

透谷は久しぶりに、數寄屋橋のたばこやへ立寄つて見た。父はいつものやうに、大藏省に出てゐたので、留守だつた。母のおゆきが店番をしてゐた。

「隨分御無沙汰だね。とんと、顏を見せないぢやないか」

と、母は口ではそんな風に突慳貪にいひながらも、顏色にはうれしさがかくし切れない風だつた。

「すみません。來よう來ようと思ひながら、この頃は、原稿の仕事に追はれたり、講演をたのまれたりするんでね」

「門はそれでもすむだらうが、美那だつたて、たまには、御無沙汰見舞ひに來てもよかりさうなもんぢやないか」

「ところが、お母さん。美那子もあんまり、外歩きが出來なくなつたわけがあるんですよ」

「ぢやア何かい。又、病氣かい。あの人の病氣は、ありやお前、やつぱり、神經の方だよ――」

「いゝや。病氣ぢやないんです。まあ、ソロ〳〵發表してもいゝでせう。實は、これなんですよ。子供が出來たらしいんです」

「まあ――ほんとかい」

「ほんとですとも。はゝゝ」

と、透谷は、高い聲で笑つた。

「そりや、お芽出度い。で、いつ、生れるんだい」

「大體、六月頃ぢやないかと思ふんだが、まだ、あんまり目立つちや來ませんよ」

「美那の方は、年に不足はないが、お前の方は、若いお父つあんになるわけだね」
「結婚も早かつたんだもの、子が出來るんだつて、早いのは當り前ですよ」
「石坂さんところでは知つてるのかい」
「何に、知るもんですか」
「別にお實家に歸ることもないんだね」
「えゝ。自分のところで、生ませるつもりです」
「お父つあんも、お喜びだらう。あれで、なか〳〵、子煩惱の方だから」
「そのうち、美那も寄こしますから、參考になるやうなことを、いろ〳〵敎へてやつて下さい」
「いゝえ、子供が出來てるんぢや、あんまり歩いたり、俥にのつたりしちや、あぶないからね。今度は、暇を見て、わたしが出かけていきますよ」
と、母もすつかり機嫌が直つてゐた。それから、しばらく、四方山の話をして、やがて夕方近く、彼は母のもとを辭した。いつものきまりで、隣りの松崎せんべいが一包、妻への土産であつた――。
尾張町の角で、やがて生れてくる赤ん坊のことなどを考へながら、鐵道馬車のくるのをまつてゐると、だしぬけに、背後で、
「先生」

と呼びかけるものがあつた。透谷は驚いて振返つて見ると、フレンド女學校の學生の富井まつ子であつた。

「富井さんか。誰かと思つたよ」

「先生はどちらへ。お父さまのお家？」

「さう。よく知つてるね」

「そりやア、先生のことなら」

と、富井は一寸はにかんだ科をした。絣の銘仙を着て、濃い半襟をのぞかしてゐた。髮のつまつた髷の小さい桃割れに黄色の大きな花かんざしをさしてゐる。無論、まだ海老茶袴の女學生風俗は見られない時代だ。

「先生は鐵道馬車を待つてらつしやるの」

と、又、まつ子がきいた。

「さつきから、大分、待つてるんだが、向うのばかり來て、こつちはちつとも來ない」

「ねエ、先生、あたし、前から先生にお話したかつたんですよ。お話しては、いけませんか」

「お話？　そりやちつともかまはない。ぢやア少し、歩かうか」

「でも、それぢや、先生に悪いわ。又、こんどにしますわ。こんど、先生のお暇の時、ゆつくりお話

したいと思ひますわ」
と、まつ子は遠慮ぶかくいつた。
「今日だつてかまはないが、――僕の方は」
透谷の方も、何となく、このまゝ、別れるのは淋しいやうな氣がして云つたが、折柄、鐵道馬車の走つてくる音がしたので、
「それぢやア、又にしませう。學校でもよし、家へ來てくれてもよし、――遊びに來給へ、いつでも」
と、彼はまつ子に後會を約して、鐵道馬車にのりこんだ。
まつ子は、街角に立つて、手をふつた。その白い細い手が、妙に印象的だつた。美しい子だが、どこか病身な感じがする。首でも手でも、それから、全身から受ける感覺も、敏感ではあるが、壞はれ易いやうな氣がする、と透谷は思つた。
そこへいくと、美那子はガツチリしてゐるな、と彼は妻の健康で美しく、たくましい情熱をひめた肉體を思ひ出した。子供を胎にもつてから、彼女は一層、生き〳〵と丈夫になつてゐた。しかし、その時代の明治のインテリ娘たちには、病弱の女が多かつた。フレンド女學校や、明治女學校の學生たちの中からも、蕾のうちに斃れていつた娘達の數は、決して少ないものではなかつた。そして弱さうな女程感受性が鋭敏で、情熱的な特徴がつよかつた。まあ、美那子位、丈夫で、元氣があつて、頭も

いゝ女は、フレンドや明治女學校にだつてざらにはない――透谷はそんなことを思つて、さういふ妻をもつた滿足を味つた。

「おい、今日は、數寄屋橋へいつて、すつかり發表して來たぜ」

と、透谷は歸るなり、大聲で、美那子に云つた。

「まあ、發表つて、何を發表したの」

「お前のことをさ――子供のことだよ」

「いやですねエ」

「いやつてつたつて、お前、いつまでも、かくしておくわけにはいかんだらう。しかし、今も道々、考へて來たんだ。美那子は實に丈夫でいゝ。やゝが出來ても、ちつとも、衰へない、どころか、益々元氣ぢやないか。さつき尾張町の角で、フレンドの富井つて學生に呼びとめられたんだが、あゝいふ病的な感じは、美しいには美しいが、やつぱり、あれでは困ると思ふな」

「でも、昔から美人の形容は、みんな病的ぢやありませんか」

「ところが、これからの美人は、健康第一でなけりや、ならんのさ」

と、透谷は押しつけるやうにいつたが、心のどこかでは、さつき逢つた富井まつ子の病的な白い手の印象に惹かれてゐた。話の途中で、ふり切つて別れて來たゞけ、餘計、心がのこつてゐるせゐもあ

つた。
二日ほどして何となく心待ちしてゐたが、富井はやつて來なかつた。透谷はあてが外れたやうに思ひ、口さきだけ調子のいゝことをいつた女の氣持ちが、不愉快だつた。それでも、次のフレンドに行く日になると、いつになく明るい氣持ちだつた。美那子も、すぐそれを敏感に反映して、
「富井さんに逢つていらつしやい。今日は何だが嬉しさうね」
と、ひやかした。
「馬鹿。僕はもう、フレンドの方はやめるつもりだよ」
「だつて、まだ島崎さんからも、巖本さんからも、何にもお話がないぢやありませんか」
「そりやア、學期半ばだからね。向うにだつていろ〳〵都合もあるさ」
さういつて、透谷は原稿の入つた風呂敷をかゝへると、そゝくさと芝の家を出た。――教室には、いつものやうに、一番前列の席をしめて、富井が待つてゐた。
――講義ををはつて、歸らうとしてゐると、また、
「先生」
といつて、呼びとめたのは、富井だつた。
「この間、芝のお宅へうかゞはうと思つて、お宅の前まで行つたんですのよ。でも、何だか、可怕い

やうな氣がして、引返してしまひましたの」

と、彼女はいつた。

「何だ。隨分、遠慮深いんだね、君は」

透谷はあきれて、彼女の顏を見た。

「でも、先生、——何だか、押しかけていくみたいで、叱られやしないかと、思つたんですもの」

「僕は、待つてたよ」

「まあ、ほんとですか、先生」

彼女の顏は、急に、生き〳〵と、活氣を帶びるやうに見えた。白い首すぢにも、サツと赤味がさした。

「あゝ、ほんとゝも。待つてるのに、來ないから、憤慨してたのさ」

と、彼は事もなげにいつた。富井は、

「ぢやア、ほんとにこんどは伺つても、かまひませんのね」

と、念を押すやうにいふ。

「いつでも、ぢやア、かうしよう。明日來たまへ。學校の歸りにでも」

「えゝ、伺ひますわ、こんどこそ」

さう言葉を交へて、透谷がかへつていくと、富井は、感激に目がくら〳〵するやうな氣がした。やつぱり思ひ切つて、云つてよかつた。長い〳〵間の思ひが、やうやく屆いて、先生と、ほんとに、したしく口をきく機會が近づいた。まるで、夢のやうだ。今までも、敎壇を通して、北村先生は、澤山のことを敎へて下すつた。自分は、どんなに、北村先生によつて啓發されたか知れない。しかし、何といつても、敎壇といふ堅苦しさがある。さういふ垣を取りはらつて、ほんとに近しいお話がしたい。先生の懷にもつと入つてお話すれば、今までより何層倍も、深い感動と啓示をうけるにきまつてゐる。

自分は北村先生から、もつと、もつと、いろんなものが頂きたい。――しかし、先生にはどうも、近づきにくかつた。うつかり話しかけて、うるさいといふやうなお顏をされたら、自分はどんなに悲しいだらう。先生の勉强のお邪魔になつてはならない――さう思つて、自分を愼んできたのだが、まるで、神樣の攝理のやうに、この間煉瓦路の角で、自分のすぐ前に、先生がひよつくり立つてゐらつしやつたのが、いはゞ、情熱に點火するきいかいけで、それ以來もう、どうにも抑へ切れないつよい感情の囚になつてゐたのだ――。それにしても、明日、先生のお宅を訪問して、一體、どんなお話をしたらいゝのだらう。何から切り出していつたものか、――それを思ふと、又、新らしい不安に惱まされなければならなかつた。戀愛結婚をなすつたといふ、奧さんの美那子さんは、どんな方だらう――そんなことも思つた。

翌日、富井は仕立卸しの黄八丈を着て、髮も新式の束髮に結つて、透谷の家を訪れた。時々パラパラと落ちてくるやうな雨もよひの空だつたので、彼女は紺の雨具合羽も着込んでゐた。富井の家は飯倉で、代々紙類を商つてゐた。さういふ古くからの町家の娘にしては、一寸不似合な程、頭のすゝんでゐる娘だつた。

「先生、先生は近いうちに、フレンドをおやめになるつて噂ですけれど、ほんとうですか」

と、富井は、やはり一番きゝたいことからきいて見た。

「うん。やめられゝばやめたいんだ。フレンドのミッションスタイルも、少々、空疎をまぬかれんからね」

と、彼は答へた。

「やつぱり、噂通りなんですのね。先生がおやめになつたら、學生はどうなるんでせう」

「學生はやめないのさ」

「さうはいきませんわ。北村先生崇拜の學生は澤山ゐるんですから、その人達が承知しませんわ」

「そんなことはないよ。僕の講義なんか、みんな退屈して、眠たさうぢやないか」

「あら、ひどいわ、先生。それより、先生は明治女學校の方へいらつしやりたいんでせう」

「あすこは、フレンドよりは、活氣もあるし文學的だからね。フレンドは、あまり型通りのクリスチ

ャンで、潑剌味が足りん」
「ぢやア、やつぱり、先生は、明治女學校の方へ行つておしまひになるんですか」
「まだ、わからん。しかし、或はさうなるかもしれん」
「だつたら、私はどうしませう」
「困つたね。僕はフレンドなんか、いつでも、すぐにでも、やめられると思つて、多寡を括つてゐたのさ。富井君みたいな人があらはれるとなると、さう、簡單に進退を決するわけにはいかんことになるかね」
「そりやアさうですよ。當り前ですよ」
富井はちよつと透谷をやりこめるやうな調子でさういつた。やつぱり、この人は、なかなか齒切れのいい、鋭敏なところのある女だと、透谷は思つた。それにしても、自分がフレンドを罷めるからといつて、學生にまで、一處に明治女學校へ移れといふことは、教師として、いふ可き言葉ではなかつた。そればかりでなく、フレンドを罷めることで、富井まつ子のやうな學生とも別れなければならぬことは、透谷にとつて、必ずしも、無關心なことではなくなつてゐた。うつかり簡單には罷められなくなつたといふ言葉の内面的意味として、透谷は富井の顏や、印象的なその白い手を見てゐるうちに、次第に、自分のなかに出來て來た或るひそかなるみれんについても一考しないわけにはいかなかつた。

實は富井の方では、たとへ透谷がフレンドを罷めるにしても、自分だけは見捨てないでくれといふことをいひに來たのだが、そこまであけすけな口をききにくかつた。それよりも何より、ひとすぢに、先生のお弟子になりたいといふのが彼女の懸命な希求であつた。彼女はそれを誰よりも純粹に、誠實に、思ひつゞけてゐるのだが、いざとなると、さつきからいひたくつてモヂモヂしながらも、なかなか思ひ切つていひ出せないのであつた。

六

富井が歸ると、透谷は急に、机に向つて、原稿を書きはじめた。若い女の學生を相手に、この間から、何やかやと、空費した時間が、惜しくなつたからである。もつと、もつと、勉强をしなければならないのに、こんなことでは駄目だと、自分を叱りつけた。彼の机の横には、女學雜誌、都の花、國民の友、などの雜誌が散らばつてゐた。彼は、新らしい文學精神を確立するには、どうしても、文壇の舊勢力を打破しなければならぬ。それには、舊勢力の主流をなす硯友社一派を、徹底的に批判することからはじめなければならぬ、と考へてゐた。

――當時の文壇情勢を大きく支配してゐたのは、何といつても紅葉山人である。紅葉は、明治二十三年には「拈華微笑」「新色懺悔」「おぼろ舟」「夏痩」「伽羅枕」「此ぬし」「文ながし」「巴波川」二十

四年には「むき玉子」「伽羅もの語」「二人女房」「紅白毒饅頭」「夏小袖」二十五年には「三人妻」といふ風に、その創作力は、壓倒的に旺盛であつた。その他、江見水蔭、漣山人、幸田露伴、山田美妙齋らが比較的多量に創作を發表してゐる。これらの作品は、いふまでもなく、舊時代的な戲作趣味の濃厚なもので、これらが文壇勢力を恣にする限り、新らしい近代文學の發達はのぞむべくもない。どうしても、これらを文壇の主潮から放逐することが必要である。となると、やはり第一にマークすべきは、紅葉山人である。――そこで、透谷は先づ、紅葉山人の作品を、片つぱしから讀んだ。そして、これを、こまかく徹底的に批評しようとした。又、紅葉露伴文學の背景となつてゐる元祿時代文學に對しても、之を深く檢討すべきだと思つた。巢林子の批評は既に以前から透谷の抱懷する所であつたので、先づそこにも着手した。硯友社文學の批判、元祿文學の攻擊が、彼の評論家としての出發の最初の重要テーマであつた。彼の眼前には鬱然たる大樹が聳えてゐた。相手は手剛い。どこから斬りつけたにせよ、ちつとやそつとのことでは、びくともしない傳統の身構へが出來てゐる。

彼は最初紅葉の「伽羅枕」と露伴の「新葉末集」を取上げて見ようと思つた。「伽羅枕」はすでに、文壇定評の佳作といはれてゐる。「新葉末集」は小說「辻淨瑠璃」を收め、これも亦、嘖々たる好評の作である。相手にとつて誠に屈强の對象だ。先づこゝから入つて、深く兩者の藝術の基底を流れてゐる元祿文學の正體を、剔り出すことが、新文藝批評の當面の役割であると、透谷は堅く信じた。

彼は、矢繼早に巖本善治の「女學雜誌」からの註文を受けてゐた。彼の原稿生活は、俄かに繁忙となり、それと相まつて、文壇進出の野心もつよまつて來た。だから彼はフレンド女學校の學生たちと、時間を浪費する暇はないと反省しつゝ猛烈に讀み且つ書いた。疲れゝば、先輩、友人の許を訪ねて、快談した。日記にも、

○十八日　湖處子、及、春のや先生を訪ふ。
○五日　戸川安宅氏（殘花子）を訪ふ。仲々に面白き談話ありし。
○七日　戸川氏來訪。愛山兄來る。もろ共に深川へ、蛤くひに行く。

などの記事が見え、殘花、愛山、湖處子などとの往復は相當にさかんであつたものらしい。

○八日　女學雜誌に到り、巖本氏に會ふ。擔當することとなりたる批評の第一を置いて來たり。
　元祿文學攻擊の第一着手、卽ち之なり。

などの記事もある。

某日、彼は依田學海翁を訪問した。演劇改良の所見を訊かうがためである。當時、依田學海翁は、官界から退いて、演劇改良運動に、力をそそいでゐた。學海翁は木戸參議の下にあつて地方官會議書記官當時、伊藤博文公やその他政府要路の大官に、團十郎や菊五郎を紹介したことがあつて、從來の俳優に對する河原乞食觀の修正には、一方ならぬ盡力をしたものであり、又、當時の劇界刷新を目論んでゐた守田勘彌や、活歷劇の創造に苦心してゐた市川團十郎をたすけて、俳優の指導監督の任に當つてゐた。明治十九年には河尻寳岑との合作に成る脚本「吉野拾遺名家譽」を、演劇改良會に於いて發表した。この發表朗讀をやつたときは、政界からは、伊藤博文公自ら出席し、劇界側からは勘彌と團十郎が招かれた。しかし、この脚本はあまりにも急進的といふ不評をうけて上場は見合されたが、翁はその後演劇改良會の延長である「演劇矯風會」及びその改名の「日本演藝協會」にも關係して、劇界に於ける翁の勢力といふものは、なかなか侮ることの出來ないものであつた。

透谷は、この學海翁をつかまへて、次のやうな一問一答をやつた。

○透「今後の演劇の進むべき方針大綱は如何？

△學「今後の演劇は「眞」に近かるべきこと

○透「具體的にいへば如何？

△學「則ち、狐忠信の如き、寺小屋の如き、すべて不自然なる構想によるものを排斥すべしとの意

○透「臺詞は？

△學「なるべく自然卽ち「眞」に近かるべきこと

○透「道具は？

△學「この方は、出來る限り、美しき方よろし。則ち、觀客をして「眞」に樂しみ「眞」によろこぶことを得せしむべきこと

○透「チョボは如何にすべきか

△學「床淨瑠璃はすべて廢すべし。役者自らをしてすべてを言はしむること

○透「となると、問題は一つに、脚本そのものによることとなるべし

△學「然り。今後の演劇は、脚本第一主義にならなければならず。よき脚本こそ、よき演劇なり

○透「大いに然り。新演劇の面目は、一つにそこにあるべしとわれも信じゐたり

△學「舊演劇は、もともと、木偶より起りたるものなれば、換言すれば五官を具へたる人間の學ぶべき所に非ず

○透「とすれば、いつの頃より、人間となりたるものなりや

△學「昔は人形芝居と踊りの一派と、兩者ありしがいつか合して、人となりしぞ

○透「莊高なる者を古神的近世神的に興行するは如何？

△學「之れ遂におどけとなるべし。幽靈も鬼神も、若し眞に迫らば、大いに可なるべきも、戯れに見ゆるこそ是非なけれ

○透「俠といふことは、如何なる所より起りしや

△學「實に、舊時代の著作者が、盗賊、或は心卑しき者を、脚本の主人公に選みて、觀客の中の、小人、賤人、小屋、長屋の連中をよろこばしめんがために、義俠の心あるものとし表現したるより起りたるものなり――これ、舊時代脚本の最も非とすべき點なり。盗みたる金、家じり切りたる金を以て、人を救ふとは、愚の骨頂といふべきのみ

○透「この御意見大いに服すべし。然らば、粹とは如何なる者ぞ

△學「これも作者の不量見より、起り來たるものなり

○透「その始めは如何？

△學「蜘蛛の糸卷の中なぞにある十八大通の如きが其の始めならん。以て、そのいかに低俗の趣味なるかを知るべし

○透「御說に甚だ同意なり

△學「昔は戯作者といはゞ、人の汚れと思ひ居たり。現代に於いては、まさに、之れあるべからず。今日の文學者は、一代の指導者たるべし、監督者たるべし。脚本の、演劇を指導すべき理も亦、之

にあり

○透「戲作者のうち、馬琴の如きは、如何にや

△學「馬琴に至りて、稍、戲作者の品格を上げたり。然れども、馬琴を先生と呼びし者はなし、現代の作者は、社會の先生ならずんばあるべからず、觀客乃至俳優に、追隨したるは、昔の作者なり。讀者の興味に隷屬したるは昔の戲作者なり。現代は、その反對なり。脚本作者こそ、觀客乃至俳優を教へ導き、小說作者こそ、讀者を啓發せしむるに任を有す

○透「現代、尙、先生の御說の如く、進步いたして居らず、舊弊、新道を塞ぐ。以て如何にすべきか

△學「余が演劇改良意見も、一部に於いては、尙早と難じ急激とそしる

○透「文界にありては、戲作文學を攻擊し劇界にありては、舊派脚本を否定すること、目下の急務なり

△學「若き御身らの精進こそ、肝要なり

○透「吾ら大いに勵めば、先生の先見、近き將來に、必ずや、實現せらるべし、云々

このときの一問一答が、いかに透谷に影響する所大であつたかは、想像するに難くない。依田學海の進步的な意見は、必しも直ちに、劇界の容るゝ所とはならなかつたが、却つて透谷らの胸を通して、

文藝界の刷新に役立つたのである。

たゞ、このとき、透谷は、學海翁の意見が我國演劇の源泉たる能の要素を度外視してゐるのに、內心不滿を感じ、その後、芝神明町の高田與五郎といふ人に面會して、能樂の話を熱心にきいてゐる。この人は、透谷の父と同じ、大藏省の役人であつたが、能樂のことに堪能であつたといふ。かういふ處にも、透谷の、研究心、好學心の熱心な表情を見ることが出來るわけである。

又、その頃の日記に、

〇かねてねらひ置きたる、ナイトのシェキスピア全集を得たり。其の價、十二金なり

といふ記事もある。彼は實に異常な程の熱情を以つて、內外の文學研究に沒頭し始めたのであつた。そのうちに「女學雜誌」に發表される彼の論文を讀み、次第に、透谷の存在を知る者が多くなつて來た。フレンドの學生たちの中でも、今迄、普通の教師と思つてゐたのが、段々に、透谷の存在が文壇的となつてくるのを知ると、今更のやうに、彼を見直すものも出て來た。

或日、彼がフレンドの教室に入つていつたとき、いつも必ず、最前列の席を占めて彼を待つてゐる筈の、富井まつ子の姿が見えないのを發見した。

「富井君はどうした」

と、彼は思はず、さう聞いてしまつて、ハツと思つた。

「この間から、御病氣でお休みです」

と、側の一人が答へた。

「惡いのか」

「さあ――」

皆は何となく冷い表情を見せた。透谷はそれつきり默つて、教壇に上つたが、やはり、張合拔けのする氣持ちを否めなかつた。

昨日、はり切つてこしらへて來た講義案の「シェキスピアの戯曲論」をしやべるにも、富井がゐなくては、何にもならぬやうな氣がした。あの富井の熱心にそそがれてゐる情熱的な目がなくては、彼の講義は、脂がのつて來ないのである。

しかし、さうもいへないので、彼は仕方なく、講義をはじめた。砂を嚙むやうに、憂鬱な一時間であつた。しまひにはヂリヂリして來て、席のうしろの方の、何かといふと、小さい聲で友達と話したがる一女生徒を、とう〳〵、きびしく叱りつけた。

「うるさい。講義中に話をする者は、外へ出たまへ――」

第六章

一

普連土女學校の方を、罷める罷めるといひながら、なかなか實行しかねたのは、强ち富井まつ子への祕かなみれんのせゐだけでもなかつた。美那子の出產を控へて、生活の不如意はいよいよ重苦しく彼を攻めつけてゐたし、希望の明治女學校の方は、缺員のない以上、無理に割込むわけにもいかなかつた。透谷にその意思のあることは、巖本善治も藤村を通じて聞いてゐて、明治女學校のブレーントラストを强化するには、是非こつちからも、入つて貰ひたいところだつたが、ぎつちり時間表の出來てゐるものを、誰にしろ罷めさせてまで、彼を迎へるといふ理不盡はやりかねた。止むを得ず、時々、特別講義の形で、來て貰つては、客員として、待遇した。しかしそれが經濟的にどれ程の足し前になつたがは、知れたものであつた。

或る日の透谷の日記に、

「米九升七合なり」

と、ぶつつけに書いた個所がある。恐らく、米價が昂騰して、圓に九升七合にまでなつたのを慨嘆した一句であらう。今日から考へると、比較にも何にもならぬが、當時の九升七合は、透谷の家計には、よほど、つよく響いたものに違ひない。これについて、透谷の舊い友、櫻井明石氏が、次のやうに、回顧談をしてゐられる。

「透谷子は詩人であり、時に飄逸な行動のあつた人である。故に日常米鹽の事なぞは夫人任せで顧みなかつたのであらうと思ふと、なかなかさうばかりでは無かつたらしい。一つには夫人が地方豪家の生れで、結婚の當初は、家事經濟には恐らく不馴れであつたゝめ、予自ら出納の事に當つたのが、度々有つたらうと思はれる。(中略)多分、此頃の事で有つたかと思はれるが、予の母が、「お米は高くなつても、圓に一斗まであつて欲しい」といつたのを覺えてゐる。精米が、一圓に一斗以内に入つてから、我々の生活が次第に苦しくなつて來たのである。「米九升七合なり」の一句は、そこに米があがつて困るなア、と眉に一きは深く、八の字を寄せて、つぶやく透谷子をあらはしてゐて、予は笑止々々と、思はず微笑を洩らしたのである。

又、單に夫人の不馴れといふばかりでなくて、子は先天的に算盤の方面に無頓著ではゐられなかつたのである。さうして月々、零碎の貯金をして、それで旅行をしたり、友の急を救つたり、また、當時に在つては我輩貧書生には大金である十二圓を投じて、シェクスピア全集を購つたりした。敢て自

分自身や、妻子に粉奢の生活をさせようといふ考から、財を得たいのではなく、たゞ一通りの生活を安定させて、心のどかに創作に從事するといふことが、透谷子の念願であつた。而して家には、若干の資産がある。將來、之を相續する者は兄弟二人、弟氏は兄の孤高激越の性格とは異つて、溫順なるために、母親は特に之を愛した。故に資産の大部分はこの弟氏の手に入るのではないかと、兄の透谷は、且つ疑ひ且つ憤つた。この資産に關する猜疑、猜疑がかもす瞋恚、これはずつと前からあつたことである」

しかし、透谷と北村家資産分配の問題は、結局表面化するに至らぬうちに、透谷の自死によつて、一旦は、有耶無耶に解消した形であるから、果して透谷の惱みが、さうした現實的な問題の周圍を彷徨してゐたか否か、明瞭な證明はない。父快藏やおゆきさんの考へからすれば、弟の垣穗は丁稚奉公に出してゐるのだから、數寄屋橋のたばこやは、いはゞ門太郎のために、買つておいたやうなものであるのに、門太郎がそのたばこやをきらつて、文學者たらんと、家を出た以上、自ら、權利を抛棄したわけであると考へるのは、無理のないことであつた。透谷も自分の好きな道に進む限りは、たばこやなどに未練のある筈もない。そつちもこつちもといふ卑俗な慾ばつた氣持ちは、透谷にはあり得なかつたと思はれる。從つて、彼の惱みは、單に資産に關する猜疑ばかりではなくて、もつと精神的な問題に關はるところが多かつたのであらう。が、それよりも何よりも、直接に彼を苦しめたのは、生

活であつた。刻々の生活の苦しみが、時に、彼をして、資産分配の猜疑に立ちどまらせることも皆無とはいへなかつた。

心ならず、フレンド女學校に依存するのもやむを得なかつたし、若干の報酬に貴重の時間を割いて、フレンド教會から出てゐる「平和」といふ雜誌の編輯をやつたりしたのは、すべて、生活問題に原因してゐるのであつた。

編輯とは云ひ條、殆ど、自分一手に引きうけて、いろいろなペンネームを用ひては、書きまくらざるを得なかつた。

恰度、其の頃であつた。ジョンスなる宣教師に隨行して、奥羽地方の傳道の旅に出たことがあつた。松島についたのが、二十五年四月十日の夜であつた。彼のこの旅行の所產としてのこつてゐるものは「松島に於て芭蕉翁を讀む」の一小品である。

曰く、「飄遊は吾性なり。飄遊せざれば吾性は完からざるが如き感あり。天地粹あり、山水美あり。造化之を包みて景勝の地に於て、其一端をあらはすなり。詩性ある者が、景勝の地に來りて、神動き氣躍る至當の理なり」と。

或は曰く、

「迷宮と知つて迷宮に入るは文士の樂しむところにして、迷宮に入ること能はざるは、文士の悲しむ

所なり。古へより、文士の景勝を探る者、未だ迷宮に入らざるに、未だ妖魅を受けざるに、未だ造化の祕藏に近づかざるに、先づ、筆管を握つて、秀句を吐かんとする者多し。造化に對して禮を失ふ者といふべし。

彼等は彫琢したる巧句を得べし。然れども妖魅せられざる前の巧句は、人工なり。安くんぞ、神靈に動かされたる天工の奇句を咏出する事を得んや。ひとり探景の詩文のみに就きていふにあらず。凡ての文章が神に入ると神に入らざるとは、即ち此境にあり。古來の大作名著が、神に入れるは、孰れか神靈に動かさるゝを待ちて筆を握らざる者のあるべき。一たび妖魅せらるゝは、蓋し、後に澄清なる識別を得るの始めなるべけれ」と。

いづれも透谷持前のロマンチックな文學觀の片鱗を示すものであるが、この旅行で、文化の昔、一句を成さずして西歸した桃青翁を偲びつゝ、自家の文學上の信念に一進境を劃し得たことは、あきらかだ。

二

不相變、生活は不如意だつたが、書いたものの反響は次第に强まつて來た。

「厭世詩家と女性」をはじめ「油地獄を讀む」「伽羅枕及び新葉末集」「粹を論じて伽羅枕に及ぶ」及

び、前記「松島に於て芭蕉翁を讀む」等のエッセイは、いづれも、芝公園地內、三十八號の家で書かれ、「女學雜誌」の二十五年二月號から五月號にわたつて、それぞれ揭載され、新人透谷の出現を明らかにしたものである。

「厭世詩家と女性」の冒頭の一句は、屢々引用したが、當時の透谷愛讀者の一人であつた木下尙江は、(ところが、その女學雜誌に突如として、調子の變つたものが現はれて來た。大阪で、今から見れば殺風景な表紙――それを開けると、最初が論說欄であるが、その冒頭に「厭生詩家と女性」といふ文章があらはれた。それは從來のものとは全く調子の變つたもので、その冒頭の一句が、青年の尙江に非常なものをぶちこんだ。私も今は、こんなよぼよぼの老人になつてゐるが、その頃はこれで、堂々たる青年であつたのだ……。

戀愛は人生の祕鑰なり。

この一句はまさに大砲をぶちこまれたやうなものであつた。それまでは戀愛――男女間のことは、何か汚いものの樣に思はれてゐた。

それをこれほど明快に喝し去つたものはなかつた。

透谷の自畫像は、この一句に盡きる。この一句は、彼の一生の大事業であつたと思ふ。實に不朽の言葉である。

日本も爾來數十年を經過し、文化も榮えたが、「戀愛は人生の祕鑰なり」と鐵門を開いた人は、天下に幾人あるだらうか。

彼は實はその先驅者であつたのだ。が、はたして透谷は、戀愛の鍵を以て、人生といふ鐵門を開き得たのであらうか。此處に鍵があるといふ事は知つたのであらうが、その鐵門を開くまでに至らず、實相を見るに及ばないで倒れた人であると想ふ。」

と、語つたことがあつた。つゞいて、

「思想と戀愛とは仇讐なるか。安んぞ知らむ、戀愛は思想を高潔ならしむる慈母なるを」

或は又、「誠實忠信、死も奪ふ可からずと見ゆる者あり。何ぞや、曰く戀愛なり」又、曰く「情人相對する時は、天地に强敵なし」と叫んだ透谷の戀愛讃美が、從來の元祿文學的戀愛の卑俗さを、はつきり區別しておかなければならぬ必要から、元祿文學の影響下に出發した、紅葉露伴文學への徹底的な批判となつて、彼の新らしい「粹論」「俠論」があらはれることになる。

「一は實を主とし、一は想を旨とする紅葉と露伴。一は客觀的實相を徇び、一は主觀的心想を重んずる當代の兩名家」といふ書き出しで、

「若し夫れ、明治の想實兩大家が、遊廓內の理想上の豪傑を畫くに汲々し、我が文學をして、再び元祿の昔に返らしむる事あらば、吾人の遺憾いかばかりぞや」

と、强調し鋒を元祿文學に轉じて、

「そも元祿文學の輕佻なるは、其の章句の不羈放逸なるが故のみならずして、其想髓の輕佻なるが故なり。」といひ、元祿文學の罪惡は、一に戀愛を其の自然なる地位より退けたことであると指摘し、「恐らく、遊廓を以て、彼らの天國と見做し、正路を步むの人を愚物視し、人生の大不調子、大不都合を見るよりも、寧ろ小覗、小癖、不調子、小不都合の眼を具するを尙び、偈曲輭弱なる意氣より朴直なる野暮の中に隱れたる美を嘲り、至善至惡に對する妙念は殘らず罷脫し去りて、只だ慾火炎上の曲りくねりたる一時のすゞしさを、こよなき者と珍重す。美の眞ならず、自然ならぬこと、多言を用ひずして明瞭なるべし」

と、論難し、元祿文學卽遊廓的文學卽好色的文學である所以を述べ、

「好色は人類最下等の獸性を縱にしたるもの、戀愛は人類の靈性の美妙を發暢すべきものなり」

と、兩者の區別を嚴密に主張した。更に筆をすゝめて、

「粋と俠とは遊蕩の敗風より生じ、遊廓を以てテンプルとなしたること、前に云へるが如し。然れども、當時の文學中の最大部分たる洒落本、戯作の類の大に之に與りて力ありし事を思はざる可からず。當時の作家は、槪ね遊廓內の理想家にして、且つ、遊蕩場裡の寫實家なりしなり。

愛情を高潔なる自然の意義より解釋せず、遊廓內の腐敗せる血涙中より、之を面白氣に畫き出でた

る者にて、遊廓内の理想を世に紹介し、世に教導したる者、實に彼らの罪なり。

粹と俠とは、遊廓内に生長したり。而して作家は之を世に教へたり。西鶴其磧より下つて、近世の春水、谷峨の一流に至るまで、多くは全心を注いで、此粹と俠とを寫さんことをつとめたり。抑も粹は人の好むところ、俠も人の愛するところ、然れども粹をして必ずしも身を食ふ蟲とならしめ、俠をして必ずしも身を傷ふものとならしめしは、先代の作家、大いにその罪を負はざる可からず」

と、論破してゐる。彼もいふ通り元祿文學、近世文學の餘波は、尙、當時の文壇にふかい傳統をのこしてゐたし、春水、金水のデカダンスが、硯友社によつて止揚されたとはいへ、まだまだ粹、俠の小理想が作家の創作意圖に支配的な力をもつてゐた時代であつたから、透谷のかうした激越な論評は、贊成者も反對者も、共に目のさめる思ひであつた。

無論、新日本の健全で正常な文學の發達のためには、誰かゞ立つて、戲作趣味の傳統を破壞しなければならぬのは、明らかであつた。それほど牢乎として、拔くことの出來ない深い、強い、趣味でもあつた。透谷は、年少氣鋭を以つて、その役割を買つて出たのである。

前に記した依田學海翁との一問一答によつても、彼のこの信念は、ふかめられたに相違ない。

かくして、この四、五の評論は、たしかに時代の手應へがあつた。木下尙江のやうな、熱心な愛讀者を獲得したばかりでなく、彼の周圍を啓發する上にも、少なからぬ效果があつた。

藤村も、禿木も、天知も秋骨も、この矢繼早に「女學雜誌」を彩る透谷のエッセイには、目をまるくした。大變な奴があらはれたと思つた。自分らもうかうかしてはゐられないといふ氣がしたが、しかし、彼の說く處をよく味つて見ると、自分らの仕事の上に、强力な掩護射擊をして貰つてゐるのだといふことがわかつた。

はじめは驚き、そして理解と共感――そのあとには、きつと若い者たちの確信と抱負が頭をもたげる。

硯友社ばかりでなければ、到底、文士たり得ないのではないか、と、時に懷疑に落ちこむ日もあつた若い人達は、透谷のロマンチックな評論によつて、時代の黎明を仰ぎ見るやうな氣がした。かうして、いつのまにか、若き透谷は、新時代のリーダーのやうな位置に、立たされてゐた。藤村や禿木や、その他の友人知已からも、しきりに激勵や共鳴の手紙が、舞込むやうになつた。

三

奧州の旅から歸つて間もなく、彼は高輪の東禪寺の境內に移轉した。美那子はもう、臨月にちかい大きなお腹を抱へてゐた。

後に彼が書いた隨筆「鬼心非鬼心」の中に、「このあたりの名寺なる東禪寺は、境廣く樹古く、陰欝

として深山に入るの思ひあらしむ。この境内に一條の山徑あり。高輪より二本榎に通ず。近きを擇むもの、こゝを往還することとなれり。累々たる墳墓の地、苔滑らかに草深し。ももちの人の魂魄、無明の夢に入るところ。わがかしこに棲みし時には、朝夕杖を携へて幽思を養ひしところ、又、無邪氣の友と共に、山いちごの實を拾ひて樂しみしところなり」

とあるのによつて、この新居の環境を想像することが出來る。藤村も、「亡友反故帖」の中で、

「吾が知りてより、透谷子四度居を轉ぜり。高輪の舊寺に寓せし時、庭前草花あり花園に隣りて畑あり、室のうしろは老杉欝蒼、古墳壘々として、かの鬼心非鬼心を草せしは爰なり」

と、記してゐる。

引越して間もない或日、フレンドの富井まつ子が、ひよつくり訪ねて來た。旅から歸るなり、原稿に追はれたり、引越しがあつたりして、フレンドの方も、二週ほど休講になつてゐた。

「先生。いつからお講義はじめて下さいますの」

と、まつ子は恨みがましい調子でいつた。

「來週は必ず。何しろ、家内はこれだし、引越しをしなければならなかつたり、とても學校なんぞへ行つてる暇はなかつたんだ」

と、透谷は辯明した。

「何だかあんまり、樹が多くつて、夜なんか可怕いやうですわ、どうして、こんなところへお引越しあそばしたの」

と、まつ子は、家のまはりを見廻しながら云つた。

「どうせ、假の宿さ。飽きたら又、引越せばいい。いよいよ、身の置きどころがなくなつたら、一思ひにやるんだね」

「また、そんなこと仰言る。いけませんわ」

「昨日もね、外から歸つてくる途中で、氣狂ひ女につかまつてしまつたよ」

「まあ、可怕い。そしてどうなすつたの」

「恰度、東禪寺の寺内から高輪の方へ出ようとする細道に、覆ひかぶさるやうな、大きい松の木があるんだ。道の傍を小川がチヨロチヨロ流れてゐて、晝間は惡戲小僧が小魚を網でしやくつたりしてゐるが、夜になると、人の往來も絕えて、ひつそり閑となつてしまふ。そこを僕がすたすた歸つてくると、松の木のかげに、誰やら一人、人間が立つてゐる。驚いて足をとめると、いきなり、そいつが僕にかじりついたのさ」

「あらア——氣持ちがわるい」

「見ると、君、それは女さ。髮は亂れて肩にからみ、色は眞靑、とんと芝居で見る鬼女そつくりだ。

そのうちに女は大聲で泣き出した。僕も途方にくれたが、一體何者かと思つたので、靜かに、訊いて見たのさ。さうしたら、二本榎の方に住むかつぎ賣りの八百屋のかみさんで、食ふに困る處から、子供を殺したといふ話を聞いてゐた、その女らしいんだね。何でも、その兒がゐないと、一日に二錢の儉約が出來るといふところから、女の淺い心で、むごたらしい、東禪寺の墓の中の石桶に、ぶつつけて殺してしまつたのださうだ。しかし、同時に自分も氣が狂つてしまつて、夜になると、東禪寺のまはりをうろつき歩いてゐるんだ。そいつに、運わるくつかまつたのさ。どうしても、今夜こそ死んでしまふといつて泣きやまない。そして僕も一しよに、連れて行かうといふんだ。狂女の馬鹿力は怖ろしいよ。僕の袂をきつくおさへて、いくら振りもがうとしても、はなれないんだ。しまひには、僕も可哀想になつてね、よつぽど、女の行く處へついて行つてやらうかと思つてゐると、恰度そこへ、角燈をつけた巡行の査官が來かゝつたので、ともかく引渡したのさ」

と、透谷はまだ昨夜の幻影が消えやらぬやうに、窓の彼方の古い木立をながめた。

「たつた二錢ぽつちで、子供を殺すなんて、隨分野蠻ですのね」

「野蠻といへば野蠻さ。しかし、このごろのやうに、米がどんどん上つたんでは、その日かせぎの人達は、全く不安そのものだ。二錢だつて、あの八百屋には、大變な問題なんだ。それに、決して平氣で殺したんぢやない。自分の精神がぶちこはされる程の苦痛を受けてまで、殺したんだ。僕は、考へ

させられたよ。いろんなことを考へた。とう〳〵、昨夜はあけ方まで、眠られないのさ。考へてゐるうちに、腹が立つて來たり、悲しくなつて、涙がわき出て來たりした」

透谷の目がギラギラ光つてゐた。

まつ子は、かういふ透谷の純粋な面を見せられると、思はず、身内がふるへるやうな氣がするのだつた。あゝ、先生は純粋な方だ。自分なんかより十倍も純粋な方だ。――さう思つて、自然と頭が下がるのだつた。

そのとき、

「御免」

と、聲がして、誰かゞ玄關に訪れた。出て見ると昨夜の巡査だつた。

「いや、昨日はどうも失禮しました。あれからどうなりましたか」

「昨夜だけ、署で保護しましたが、さつき、精神病院へ入れました。今、こゝを通りすがつたので、一寸、報告しようと思つてね」

と、巡査は汗をふきながらいつた。

「はじめはびつくりしました。何しろ、いきなり、とびついて來るもんだから」

「はゝゝ。さうでせう。あゝなると、普通以上の力が出るんで、私も手古摺りましたよ」

そんな話をして、巡査は玄關で歸つていつた。
まつ子も今日は久しぶりに、いろんな質問を持つて來たのだが、今の話に脅えて、あまり夕方にならぬうちにと、怱々に辭去した。
「鬼心非鬼心」は、又芝公園に引越してから書いたものだが、その結尾で、彼は次のやうに、この事件を批判してゐる。
「殺さんと思ひ立ちしは、偶然の狂亂よりなりし。されども斯くの如き悲劇の、斯くの如く徒爾の狂亂より成りしことを思へば、まがつみの魔力、いかに迅速の大ならずや。親として子を殺し、子として親を殺す。大逆不道此の上もあらず。然るに斯般の惡逆の往々にして世間に行はるゝを見ては、誰か悽惻として人間の運命のはかなきを思はざらむ。狂女、心底より狂ならず。醒め來りて一夜悲悼に堪へず、兒の血を濺ぎし所に行きて、己れを殺さんとす。己れを殺さんために、その悲しき場所に獨り行くことを得ず。却て路傍の人を連立てんことを請ふ。
狂にして狂ならず、狂ならずして猶ほ狂なり。
あはれや子を思ふ親の情の、狂亂の之に隱在すればなるらむ。その狂亂の原は、いかに渠が出でがける、曰ひし一言、深く社會の罪を刻めり。
昨夜は淵明が食を乞ふの詩を讀みて、其淸節の高きに服し、今夜は慘澹たる實聞をものして、思は

は白らず袖を濕らしけり。知らぬうちとて、默視逍遙の好地と思ひしところ、この物語を聞きてよりに足をそのあたりに向けずなりにき。かの地に住みし時この文を作らず、却て今の庵にうつりて之を書くは、わが悲悼の念のかしこにしてはあまりに强かりければなり。思へば、不思議なるほどに、酸鼻のこともあるものかな」と。

因みに、「鬼心非鬼心」は「女學雜誌」三三一號に掲載されたが、透谷の隨筆としては、大いに異色あるものとされてゐる。

四

六月一日、美那子は出産した。産れた子は女の兒であつた。

彼はぶらりと、櫻井明石のところへやつて來ていつた。

「おい。子供がうまれたよ、はゝゝ」

例の蝶々の模樣の中形の浴衣を着てゐた。洗ひざらしで、もう、色もうすくはげ落ちてゐた。

「さうか。これはお芽出度う。名前は何とつけた」

「まだ、とゞけてはゐないが、フサとしようと思ふがどうだ」

「フサとは?」

「漢字は英の字をあてる」

「北村英か。いい名だ。英は花の秀いづるものをいふ。英邁不群といひ、忠武英斷、誠冠ニ終古ーなどといふ。誠に結構だ」

「さうか。そいつはありがたい。實は漢學に通じてゐる君の意見を徵しに來たんだ。早速屆出よう」

と透谷はうれしさうに云つた。

「そこで、どうだい。一子を成した感想は？」

「まだ、何も起らぬさ。しかし、さつき産湯をつかつてゐるところを見ると、女のくせになかなか活氣に充實してゐたぞ。まあ、これから、子供を研究するんだ」

「この間、皆が云ふとつたぞ。透谷も子供が出來たら、論文の調子が一變するんぢやないかつて。子供は人生の祕鑰なりになるんぢやないか」

「馬鹿をいへ。戀愛は戀愛、子供は子供さ」と、彼は一蹴したが、まだ子供に對する愛の認識が淺いだけに、何か冒險に似た心のときめきを否むことは出來なかつた。思ひ切り好奇心の強い彼は、たゞ、柔く赤い、猿の子のやうな赤ん坊の肉塊を前にして、素直な正視と觀察だけが必要だと思つた。新らしい愛情はそれから出發する。既成の感情にとらはれては、本當のものがわからなくなるぞと、自分を戒めてゐた。戀愛にしてもさうだ。自分は出來るだけ素直に、美那子との間の愛情を視て來た。自

させられたよ。いろんなことを考へた。とう〳〵、昨夜はあけ方まで、眠られないのさ。考へてゐるうちに、腹が立つて來たり、悲しくなつて、涙がわき出て來たりした」

透谷の目がギラギラ光つてゐた。

まつ子は、かういふ透谷の純粋な面を見せられると、思はず、身内がふるへるやうな氣がするのだつた。あゝ、先生は純粋な方だ。自分なんかより十倍も純粋な方だ。――さう思つて、自然と頭が下がるのだつた。

そのとき、

「御免」

と、聲がして、誰かゞ玄關に訪れた。出て見ると昨夜の巡査だつた。

「いや、昨日はどうも失禮しました。あれからどうなりましたか」

「昨夜だけ、署で保護しましたが、さつき、精神病院へ入れました。今、こゝを通りすがつたので、一寸、報告しようと思つてね」

と、巡査は汗をふきながらいつた。

「はじめはびつくりしました。何しろ、いきなり、とびついて來るもんだから」

「はゝゝ。さうでせう。あゝなると、普通以上の力が出るんで、私も手古摺りましたよ」

そんな話をして、巡査は玄關で歸つていつた。

まつ子も今日は久しぶりに、いろんな質問を持つて來たのだが、今の話に脅えて、あまり夕方にならぬうちにと、怱々に辭去した。

「鬼心非鬼心」は、又芝公園に引越してから書いたものだが、その結尾で、彼は次のやうに、この事件を批判してゐる。

「殺さんと思ひ立ちしは、偶然の狂亂よりなりし。されども斯くの如き悲劇の、斯くの如く徒爾の狂亂より成りしことを思へば、まがつみの魔力、いかに迅速の大ならずや。親として子を殺し、子として親を殺す。大逆不道此の上もあらず。然るに斯般の惡逆の往々にして世間に行はるゝを見ては、誰か悽惻として人間の運命のはかなきを思はざらむ。狂女、心底より狂ならず。醒め來りて一夜悲悼に堪へず、兒の血を濺ぎし所に行きて、己れを殺さんとす。己れを殺さんために、その悲しき場所に獨り行くことを得ず。却て路傍の人を連立てんことを請ふ。

狂にして狂ならず、狂ならずして猶ほ狂なり。

あはれや子を思ふ親の情の、狂亂の之に隱在すればなるらむ。その狂亂の原は、いかに渠が出でがける、曰ひし一言、深く社會の罪を刻めり。

昨夜は淵明が食を乞ふの詩を讀みて、其淸節の高きに服し、今夜は慘澹たる實聞をものして、思は

ず袖を濕らしけり。知らぬうちとて、默視逍遙の好地と思ひしところ、この物語を聞きてよりは自らに足をそのあたりに向けずなりにき。かの地に住みし時この文を作らず、却て今の庵にうつりて之を書くは、わが悲悼の念のかしこにしてはあまりに強かりければなり。思へば、不思議たるほどに、酸鼻のこともあるものかな」と。

因みに、「鬼心非鬼心」は「女學雜誌」三三一號に掲載されたが、透谷の隨筆としては、大いに異色あるものとされてゐる。

四

六月一日、美那子は出產した。產れた子は女の兒であつた。

彼はぶらりと、櫻井明石のところへやつて來ていつた。

「おい。子供がうまれたよ、はゝゝ」

例の蝶々の模樣の中形の浴衣を着てゐた。洗ひざらしで、もう、色もうすくはげ落ちてゐた。

「さうか。それはお芽出度う。名前は何とつけた」

「まだ、とゞけてはゐないが、フサとしようと思ふがどうだ」

「フサとは?」

「漢字は英の字をあてる」
「北村英か。いい名だ。英は花の秀いづるものをいふ。英邁不群といひ、忠武英斷、誠冠二終古一などといふ。誠に結構だ」
「さうか。そいつはありがたい。實は漢學に通じてゐる君の意見を徵しに來たんだ。早速屆出よう」
と透谷はうれしさうに云つた。
「そこで、どうだい。一子を成した感想は？」
「まだ、何も起らぬさ。しかし、さつき產湯をつかつてゐるところを見ると、女のくせになかなか活氣に充實してゐたぞ。まあ、これから、子供を研究するんだ」
「この間、皆が云ふとつたぞ。透谷も子供が出來たら、論文の調子が一變するんぢやないかつて。子供は人生の祕鑰になるんぢやないか」
「馬鹿をいへ。戀愛は戀愛、子供は子供さ」と、彼は一蹴したが、まだ子供に對する愛の認識が淺いだけに、何か冒險に似た心のときめきを否むことは出來なかつた。思ひ切り好奇心の強い彼は、たゞ、柔く赤い、猿の子のやうな赤ん坊の肉塊を前にして、素直な正視と觀察だけが必要だと思つた。新らしい愛情はそれから出發する。既成の感情にとらはれては、本當のものがわからなくなるぞと、自分を戒めてゐた。戀愛にしてもさうだ。自分は出來るだけ素直に、美那子との間の愛情を視て來た。自

分は、西鶴や近松の戀愛觀にわづらはされないで、心を平かにして、自分の內部を觀察して來た。そこから、新らしい戀愛觀が生れたのである。さういふ點で、自分の考へには借物がなかつた。これは今後とも、文學者として一貫しなければならぬ態度だと、彼は信じた。

と同時に、問題は、必しもそんな抽象的な範圍にばかり止まつてゐるわけではなかつた。今までも不如意なのが、たとへ赤ん坊にしろ、人一人增えたことは、決して輕視することの出來ないことだつた。責任も感じさせられる。一日二錢の出費を慮つて、子供を殺した狂女のことが、新たに痛切に響く思ひであつた。(人のことだとばかりは云へない)――そんな氣もしてゐた。

「ところで話はちがふが、君の「星夜」を拜讀したよ」

と明石がいつた。「星夜」は「女學雜誌」三二二號に出た透谷の小說である。小說といつてもごく短いものであるが、主題は女の變心による失戀の悩みを描いたものだ。女は、厚生館の音樂會に出て、七草を散らした裾模樣を着け、皎々たる素手を伸べ、金石の音を脣頭に轉ばしてアルトの獨誦をした。それ以來の戀で、二人は結婚の約束まですゝみ、或は郊外に散策し、或は甘き物語に時の移るを忘れたのに、突然、女の母から「彼のごとき者を差上げては御爲にならず」いふ理由で、ことわられる。一我は婦人の情の斯くも變はり易きを信ぜんとして信ずる能はず」と男は腹を立てる。「樂しさうなる面して、我が肩に憑りかゝりたりし躑躅園の歡意は、彼の遊女の賣色の笑にも似たる一時の假造よ

り出でしものなりしか」と怒る。輾轉又輾轉。眠らんとして眠り得ざるまゝに、床を排して戸外を眺むれば、茫々たる虛空には、無數の星屑が、炳々たるあるのみだつたといふ――その最後からとつて「星夜」と題したものであつた。

「で、どうだね、出來榮えは？」

透谷は明石の顏をのぞきこむやうにして聞いた。

「實は、それで僕も一文を草したのだ。女學雜誌へ出して貰はう思ふ。まあ、その前に君に見せてもいいが、こゝで讀まれては困る。持つて歸つて讀んでくれ」

明石はさういつて机の上から原稿をとつて渡した。――透谷は高輪の家へ歸ると、早速あけて見た。

「脫蟬子に與へて、其「星夜」を評す」

といふ題で、署名は（「星夜」の主人公となりし男）となつてゐる。

「星夜、面白く拜見仕候。彼のことありてより、はや小半年。前契の歡愁悲喜もすでに忘れ居候ひしに、思ひもかけず、御作によりて復一種の感情を味ひ、且つ、かけても思はぬ小說中の主人公と相成り終り、芽出度からぬ艷名を流し候事、如何なる歲のまはりあはせかと一笑仕候（中略）

とにかく、賢兄の御寫し被下れし小弟の愛は、世間普通のたはれをの愛にして、堂々たる士君子の愛にては無之、少くとも小弟の愛にては無之候

寫眞をながめて、夜一夜明かしたること、山吹の花片の細斷したること、小弟成程一時彼らの無禮を怒り、失望も致したれど、かやうなる女々しき失望は致し候はざりき。知り候はぬ人々には、主人公は誰やら分からねば、愛も失望も何とお書きなされ候ても、苦しからず候へ共、知友多き小弟故、小弟の關係知つて此御作を讀まれ候ては、計らぬ寃名を受けねばならず候故、愚痴をこぼし申し候」

明石の語氣は、意外に荒く、强く、透谷の心を刺した。

成程「星夜」は、不知不識のうちに、明石の失戀事件をモデルにしたかもしれぬ。しかし、あからさまにそれと見えてはならぬと慮つて、いろいろに潤色した。それが却つて、彼を誣ふるかのやうに、反撥されたのは、透谷の方でも、心外の感がある。しかし、公平に云つて、モデル問題が起る可能性は十分あるのだから、透谷としても何とか辯解しておかなければならぬ。

其夜、おそく、透谷は筆をとつて、明石への返事を書いた。

「………

生が「星夜」一篇、端なくも知友を弄して小説の主人公となして戯れたるものの如くに、お疑ひを蒙りぬ。生が知已を辱うする畏友に對して、斯る不敬を加ふる男と御覽ありしは、生の方にも憾みあり。

若し强ひて生が「星夜」を草したる時の腹の中を割つて見たしと仰せあらば、まこと頃日は知已の

中に、破契といふべき不吉事多くして、忌々しきことの流行するを悲しきことに思ひて、深きまことの情をもて、男に思はれながら、輕々しき心もて男を疎んずる女子の薄情に激するところありて、聊か其人々の猛省を請はむとの野心を抱きて執りし義に有之候。故に全篇の主要とするところは、男に情あるを示し、其情に對して女は深く酬いざる可からざる旨を寓するにあり。左ればこそ御批評にもありし如く、女の母なる人より、直ちに破約の書を男に送らしめて、以て破約といふことの原因は、多く女の母より起るものなることを暗に示したる譯に御座候、女子が薄情なりや否やは、自ら別問題に屬すれば、此に辯ずるも益なし。唯だ今日の女流に虛名虛榮を慕ふこと多くして、男子の心膽に戀することの少きは事實にて、生を激せしめたる一原因となり居り候、從一位の殿樣ならば、いかなる腐腸男子にても、戀婿にせんと願ふは、當今の人情にて、淺間敷かぎりと存じ、いでこの薄弱なる婦人原に、男子の戀はいかなるものなるかを敎へ吳れんとの大望も、此の小篇の中に籠り居り候

……………

知友を辱うしてより幾載、小生いかに鈍なりとも、賢兄の品性を知らざるものと思はれしは殘念に候

賢兄の事有りし時に、人の賢兄に向つて、「失望は一層賢兄を大にすべし、」といひし時、賢兄は怒つて、「婦人の故を以て、品性を大にするものと見做すや」と言ひ玉ひし御樣子、今に我が眼前にあり、

生も亦、世の硬骨男兒が、往々にして、戀愛の事に冷淡なるを知る。何すれぞ、賢兄をうつして、戀愛と失望と星夜の主人公の如くにする愚をなさむ」

彼はしばらく筆を擱いて默思した。硬骨男兒、櫻井明石の面影が、髣髴とした。親しい友である。しかし、自分とは、全く違ふ。詩人は女に似てゐると、自分は考へてゐる。女性は、或點で甚だ偏狹頑迷だが、詩家も亦、或點から見ると、これに似てゐる。女性は優美纖細を旨とするが、詩家もこれに同じい。たとへ豪逸雄壯の詩句を成すときでも、その根底に優美の情を藏してゐなければならない。

その他、神經質なるところ、執着心つよきところ、感情の豊かなるところ、詩人は普通男性より一歩女性に近いところが有るにちがひない。所謂硬骨男兒の心情の粗暴さは、詩人のもつとも忌むところだ。その粗暴に就く位なら、女子の執着と未練に就く可しとさへ、彼は考へざるを得ない。男子と女子の中間に、詩人の位置がある――そんな風にも思ふ。透谷は、戀愛に對する新らしい認識を力づよく打ちたてると共に、女性の地位を引上げる必要を痛感してゐた。しかし、明治の女は不相變、舊く、因循で、不活潑であり、明治の男は、いつまでも、粗野で、硬骨で、婦女子を頭ごなしに輕蔑しながら、平氣で露骨な欲情に支配されてゐた。かういふ對立となれ合ひからは、決してほんとうの人間の幸福が生れつこない――と透谷は信じて疑はなかつた。「星夜」を書いた主な氣持ちも、少しでも、人間がほんとうの幸福に近づきたい念願からだつた。

彼は又、筆をとつて、手紙をすゝめた。

「又、賢兄の如き人物は、小說家の禁物とするところにて、もしまこと賢兄を主人公にとる心なれば、生は一部のロマンスを作りし方、宜しかりしならん。然れども、戲れにも知友を以て主人公にとりしと思ひたまふは、寃罪に有之候

………

篇中の戀愛も失望も我が想中の愛兒にて、どこまでも手離すことは出來申さず、小說は世間普通の實象を描くを本旨とすれば、星夜の主人公不出來なりと雖も、小生の愛兒に有之候、但し、理想的に一個の硬骨男兒を寫し出せよとあらば、小生は或は其模型を賢兄に倣むやも圖られず候、世の眼もし賢兄の憂ひ玉ふ如く、「星夜」一篇に由つて、賢兄と見誤らん事あらばと、小生の罪の程をも恐れて、作意を陳ずること斯の如し。

餘は拜眉の上にて、萬縷可申上候

透谷　拜具」

すると、折返し、返事が來た。

「又、脱蟬子へ、

「星夜」の主人公ならざりし男

御作意拝聴、此上かごとがましく申すも餘りほめたることも無之故、何も不申上候

陸奥にありといふなる名取川

なき名取りてはくるしかりけり」

どうやら、これでモデル問題は、一應のけりがついたやうだつた。

そして之等の應酬は、そのまゝ、「女學雜誌」に掲載された。櫻井明石氏の「透谷追憶記」に依ると、「その後、恰度、予が訪問中に、藤村秋骨二氏が同道で訪ねて來た。予はこの二氏には初對面であつたので、透谷子がそれぞれ紹介に及ぶと、藤村氏が透谷子に、

〈こちらが、星夜の櫻井さんですか〉

と笑ひながら問ふので、透谷子は、一寸頭を抑へて、

〈漸くお詫びの叶つた處なのだから、もう、星夜の『ホ』の字も言つて下さるな〉

といつたので、四人が大笑をしたことがあつた」

と、語つてゐる。

五

透谷がフレンド女學校の門を入らうとすると、さつきから待つてゐた四、五人の女生徒が、

「先生」

と呼びかけた。

「先生、お芽出度うございます」

「お芽出度うございます」

と、口々にいふ。

「早いね、もう知つてゐるのか」

と、透谷もすぐそれと察して、思はず、いつもの六ケしい顏が、くづれる。

「だつて――それやアもう。とても、可愛いいお嬢さんなんですつてね」

「お父さまになつた御感想は？」

と、遠卷きに攻立てる。

「そんな、まだ、生れたばかしで、赤い顏をしてゐるだけだよ。一體どこから聞いたんだ」

「先生、こんど、是非、赤ちやん見せて下さいね」

「みんなで押しかけて、よろしうございますか」
と、わいわいいひながら、その中の一人が、何やら、箱に入つた紙包をさし出して、
「先生、これ、お祝のおしるし、クラスのみんなで、つくりましたの」
「こりやア、どうも、すまなかつたね。それぢやア、折角みんなの志だから、貰つておきます」
彼は、紙包をうけとつて、輕く會釋をした。
「何だらう?」
「ちやんちやんこですの。これから、お暑いからと思つて、絽にしましたの。皆して、裁つたり、縫つたりしたんですから、みんなの思ひが、こもつてますのよ。富井さんも、襟かたをお縫ひになつたんですの」
さういはれるまでもなく氣がついてゐたのは、いつも、必ず、かういふ場合に眞先に立つ富井まつ子の姿がそこになかつた。
「富井は又、病氣?」
と透谷は訊いた。みんなは、何となく、しりごみするやうに、すぐには返事をしなかつた。透谷は何か、不安な空氣を直觀した。すると、中の一人が、
「少し、こんどはお惡いんです」

と、口ごもるやうに答へた。

「惡い？」

「えゝ。先生、折角、お芽出度いのに、病氣のことお話したりして、お氣持ち惡くしてはつて、みんな、申上げない方がいいだらうつて話合つたんですけど」

「そんなことはかまはないさ。どんな風なの、一體？」

「入院なさいましたの」

透谷はびつくりした。この間、逢ひに來たときは、割合に元氣で、その前より、血色もいいやうに思つて一安心してゐたのだが、何か、容態が急に惡化するやうなことがあつたのかも知れない。

「さうか」

深い溜息が、思はず胸につき上げて來た。

「でも、昨日、これ持つて、お見舞ひに伺つたら、あたしにも一針縫はしてつて、看護婦のいふことなんか、おききにならないんですよ。先生に、くれ〴〵もよろしくつて」

「ぢやア、今日、歸りに見舞ひに行つてみよう。あとで、病院のところ敎へてくれ給へ」

「はい」

——みんなと別れて、ガランとした敎員室へ入ると、危く泪がこぼれかゝつた。白い、細い、病的

な手の印象が、又、あたらしく、透谷の目にうつつた。恰度、年頃も、一番惡いところた。病氣の進行は、案外、早いのかもしれなかつた。

彼は今、貰つた紙包の紐をほどいた。中からは、白地に、緋鯉を染めた平絹のちやんちやんこがあらはれた。

「ホウ、こりやア、美しい」

透谷は、窓の方へ、手でつるすやうにして、それを眺めた。病床でまつ子が一針、縫つたといふ、その襟かたの方へ、自ら視線があつまつていつた。

その時、始業のベルが鳴つたので、透谷はちやんちやんこを又、元のやうに箱の中へしまふと、「ハムレット」のテキストを持つて、教室へ急いだ。

和泉橋のD病院の一室に、富井はやせた體を横たへてゐた。

この間、透谷の家から歸つて間もなく、感冒氣味で、八度程、熱が出たあと、ごく少量ではあつたが、咳と共に喀いたものが赤かつた。それ以來、熱がつゞいてゐるので、醫者のすゝめもあり、思ひ切つて、こゝへ入つたのであつた。

透谷はフレンドの歸り途、とりあへず、D病院を訪れた。病人は、白いシーツに埋まつて、特別に

美しく見えた。無造作にといたまゝの、眞黑な髪が、枕もとに垂れさがつてゐた。
「まあ、先生」
まつ子は驚いて白い頰を染めた。
「どうしたんだ。この間はあんなに元氣だつたのにね」
透谷はベッドの傍に近よつた。
「先生のところから歸つてすぐなんですのよ。變ね、あの、狂人女のお話伺つたせゐかもしれませんわ」
「はゝゝ。傷き易いんだね、あなた方の神經は」
「だつて。いろんなこと、矛盾が多すぎるんですもの」
「まあ、そりやアさうだが。――さうさう。赤ん坊のお祝ひをありがたう。あなたも縫つてくれたんだね」
「あら、どうしませう。あたくし、赤ちやんのこと、申しおくれてしまひましたわ――お芽出度うございます」
「いや、いや、お芽出度いのかどうか、さつぱりわからないが」
病院の窓から見る青空には、白い雲が浮いてゐた。もう、ソロソロ、入梅時といふのに、カラリと

晴れ上つて、空氣は乾燥してゐた。

しばらくして、まつ子が輕く咳込んだ。咳込むと、なかなか、すぐに止まないのだつた。透谷も、背中へ廻つて、女の肩の下を、ソツと、撫でてやつた。

「つらさうだね。咳込むと、胸が痛いの？」

と透谷は訊いた。

「えゝ。右のうしろに、少し、水もたまつてゐるもんですから」

「ぢやア肋膜？」

「まあ、いろんな病氣が、一緒になつてゐるんですわ」

「それは、わるい」

「ねエ、先生。あたし、當分、勉强つゞけてやれませんわね」

「勉强なんか、しなくつたつて何でもない。それより、ほんとうに癒してしまはなくては――」

「でも、折角、勉强に脂がのりかけてゐたのに、とても殘念ですわ。シェキスピアだけでも全部讀みたいと思つてたんですわ。――でも駄目ですわ」

「まだ、お互に若いんだから、一年や二年、中絕したつて、何ともないぢやないか」

「あら、先生つたら、他人のことだと、まるで、簡單に仰有るのね。先生だつてお若いくせに、「我牢

獄」なんて、可怕いものお書きになるぢやございません？」

「さうか。そいつは參つたね。あれ、そんなに可怕いか」

「可怕いわ。まるで、自分まで牢獄に入つちやふやうな氣がするわ。でも、病院も牢獄ね」

――「我牢獄」とは、最近の「女學雜誌」に書いた論文のことである。透谷のものなら、細大洩らさず讀み漁る富井は、醫者の吩附に背いても、もう早速、讀んでしまつてゐた。その論文には、透谷の神經的な憂悶が、色濃くあらはれてゐた。語氣も強く、衝動も鋭いものであつた。

「病人が、あんなものを讀んでは、いけないね」

と、透谷は冷靜を裝ひながらいつた。しかし富井は、透谷のものが讀めない程なら、死んだ方がましだと思ふ程の氣持ちにかられてゐるのだから、透谷の生ぬるい慰藉の言葉が物足りなかつた。

「我牢獄」の最後の一節――それは富井の心に、まだ、新らしい刺戟として、のこつてゐた。

「世は我に對して、害を加へず。我も世に對して、害を加へざるに、我は斯く籠囚の身となれり。我は今、無言なり。膝を折りて柱にもたれ、齒を咬み眼を瞑しつゝあり。知覺我を離れんとす。死の影は我が後に來りて、機を覗へり

死は近づけり。然れどもこの時の死は生よりもたのしきなり。我が生ける間の『明』よりも、いま死する際の『薄暗』は我にとりてありがたし。暗黑！　暗黑！　我が行くところは圖り知らず、死も

亦眠りの一種なるかも。眠りならば夢の一つも見ざる眠りにてあれよ、をさらばなり、たださらばなり」

抽象的な言葉の羅列ではあつたが、富井には、それが又たまらない魅力であつた。御座なりの言葉などはどうでもよかつた。「我牢獄」の中の文章のやうな、生き〳〵した、ユニックな言葉が聞きたかつた。そのために病氣が進んだところで、どうせ、助からぬ胸のやまひである。看護婦さへゐなければ、いつそ自分の方から、もつと何か激しいことをいつて、先生を喫驚させてやりたいが、と思つた。そのうちに、ボロボロ、泪が噴くやうに出て來た。

「泣いちやア駄目だ。そんなだと、うつかり僕は來られなくなる」

――看護婦も何かいひながら、ガーゼで目の下をふいた。

「ねエ、先生。あたし、もう、フレンドへも行けないわね」

富井は泣きじやくりながらいつた。

「さア。なほれば又行けるさ。しかし、すつかりよくなるまで、一時、休學した方がいいかもしれない」

「…………」

透谷はふと思つた。富井がフレンドをやめることになれば、自分ももう、別に心のこりなく、明治女學校の方へ、替はれるかもしれない――しかしすぐ、そんな功利的な、淺薄な思ひ付を、恥しいも

のに、思ひかへして、打消した。

「勉强や學校のことなんか、暫く忘れて、闘病專一にやるんだね」

透谷はいたはるやうに、優しくいつた。しかし富井はすぐ反撥した。

「忘れろつたつて、そりや無理よ、先生。一體、あたし、ほんとうに助かるとお思ひになるの？　先生、後生だから、ほんとのこと仰言つてよ」

女は熱のある目を無理にみひらくやうに、せつぱつまつた聲でいつた。透谷は何と答へていいかわからなかつた。

第七章

一

「芝公園地、第二十號四番に移る。樹欝として、地高く、もつとも我意に適せり」、と、日記に書いたのは、明治二十五年八月二十三日のことである。

高輪の東禪寺境内の家も引越した當座は氣に入つてはゐたが、結局二ケ月そこそこで、又家移りをした。このゝちも、その年の暮までに、麻布の箪笥町へ、霞町へとしきりに引越しをして歩いて、都合、一年に四回の引越しをしてゐるのである。彼が、どんな適當な住宅にも、半年とつゞけて、住み得なかつた理由は何であらうか。

「飄遊は吾性なり」といひ、「飄遊せざれば、吾性は完からざるが如し」と自らいふ、其の飄遊のせゐであらうか。或はまた、彼の日記に記されたいくつかの戯曲の腹案が、あるところまで組立てられると、恰も興味の大半を失ふかのやうに、そのまゝ篋底に放下されたのと、何か共通の性格的要因があると見ていいだらうか。

が、ほど、好奇癖と焦燥だけに、彼の目まぐるしい轉宅を解釋するのは當らない。「情熱は執なり、放にあらず」と自ら座右銘を書いた彼である。すぐ氣のかはる飽きつぽい性癖と見るのもどうか。私はかう考へた。――二十七年の短命な一生を彼は思ひきり激しく生きたわけだが、殊にそれが、死の三四年前からは、普通の人の一年を五年にも十年にも生きなければならなかつたのではあるまいか。「後の新片町より」の中で、「一體、北村君の書いたものは、死ぬ三四年前あたりから急に光つて來たやうなところがあつて、一呼吸にあゝいふ處へ躍り入つたやうな風に見えた」と、藤村も書いてゐる通り、この明治二十五年六年の透谷の文學的活動は、人目をおどろかすに足るものがあつたわけで、さういふつよい生命力が、一どきに燃え上るやうなときには、常時には考へられないやうな行動も、易々として果しうることがあるのである。

この芝公園の二十號四番といふ住居は、あつちこつちと引越したあげ句、再びそこへ舞戻つて、彼が死をはかつた住居でもある。いまの同じ隨筆の中で、藤村が「其處は紅葉館の裏手に方るところで、飯倉の通りへ出られる細い坂道に接した位置にあつた。土地が高く、樹木が欝蒼とした具合が、北村君の性質によく協つた」といひ、又、櫻井明石氏も「透谷子はよく轉宅する人だつた。予が一回も訪ねぬうちに引越した家もあつた。予の記憶してゐる家のうちでは、芝山内の、子が自決したその家が一番よい家であつた。木立の欝蒼たる中に建てられた極めて閑靜な小屋で、もと僧侶か讀書人かが住

つたものと見えて、書齋の一方の壁を一尺程も引込めて、縱も横も五尺ばかりの處に、棚が幾段も作りつけになつて書架用に供されてあつた。予も大いに氣に入つて、かやうな處に少しでも住んで、讀書作文でもしたら、嘸愉快なことだらうと思つたのであつた。」と、語つてゐる通り、恐らくこゝが、透谷の住居の中では一番整つた感じのする家だつたにちがひない。しかし、家そのものは氣に入つてゐた透谷も、すぐ目と鼻の先きの紅葉館から聞えてくる朝野の貴顯紳士のさんざめきには、内心平かならざるものがあつたらしい。

或る朝早く、起きぬけに詩想のわくまゝ彼は端然と机の前に坐して筆をとつてゐた。すると、すぐ前の窓際で、「にやア――にやア」と鳴く仔猫の聲がする。オヤと思つて、よく見ると誰か知らむ、窓ごしに白い仔猫を一匹、すてゝあるのであつた。

「おい、美那子、猫だ。猫だ」

と、彼は妻を呼んだ。美那子もびつくりして、やつて來た。

「まあ、可愛いい猫ですね、捨てたんでせうか」

「捨てたんだ。可哀さうに。このへんにも情を知らぬ奴らが住んでゐると見える」

と、透谷は不機嫌に云つた。

「それとも、迷つて來たのかも知れませんよ。迷兒か棄兒か、どつちだらうね、お前は」

と、美那子はその猫の頭を撫でながらいつた。――あとで、近所の御用ききの話で、それが一丁程向うの、やはり山内にある或家の飼猫だといふことがわかつた。その御用きゝにたのんで仔猫はつれもどされた。

「何も捨てるのに事をかいて、俺の家の窓の中へ、捨ててゆくことはないぢやないか」

と、透谷は自分が何か、からかはれてゐるやうな氣がして、面白くなかつた。

「だから、きつと、棄てたんぢやなくつて、猫の方で、あそびに來たんでしよ」

と、美那子は善意に解釋した。

「さういへば、さつき鴉が遊びに來たよ」

透谷は少し機嫌を直していつた。

「まあ、鴉が？」

「さつき、こゝで書いてゐると、其の庭先きへ下り立つて、僕が追つても、叱つても、飛んでいかないんだ。時々、脚を立てたり、首をあげたりするが、平氣で、ちよろ〳〵歩きながら、何か餌をあさつてゐるのさ。汚いものでも、餌と見れば、危險を犯して群がつて來るのは、鴉ばかりか、人間にも澤山ゐると思つたら、急に腹が立つて來てね、僕は、いきなり、この卦算をとつて、投げつける眞似をしたら、鴉め、驚いて飛んだよ。ところが、飛去りながら、ガア、ガアつて、變な聲で鳴くぢやな

いか。いやな奴だよ。皮肉な奴だよ」

「そりやアあなた、鴉は、かアかアつて鳴きますわ。それが當り前よ。鴉が、ポツポツポツつて鳴いたら、それこそ、變よ」

と、美那子は笑つた。それで透谷もつりこまれて笑つた。

その晩、彼は「秋窓雜記」の第六節をものにして、鴉のことに及び、

「かあ、かあと鳴く聲は、我が局量を嘲る者の如し。實に皮肉家といふもの、文界のみにあらざりけり」

と、書き結んだ。その窓の下では、今宵は蟋蟀の聲が、秋らしくもの哀れであつた。彼はそれに聞き惚れながら、原稿の筆をすゝめてゐると、又しても、紅葉館からは、しきりに三絃をかき鳴らす音が聞えて、しばしば、彼の耳を、蟋蟀から奪ふのであつた。

彼は、撫然として、第九節を書いた。曰く「紅葉館は我庵の後にあり。古風の茶亭とは名のみにて、今の世の浮世才子が、高く笑ひ、低く語るの場所なり。三絃の音、耳を離れず、蹈舞の響、森を穿ちて來る。その音の卑しく、其響の陰なるは、幾多世上の趣味家を泣かすに足る者あるべし。紳士の風儀久しく落ちて、之を救濟するの道、未だ開けず、悲しい哉」と。

彼が、今の世の浮世才子と罵つた中には、朝野の紳士紳商ばかりではない、その頃やゝもすれば、

紅葉館の女中などと芳しからぬ噂の種子をまいてゐる硯友社一派の、戲作文學者に對する糾彈も意味してゐた。金色夜叉のモデルになつたのも、この紅葉館の一場面であつた。硯友社の領袖だつた巖谷小波が、この頃愛してゐた紅葉館の或る女に、裏切られたのを憤慨の結果、紅葉館の玄關先で、恰度、熱海の海岸の場のやうな、芝居がかつた騷ぎが演じられたりしたこともあつた。透谷はそんな噂を聞いて、苦りきつてゐた。戀愛は崇高にて、人生の祕鑰と論じてゐた透谷も、さういふ不しだらな女出入は、正視するに忍びなかつた。いやしくも世に文士と呼ばれ、一代を指導すべき立場にありながら、それでは俗物中の俗物と卑しめられても、辯護の餘地がないやうに思はれた。作家の人格は、もつと高潔で、宇宙を貫くやうな、きびしく激しい浪漫的なものでなければならぬと、透谷は信じた。それなのに、

「何でも、巖谷のふられた女を、紅葉が、式臺のところで、足蹴にしたさうですよ」

と、まるで近頃の快心事かなぞのやうにいひふらす、愚しい文壇通もゐた。明治の新文學も、やうやく、社會の關心をひき出したばかりなのに、その首領株が、もうこの態たらくでは、とてもお話にならないと、彼はいまいましい氣持ちだつた。それには徒らに他を指彈するばかりでは、無能のことで、自ら率先して、新文學精神の態度といふやうなものを、示していかなければならぬ。作家は、華美なる街の人氣男であるだけではいけない。作家は世に迎へられるためのみではなくて、世の先きに

立つて、憂ひ、考へ、進まねばならぬ。それには何よりも高潔な浪漫的精神が大切である。俗物根性をなで切らなければならぬ、たゞ、しきりに文を賣つて、一部皮相の人氣に投じてゐる硯友社文士のやうなものが、文士の代表的存在といふことになつては、文學の眞價を疑はれても止むを得ないことになる。どうしても日本の文士は、戯作者ばかりでないことを、世に示して見せる必要がある。――透谷は、「秋窓雜記」の筆をやめて、しばし日本文學の現狀を憂へた。それには、自分らの雜誌をもちたい、といふことも、その頃からしきりに胸奥を去來してゐた一案件であつた。

その翌日は雨だつた。風も加はつて、雨足の白く光る、秋らしい强い降りであつた。

窓を明けると、雨にうたれた菊の葉かげに、又、白いものがゐた。

「オヤ、また、猫だ」

昨日かへした猫が、又、その庭に投げこまれてゐるのだ。しぶくやうに降りそゝぐ雨にぐつしより濡れて、きれいな白い毛なみも、今日は無殘によごれてゐる。

透谷は、こみあげてくる、つよい怒りを感じた。怪しからん。人を馬鹿にするな。二度まで、人の庭へ猫をなげこむとは、一體、何の恨みがあるのかと、癇癪もちの彼は、いひ知れぬ腹立ちに身をふるはした。捨てられた猫も可哀さうだつたが、いかにも自分らが當てこすりをされてゐるやうで、いらいらした。

仔猫は、冷えと飢えに、殆ど死にかけてゐた。このまゝ雨にさらしておけば、まもなく死骸となるだらうことは知れてゐた。透谷は傘もさゝずに、雨の中を、庭に下りて、菊の葉かげに小さくなつてふるへてゐる仔猫をつまみ上げた。

猫のからだには、もう弾力がなかつたが、目は澄みわたつて美しかつた。猫は抵抗もなく、彼の掌に身をまかした。濡れてゐるのに、輕かつた。まるで、菊の花體を折り取るのと大してかはりがなかつた。

「これも何かの緣だ。飼つてやらう」

と、透谷は思ひ直した。

二

北村先生

きのふは、わざわざ新橋ステエションまで御見送りを賜はり候こと、わたくしの一生の光榮と存じたてまつり候。おかげさまにて、道すがら恙なく、そのゆふべ五時半と申すに、汽車は山ふかき田舍の驛につき申し候。そこより、人力をやとひていそぎ候。二とせぶりにて踏む村里の土もいとなつかしう存じそろ、汽車の窓にてのおわかれ際に、たまはりし御言の葉、くりかへし思ひ出でまゐらすう

ち、はやくも俥は叔父の家につき候、さいはひに疲れもうすく、宵の熱も三十六度八分にて、いつもより却つて低き程にござさうろふ。これもみな、ひとへに先生のお加護と、なつかしの都の空遍かに拜みまゐらせ候へども、これにて、愈々先生のお顏見るたより絕えたりと思へば、又一しきりは、泪の雨にそろ。すれ違ふ汽車にて、いつそ引きかへさばやと思ひしは幾度か。横濱にて、國府津にて、箱根の山中にて——あゝ

すぐにも安着のおしらせしめし參らすべしとは存じ候へ共、半日汽車に搖られ候懸念も有之、叔父、叔母の親切なる世話にてその夜ははやく、床につき申しそろ。いつも叔父の書見などする日當りよき二階の一間を、わたくしの閨にあてがひ、心おきなく養生致すやう、申されそろ

何分、人にきらはるゝやまひのことに候へば、この恩、夢にもおろそかにはならず候。山村はすでに秋ふかく、萬木凋落の氣せまつて、窓に近き蟲の聲風の音にも、そゞろに心はいたみ候。たとへ病む身にても、都はいとたのしきものにそろ。田舍はさびし、田舍はかなし、田舍は淋し、田舍は悲しと、吟むうち、泪は頰をつたうて、髮をぬらし候。いつぞや神田の病院にて、はげしき咳出で候折、この髮のあたり先生のいともやさしく撫でさすりたまはりしこと、にはかに、甦りそろ。あれが、あとにもさきにも、たつた一度のおん情にてござ候

あとはいつも知らん顏——わたくしまで、心にもなく、いつも色を内に含みまゐらせしは、今に思

へばよくよく、不運の女にこそ。とかく物思ふうち、夜なかうち過ぎ申し候。せつかくの早寢、養生、これでは何にもなり不申……

養生叶はずば、お目もじもなるまじく、ふたゝび都の春にも、めぐりあふことはあらじ

わかれ來し方の、切なく戀しきを、たゞ一思ひに押ししづめて、早く夢路に入らばやと、目をつむる……

ゆふべの眠り淺ければにや、けさはつむりいと痛かり。されどさすがは山の秋、紺靑に澄みわたれる朝空に、大きく赤き柿の實の垂れたる窓邊あけはなちたるときは、思はずも、恍惚として、しばしいたつきの身の、むなしく故鄕に歸りまゐり候こと、打ち忘れて居りそろ

はやくも叔母上の、臺所にて朝炊きの用意と見え候に、いそぎ衣がへ、階下に下り立ち候を、まだまだ、寢ていらつしやい、下りて來てはいけませんよ、と押しとゞめられ、これも養生の一つと、又、閨に引きもどり、朝げまでのうちにと、先づ先生への文かきはじめ候ことにてそろ

やがてこの山に雪ふり、雪とけて春となるまで、この二階にひとり、病を養ふほかはあるまじと、心にさだめ、つれづれには、せめて、古き「女學雜誌」なる先生の評論を友とすべし。新しきは、とても見るよすがもなきやうにて、たゞ心細しとも心ぼそし、せつかく、教へ導かれし思想も文藝も、この山にては、やがて萬象の枯るゝ如く、色も消えうせ香も朽ちはてなんず

先生にはきつと、それも亦善しと仰せあるべし。いたつき早う癒ゆるものなれば、或はよけれ。しよせんは不治のものにてあらば、化して山娘とならんも何するものぞ

すでにバイロンにはなれ、シェキスピアを讀まずしてあること、半歲にすぎ候　これより又半歲のいかに荒凉として、長からずや。いかに荒漠としてかなしからずや……

若し、いかなる折にか、わたくしのこと思ひ出で候て、一ふでにても御文賜はらば、せめての命ともなるべしと存じそろ、そのほかの榮耀しんぞ望み不申候

なにぶんにも、時候不順の折から、お油斷なきやう御自愛いのり上げまゐらせそろ　おん奥さま、お孃さまへも、御きげんよろしく、おん伺ひ申し上げまゐらせ度く、先は安着のおしらせ旁々、むねのうち、あら〳〵申入候　もはや何と見そなはせ給ふとも、決して恥ならず候

かしこ

富井まつ子

そんな手紙が來た。胸を疾んで、向學を中道にはゞまれ、悲しく山に療養の身となつた女の氣持が、測々と透谷の心にせまらずにはゐなかつた。

一ふでの文でも貰へば、それがせめての命と、悲しいことをいつてよこした女に、透谷は、とるも

のもとりあへず返事を書いた。しかし、思ひが激しく、一杯なときといふものは、筆がうまく廻らないものである。彼は、今日に限つて、どう書いても、眞實がそこに表れてこないのが、もどかしかつた。どうすれば、この眞情が、そつくり打出せるのであらうか。

いつそ、明日にでも、富井の住む山の家まで出掛けていつて見ようか、とまで思ふほどであつた。

「貴箋忝拜見候……」

と書きかけて破つた紙が、何枚も風にとんで、部屋の隅にかたよせられてゐた。やうやく書上げたのは、もう日の落ちる頃であつた。

彼は兵兒帶をしめなほして、近くの郵便局まで、それを出しにいつた。

歸つて來ても、まだ、その事が氣になつてゐて、たのまれてゐる女學雜誌の原稿の方に向ふ氣にはなれなかつた。

彼は書き損ひの手紙を、片づけながら、遠く山の女を想つた。

印象的な、細い白い手が、目の前にまたうかび出た。彼は、その思ひ出にふけりながら、「秋窓雜記」の一節を書き足した。

「病みて他郷にある人の身の上を、氣づかふは、人も我もかはらじ。左れど我は常に健全なる人のたまたま床に臥すを祝せんとはするなり。

病なき人の、道に入ることの難きは、富めるものの、道に入り難きに等しからむ。世には、體健かなるがために、心健かならざるもの多ければ、常に健かなるものの、十日二十日、病床に臥すは、さまで恨むべき事にあらず。

況して、この秋の物色に對して、命運を學ぶに、こよなき便あるをや。

斯く我は、眞意を以て、微恙ある友に書き遣れり――と。

山からは、又、すぐ、返事があつた。しかしそれは、前文より、更に、つきつめた女心の悲しい訴へであつた。二日目の朝には、もう柿の實がふり落されたといふところの描寫もかなしかつた。山は一日ごとに、氣候の變り目を際立たしてゐるにちがひなかつた。富井がその淋しさに、身を顫はしてゐるのが、目に見えるやうだつた。富井はあきらかに、透谷が微恙あつかひしてゐるのを、半分はなぐさめにしながら、半分は不服だつた。もつと、もつと、大げさに同情してくれないのが、物足りない思ひだつた。

三

それにしても、富井がゐなくなつたので、フレンドの方は、いよいよ氣のりのしないものになつて

來た。それに引きかへ、明治女學校の方は、次第に、世評も高かつたし、講師達のいろんな噂も、文壇をにぎはしてゐた。

或日、フレンドの教頭から、どうも北村先生は、この頃お休みが多いやうだが、もう少し、勤勉にやつて頂き度い、といふやうな話があつた。

「休んだのは、たしかに私が惡かつたです。しかし、必ず次の時間にはそれをとりかへして、學生は私の誠意を疑つてはゐないと思ひます。お話はよくわかりましたから、家へかへつて考へて、善處しませう」

さういつて、彼は家へ歸つて來た。それから、美那子とも相談して、辭表を書いた。ついでに、又、山の富井にも、手紙を出して、「自分は今日限り、フレンドを罷めた。あなたのゐないフレンドは、僕にはもう、用はないのだ」

と書いた。それでも、いよいよ投函するとき、その文句が、富井のために善き慰めにならず、惡い迷ひになつてはいけないと、躊躇したが、思ひ切つて、ポストに落した。

歸りみちで、芭蕉の葉が、籬を蓋ふ微かな住居から、しづかに琵琶の音の洩れるのを聞いた。何氣なくのぞいて見ると、年老いた盲女が、獨り琵琶を彈じてゐるのであつた。その姿は、凜乎として嚴しく、律調は甚だ端正と聞えた。彼も亦襟を正して、しばしその音に聞き惚れた。

「今日はいいものを聞いて來た。紅葉館の三味線ばかりでは、耳が腐るからね」

と、彼は妻に、その盲女の話をした。

「さういへば、さつき、民友社から、手紙が來てゐましたよ」

と美那子はいつた。

「民友社？」

と、彼も一寸、意表をつかれた形で、問ひかへした。

美那子は戸棚の上から、白い封筒をもつて來た。裏をかへして見ると、美那子のいふ通り、それは民友社からの書狀だつた。さつそく、あけて見ると、「國民の友」からの原稿註文の手紙だつた。

「何ていつて來たんですの」

と、美那子もそれを覗くやうにする。

「國民の友からの依頼だ。しかし、まだ、僕の原稿がこの雜誌にあらはれる時機かどうか、僕は自信がないよ」

と、透谷はそれをくりかへして讀みながら謙遜していつた。

「そんなことはないでせう」

「さうかねェ。しかしとにかく、頼んでくれた好意は、感謝しなくてはならん。德富さんに逢ひに行

つて見るか」

「まだお逢ひになつたことないんですか」

「うん。まだ、ないのさ」

――そのころ「國民の友」といふ雜誌は、發行部數のうへで、一番盛んな賣行を示してゐた。主筆德富猪一郎の思想の、その時代に於ける革新的な色彩は、この雜誌を、靑年たちの間にもつとも先覺的なものに感じさせるに十分だつた。巖本善治の「女學雜誌」は、これに對抗する意味で、發行されてゐたが、これは何といつても婦人向きであつて、「國民の友」の敵ではなかつた。加之もこれまでの透谷の論調は、やゝもすれば、「國民の友」を向うに廻して物をいつてゐた。そのいはゞ論敵から註文が來たことは、ともかく意外としなければならなかつた。

藤村も、前記「後の新片町より」のなかで、「明治年代の文學を回顧すると、民友社といふものは、大なる貢獻をした事は、事實であるし、蘆花、獨步、湖處子の諸君の仕事も、民友社といふ事からは、離しては考へられない。

遠くから望むと一群の林のやうな觀をなしてゐたが、民友社にも種々異つた意見をもつた人が混つてゐて、透谷君の激しい論戰は、主に民友社の德富蘇峯氏、山路愛山などを對手取つたものであつた。でも、愛山氏などは、殆ど正反對に立つた論敵ではあつたが、一面北村君とは仲のいゝ友達であつた。

それから喧嘩をして却つて對手に知られた形で、北村君は、「國民の友」や「國民新聞」なにかへも、寄稿するやうになつた」と、書いてゐる。

芝公園第二十號地に於ける透谷の仕事は、「三日幻境」(上下)「心機妙變を論ず」「秋窓雜記」「他界に對する觀念」「處女の純潔を論ず」「鬼心非鬼心」等であつた。このうち「三日幻境」は、その昔、大矢蒼海と交つた時代の思ひ出の一幻境を叙したもので、「政治か文學か」の間に彷徨した當時の透谷を偲ぶによき資料である。蒼海と二人で、この幻境に身をかくしてゐた頃、山に入つて炭燒や薪木樵の手傳ひをしたり、わざと破れ衣をつけて身をやつし、炭賣車の後から車を押して、市に出て、炭賣をした話なども出てゐる。

「三日幻境」に次いでは、袈裟を斬つたことで、心機を開發した文覺を論じた「心機妙變を論ず」といふ評論は、もつとも注目されていい好文章であつた。

「文覺が袈裟を害したるは、實に彼の心機を開發したる者たり。蓮花蕾を破りて玉女泥中に現はれたるは眞に此晨なり。至善の至惡を仆したるもこの朝なり——凡そ傲逸彼の如きをして、遂に劍槍に杖かずして、經典に倚らしめたるもの、抑もいかなる鬼物の神力ならむ。他ならず。この一瞬時の發露刀なり。心機妙變なり。剛健彼の如く、執着彼の如く、驕慢彼の如きものをして、志の壯偉なる事は、

全盛の平家を倒して、孤島飄落の人を起す程にありて、而して胸中一物の希ふところなきもの、抑も奈何の故ある。曰く彼時の發心なり、彼時の心機妙變なり。彼時に得たるものが、ふかく胸奥に印して抹除すること能はざればなり。冷淡にして熱血ある好漢、遂に半悟の人とならず、能く自家の弱性を暴露し、罪業を懺悔せり」

といふやうな文章が、たゞに流暢の故に人々に愛されたばかりでなく、その思想にも見るべき新らしさがあつたことは、一作毎に彼の聲價を大ならしめた所以であつた。

これについでは「他界に對する觀念」といふ論文がある。十月六日の脫稿で、「國民の友」の註文に應じたものだ。

この論文は、前作にくらべると、やゝ生硬の感じがあるのを否めない。「三日幻境」や「心機妙變」は、いづれも「女學雜誌」に發表したものであるから、どこかのんびりした筆のおちつきが見えてゐる。「國民の友」は何といつても、他流試合であつたから、透谷も思はず、堅くなつてしまつたのであらう。その頃の「國民の友」は、表紙にも、政治社會經濟の雜誌であることを標榜してゐて、社會的反響は大きかつたが、文學の方は手薄だつた。その代り新年の特別附錄には、小說の特輯を行ひ、一流作家の力作を揃へて、大いに文壇登龍門としての權威を示してゐた。

——日記によると、透谷が蘇峯に會つたのは、明治二十五年九月二十日といふことになつてゐる。

このことは、のちに、蘇峯自らが次のやうに語つてゐることで、符節を合する。

「記者は自ら君の友人たる可き資格あるや否やを疑ふ。君の日記を閲すれば、記者が君と始めて相見たるは、明治二十五年九月にして、而して君は二十七年五月を以て、既に他界に旅行したり。この僅僅たる歳月中、互ひに相見るの期甚だ多からず。

而して君が思想の領土の、三分の二は余に於ては未觸の地にして、ただに其の同情の缺乏したるのみならず、亦、君を文士として評値すべき理解さへ不足なるが如し。然も君の美質は、記者の不敏を以てするも、尙之を愛好するを禁ずる能はざるものあり。君は自ら『生の神經の過敏なる惡質は、之を母より受け、傲慢不羈の性は之を父よりもらひたり』と語りたれども、君は其の以上に、尙一種純粹なる美質の致したることを自覺したるや否や。余は嘗て、より多く君を知れる愛山君に語りて曰く、透谷子はあまりに純粹なり。是れ自ら消磨したる所以にあらざるなき乎。世に通用せしめんには、金貨さへも、他の鑛質を加味するにあらずやと。若しそれ君の不幸は、君の缺點よりも、寧ろ君の美質より來たりと知らば、如何に鐵石の心腸を以て自から居る男兒も、焉んぞ君のために、一掬の哀涙を迸しり出さずして、止まん哉」

と。よく透谷の面目を評したる好箇の一文であるが、これは明治三十五年十月五日「國民新聞」三八五一號にかゝげたる蘇峯の「透谷全集を讀む」の中から、その一部を抜いたものである。

この同日、透谷は蘇峯に初會した餘勢をかつて、星野天知の家もおとづれた。天知の思ひ出談しによると、この日透谷は、薩摩絣りの單衣に、兵兒帶、ステッキ、ヘルメットの白帽といふいでたちであつたといふ。

天知はその頃、日本橋の本町四丁目に住んでゐた。昔風の土藏造りの、五間間口の老舗で、店員が十五六人ゐて、それがまるで、花魁の張見世のやうに、格子先にずらりと並んでゐる砂糖問屋が、その天知の店であつた。

「天知和尚はゐますか」

と、透谷は店先で大聲を發したから、店員たちは喫驚した。天知が出て見ると、透谷はすぐ、便所へ入つてゐて、帽子もとらず、そこから出て來た。

「いや。今日は。透谷です。文覺に逢ひに來ました」

さういつて、店員たちを尻目に、ずいと座敷へ通つた。天知が「女學雜誌」に書いた「文覺上人」は、透谷の快讀するところであり、それを機縁に、自分も「心機妙變を論ず」を書いたあとでもあつた。天知も彼に負けない氣鋭の勇士であつたから、之を快く迎へて、談論風發した。透谷がその頃しきりに愛讀した陶淵明「乞食」の詩を、まるで、地で行つたやうなものであつた。

やがて、夕飯が出た。それがすんでも二人の快談高論は止むときがなかつた。とう〳〵、泊ることになつてしまつた。天知の部屋に蚊帳をつらせ床をしき、共に寢についたが、亢奮した二人は眠られる筈もない。

「すまんが、洗面器をかしてくれ、頭へ血がのぼつて、カツカツしてゐるのだ」

と、透谷はたまらなくなつて云ふ。蚊帳の中に、水の入つた洗面器がはこばれた。手拭を水にひたして、彼は腦をひやしながら、話をつゞけた。煙草のけむりも、蚊帳の中に濛々となつた。

天下の文豪は、ことごとく、二人の俎上にのぼされた。殊に、硯友社、民友社に據る當代文士の話になると、激しい火花が飛び散つた。二人はしまひには起上つて、論じ合つた。

もう深更であつたから、店の者に知れる心配もなかつた。そのうちに、東が白む頃ともなつた。やうやく疲れて眠つた二人は、翌日は、高く日ののぼる頃に起きて、朝餐をすまし、再會を約して透谷が去つたのは、もう正午近かつた。

「まあ、どうなすつたのゆうべは？」

と、家では妻の美那子が、心配して待つてゐた。

「星野天知にはじめて逢つて、夢中で話しこんでしまつたんだ。別に變つたこともなかつたか。英子も無事だらうね」

と、透谷はすぐ、晝寢してゐる英子の顏を覗きにいつた。
「德富君にも逢つて來たよ。一應は辭退したんだが、たつて書かんかといはれたので、書くと返事をして來たよ」
「まあ、それはよござんしたね」
と、妻も機嫌を直してゐた。

四

十一月三日、天長の佳節に、彼は麻布簞笥町四番地に移轉した。宣教師コーサンドから山羊を購つて、之を飼ふことにしたのも、この簞笥町へ引越した當座であつた。しかし、こゝはすぐいやになつて、同月中に、同區霞町二二に轉宅した。山羊はそのまゝ持つていつた。
民友社からは、第二回目の註文が來た。前に述べた新年特別附錄に、小說を寄稿せよ、といふのである。この附錄は、かつて美妙の「胡蝶」などものつて、文壇の檜舞臺ともいふべきであつたので、透谷も、こんどこそは、會心作をひつさげて、眞價を世に問はなければならないと、覺悟をきめた。
或日、こんどは天知が透谷をたづねて來た。すでに、藤村、秋骨とは交りがある透谷であり、つゞいて、藤村と天知がしげしげと往復をはじめ、これに同じ日本橋區伊勢町の、平田禿木も仲間に加は

つた。かうして、少しづつ、「文學界」同人の結成の氣運が、かもされて來つゝあつたのである。藤村と天知には、その頃、共通した胸のなやみが燃えさかつてゐた。一人はのちに天知の妻となるおまんであり、今一人は、藤村に失戀の苦盃をなめさせた佐藤輔子であつた。藤村の「春」に登場する勝子といふ女性が、その人であることはすでに有名である。しかし、戀の勝利者である天知にしても、その頃は、まだ、おまんさんから、二言目には、

「先生としては尊敬します。しかし、どうしても、自分のラヴァとして考へることは出來ません」

などと、あつさりきめつけられてゐたのであつた。

天知は「女學雜誌」の妹雜誌のやうな、「女學生」といふのを、自分が主任で發行してゐた。それは、よく時好に投じたので、二十五年の夏には號外まで出すといふ繁昌ぶりであつた。執筆者も、無名子（藤村）脫蟬子（透谷）夕軒（天知弟男三郞）禿木などと顏ぶれが揃つてゐた。そのうちに、「女學雜誌」の方は、透谷や藤村の書くものが多くなるに從つて文學的色彩がつよくなり、女學生相手のものとしては、其の思想內容も六ケしいといふ訴へがあつたので、巖本善治も、どうやらこの若い文人たちを、もてあまさなければならぬやうな狀態になつてゐた。

そこで彼は、「女學雜誌」を、赤表紙と白表紙にわけ、それを交替に發行することにして、赤表紙は彼自ら任に當り、主として婦人向き家庭向きの雜誌とし、白表紙の方は天知に編輯を一任して、文學

的な色彩をつよく出してゆくといふことにした。透谷の「我牢獄」は、この白表紙、甲の卷の「女學雜誌」に出た最初のものである。これが二十五年六月、同誌三二〇號の時である。以後「女學雜誌」は、赤白にわかれて發行されたが、翌二十六年四月には、白表紙の方は改題して「評論」と稱するに至つた。

すなはち、「文學界」なる文藝雜誌の誕生は、實にこの「女學生」「女學雜誌」などを母胎として、その執筆者グループの中に、段々に萠芽をしめしはじめてゐたのである。

或日のこと、天知から、相談したいことがあるので、といふ呼出し狀がとゞいた。透谷は、「國民之友」に書く約束の小說の腹案になやみつゞけた頭を休めるのには、恰度いい氣ばらしだと思つて、家を出た。秋の日ざしは、弱く赤く、ふかい木立のかげに、黑い幌をかけた車のゆく景色も何となく淋しいものに見えた。

――例の格子戶のある砂糖問屋の奧の間の茶室風の部屋には、すでに、藤村や禿木があつまつてゐた。秋骨や新顏の孤蝶もゐた。

「さあ、これで揃つた」

と、天知は、透谷を正座に招いた。皆が一わたり挨拶する間を、天知の妹のお亮さんが茶をはこんで來たりした。弟の夕軒は、まだ高等學校の學生だつたが、將來は大學の工科へ入らうといふ畑ちが

ひだつた。それでも、兄の天知をたすけて、雜誌のことでは、いろ〳〵目立たない、緣の下の力持ちをしてくれてゐるのだつた。

「それでは申し上げる」

と、天知が座をあらためて、かしこまつた。

「實は、この六月から、御存じの如く、「女學雜誌」の白表紙を引きうけてをりましたが、……」

そんな調子でやり出した。話といふのは、つまり、「女學生」や「白表紙」程度では、すでに、激しい時のながれからいへば、もう時代おくれになつた。こゝに集つたやうな若い執筆グループの生長は、日に新たに、日に強く、すゝみつゝある。いつまでも舊套を追つて、女學生相手の作文を綴つてゐられる時ではない。新らしき酒は新らしき器に盛られなければならぬ。それにはどうしても、新雜誌が必要である。この氣運に乘じて、斷然われわれの雜誌をもたうではないか、といふのが、彼の逞しい提案であつたのだ。

「それは贊成だ」

と、最先きに叫んだのは、禿木だつた。

「で、「女學生」の方はどうするんです」

と、藤村が訊ねた。

「あれも白表紙も、兩方共やめるといいんだが、白表紙の方は、もともとが巖本君のものだから、これはあの人に返せばいいだらう。「女學生」の方はこの年末で三十號だから、それで廢刊さ」

と天知が答へた。

「そりやアまあ、我々の書くものが、「女學雜誌」では、六ケしすぎて困つてゐることは、明らかなんだから――」

と、秋骨もいつた。

「それでどうでせう。皆さんがやるとなれば、僕も、今までの行がかりは全部清算して、新らしい雜誌を專一に、かゝつていくつもりです。幸ひ、編輯の方は、これまでの經驗と弟の助力で、相當のものにはしていけるつもりだし――」

と、天知は顏を見まはすやうにしていふ。

「北村君はどうだね」

さつきから、默つてゐるので、禿木は促すやうにいつた。

「贊成にきまつてゐるよ。何といつても自分の雜誌をもつのは、非常なる强味さ」

と透谷は答へた。

「さうか。それぢやアよし。來春一月を期して創刊といふことにしよう」

「一月か。なら、すぐにも原稿をあつめなければならんぞ」

「無論だ」

一座は、それで急に活氣づいて、皆がしやべり出した。しばらくして、急に透谷が大きな聲でいつた。

「しかし、星野君。僕は、ごらんの通り、性格が尖鋭だし、もし同人と爭ふやうなことが起る時は、雜誌の前途を危くすることがあつてはならぬから、僕だけは客員といふことにならう」

「何だ、客員だつて。そいつはまづいよ」

と、藤村が反對した。

「いや、まづくない。僕は危險だよ、同席は避けた方がいいのだ」

と、透谷が答へた。この自家爆彈動議で、一座は又甲論乙駁したが、天知も、透谷の性格を知るものとして、或は、彼の希望通り客員待遇といふこともわるくないと思ひ出した。

「成程、それもよからう。ぢやア、北村君は客員として、他の人々は、同人たることに異存ないか」

と、天知は又、提議をし直した。皆は、異存のない旨を答へた。

「では、さう決める。しかし、透谷君も、書くだけは、必ず書いて貰はなければ困るぜ」

「そりやいふまでもない。同人以上、書くよ。書きたいことは、うんとある」

と、彼は昂然といつた。

「何といふ名前にするか」

と、禿木が天知にきいた。

「まだ、名前は出來てゐない。一つ、みんなにこの次までに考へて來て貰はう」

「やはり、われわれの氣持ちにピツタリした名前でないといかんね」

と、秋骨が考へ深さうにいつた。話がきまつたので、あとは又、めいめい勝手な文學熱の昂揚であつた。やはり、何といつても一座の中心は、透谷と藤村であり、殊に透谷の氣焔は虹の如きものがあつてみんなを傾聽させた。

それから、しばらくして、透谷は藤村の訪問をうけた。新雜誌發行の氣運は、やうやく爛熟してゐた。さうした、何がなしあわたゞしい日、突如、藤村の旅立ちが、告白されたのである。

「旅へ――いつまで?」

と透谷がおどろいて聞いた。

「いつかへるとも、あてのない旅です」

藤村はうつむいて答へる。

ら、旅先きから送ります。却つて旅の方が、面白いものが書けるかもしれない。今の生活か
らは、もう何もうまれては來ないでせう」
「雜誌の方はどうする？」
「書けたら、旅先きから送ります。却つて旅の方が、面白いものが書けるかもしれない。今の生活か
らは、もう何もうまれては來ないでせう」
藤村が低い聲で懺悔するところによれば、彼は、明治女學校の教へ子佐藤輔子に、なすべからざる
思ひをかけて、その惱みを忘れるために、あてどない旅に出る氣になつたのだと、——。彼は急に思
ひ立つと、一刻の猶豫もならぬ程氣がせいた。彼はそれをすぐ、巖本校長の許に申し出て、その足で、
先づ芝の透谷を訪れたのである。
透谷にも、思ひ當る節はいくつかあつた。現に其の日も、山の富井から、又、長々と青い情熱の燃
えるやうな、手紙がとどいたばかりであつた。それを思ふと、この年若い友の、思ひつめた姿には、
心からの同情を禁じ得ない——。
「それも止むを得ないでせう。行き給へ、旅へ、旅へ。君の原稿のことは、僕がたしかに引きうける」
透谷はさういつて、友の手をとつた。友の目にも泪が光つた。
「それでね、北村君。旅へ出るとなると學校をやめなければならん。實は今、それも校長に申し出て、
諒解を得たのですが、そのついでにね、もし、君の都合さへよければ、僕の代りといつては失禮だが、
その時間を引きうけて貰へないかしら——」

と、藤村はオヅオヅした口調でいつた。
「さうか」
と、透谷はしばらく考へてから、
「いいだらう。前から、あすこは行つて見たいと思つてゐた」
「ぢやア、引きうけてくれるかい。そいつは有りがたう」
「しかし、僕が引きうけても、巖本君が何といふか」
「それも實は、早手廻しに、承諾を求めて來てある」
「何だ。馬鹿に要領がいいんだね」
「いや、學校の方は、すぐ、後釜をきめて貰ふんだから、大よろこびさ。君のことでは向うでも機會を作らうと待つてたところだつたんだから」
「それならいいが」
「僕は又、雜誌の同人までことわる君のことだら、僕の後釜なんか嫌だつていはれやしないかと、それを心配して來たんだ」
「そんなことはない。僕は決してそんなケチなことはいはないよ。大丈夫。よろこんで君のあとを引きうけよう」

――透谷がさういつてくれたので、藤村もやつと安心した。「これで僕は明日にでも立てる」

藤村は、しかし遠く傷心の旅路を想ふかのやうに、目をふせた。

五

――花卷の生れで、いかにも雪國の人らしく、色が白くて頰が櫻色をして、ぱつちりしたうるほひのある眼が、當時の世間の好みとしては、やゝ大きすぎる位、その眼がひとしほ、その人の印象を深くしました。背もすらりとして、心立もその通り、富も理解もある家庭に、のびのびとして育つた人の、素直な優しい性格……。

と、相馬黑光さんは、當時の佐藤輔子の印象に就いて、語つてゐる。

透谷も、藤村の後釜をひきうけて、はじめて、明治女學校の專任講師となつて教壇に立つた時、やはり、自分の若い友が、その人のために職を捨てゝ彷徨の旅に出なければならなかつたといふ相手が、一體、どんな美しい人なのかと、人並みの好奇心をそそられずにはゐられなかつた。

講義をすますと、例の教員室兼應接間で秋骨がしきりにバイロンの詩の下調べをしきりにやつてゐる傍によつて、

「ねえ、戸川君、島崎君の問題の人といふのは、どこにゐるのだね」

と、質問した。

「何だ。君はまだ知らないの」

「だつて君、あのクラスは今日、はじめて、講義したばかりだし、至つてその方面は、寡聞だからね」

「窓際の前から二番目に坐つてゐる子だよ。色の白い、眼のぱつちりした、雪國の女の特徴を具へてゐる美人だ。こんど名をさして、テキストを讀ましてごらんなさい。とても、發音が美しいのだ。島崎君も、あのエロキューションが耳について、眠られない、と、いつも告白してゐました」

――この佐藤輔子といふ問題の人は、北海道大學の總長、佐藤昌介氏の令妹であつた。彼女ばかりでなく、當時明治女學校の才媛たちのなかには、何故か東北の人達が多かつた。巖本善治の妻、若松賤子も、會津藩士の長女であつたし、のちに星野天知の妻になつた松井お萬も盛岡の侍の娘であつた。仙臺のミッションスクール、宮城女學校のストライキ組のリーダーたちも、そこを退學させられると、相前後して上京して、大てい、明治女學校へ入つてしまつてゐた。そんな關係から、東北の女性が多かつたのである。

宮城女學校のストライキといふのは、その頃ミッションスクールの勃興期にあつて、やゝもすれば、日本の傳統が無視され、アメリカ式教育の盲目的な追從であるのに反對した、各クラスの秀才たちが、結束して校長ミス・ブルボーに英文で建白書を書いて提出したのに始まる。其の內容は、本校の教育

方針が、たとへアメリカの資金によるものではあつても從來の如く、あまりにもアメリカ萬能である べきでなく、日本の傳統と精神に立脚して、もつと日本的な教育をして貰ひたいといふ要望であつた。

このとき英文を書いたのが、小平小雪といふ生徒であり、これに共鳴して、ストライキの主唱者に なつたのが、齋藤お冬、石川梅代、町田お辰、尾花梅代などであつた。校長ミス・ブルボーは、激怒 してこの五名を退學處分に附した。生徒一同を講堂にあつめて、ミス・ブルボーは、小雪以下の罪狀 を說明し、彼女らは全く、宮城女學校と調和することの出來ない要求を提げて、純眞なる生徒を徒ら に不安と動搖に導いたデマゴーグであると强調し、五人の名を呼び上げて、全生徒の前に立たせ、最 も憎むべき輕擧盲動の徒はお前達だと、宣言した。そして遂に昂奮を抑へきれず、ブルボーは、大聲 を發して、

「Go away! Go away!」

と、左手の戶口を指して絕叫した。

かうして否應なしに退學させられた五人組のうち、お冬お辰小雪の三人は、多年憧憬の明治女學校 を目ざして、すぐ上京した。その後宮城女學校では、この先輩をしたつて、學校をやめるもの、上京 して明治女學校に轉校するものが續出したといふ。

——佐藤輔子の話のついでに、透谷は、秋骨から宮城女學校に於けるストライキ事件の話をはじめ

て聞かされて、その若い生徒達の情熱にまじりつけのない美しいものを感じさせられた。

「實にいい話だなア。まつたく、宣教師の奴らの、勝手氣儘の魂膽には、僕も手を燒いてきたんだ。フレンドだつてさうだよ。僕は、あすこを罷めたのは、ほんとによかつたと思つてゐる。しかし、よく、生徒の立場にゐてそれに抵抗してくれたね、英文で日本教育論の建白書を書いたのは愉快だが、あつさり、退校されて、揃つて、明治女學校へやつて來るところも痛快だね。さういふ生きのいい生徒がゐると思ふと、われわれも教へ甲斐があるといふもんだ」

と、透谷はたのもしい氣がした。

「まあ、一度、齋藤か小平に、詳しい話を聞いて見給へ。殊に齋藤なんか、頭腦は明晳だし、態度は毅然としてゐるし、却つて、ミス・ブルボーをカンカンに感情的にさせといて、彼らは甚だ冷靜な行動をとつて、生徒を指導して來たらしい。時代の流れは、あゝいふ新らしい女のタイプを生み出すんだね。僕らも、うかうかはしてゐられないよ」

秋骨は、そんな風にいつた。

フレンドの富井まつ子なども、女ながら、好學の精神に燃えてゐて、眞理の追求にかける誠實さには見るべきものがあると思つたが、宮城女學校の連中のやうな、積極的な行動性には缺けてゐた。

次の日、彼は教室で、齋藤冬の名を呼んだ。

「はい」

と答へて、最前列の右側に座席をもつた一人の生徒が立上つた。

「あなたは、もと、宮城女學校にゐた人ですか」

「はい、さうです」

「あなたは、何故、その學校に不滿だつたのか」と、透谷は威儀を更めて訊ねた。

「そこは、何から何まで、アメリカ式に教育されて居りました。校長先生は、無論、アメリカ人ですし、その他、二三のアメリカ婦人が、主要學科を擔任してゐられました。私達は、アメリカの臭ひに、窒息しさうになつたのでございます」

と、冬は答へた。

「國語や國文學の授業はあつたのですか」

「それは、科目としてはありました。けれど、上級も、下級も同じ本を讀まされてゐるといふ狀態で、學校としては、その方が手數が省けて、都合がよかつたでせうが、學ぶ生徒の方からいへば、隨分妙なものでございました。」

それに段々、卒業近くなると、誰しも思ふのは、英語だけはとにかく進んでも、日本の女性として、必要な準備は、何一つ、出來てゐないのではないか。いくら、英語だけが達者になつても、日本を知

らぬ日本の女が出來てしまつては、大變なことになる――私達は、そんな風に考へずにはゐられなくなつたのでございます」
「學校當局は、その無理に氣がつかないでゐたのかね。日本人を、日本の傳統や氣風や、民族精神などから全く引きはなして教育することの、根本的な間ちがひを――」
「少なくとも日本人の先生方は、その矛盾に氣がついてゐられました。たとへば教頭の藤生金六先生は、小雪さんの建白書に對して『皆さんの希望が容れられるやうにミス・ブルボーに話してやる』と、お引きうけになつたこともあります。しかし、いくら待つても、それは實現されませんでした。龜山先生なども、アメリカ側と生徒の間に介在して、いろいろ面倒を見て下さる氣持ちはあつても、やはり一つとして、それが徹底いたしません。その他、小此木先生なども生徒間の人望もあり、内々私達五人の意圖に贊成してゐられたのですが、やはり、意志が通りません。
何といつても、あの學校の首腦部はアメリカ人であり、日本の先生方は、手の出しやうがなく、恐らく、發言權さへ、持つてゐられたかどうか、疑はしいのでございます」
「東北學院長の押川方義先生が、あなた方の尻押しをしたといふ風に、噂されてゐるが本當ですか」
「それに、たしかに、仙臺在住の宣教師達の逆宣傳でございます。私共はそれをはるかに聞き、押川先生に御迷惑をかけたことを、深くお詫びしなければならぬと考へて居ります」

「では、押川先生は、この事件とは、無關係だつたのだね」
「いいえ、全然、無關係ではありません。今も申上げました通り、校長先生と生徒の對立が、次第に尖鋭化して來た時、押川先生がそのことを聞かれて、大變に心配され、どうかして、五人の意志を思ひ止まらせようと、色々、なだめ諭して下さいましたが、私達は、これ〲ばかりはと、主張を守りつゞけ、とう〲、押川先生の御仲裁をおことわりしてしまつたのでございます。それをまるで、押川先生が暗躍でもされたやうに、皆がいひますのは、勿體ないことだと思つて居ります」
「ほかに、君達のために、迷惑のかゝつた人はないか」
「はい」
と齋藤はしばらく考へてから、
「さつき申上げました小此木先生も、犧牲者のお一人でゐらつしやいます。何か、私達と共謀したといふやうな誤解をうけられて、宮城女學校をおやめになつたと承つて居ります」
「さうか――」
透谷はそれで、事件のあらましがわかり、この人達に對する敬意を新たにする思ひがした。殊に齋藤冬に對しては、今日の答辯ぶりからいつても、頭腦のいい、度胸のある、正義感のつよい女性であることがはつきりわかつた。分析も鋭く雄辯家でもあつた。美那子にも、富井にもなかつた新らしい

性格の發見がそこにあり、教へ子といふよりは、寧ろ協力者の親しさが感じられるのであつた。
お冬たちの持つてゐる日本教育論に對しても、透谷は同感であつた。外國文學に接すれば接する程、日本の認識が大事であることは、このごろ、透谷のしきりに思ふ所であり、現に新雜誌の創刊號のために、富獄の精神を論ずる一種の日本論を起草しつゝある際でもあつた。
「僕は君達が、日本の婦人として、ミッションスクールの現狀に反省を促し、犧牲の行動をとつた思想に敬意を表する」
と、彼はお冬の答辯に、つよく結論をつけるやうな調子で云つた。
さすがに、頬を紅めて亢奮したお冬はそのとき着座した。そして、ジツと、透谷の顏を見つめた。
透谷はテキストをあけて、講義をはじめた。しかし、お冬の目は、いつまでも透谷の顏にそゝがれてゐた。

六

この齋藤冬のことについては、彼女の後輩であり、その指導によつて動かされた相馬黑光さんの語る處を聞くほかはない。黑光さんは次のやうに云つてゐる。
「お冬さんは、英語學者では知らぬ人もない、あの齋藤秀三郎さんの令妹で、お家は仙臺、伊達藩の

士族。恰度、私の父とお冬さんのお父さんとは、藩の同僚といふ關係でございました。

當時、齋藤家には二男二女あつて、いづれも秀才、長男の秀三郎さんはあの通りの立派なもの、次ぎがお冬さん、弟さんもなか〳〵すぐれてゐて、大いに前途を囑望されてゐましたが、惜しいことに、この人は熊本の高等學校在學中に、その地で病死しました。

秀三郎さんの語學の才はお父さんの代から既に根ざされたもので、明治といつても、まだほんとうにはじめの頃、仙臺で英語を知つてゐたのは、男では齋藤さん、女では私の叔母の星艶（のちに佐々木豐壽）この二人だけであつたといふことです。私が子供の頃にも、東京で勉强中の秀三郎さんから、お家へ來る手紙は、みんな英語で、それをお父さんが、辭書を引き引き讀んでをられるといふことを、よく聞いたものでございます。何だか不自由なやうな話ですが、如何にも語學の天才の生れる家らしいところがあり、お冬さんにも、たしかにこの血は通つてゐました。

天才的な秀三郎さんには、なか〳〵奇拔なところがあり、吉原通ひの結果、或る問題を起して、帝大を退學になつたのなどもその逸話の一つですが、これも當時の青年の一面を語るもので、今から見れば、放埒としか考へられない行ひも所謂浩然の氣を養ふといふところでしたか。

大學は退學になつても、實力をもつて、ぐん〳〵世にあらはれ、遂に大を成す。かういふ氣魄は、ちよつと今の世に見られぬもの、又、解されぬものであります。

お冬さんが、恐らく日本で最初の學校ストライキの主謀者として追放されたのも、事の性質こそ違へ、やはりこの兄の妹らしい激しさによるもので、明晰な頭腦、確固とした信念、そして何處かに自由人らしい毅然としたものがあつたことは、實に私の限に、鮮かな印象をのこして居ります」

と、齋藤冬について語る黑光さんの文章である。校長ミス・ブルボーに Go away! と叫ばれて、あくまで冷靜に、講堂を去つていつた冬たちの自信に滿ちた態度が、髣髴としてあらはれてくる。

黑光さんは、尙つゞけて曰く「お冬さんを表現するのに、最も適切な言葉は『指導者』——ほんとうに、お冬さんは、其頃、仙臺に於ける知識的な若い女性、向上心に燃える少女達の唯一の指導者でございました。

東北の神樣といはれた押川門下で、男子を代表するのが島貫さん。女性を代表するのが、お冬さんといふ有樣で、實に魅力のあつたものです。聲の美しい人で、日曜學校ではオルガンを彈き、讃美歌を教へてゐました。

さういふお冬さんが、明治女學校に入つたのは、實に花の苗が、土の淺い、養分のない、そして四方に限られた溫床から、廣い花壇に出されたやうなもので、忽ち、非常な發育をとげたことは、もう何を聞かないでも、私共にはよく想像されるのでありました」と。

黑光さんの明治女學校への通り、お冬の宮城女學校から堪能であつた英語の力は、明治女學校に轉ずるに及

方が本格的である。ミッションから明治女學校に入つたものは、誰でも、英語の力はすぐれてゐた。ミッションで得た語學の力を更に縱横にふるつて、新らしい收獲をするチャンスが、こゝには十分備へられ、お冬たちの希望しかし、こゝにはミッションにない別の分野がひらけてゐた。お冬たちも、ミッションの教育のんで、更に素晴らしい成績を示したのであつた。語學そのものとしては、無論、ミッションの教育の

方が本格的である。ミッションから明治女學校に入つたものは、誰でも、英語の力はすぐれてゐた。しかし、こゝにはミッションにない別の分野がひらけてゐた。お冬たちも、ミッションで得た語學の力を更に縱横にふるつて、新らしい收獲をするチャンスが、こゝには十分備へられ、お冬たちの希望し、憧憬したいろいろの夢に、手のとゞく思ひがするのだつた。

「宮城女學校では、語學としての英語の力はつきましたが、教科書に制限があつて、どんなに讀みたくても、せいぜい歴史的なものゝ範圍を出ないのでしたが、明治女學校の學問の仕様は、最初からさういふ埒を越えてゐて、實に豐潤な文藝の野が展けてゐました。

そして先生はみな二十代の若さで、清純で、嚴肅に人生を凝視するといふしつかりした人物が揃つてゐるのでしたから、教へるものと、教へられるものとが、ぴつたりしてゐて、その間に自から何を學ぶかといふ目標が定まる。學問と人との間に、些の間隙もないのでした。

ほんとうにこゝでは、一行の文字も空疎なものはなく、一つの言葉も心に遠いものはないといふ風で、これまでお冬さんの内部に閉ぢこめられてゐた文藝的な素質がぐん〳〵引出され、すると眞の持前ともいふ可き緊張で、行動一切が文藝的となり、さうしてお冬さんが最も傾倒したのが、北村透谷であつたのです」

――さう、黒光さんはいふ。特に黒光さんのレンズを通して、こゝまで、齋藤冬の人となりを說明して來たのは、實に透谷に傾倒した明治女學校の若い女性たちの中で、最も代表的な存在として、自他共にゆるしてゐたのが、この齋藤冬であつたからである。卽ち藤村に於ける佐藤輔子、透谷に於ける齋藤冬は、あきらかに一種のコントラストであつた　前者が抒情的な大きな限をもつた色白の美人で、しかし極く穩健な、尋常すぎる程尋常な女性たつたのに引きかへ、冬はどこまでも冴えた頭腦と理智に秀いでた婦人であつた。藤村と透谷の對比は、そのまゝその婦人たちの性格の上に、投影されてゐる感じであつた。

第八章

一

明治二十五年もやうやく終らうとしてゐる頃、透谷は三つの雜誌の註文を引きうけて、呻吟してゐた。一つは、前記した國民の友からの小說依賴であり、他の二つは、文學界と女學雜誌への評論である。その他まだ關係の切れない「平和」へも、いくつかのエッセイを書かなければならなかつた。やつと書き上げたのは、國民の友の小說だつた。しかし、讀みかへして見ると、どうも不滿である。題も二日程苦しんだ擧句「宿魂鏡」とつけた。

「どうも面白くない。破いてしまはうか」

彼は煩悶して、妻に訴へた。それから、藤村に手紙を書き、非常に不出來だから、やめようと思つたが、一旦引受けた以上、雜誌の方では、あてにして待つてゐるといふから、自分の名を汚さぬために、透谷の透の字を桃といふ字にかへて發表しようと思ふと書いて送つた。藤村も、「宿魂鏡」については、

「あの作は透谷君も得意の作では、無論なかつたと思ふが、でも私には、その病的な方面が窺はれるかと思ふ」

といつてゐる。病的といへば、この頃から、少しづゝ、透谷の健康には異常が起りつゝあつたのではなからうか。藤村が「後の新片町より」の中で、透谷を語つてゐる言葉にも、その頃から、透谷は、やゝもすれば、身體を横にしたがつたといふ。文學界の相談で、皆があつまつてゐる時でも、すぐ、ゴロリと、横になつたり、何か身體をさゝへるものが欲しいといふ様子をしたのは、あながち、透谷の習癖ばかりではなかつたのであらう。

同じ時、女學雜誌に發表した「罪と罰の殺人罪」といふ論文にも、さうした病的な感じが、匂つてゐるのを否めない。しかし、これらの脱稿後、勇を鼓して執筆した「富嶽の詩神を思ふ」といふ論文は、彼の多くの論文の中でも、力のこもつた佳作であつた。それが、文學界創刊號を飾つたことは、新雜誌の發足のために、どんなに大きい貢獻であつたかはいふまでもない。

これよりさき、新雜誌の創刊準備は、着々としてすゝめられたが、肝腎の原稿は、なか〳〵集つて來なかつた。

編輯責任者星野天知は、不安な氣持ちをまぬがれなかつた。藤村は、すでに飄々として、放浪の旅

に上り、透谷は、あくまで同人を肯じずして、客員、寄稿家たるの距離を以つてせんとする。僅かに相談相手は、平田禿木一人であつた。その禿木の原稿がなか〳〵進まない。

第一、まだ雜誌の名前もきまつてゐなかつた。仕方がないので、天知の一存ではあつたが、「女學雜誌の文學界」といふ長つたらしい題にして見た。そして近所の禿木のところに行つて、之を見せた。禿木も、

「好からう」

といふので、とりあへず、それにして、天知は出版屆を書いた。しかし、いざ、表紙の裝幀をする段になつて「女學雜誌」は小さい字で書き「文學界」の方を、大きい標題にした。しかし、これは同人間に評判がわるく、結局「女學雜誌」の肩書は、第三號から削除されて、爾來「文學界」の一枚看板となつたものである。印刷所は秀英社にたのんだ。そのうち禿木の『兼好法師』が締切月をすぎてやうやく屆いた。天知も考へる暇なく、一夜づくりで「阿佛尼」を書いて穴を埋めやつと月末に辛うじて第一號を出すことが出來た。以來、文學界は、三十日發行といふことになつた。創刊號は、四六倍判四十頁、初版千五百部忽ちに賣切れとなりすぐ再版一千部を出すと、また賣切れ、第三版はどうしようかといふことだつたが、これは手控へることにした。とにかく、編輯者としては大成功をかち得たわけだ。天知の「文學界雜誌顚末」といふ一文に、當時の狀況が、次のやうに回想されてゐる。

まて、編輯たる私は、斯う考へた。初め同人（天知、禿木、藤村、秋骨）共同の責任といふ相談で取極めたが、出費も印刷も販賣も編輯も、皆自分の負擔だから、先づ編輯の方針も豫め極めておかう。編輯人には素より撰擇の權はある。其には誰の文でも、努力と熱力のある文をなるべく巻頭に置かう。同人外のものでも、さうしよう。他から此の雜誌を見ると、誰が主幹だか見分けがつかないかも知れないが、其が平等で、生彩があつて好いと思つた。

其頃、各書店は、皆原稿料を拂ひ出してゐたが、同人たちは、はじめのうちは原稿料といつては受けてゐない。文學界も二月號までは女學雜誌社の營業で、私は會計の事は知らなかつたが、三號からは、私が出版することとなつて、出費一切あきらかとなつた。

原稿料は折々提供するばかりだが、隨分原稿は集つた。若い氣鋭の意氣で、掲載を仰望し入社を申込む人も多かつた。其頃、硯友社同人には、中々通人もゐて、相應に洒落者もゐるやうだつたが、こちらは極めて眞面目な、地味な熱血家の連中で、折々催す小宴でも、三四杯の猪口で陶然とする仲間で、せいぜい警句のやりとり位で、唄一つうたふ者もない無粹なものだつた。透谷は一度も來會しなかつたから知らないが、あとは皆、斯ういふ風であつた。

文學界を學校とすれば、學監は禿木、藤村が主座教師、透谷が囑託講師で、私が校長兼會計、夕軒が庶務といふ所だ」

といつてゐる通り、透谷の「文學界」に於ける地位は、決して、世評のやうな、華々しい頭領格ではなかつた。頭領はあくまで星野天知であり、透谷は客員であつた。しかし、客員にしろ、囑託にしろ、仕事の上では、斷然、透谷が一人役者であつた。創刊號の「富嶽の詩神を思ふ」以來、彼の一文學界」に發表した作品は、事實上「文學界」の表看板であつた。後世の人が見て「文學界」のリーダーは、透谷であつたかのやうに考へるのも無理はない。

しかし、實際は、星野天知の記す如く、透谷は、雜誌の編輯に關して、何の關心も示しては居らないのであつた。彼はあくまで、作家として、寄稿家として、活動したにとどまる。彼は、文學者が、孤獨に徹すれば徹する程、大衆の胸に通ずるといふ、逆說を確信してゐたのである。その意味で、彼は、硯友社同人の結成を輕薄才子の集りと罵り、文學界の小宴にも、めつたに顏を見せない氣六ケしやであつたのだ。作家の生命は、作品にある。編輯の權力や、結社のヘゲモニーや、交際の上手に、あるのでは決してないことを、彼は重々承知してゐた。しかし、それが、天知や禿木にとつて何となし、透谷一人が、お高くとまつてゐるやうに見え、雜誌の氣勢を揃へる上に、今一つ物足りない感じのするのを、否むことは出來なかつたと見える。

さうかといつて、今更、透谷を除くわけにもいかない。同人會には出席しなくても、透谷の書くものは、文學界同人の水準をはるかに拔いて、いつも嘖々たる好評を博するのであつて見れば、多少の

異端は我慢しても、やはり透谷を大事にしなければならない――少くも天知はさう觀念して、結局、自分は、緣の下の力持ちになるのだと、腹をきめてかゝつた。

このそれぞれの特徴を活かした同人間のコンビネーションが、つまりは「文學界」が、豫期以上の仕事をなし得た、最大原因であつたに違ひない。透谷も頑固だつたが、天知も、なみなみならぬ忍耐力があつたのであつた。

「方今、文學雜誌の類名あるもの少からず、而も文學の域、漠々として際みなく、徒に諸氏のみ勞せしむべからず、吾曹の任務尙盡さざるものあるを信ず。本社さきに發兌の雜誌を分ちて、白表赤表の二卷とし、一は益々政治社會時文と關係を厚ふし一は愈々實際の域に進みて家庭に友たらんことを期せり。而して今や學界の友に向つては、此「文學界」なる册子を發し、社員社友の斯道に志ある者、相集りて互に其の得た所、思ふ所を述べ、我好讀者と共に、幽味得も言ふ可からざる文界に逍遙し、併せて志篤く、便り少き人のために、好修養場となり、指導者となり、又人々が一場に會して、道を語り想を練り、文を研くのたよりとなり、以て他日の大成を待たんとするものなり。(以下略)」

以上は「文學界」創刊號に於ける「發行緖言」の一部である。又、その後に附記して、執筆者グル

ープを紹介し。

「〇本誌のために、特に力を盡さんとせらるる諸君、大略左の如し。

・若松賤子、三宅花圃、樋口一葉の諸名媛は、袂を連ねて、清婉優雅なる作に筆を染め、

・大和田建樹氏、井上通泰氏等は、釋義歌話等に力を盡され

・紫苑山人、古藤主庬等は、時々詩歌ドラマ等を吟じ

・其他、透谷子、天知子、棲月子、禿木子、女學子、又各筆硯を新たにし、時事文學評論批評、文學論說、史談、飜譯等に勉めんとす」

と、各執筆者の役割を、それぞれ闡明したものであつた。尙「文學界記傳」なる書の調査する處によればこれらのメンバーの、本名、ペンネーム、及、明治二十六年に於ける年齡等は次の如くである。

星野愼之輔（天知・天爲居士・蓮花坊・破蓮坊等）　三十二歲

平田喜一（禿木・鬱孤洞主・無名氏）　二十歲

戸川明三（秋骨・棲月。鷗水）　二十三歲

島崎春樹（藤村・古藤庵・無聲・藤生等）　二十二歲

戸川安宅（殘花）　三十八歲

馬場勝彌（孤蝶）　二十四歲

上田敏（柳村・あやめ）　十九歳
北村門太郎（透谷・脱蟬子・蟬羽・電影等）　二十六歳
大野豊太（洒竹）　二十一歳
星野男三郎（夕軒・夕影）　二十五歳
三宅龍子（花圃）　二十六歳
樋口夏子（一葉）　二十一歳

また、創刊號の主なる目次を揭ぐれば、

○琵琶法師（悲曲）　古藤庵
○吉田兼好　禿木
○阿佛尼　天知子
○文章の道　巖本善治
○富嶽の詩神を思ふ　北村透谷
○漫語　無聲

〇女家仙歌集
〇兼好法師家集
〇阿佛乳母の文」

等であつた。前記したる如く、初版千五百部は、すぐ羽が生えたやうに賣切れた。再版千部も、またゝくうちだつた。無論、明治女學校の若いファンたちも、先を爭つて之を買ひもとめた。——もう硯友社でもあるまい、紅葉露伴でもあるまい、江戸戲作文學でもあるまいと、模索してゐた新らしい時代の若い人達、それでゐて、古藤庵や脫蟬子が、「女學雜誌」のせまい天地に、跼蹐してゐるのを、何となく、物足りず思つてゐた連中が「文學界」の創刊を、まるで、天來の福音のやうに、初めて日本にあらはれた、文學精神の獨立として、歡迎したのは無理もなかつた。こゝにこそ時代の新らしい行く手がある——彼等はさう信じた。そして、蟻の甘きにつく如き勢ひで「文學界」に傾倒した。讀んで見て、やはり何といつても、彼らをうつたのは透谷の一文であつた。世評はいやが上にも彼の前に集らざるを得なかつた。

「富嶽の詩神を思ふ」は、短い隨筆ではあつたが、透谷のとぎすました奔放な熱情は、今が眞盛りと見えるのだつた。

大和田建樹

「墳墓、何の權かある。宇内を睥睨し、日月を叱咤せし古來の英雄、何すれぞ墳墓の前に弱兎の如くなる。

嗚呼墳墓、汝の冷々たる舌、汝の常に餓ゑたる口、何者をか噬まざらん、何物をか吞まざらん、而して墳墓よ。汝も亦遂に空々漠々たり。水流滔々として洋海に赴けど、洋海は終に溢れて、大地を包まず、冉々として行暮する人世、遂に新なるを知らず、又、故なるを知らず」

と、彼は叫んだ。また、

「白雲、黑雲、積雪、潰雪、閃電、猛雷、是等のものを用役し、使僕し、制御して、而して、恆久不變に威靈を保つもの、富嶽よ。夫れ、汝か。渡る日の影も隱ろひ、照る月の光も見えず。晝は晝の威を示し、夜は夜の威を示す。富嶽よ汝こそ不朽不死にちかきものか。(中略)

盡きず、朽ちざる詩神、風に乘り雲に御して、東西を飄遊し玉へり、富嶽駿河の國に崛起せしといふ朝、彼は幾億萬里の天涯より、その山嶺に急げり。而して富嶽の威容を愛するが故に、その殿居に駐まり棲みて、遂に復た去らず。是より風流の道大いに開け、人麿、赤人より降つて、西行芭蕉の徒、この詩神と逍遙するがために、富嶽の周邊を往反して、形なく像なき記念碑を空中に構設しはじめたり。詩神去らず、この國なほ愛すべし。詩神去らず、人間なほ味あり」

と、道破した。思想も文章も、今よりすれば甚だロマンチックなものではあるが、當時、低文學

の俗流、地を掩ふの感あるとき、この透谷の論調は、恰も爽颯たる天籟の聲であつたのである。と同時に、明治文學者數多しと雖も、彼ほどに、素直な凝視と直觀を以つて、その論調、論格に、がつちり、日本論を把握して讓らなかつた文學者があるだらうか。「富嶽の詩神を思ふ」の一編は、たしかに、當時の文界を聳動しうる好箇の日本論たるを失はなかつた。

三

「先生。北村先生。今、文學界の創刊號を讀んでゐるところです。先生の論文、無論、イの一番に讀みました。讀んでゐるうちに、亢奮して、頰が熱くなりました。素晴らしい傑作ですわ。二度でも三度でも、何度讀んでも素敵ですわ。

先生、北村先生。でも、とう〳〵、かうして先生とお別れしてしまつて、もう、私には、何の希望ももてません。生きてゐるといふだけの、屍のやうな絶望の毎日でございます。先生。病氣は大分、進行して參りました。それが、手にとるやうに自分にもわかります。恐らく、二度、都の土を踏むことは、かなひますまい。私は、あきらめて居ります。……」

山にゐる、病める女友からの手紙が來た。透谷は、近いうちに是非一度、この友達を慰めに山へ、逢ひに行かなければならないと思つた。しかし、明治女學校に出るやうになつてからは、仕事が規則

的になつてゐるので、なかなか思ふやうな暇が得られないのであつた。
その頃の或る日、教室へ入らうとすると、廊下の角に、齋藤冬が立つてゐた。
「先生、お願ひがあるんでございますけれど」と、彼女は低い、力づよい聲でいつた。
「何だ」
「いつぞやお話した、宮城女學校の小此木先生ですけれど、向うをお罷めになつて、あと、まだ、何處にもお勤めなすつてゐらつしやらないといふことなんで、もし、お願ひ出來れば、明治女學校へ就職したいのだつて、私の姪のお幸のところへ先だつて、お話があつたつて申しますの」
「あゝ、小此木先生か。そりやア一つ校長さんに話しておきませう」
と、透谷は、自分もその事は內々考慮してゐたことであつた。
「姪のお幸も、來年はこつちへ、御厄介になるつもりだといつて參りました」
冬はさういつて、恭しく頭を下げた。
教室へ入ると、こんどは、小平小雪が立上つて、
「先生、今日はお講義の代りに、ドストエフスキーのお話をして下さい」
と、いひ出した。內田不知庵の「罪と罰」の批評を、その月の女學雜誌に書いたのが、クラスの中で、問題になつてゐるのだといふ――。

「では、皆さんは、罪と罰を讀んでゐるのですか、讀んでゐる人は、手をあげなさい」
と、透谷はいつた、クラスの半分程が勢よく手をあげた。
「讀んでる人もあれば、讀んでゐない人もある。話をするとすれば、皆が讀んでゐた方がいい。ラスコルニコフについて話してもそれがどういふ人間で、どういふことをしたかを、皆が一應知つてゝ貰はないと困る。この次の時間までに、準備してきて貰ふことにしよう――それから、依田學海先生の、罪と罰の批評を讀んでる人はあるか」
さすがに之は少なかつた。宮城女學校組の三人が、手をあげたきりだつた。
「これも一種の參考になる。ついでに、讀んでおいてくれたまへ――」
さういつて、透谷は又、いつものテキストを取上げた。小雪や冬たちは、あきらかに、それが不滿の顏であつた。
放課後、小雪と冬が、教員室まで顏を出して、
「北村先生。先生はあゝ仰有るけれど、皆はこの次だつて、ドストエフスキーなんか、讀んでは來ませんわ。あの人達は、たゞ學校の教科書さへ勉强してゐればそれでいいと思つてゐるんだし、又、それ以上に、手をのばす元氣もないんですわ。それなのに、先生は、いつもみんな、みんなつて仰有つて、先生の一番すぐれた高級なところを、私達に與へては下さらないのですわ。それでは、私達は退

屈してしまひますわ」
と、冬がいつた。
「先生、もつともつと、先生が、文學界にお書きになるやうなよつよい熱情を、私達にも頒けて下さい――さういふ意味で今日のお時間に、ドストエフスキーを持ち出したんですわ」
と、小雪がいつた。
「いや、君達のいふことはよくわかる。どんな素晴らしい傑作でも、教科書となれば退屈なのだ。しかし、君たちが、クラスのものと調和しないのは、やつぱり僕には不都合だと思はれる。君たちが、ほんとにクラスのみんなと調和してゐるとわかつたら、僕は斷然、油ののつた講義をやる。さうなれば僕は、お冬さんや小雪さんだけ相手にしてしやべつても、クラス全體がそれに反感や不平を持たないやうな熱情を示すことも出來ると思ふ。現在の狀態では、君たちだけが、變にほかの連中から分裂してゐるので、僕は實にやりにくいのだ――」
透谷はさう答へた。二人はジツとうなだれてしばらく沈默した。先づ、冬が頭を上げた。
「先生、わるうございました。明日から、クラスの調和について、一所懸命、努力して見ます。きつと、出來ると思ひます。又、どうしても、さうしなければならないと思ひます」
「すみません――」

と、小平小雪も、頭を下げた。

二人が教員室を出ようとする時、透谷は思ひ出していつた。

「あゝ、さつきの小此木先生のことだね。晝休みの時、校長さんに話しておいた。多分、君達の希望通りになるだらう」

「まあ、うれしい」

「ありがたうございます」

二人は感動して互に手を取合ひながら、泪のあとの靜かな微笑を見せた。

四

「巖本善治の「文章の道」を讀んで、俺は憤慨した。あゝいふものが、「文學界」に載つてはいけない。目障りだから、以來、「文學界」は巖本善治と手を切つてくれ、女學雜誌社とはなれても、「文學界」は、十分に成立つていけると思ふ」

そんな意味の手紙が、禿木から天知へ送られた。

旅先きの藤村からも、創刊號の出來は上乘だが、「女學雜誌の文學界」といふ長つたらしい肩書は、どんなものか。出來ることなら、肩書を削つて欲しい。これは、他の同人諸氏も恐らく同感ではない

かといふ註文が屆いた。

巖本善治の「文章の道」といふのは、主として、文章に於ける功利主義を强調したものであつた。明治女學校の校長であり、女學雜誌の社長である彼が、その文章論の本質に、功利主義を說かうとするのは、止むを得なかつたが、純文藝の旗を立てる他の同人間に惡評だつたことも、亦當然である。

しかし、星野天知と巖本善治とは、前々から深い交涉を持つてゐる。天知とすれば今、同人の言に和して、直ちに巖本と袂を分つことは、情に於いて忍びないものが多いのだ。

天知は、文學界の結成については、年齡は若いが、禿木に恃む所が一番多かつた。その禿木から、抗議が出たのである。次に信賴すべき藤村は、放浪の旅にゐる。その上、旅からの消息では、彼も亦禿木と同感想にあるらしい。そこで、當然、客員の透谷に相談するのが順序である。天知もそれは重重知つてゐる。しかし、何となく、それを躊躇する氣持ちが、天知の中にわだかまつてゐるのを如何ともなしがたいのだ。

何故であらう。

天知にもよくはわからぬ。わからぬなりに、どことなく、煙つたいやうな、親しみ憎いやうな、一種の雰圍氣がある。――しかし、はじめ天知をたづねて、天知和尙はゐますかと、大聲をあげて入つて來たのは透谷であり、その夜、二人は、一面直ちに十年の知已の如く、床をならべて、徹宵、文學

を論じた間柄であつたにもかゝはらず、天知と透谷の間には、その後、一種の割り切れぬものがのこされてゐたのである。

「結局、北村は文學界に於ける、一種の彗星的光芒で、恆星として期待は出來ないと僕は見てゐる」

そんなことを、ひそかに禿木の耳に囁いたこともあつた。

「あいつは、無論惡い男ぢやアない。いや、むしろ、善すぎるくらゐ善い男だ。純眞そのものかも知れん。しかし、あれぢやア、人に誤解されてしまふね。自分のいいところを、人に傳へていく方法を知らんのだから」

と、禿木も相槌をうつた。

「とにかく、僕は北村を認めてはゐる。あいつの書くものは、光彩を放つとる。しかし、まだ、まだ、苦勞が足りん。人間が出來とらん」

「さういふところは、實にある」

——だから、こんな場合にも、天知はどうも、透谷に相談しにいく氣にはならない。それに、若しそんな弱いところを見せると、透谷が何を云ひ出すか知れたものではないといふ氣もした。そんなら俺に、編輯權を渡せ、ぐらゐのことは、いついひ出すかわからないのだ。そして若し、彼に、編輯權をあたへたら、それこそどんな雜誌をこしらへるか、その點の安心は絕對に許されない。純眞だから

單純で、單純だから無鐵砲である。狂人に刄物といふ譬へがあるが、どう考へても、苦勞の足りない感じが、透谷に對する天知たちの信賴を阻むのだつた。

しかし天知も、編輯の實權は握つてゐるものの、雜誌の仕事が、自分だけでやつていけるものでないことは、重々承知してゐる。雜誌といつても、女學生向きの一般雜誌とちがつて、これは志を同じくするものによつて結成された新鋭の文學運動であり、天下に向つて、其の存在を主張せんとするものである以上、どうしても足並を揃へていかなければならぬ必要があつた。それには、創刊號に「吉田兼好」を書いて好評だつた禿木にしろ、又、藤村にしろ、天知には大事なメンバーである。親しみにくい透谷でさへ、雜誌の客觀性を强くするためには失ふことの出來ぬ仲間である。

さう考へると、同人間に起つた反巖本善治熱を、姑息な手段で彌縫しておくことは、必ずしも「文學界」百年の計を樹つる上に得策とはいへない。且つはこの際、思ひ切つて、女學雜誌社からはなれて、自分の手によつて「文學界」が獨立することは、世間の氣受けからいつても、きつと喜ばれることだらう。何か、若々しい勇氣と潔癖が感じられることだらう。同人の不滿も解消し、世評も好しとならば、一石二鳥といふべきでこれを一氣に決行するに如くはない。

更に、それによつて、名實共に、文學界の編輯責任者が、天知その人とならざるを得ないのも、亦、些か得意である。

さう思ふと、天知は多少の冒險、經濟上の危惧をおかしても、この際、「文學界」の獨立を圖らうといふ決心が、やうやく、つよく高まつて來た。

そこで、彼は單身、明治女學校に巖本善治を訪れた。例の應接室兼教員室の卓子をはさんで、彼は口を切つた。

「今日は君に、云ひ憎いことをいひに來たのだ。その代り、すべて率直にいふから、聞いてくれ」

巖本善治は、泰然として默つて、天知の顏を見てゐる。

「實は、君が、文學界に書いた「文章の道」といふ論文が、同人間で問題になつたのだ」

「ホホウ」

「君の、文章上の功利主義が、氣に入らんといふのだ。で、かういふことになるといふのも、畢竟、君と同人間に、見解の相違があるわけだと、僕は思ふ。ついては、結論をいそぐやうだが、三號から、女學雜誌の肩書を削り、君の社から離れて、純粹の同人雜誌として、獨立してやつて見たいと思ふが、どうだらうか」

と天知は、ずばずばといつてのけた。巖本は尙默々として、半眼を閉ぢながら、考へてゐたが、

「同人つて、誰が、それをいふのか」と訊きかへした。

「誰といふわけでもない。要するに、みんなだ。期せずして、同人間の空氣となつたわけだ」
「さうか。では、北村もか」
「いや、あれは知らん。北村は同人ではなくて、客員だから雜誌の組織上のことにも、經營上のことにも、喙は入れぬといふ約束なのだ。彼はたゞ、原稿の寄稿者にすぎない。それ以上の關係は、絶對にないのだ」
「僕は又、彼がその急先鋒かと思つてをつたよ」
と、巖本は破顏一笑した。こゝにも、透谷の理解者にして、誤解者である男がゐた。
「文章上の功利主義の主張が、何故そんなにわるいか」
巖本はキラリと光る明眸をつよく見ひらいて、反擊して來た。
「要するに、文學界の同人は、物質以外に、高遠な理想の殿堂が嚴存してゐることを、文藝によつて、鼓舞しようとしてゐるのだ」
「それはわかる。わかつてゐればこそ、僕は皆に敬意を呈してゐる。しかし僕の所懐が民友社の功利主義と、軌を一にするものでないことは皆も諒解してゐるのではないか」
「さう、――それはわかつてゐる。しかし、民友社が、當時、最も功利的な論鋒で、青年間に、淺薄な功名心を刺激してゐるのを、同人は甚だ面白からずと思つて居る。君の所說とそれとが、功利主義

の名に於いて、同一視せられる危險がないでもない。それを皆は惧れるのだ。皆が理解するにしろ、世間が何と見るか。「文學界」は口に、純文藝の理想を說きながら、結局、巖本の功利的文藝觀の走狗となつてゐるのではないか――さう見られることは、これから氣勢を上げようとする同人にとつて、一番辛いことなのだ」

「…………」

「そこだよ。巖本君。わかつてくれるか」

天知は、思はず卓をうつて、熱心に顏をつき出した。巖本は再び眼をとぢて、考へこんだ。しばらくして彼は云つた。

「よし。僕は引かう。成程、同人をして正しく世に立たせるには、もう、僕の存在が背景になることは、或は不利だ。わかつたよ星野君。心配をかけたのはすまなかつた。やつてくれ、すべてを君に一任する。僕はむしろ、雜誌の背景にならず、君個人の背景になるよ。今後は、君のプライヴェトだね、それがいいだらう」

「ありがたう、巖本君」

と、天知は椅子をはなれて、巖本の手を握つた。

「ほんとに、君がこんなに、あつさり、同人の苦衷を察してくれようとは思はなかつた。君は實に立

派な人だ」
と天知は徇くりかへした。
「いはゞ、文學界の生みの親たる君だ。もし君に、臍をまげられたら、どうしようと、ほんとに、今日まで、僕はオチオチ眠れない位、心配したのさ。何しろ、こんどのことは、いはゞ、正論的暴論なんだから」
「暴論でも正論でも、そんなことは、僕は苦勞しぬいてゐるから、大丈夫さ」
——そのとき、授業の終るベルが鳴つた。やがて教師達がかへつてくるので、二人の話はそこで杜切れた。
——透谷が歸つて來た。袂をチョークの粉だらけにして。
「やア、天知。今日は時間のある日か」
透谷は、例の調子で、開け放しにいつた。
「いや、一寸、授業の打合せに來たのさ。もう歸らうと思つてた處だ。君はまだか」
「もう二時間ある」
「そいつは御苦勞だ」
透谷は袂のチョークをバタ〳〵拂つた。教員室の連中は、迷惑さうに顏をしかめた。

んで出ていつた。

雜誌に關する

こんな重要な取引が行はれたなどといふことは、たうてい知る由もないことであつた。

たゞ、何となく、「文學界」創刊以來、自分と友人達との間が、水と油のやうになつてくる氣配は、

人間は單純と批評されるにしろ、神經のこまかい透谷のカンに、微妙なひゞきをもたらさぬ筈はない。

「何だか變だ」

さう思ひながら、しかし、それを徹底して追求する興味は、彼にはなかつた。

五

「孤雲野鶴を見て、別天地に逍遙するは詩人の至快なり。然れども、苦海塵境を脫離して、一身を挺出せんとする人間の道にあらず。苦海塵境に淸凉の氣を、輸び入るゝにあらざれば、詩人は一の天職を帶びざる放蕩漢にして終らんのみ」

齋藤冬は、聲を出して、透谷の文章を讀んでゐた。「女學雜誌」に出た「山庵雜誌」の第七節である。

教室には小雪や輔子や、五六人の學生が殘つてゐた。
「でもね、北村先生は、少し、別天地すぎやしないかしら」
と、小雪が口をはさんだ。
「それは定評よ。でも、先生は、この通り、詩人の天職といふものを、洞察していらつしやるぢやないの。苦海塵境に清涼の氣を運ばう、とはつきり仰言つてるのよ。でも、それには、別天地に逍遙したことのない、埃まぶれの詩人には、苦海塵境に清涼の氣をもたらすことは、出來ないわ」
と、齋藤冬が應酬した。
「この間、お萬さんが云つてたわ。星野先生や平田先生の言を以つてすれば、透谷は苦勞の足りない、セルフイッシュな天才ですつて。客觀性がないのよ」
と、小雪が更に駁論した。
「島崎先生の方が、謙遜で、心のふかい所がありますわ」
と、佐藤輔子が云つた。そりやアあなたはさうでせうよ、と、みんなは揶揄が口まで出かけて、しかし、ちよつとのまれたやうに目と目を合せて、默つてゐた。
「さうよ。北村先生のは、人に押しつけるみたいなところがあつて、高慢といつちやわるいけれど、つまり、下手ね。いいものを持つていらつしやつても、それが、ぴつたり、私達の胸に來ないところ

があるのよ。反撥したくなるやうな感じになるのよ」

と、小雪がいよ〳〵鋒を向けるので、

「そんなことない」

と齋藤冬は、赤くなつて、

「ぢやア、もう一つ讀むわ。第八節よ。――他を議せんとする時、尤も多く己れの非を悟る。頃者激する所ありて、生來甚だ好まざる駁撃の文を草す。草し終りて靜に内省するに、人を難ずるの筆は、同じく己れを難ぜんとするに似たり、是非曲直、輕々に判じ難し。如かず修練鍛磨して、叨りに他人の非を、測らざることをつとむるに――これでもまだ、北村先生は高慢といへるでせうか」

皆は默つてしまつた。これ以上いふと、齋藤冬を泣かしてしまふことになる。でなくとも、彼女はもうさつきから興奮してゐて、今にも泪がふき出しさうな顏をしてゐるのだ。

チヤラン・チヤラン・ラン

と、鐘が鳴り、みんなが校庭の方から、入つて來た。

こんどは、その問題の、北村先生の授業である。

――透谷は、そんなこととは知らないから、いつもの態度で入つて來た。珍しく、首まきをしたまだ。

「今日は、風邪をひいてゐる。首まきを許して貰ひたい」

と、彼はことわつて、教壇に上つた。

はじめ暫くは、テキストによつて、英語の講義である。しかし、そのうちに、テキストをはなれて、文學論がはじまる。いつもの習慣である。

話してゐるうちに、あつくなつて來て、折角の首まきは取つてしまひたい程だが、鼻の方はしきりと、むづがゆく、さつきから、何度も、チン、チンと、ハンケチで鼻をかんでゐる。

話が熱してくると、彼は教壇を下りてしまふ。そして、自ら、級中の一番熱心な聽き手に向つて話し出す。實はこれが、クラスの反撥を買つてゐる所以だつたが、透谷にはわからなかつた。一人といふのは、いふまでもなく、齋藤冬のことである。

彼はいま、孤獨について論じてゐる。彼自身、このごろ、孤獨を味つてゐる。或はむしろ、孤獨を愛してゐる形だ。これは却つて、文學界をやり出して、文學上の同志と交ることが多くなつて、一層、そんな氣持ちに突きつめてゐる。時には持前のペシミズムも顏を出す。しかし、彼は、人間を愛してゐる。彼は、孤獨を愛しつゝ、それが、排他的な意味のものでないことを、やはり、强調せずにはゐられない。

しかし、彼の孤高の精神は、やゝもすれば排他的のものに見られ易いのだ。彼はその誤解を知つて

ゐる。彼が腹を立てるのは、いつもその誤解に對する云ひやうのない悲しみからだ。

そのうちに、とう〳〵、彼は齋藤冬の机のすぐ前に立つてしやべり出した。これではまるで、透谷と齋藤冬の個人教授を、他の生徒が取りまいて聞いてゐるといふ形だ。――さういふ形は、美しさや誠實を通りこして、やはり誤解され易い。

しきりに鼻水が出る。

それでも、まだ、ハンカチで拭いてゐるうちはいい。しまひには、もう、その感覺も忘れる程に熱して來て、ポタポタと、水が冬の机の上に落ちるのだ、――みんなはそれが氣になつて、折角の熱辯も、さつきから上の空なのだ。齋藤冬も困つて、懐から紙を出して、

「先生、お鼻」

「あゝ、さう。これは、どうも」

透谷はハツと氣がついて、鼻紙を受取ると、いそいで、鼻水をおさへた。しかし、又、夢中になると、鼻水の噴出は忘れてしまふ。

「先生、お鼻」

そのたびに、齋藤冬は、紙を出した。すると皆はクスクス笑つた。しかし、そのうちに、皆も透谷の熱に惹き入れられて、もう、その紙のやりとりも、笑へないものに思ふのであつた。無論齋藤冬は、

端然として、透谷の言葉にきゝ入つてゐた。いかに、師の鼻水が、しぶきとなつて、自分の髮や顏にふりかかつても、何女は何の辭色も變ずることがなかつた。たゞ時々、懷中の紙を用意しただけであつた。しまひには、その紙を受取る方も、渡す方も、すべて以心傳心、殆ど、無意識の狀態になつてゐた。

しかし、その授業のあとで、やはりクラスでは、緊急動議が持上つてゐた。あゝいふセクト的な授業はやめて貰はうといふのだ。小平小雪と齋藤冬は、前回にも書いた通り、宮城女學校のストライキ組の堅い同志であつたのがいつの間にか二人の間には、溝が掘ゑられてゐたのである。

何故だらうか。小雪もはじめのうちは、冬とともに、透谷ファンの一人であつたことは、誰しもが認めてゐた。

二人はいつも揃つて、透谷のまはりを取卷いてゐた。そのうちに、小雪は、透谷の側をはなれていつたのである。透谷をはなれると一緒に、仙臺以來の盟友である齋藤冬との間にも、一種の暗流を生じてゐた。冬はそれが何よりも悲しくつてならなかつた。女同志ではあつたが一生の友情を契つたつもりでゐた小雪、すべての行動を共にして來た小雪が、透谷への師事にあきたらずして、事毎に反撥を示すやうになつて來たことは、全く、致命的な煩悶であつた。

しかし、たとへいかに小雪が反目しても、自分も亦、その故に、透谷への、思慕、敬愛を捨てることは出來なかつた。

「あれでは、お冬さん以外の生徒は、全く無視されてしまつてゐるんです。それでは學校といふものの、本來の趣旨に副はない。あゝいふ教授法を絶對にやめて頂きませう」

と、小雪は主張する。

「北村先生は、何と辯解なさらうと、別天地派です。このクラスにあつてさへ、透谷對お冬さんの別天地をおこしらへになる。苦海塵境なんて仰言るけれど、それは全然、わかつてはいらつしやらないのです。同じクラスにありながら、お冬さんだけが、あゝして特別に扱はれてゐるのを、我々はたゞ、見せつけられてゐる。さういふ我々の氣持ちに察しがなくて、何の苦海塵境でせう。私は、斷然、北村先生の別天地主義と鬪ひますよ」

さう叫ぶやうにいふ小雪の言葉を、冬は一人、斷罪されるやうな深い惱みの中で聞いてゐる。嘗ての同志から、このやうに激しく戰を挑まれながら、冬にはもう、一言の反駁を加へる元氣もなかつた。

「でもね、もつと功利的に考へれば、あゝいふ別天地的ポーズをとることが、北村先生の情熱を、もつとも强烈に、噴き上らせるのだとしたら、我々はそれを、大所高所から見て、十分に吸收した方が賢明なんぢやないかしら——」

と、お蔦が、いつた。

「さうね、あゝいふ浪漫詩人は、出來るだけ自由な形をとることで、燃燒するのよ」

と、町田お辰——この人もストライキ組の一人だが——彼女も、冬と小雪の反目には、少からず胸を痛めてゐるので仲をとるやうな氣持ちでいふ。

「でも、お辰さん。こゝは學校よ。教室よ。詩人の自由も、こゝでは或る種の制約の中にゐなければならない筈よ。そりや先生が、文學界にお書きになるときは、いくら自由でも奔放でも、それが先生の燃燒だとすれば、誰しも異存はないでせう。でも、同じ資格で教へを受けるものの間に、甲乙があるのは、正しいことでせうか」

と、小雪の銳鋒は止まない。何しろ、校長ミス・ブルボーに率先して英文の建白書を出したといふ元氣者であつたから——

「でも、小雪さんだつて、北村先生のお講義に就いては、敬服していらつしやるんでせう」

と、お辰がきく。

「そりやア、無論よ」

「そんなら、あなたみたいに、彈劾ばかりなさらないで、もつとみんなの利益といふものを考へなければならないわ」

「おねがひするのよ。お冬さんばかりでなく、みんなにも、お話をして下さい——みんなにも話してくださるといふ氣持ちで、甲乙や優劣をつけないで、お講義をして下さいつて。さうお願ひしてお聞分けにならないやうな、そんな先生ぢやア、きつとありません」

と、お辰は自信をもつていつた。冬は、たまらなくなつて、机の上に、うつぷしになつた。泪が湧くやうに、手のなかに落ちて來た。

みんなはそれ以上、何もいはなかつた。小雪も默つて、頭を窓硝子にくつゝけて、上の方を、眺めてゐた。

しかし、小雪はそのことあつて以來、いよいよ、冬とははなれていつた。そして、いまゝでの文學熱を一擲して、宗教の方へ向つていつた。わたくしは、いまゝでの長い文學熱から、目が醒めました——と、彼女がそれを植村正久師の前に、告白したのは、それから間もない或る日であつた。

植村正久も、明治女學校には、深い關係があつた。學校がまだ九段にあつた頃、彼はこの學校で、熱心に宗教々育を鼓吹したのである。

小雪が入學した頃には、もう彼はこゝにゐなかつたが、麴町一番町の教會が、植村正久の教會であり、明治女學校の宗教グループは、必ず、日曜にこの教會に出かけて、植村先生の宣教を聞いたもの

であつた。

その教會が、つまりのちの富士見町教會の前身にあたる。透谷に反撥した小雪が、勢ひ、足をその方に向けるのは自然の成行であつた。それに、植村夫人が、漢學の先生として、明治女學校にまだ殘つてゐたので、さういふ關係からも、生徒間の植村崇拜熱といふものは、透谷傾倒派に對して、遜色のないものであつた。

或日、小雪が教會へゆかうとしてゐると、向うから植村先生が歸つて來られるのに出會した。

「あら、もう、おすみになつたんですか」

と、小雪は失望をあらはしていつた。

「おそかつたね、どうしたの」

「いろいろ、クラスで、北村先生のお話なんか出てゐたもんですから――」

「さうかい。それもいいが、この頃の流行であんまり、文學界系統の文學熱にかぶれては、いけないよ」

さういつて、植村正久は、又、スタスタと向うへ歩いていつた。

小雪は天來の聲を聞いたやうに思つた。

「さうだ。その通りだ」

彼女が、文學を一擲しようと、堅く決心したのは、このときであつた。そして、植村先生の前に、すべてを告白し、信仰生活に入ることを、堅く誓はねばならぬやうな、つよい衝動を感じた。

そのためには、お多さんとも、きれいに別れよう。北村先生のことでも、クョクョしたりはすまい。もう、小説も、戯曲も、自分には何の魅力ももたないだらう――と、小雪は自分に宣言した。いまゝでのことが、すべて徒勞になるのは悲しかつたが、さうする以外、彼女の新らしい生活は拓けないといふ確信がついた。――彼女は氣を取り直すと、踵をかへして、植村正久のあとを追ひかけた。

六

「人生に相渉るとは何の謂ぞ」は、「文學界」第二號に掲載された。これは、透谷の評論中でも、特に著名なものであるが、民友社の山路愛山との論爭を展開したことで、大いに當時の視聽をあつめたからである。

透谷の筆端は、この頃になると、いよいよ火を吐く勢ひが感じられる。

○ 反動は愛山生を載せて走れり、而して今や愛山生は反動をのせて走らんとす。彼は「史論」と名づくる鐵槌を以て撃碎すべき目的を擴めて、しきりに純文學の領地を襲はんとす。反動をして反

動の勢ひを縦にせしむるに余も異存なし。唯、反動を載せて、他の反動を起さしむるまで遠く走らんとするを見る時に、反動より反動に漂ふの運命を、我が文學に與ふるを悲しまざる能はず。

○　天下に極めて無言なる者あり。山獄之なり。然れども彼は絶大の雄辯家なり。若し言の有無を以て、辯の有無を爭はゞ、凡ての自然は極めて憫むべき啞兒なるべし。然れども常に雄辯なるは自然に加ふるものなきなり。人間に若し、自然の如く無言なるものあらば、愛山生一派の論士は、その傍に來りて、爾何ぞ能く言はざると嘲らんか。

○　文學は事業を目的とせざるなり。文學は必しも一人若しくは數百人の敵、見るべきの敵を目がけて擊つを要せざるなり。（略）山陽も擊てり。山陽の擊ちたる戰は、今日に於て人に記憶せらるなり。

然れども其の擊ちたるところは愛山生の言ふ如く直接に人生に相渉れり。人生に相渉るが故に人生を離るゝ事も亦た速ならんとす。源頼朝は能く擊てり、然れども其の擊ちたるところは速かに去れり。彼は一個の大戰士なれども、彼の戰場は實に限ある戰場にてありし。西行も能く擊てり、シェクスピーアも能く擊てり、ウォーヅオルスも能く擊てり、曲亭馬琴も能く擊てり。是等の諸輩も大戰士なり。而して前者と相異なる所以は、前者の如く直接の敵を目掛けて限ある戰場に戰はず。換言すれば天の限なきミステリーを目掛けて擊ちたるが故に、愛山生には空の空を擊

ちたりと言はれんも、空の空を撃ちて星にまで達せんとせしにあるのみ。行いて頼朝の墓を鎌倉山に開きて見よ。彼が言はんと欲するところ何事ぞ。來りて西行の姿を山家集の上に見よ。孰れか能く言ひ、孰れか能く言はざる。

○　文學のユチリテー論今日に始まりたるにあらず。吾等の祖先に勸善懲惡説あり、吾等の同時代に平民的批評家としての活用論者を愛山生に得たるも故なきにあらず。

などの文字が見られるのである。しかし、これは、當時、最もつよく文學上の功利説を主唱した民友社系の、論駁の的となつたことはいふまでもない。文學界系と民友社系の論爭は、この口火によつて、はげしく捲き起された。しかし、當の論敵、山路愛山は、次のやうに透谷との公私の交渉を説明してゐる。曰く、

「余は文壇に於て、もつとも多く君に攻撃せられたり。私交に於て、最も多く親しまれたり。君が痛酷なる論文を「文學界」に掲げて、余を駁撃したるより、數日をへだてゝ、君は予が家の薯汁飯を喫せり。余が君に遇ふや、屢々論駁の鋒を向けぬ。君は毫も之に逆ふことなかりしなり。竹越君曰く、透谷と月下に語れば、淸濯飄渺として神仙の如し。亦俗界の人に非るを覺ゆ。蘇峯氏、余に謂つて曰く、透谷は銀匙なり。君に至つては乃ち鐵瓶のみ。彼れが超俗の資は、我儕の同じく認識する所たり

き」と。

これによつて見ても、透谷は、烈々たる闘志を以つて、論爭を挑んだ愛山生の家を訪ねて、けろつとして、薯汁飯を食べてゐるのである。さういふ態度を、浪曼的稚氣として愛したものもあつたが、又、一方では、高慢放縱として、憎むものもあつた。

甚しきに至つては、稚氣をてらふものであると解するものもあつた。或は又、彼がとてつもない陰謀家のやうに歪曲して見るものもあつた。口角、論をかまへつゝ、ひそかに慇懃を通ずるもののやうに、事更に、誹謗するものもゐた。

「いや、彼はそんな腹黑い男ではないさ――彼にあつては、論爭は論爭、私交は私交と、ちやんと區別してゐるのさ――彼は善意に一貫してゐる奴だよ」

と、星野天知は、透谷を辯解した。

しかしさう辯解しながらも、やはり、透谷も困つた奴だ。苦勞を知らぬ、お坊ちやん育ちで、實に、仕樣がないと持てあましてゐるのである。

「北村は、何だつてね、山路のところへ、ノメノメ出かけたさうぢやないか」

何となし、穩かならぬ顏で、天知のところへ、やつて來る同人もあつた。そして話してゐる中に、

「俺にはわからん。何故、山路が可恐いんだ。民友社、何の恐るゝ所あらんやだ。北村は大言壯語の

わりに、實に、氣が小さい。あれではすぐ敵に見すかされてしまふよ」

と、憤慨し易い若い同人はもう顏を赤くしてプンプンしはじめた。

――この雰圍氣が理由したのかどうか、透谷はしきりに、旅にゐる藤村が人戀しく、彼の歸京を、やうやく待ちわびる日が多かつた。

第九章

一

二十六年七月二十二日。放浪の旅に出た藤村を呼びかへし、東京からも同人が出掛けて、恰度、兩方からの出會頭を、東海道の吉原ときめて、そこで久しぶりに、「文學界」派の氣焔をあげようといふ計畫が、禿木や秋骨の間でまとまつた。天知も贊成であつた。透谷も同人ではないが、客員として一枚加はつて貰ふことにした。前にも記した通り、透谷は、天知らとの間に、何となく水と油を感じてゐたが、藤村には、しきりに懷しい氣持ちを寄せ、「文學界」の三號には、「古藤庵に遠寄す」などといふ文章を書いてゐる位であるから、こんどの企てにはすつかり乘氣で、藤村の旅費も、自分が出さうといひ出した。

「さうか。それはすまないな。島崎だつて、もうソロソロ東京が戀しい筈なんだが、旅費の工面に困つて、歸るに歸れないんだと思ふよ」

と、禿木は答へた。

「實は、どうしようかと思つてたんだが、それぢやア、北村君の厚意をうけることとしよう」

秋骨も傍から、うれしさうにいつた。早速、その場で手紙が書かれた。

島崎君。

七月二十二日に、東海道の吉原まで來給へ。其の日を期して、東西から富士のもとに會することとしよう。君の都合もあらうと思ふから、爲替で旅費を送る。　東京の友人より

「これでいいか」

「よし」

透谷は、財布をはたいて、爲替を組ました。——會合の場所は、街道筋によくある旅人宿である。二階建の離れがあつて、そこから富士がすぐ見上げられる、景色のいい家だつた。一行は三人、——星野兄弟は、同行する豫定になつてゐて、急に所用が出來て、參加出來なかつたのである。

透谷は、新らしい紺飛白に、兵兒帶をまいてゐる。禿木は高等學校の制服を着てゐる。霜降の上衣に、短く黑い髮、鷹の嘴を見るやうな隆い立派な鼻が、彼の特徴である。秋骨は濃い靑い鬚の痕のうつくしい、小柄な體軀の靑年である。——汽車の都合で、東京組の方が、少し早く吉原につく。さき

に、宿屋へ上つて、暫く、くつろいでゐるところへ、藤村が入つて來た。久留米飛白に角帶をしめ、夏帽子をかむり、脚袢ばきの尻端折といふ、板についた道中姿で、肩へ振り分けた風呂敷包みが二つ。それに大和の檜木笠まで、持つてゐた。

感じ易い藤村は、久しぶりに友人の顔を見ると、もうたまらずに、その汗臭い風呂敷包を顔に押しあてゝ泣いた。待つてゐた三人も、少し硬くなつて坐り直した。

「どうも、旅費まで送つて貰つたりして、すまなかつた」

やうやく、泪をふいて、藤村は三人の前に手をついた。

「うん、あれは、北村君に出して貰つたのです」

と、秋骨も少し面喰つて答へる。

「さうか。それは、有難い――」

藤村は透谷の方を向いて、慇懃に挨拶をする。

「何だ、恐ろしく、物堅いな。そんなことは、どうでもいいぢやないか。それよりまあ、ゆつくりして、旅の話でもきかうぢやないか」

透谷は少し、胸をひろげて、窓から吹いてくる風を、ふところに入れた。それで藤村もやつとニッコリした。しかし、目のふちが、紅く泣きはれた藤村の顔を見ると、透谷も何か、胸もとへこみあげ

てくる、熱いものを感じるのだつた。

二

やがて酒が出た。秋骨はのめない方であつたが、みんなは旅先きの落ちついた氣持ちで、盛んにのんだ。醉が廻つてくると、遠慮がとれて、談論風發がはじまつた。話題は、主として透谷の評論であつた。就中、「文學界」の第五號に出して、世評を沸き立たした「內部生命論」が問題になつた。

「僕は感激して、一晩中、眠れなかつたよ。――瞬間の冥契とは何ぞ。インスピレーション是なり。この瞬間の冥契ある者を、インスパイアドされたる詩人とは言ふなり――僕はあすこは、諳誦してゐる」

と、藤村がいふ。

「僕は、北村君のものは、昔のものの方が好きだ。厭世詩家と女性なんか、ほんとに、心をしめつけられるやうな氣持ちで讀んだ。あゝいふのにくらべると、內部生命論は、少し板につきすぎてやしないか。率直にいふと、マンネリズムを思ふ」

と、秋骨が反對する。透谷は風呂敷包みから、原稿を取出して、

「それぢや、こんど書いたのを、讀むから聞いてくれ。こんどのは心中論だ」

「何に、心中論！」

と、禿木が一膝のり出すやうにしていふ。

「題はまだついてゐない。しかし、旅に出る前に、二晩程、夢中になつて書いて來たのだ」

と前置きして、透谷は讀み出した。「桂川を評して情死に及ぶ」の草稿だつた。

○ 人の世に生るや、一つの約束を抱きて來れり。人に愛せらるゝ事と、人を愛する事之なり。造化は生物を理するに、一つの法を設けたり。禽獸鱗介に至るまで、自ら、この法に洩るゝ事なし。之ありて、萬物活情あり。之ありて、世界變化あり。他ならず、心性上に於ける引力之なり。人はこの引力の持主にして、彼の約束の捺印者なり。

○ 人は常に或度に於て、何物かの犧牲なり。能く、何物にも犧牲たらざるものは、人間として、何の佳趣をも備へざる者なり。何を以て犧牲たる。何が故に犧牲たるを甘んずるを得るや。美しいかな人間の情、好むべきかな人間の心。友のために身を苦しめ、親のために心を痛め、而して自ら甘心し、眞實何の悔恨なきを得るは、豈に、讃むべき事にあらずや。

「自己」といふ柱によりかゝりて、われ安し、われ樂しと、喜悅するものの心は、常に枯木なり。花は茲に咲かず、實は茲に熟せず。情は一種の電氣なり。之あるが故に、人は能く活動す。

時に或は、愁雲恨雨の中に、暴然鳴吼をなして霹靂一聲、人耳を愕ろかすことあるも、亦た止むべ

からず。花なき花は之なり。實なき實は是なり。情死輕んずべからず。

〇　世の中に絶えて心中なかりせば、二世のちぎりもなからまじ……と冥土の飛脚に云はせたる巢林子、われ、その濃情を愛す。人の誠意は、情によりて始めて見るべし。沈靜は、元より沈靜の味あり。然れども、熱意も亦、熱意の味あるにあらずや。

熱意は人を誠實に驅り、誠實は往々にして人を破却に逐ふ。破却素より惡むべし。然れども、破却の中に誠實あり。人死して、誠實殘る。

〇　よしや、幻想に欺かるゝ事ありとも、二人の間には一點の詐僞なく、一粒の疑念なし。二にして一、一にして二、斯の如く相抱いて水に投ず。死する時、樂境あるが如く、濁水も亦、甘露を味ふに似たり……

――草稿を讀む透谷の聲は熱し、目は燃えるやうに血走つてゐた。みんなは、その鬼氣にうたれて、シンとして聞いてゐる。透谷は更に一段、聲をはげまして、

「死は罰なり、然り罰なり、然れども、世間の罰にして、斯の如く、甘美なる罰ありや。嗚呼、狂なり。然り、狂なり。然れども世間の狂にして、斯の如く眞面目なる狂ありや」

――藤村は、ジツと、この友の顏を見てゐるうちに、友自身が、霹靂一聲、何をやり出すかわからないといふ氣がした。感じ易い自分は、しかし、とてもこの友のやうな破壞力はない。友は、感じ易

いだけでなく、思ひつめたら、破却を怖れないやうな、强い意慾がある――しかも、友は、こんどの論文で、いよいよ、强く「犧牲の美しさ」を說き出してゐる。「自己（セルフ）」を憎んで、花も實もない、と、道破してゐる。友だ、このやうに、烈々として、「犧牲」といふことをいひ出したことは、大いに注目する必要があるが、又注目と同時に、警戒の必要もあるのではないか――彼は、そんな風に思つた。

夜はもう更けてゐた。どうせ、橫になつても、眠れる筈はないのでみんなは徹夜に腹をきめて、飮み且つ談じた。離れの方には、他に泊客もない樣子なので、四人のほしいまゝな饒舌を妨げる者は、誰もゐなかつた。

三

翌々日の朝、四人は吉原の宿を發つて、箱根に向つた。みんな、尻端折で、毛脛を出し、紺足袋に草鞋ばきといふ、道中姿であつた。

「おい島崎君、君のその笠を、かしてくれないか」

透谷はさういつて、藤村が大和から持つて來た、檜木笠を借りて冠つた。沼津まで步くと、そこから三島までは、乘合馬車が通じてゐる。誰も客がないので、四人がのりこむと、すぐ發馬した。これでは、貸切りも同樣であつた。暫くいつて、沼津の町を外れると、透谷は馭者臺に聲をかけ、

「君、僕に馭さしてくれないか」

馭者は驚いて透谷の顔を見てゐたが、

「大丈夫かね」

「大丈夫さ。鞭をかし給へ」

透谷の氣合にのまれて、馭者は、鞭をわたした。透谷は馭者臺に入り替り、鞭を鳴らして、馬を走らせた。お客の三人は、內心ハラハラしながらも、痛快、痛快と、手を打つた。

プープー、と、透谷は頰をふくらまして、ラツパを吹く。そして、うしろをふり返り、

「どうだ、うまいものだらう」

で、みんなも、

「うまい、うまい」

と、相槌を打つ。しかし、どこか本職とはコツが違ふのか、透谷が馭車臺にのつてから、馬の體に、しつこくたかつてくる蠅が、客室の方へ群れて來て、みんなの衣服に取りついてはなれないのには、困つた。

馬車は、黃瀨川を渡り、長澤、伏見、新宿の村々をすぎて、三島の町に入る。そこで一同は下車して、箱根の山を裏から上り出した。

歩きながら、透谷は藤村に話しかけた。
「僕は、このごろ、人生は要するに、熱意だと考へてゐる。況や、詩人の詩人たる生命は、熱意だ。人生、熱意を感ずれば、僕は何でもやつてのけるよ。死は人の怖るゝ所だが、その最も怖れる死さへ、熱意の赴くところ、何者かあらんやだ」
と、彼は昂然といひ放つ。
「しかし、君は何故、熱意を說いて、常に死に及ぶのか。熱意が生命の發展である所以を、强調する方が、僕は賛成だ」
「だつて君、熱意は、死を甘受するところに、最高の魅力があるんだもの」
「そりやア、まあ、わかるが、しかし、君の考へ方は、僕が旅立つ前より、一層突きつめて來たね。一點の曖昧も許さずに、ぎりぎりのところまで、持つていつてる。僕は君を見てゐると、ちよつと、怖くなるよ」
「はゝゝ。怖くなるはよかつた。そんなことはないさ」
「だつて、君は、この頃二言目には、いつ死んでもいいやうなことをいふぢやないか」
「そんなことはないよ。そんなに、君、簡單に死んでは、やり切れんよ。僕には、まだ、澤山、仕事がのこつてゐる。僕の日記は、創作のプランで一杯なくらゐだもの。そのほか、僕は、闘ふべきもの

「有りがたう。しかし、僕は、壞れることを恐れて、曖昧に生きることは出來ないのだ。すり切れるまで使つて死ねば、人の一生も心殘りがないわけさ」

「とにかく、あんまり、無理をしてはいけないと思ふ。君は銳すぎる」

「僕は、君のやうに銳くも、激しくもないから、自分といふものを、大事に、長くかゝつて使つていくつもりだ」

と、藤村は答へた。

段々に山道は急傾斜になつた。みんなは汗をたらしたらし、呼吸を切らして、峠にかゝつた。

元箱根の、湖水に面した宿屋の座敷に上つたのは、午後の三時すぎであつた。日はまだ高かつたが、さすがに湖上を吹き渡つて來る風は凉しかつた。

「浴衣を出し、風呂も焚いて、夜具蒲團一切で、一晩、三十錢といふ契約だ」

と、秋骨が早速、帳場と交渉して、旅籠料をきめて來た。

「そりや安い。何しろ、この通り、凉しいのが何よりの御馳走だ。昨夜は暑かつたからね」

と、透谷は、すぐ、浴衣にきかへながらいふ。

窓の近くでは、鶯が鳴いてゐる。——風呂場へ下りて、蓋をとると、靑い木の葉が、二枚ほど、湯

の表面に浮いてゐた。

四

湖畔の宿に、四人は枕をならべた。その翌日、透谷は一人だけ、先きに東京へ歸ることになつた。宣教師と一緒に、東北地方へ旅に出る約束の日が、間近に迫つてゐた。

「こんどは、仙臺に少し逗留する豫定だ」

と透谷はいつた。

「宮城女學校にも寄つて見るのだね」

と秋骨が冗談のやうにいつた。透谷は眞面目で、

「さうだ。校長のミス・ブルボーと、議論してやらう。それから、東北の神樣にも會つてくる」

「誰だ、東北の神樣つて」

と、禿木が聞いた。

「東北の神樣は、押川方義さ」

——別れの晝めしに、芦の湖名物の赤つ腹の魚田を食べて、少し日が傾いた頃、透谷は、宿屋を出た。

道はゆるい上りであつたが、同行がないので、却つて、草臥れるやうな氣がする。芦の湯で一休み。そこからは、下り坂になるのだ。草鞋が危かしくなつたので、新らしいのと取りかへた。

芦の湯を出て、暫く行つたところで、彼は急に足をとめた。實は、この旅行に出る前から、彼の念頭を去來した誘惑に、彼はまた、つかまへられたのである。それは、病める女友、富井まつ子のゐる村が、仙石から二つ程峠を越して御殿場の方へ下つてゆく途中の山の中にあるからであつた。

このまゝ、箱根を下りてしまつて、東北の旅へでも出てしまへば、とても女に會ふ機會はない。彼は、青い夏草のしげる野道に、尻をつけて、ジツと考へた。

目の前に、病みほうけたまつ子の顏が、浮かび出た。

(ここまで來てゐて、見て見ぬ振りをして、山を下りることは、とても出來ない。人間として、友達として、又、かつての師として、たとへ一日の行程をのばしても、見舞つてやることが、ほんとうだ――)

彼は、さう考へざるを得なかつた。しばらく夏草の上に、仰向けに寢てゐたが、

(よし、行かう)

さう、心がきまると、彼は元氣よく立上つて歩き出した。道を左にとつて、今夜は、仙石上湯泊りだ。明日、朝早く長尾峠を越えれば、ゆつくり見舞ひをして、夕方の汽車で御殿場を發てばいい。――

――しかし、彼は、何となく、湖畔に置いて來た友達に對して、惡いやうな氣がした。あとで、その話をきいたら、そのために、彼がみんなを、まいたやうに思ふであらう。――まさか、今頃、彼が路をかへて、こんなコースを歩いてゐようとは、誰も知つてゐる筈がない。しかし、自分のこの不意討ちの訪問に、富井がどんなに喜ぶかを思ふと、友人への斟酌などは問題にならなかつた。

その夜は、一人、仙石の上湯に泊つた。深い木立の中の、古い溫泉で、淸水の湧き立つ音が、雨垂れのやうに淋しく鳴りつゞけてゐた。

「君たちとわかれてから、ふと、思ひ立つところあつて、塔の澤泊りの豫定をかへ、今、仙石の上湯にゐる。湖畔の宿は、佳趣横溢たりしも、こゝもなかなか、幽邃枯淡である。これより、道をかへ、病める女友の住む村を訪問することにした。しかし、明日中には、歸京しなければならない」

暗いランプの下で、彼は殘して來た友達に一筆書いた。やはり正直に、さう云はずにはゐられないのであつた。

五

透谷が富井の死を知つたのは、東北の旅の歸り路であつた。いつもは、旅先きの宿と連絡を取らせるやうなことをしたことはないのに、蟲が知らせたのか、こんどだけは、旅程を一々美那子に云ひの

こして來たので、彼は或る朝、松島の旅館で、美那子の手紙をうけとつた。

「富井さんが、急にいけなくなつて、お亡くなりあそばしました。昨日おそく、電報が參りました。私もびつくりいたしましたが、あなたも、さぞ、びつくりなさることでございませう。この間、箱根のかへりにお見舞ひにいらしつたときは、隨分、お元氣で、血色もいいと仰言つてゐましたのに。―飯倉のお店でもまだ電報が來たゞけで、詳しいことはわかりませんと仰有つてゐます。

とりあへずお悔みを申上げてきました。それから富井さんの寫眞をかざり、お花と、お線香を供へて、冥福をお祈りいたしました。　美那子」

手紙の中には、電報も折込まれてあつた。讀みながら、透谷は深い谷へ落ちていくやうな氣がした。富井の死は、當然、來たるべきものが來たのである、といふ氣もしたが、又、こんなに、もろく死ぬとは、思ひがけなかつた、といふ氣もした。

この間、仙石から、長尾峠を越して、逢ひにいつた時は、美那子の手紙にもある通り、富井は案外に元氣であつた。透谷を見ると、突然の感動に一瞬立ちすくんでしまつたが、ちよつと見ない間に、女はずつと大人大人して、フレンド時代の茶目な俤は、全然なくなつてゐた。

「ほんとに、幽靈ぢやないかと、思ひましたわ」―

――女はそんなことをいひながら、彼を二階の自分の部屋へ伴つていつた。いつかの手紙の中にあ

つた、窓際の柿の木が、すぐ目に入つた。部屋には、病床がとつてあつたのを、富井はいそいで片づけようとするので、透谷は驚いてとめた。
「だつて、先生、お氣持ちがおわるいでしよ」
富井は、頬をほてらせながら、少し横坐りに坐つた。
「外に部屋もないし、失禮なとこで、ほんとにすみませんわ」
「いいんだよ、いいんだよ――やつぱり、寢たり、起きたりなのか」
「えゝ。夕方になると、まだ熱が出るもんですからね――」
枕もとには、文學界だの、女學雜誌だのが、うづ高くつまれてある。書きかけの原稿紙も二三枚置いてある。
「でも、よかつた。僕は又、寢たつきりになつてるのかと思つた」
と透谷は、書きかけの原稿紙を覗きこみながらいつた。富井は、あわてゝ、袂をかぶせて原稿紙をかくした。さういふ所作も、昔にくらべると、すつかり女らしく板についてゐた。
少し話してゐると、富井はすぐ涙聲になつた。それを我慢しようとして、眉を苦しさうに、寄せるのだつた。
「あたし、どうしても死にたくないんですよ。死ぬのが可厭で可厭で、あたし――可厭つていふより、

可怕いんです。死んで、冷たくなつて、土色になつて、それから、火をかけられて、燒けこげて、白い灰になつて——さう考へると、夜中なんか、體中に、油汗をかいてしまふんです。とても、可怕いんです。——先生、何とか、この苦しみから、のがれられないものでせうか」

女はそこまで、突きつめてゐた。透谷も、このせつぱつまつた訴への前には、自分の書いてゐる厭世詩論などは、まだまだ、生ぬるいものだといふ氣がした。

「死ぬときまつてやしないぢやないか」

「いいえ、駄目よ。——もう、右の方はずつと深いとこまでやられてゐるし、——實際、あたしなんて、こんな無意味な人生に、どうしてかう未練があるのかしら」

と、女は絕望しきつてゐた。透谷は、今更、御座なりの慰め言葉をいふ氣もしなくなつて、段々、自分まで、女の虛無的な氣持ちの中へ引ずりこまれていくやうな氣がした。

「でも、駄目ね、あたし、もし、先生がいらしつたら、先生の胸にしがみついて、聲を出して、思ふ存分、泣いて見たいと思つてたのに、やつぱり、そんな、はしたないことも出來ないし、人間つて、窮屈に出來てるものね——でも入つてらした時、先生のお顏、とても青かつたんで、あたし、可怕くつて、ブルブルしたわ」

「僕は又、君が、ちよつとのうちに、すつかり年増になつたのに驚いた」

「年増？　へえ、さうですかね。やつぱり病氣のせゐよ、きつと」
富井は淋しさうに、笑つた。笑ひながら、又すぐ泣き顔になつた。
そのときの面影が、透谷には、いつまでも忘られなかつた。歸りには、いくらことわつても、もう少し、もう少しといつて、山道を三丁あまりも送つて來てくれた。女のいふ通り、それは死ぬことにきまつてゐる病氣だつたかもしれないが、さうかといつて、透谷が東北の旅に出てゐるうちに、急に惡化して來るやうな兆候は、未だ感じられなかつた。

そののち、透谷の日記（二十六年八月）には次のやうな記事が見えてゐる。
「富井まつ子は、曾て、一たび師弟の緣あるもの。而して、親しく交れること兩三年、其人品に於て、氣稟に於て、わが深く重んずるところありしもの、わが奧州にあるの間に於て、溘焉として遠逝す。われ深く悼むの心あり。知己は多く得べからず、渠の如きは、余が生涯に於て有數の友なりしを、惜しいかな、余が此所に於て、尤も多くの興をうち消されしは、渠を失ひし事の愁よりなり」
と。
又、彼は富井を追悼する意味に於て「哀詞序」といふものを書いてゐる。
「（中略）枕を排して、燈を剪りて、亡友のために哀詞を綴る。筆うごくこと極めて遲々、涕零つること

と甚だ多し。相距ること二十餘日、天と地の間に於て、この距離は、いくばくぞ」

とあるのは、「哀詞序」の最後の一句であるが、恰度、東北旅行二十日程のうちに彼等は幽明界を異にしたのである。透谷と富井の間の交情については、當時、どの位の人々の間に知られたものであるかは、つまびらかにしないが、少くも、文學界の仲間には、わかつてゐたことと見えて、藤村の「後の新片町より」の中にも、

「透谷君の晩年を慰めた一人の女の友達があつたが、その人が病床にゐるとき、それとなく、この人に書いて宛てた慰めの言葉は、たしか『秋窓雜記』の中に出てゐた筈だ。あれは極く短いものだが、とにかく、病人に對する深い理解や同情が籠つてゐると思ふ。この女の友達の死んだ時に、透谷君が『哀詞序』といふものを書いた。あゝいふものを書く時分から、透谷君自身のライフも、次第に磨り減されていつたやうに見える」

と書いてゐる。

その次の文學界の會合のときにも、この「哀詞序」が問題になつた。禿木なぞは、

「我はあからさまに我が心を曰ふ。物に感ずること深くして、悲に沈むこと常ならざるを。——我は明かに我が情を曰ふ。美しきものに意を傾くることは人にすぎて多きを。——嗚呼天地味ひなきこと久し、花にあこがるゝもの誰ぞ、月に嘯くもの誰ぞ、人世の冉々として滅毀するを嗟し、悵として命

運の私し難きを慨す」
と、朗吟調で讀み上げたりした。そのとき透谷は大眞面目で、
「どうも彼女は――僕に對して、ラブがあつたのかと思ふよ」
と、告白した。それでみんなは、
「サア、北村君の艶福だツ」
と、大騒ぎをしてはやし立てたが、透谷はニコリともしないで、死んだ富井の面影を追ふやうに、目を空間に光らしてゐた。みんなは、拍子抜けがした。藤村だけはちよつと心配になつた。富井の死が、透谷の精神の上にあたへたショックは、想像以上に、激しいものだつたのではないかと案じられた。
「君は少し、鋭すぎる」
と、その歸り途、藤村はいつもの言葉をくりかへして、透谷に囁いた。透谷は屹となつて立止り、拔く手も見せず、
「しかし君、僕は、死んだ女友達のことを、座興にする氣はないのだ」
と、打ちかへした。そのときの彼の語調には氷のやうな嚴びしい勢ひがあつた。

第十章

一

透谷二十六歳の年の日記は、八月三十日と九月四日の二日の記録しか殘つて居らない。東北の旅から歸つて間もなく、透谷は、國府津在の前川村に、引つこんだ。透谷の健康は、その前後から、次第に少しづゝ、損はれてゐた。

「何でも一つ、身體を丈夫にしなくつちやならない」といふので、彼は國府津へ引き移つたのだと、藤村は觀察してゐるが、しかし、透谷自身に、病氣の自覺が、どの位あつたかは審かでない。その八月三十日の日記にも、

○國府津在前川村に來り、長泉寺に投ず。蓋し、祖先の骨を埋むる處、家族を携へ、弟と義妹とを與にす。繁雜なる旅行なり。此行、はじめて、エマルソン研究に着手せり。十二月に於て、脱稿し、得んと、期すればなり――。

と、簡單に記してゐるだけである。

私は先日、偶然のことから、櫻井明石氏の令息に、藤村の「春」に、明石が朱筆で書入れをした、貴重な書入本を借りうけることが出來たが、その書入のうち、「春」第二十回の終りの部分に、うすい美濃紙に、朱筆の達筆で、

○明治二十六年八月三十一日

予が神戸なる關西學院に赴任の時、かねて時刻を打合せ置きたる故、透谷は夫人美那子に、ふさ子孃を抱かせ、この國府津の停車場に出迎へをり、五分間の停車時に、盡きぬ名殘を惜みて、西と東にわかれたるが、いづくんぞ知らん、これ、透谷との永訣とならむとは。

と、書かれてあつた。前の日記と照し合すと、透谷一家が國府津に移つた翌日に、明石氏は神戸に赴任したわけである。人一倍淋しがりやの透谷が、都會生活の煩はしさを避けて、故郷に近い東海の漁村に引きこもつたすぐ翌日、彼は友の赴任と聞いて、なつかしさのあまり、妻子を從へ國府津の驛まで友の顏を見にゆかずにはゐられないところに、透谷の誠意がよく窺へる。明石氏も亦、透谷に劣

らない誠實なクリスチャンである。二人が、國府津の驛頭に、車窓に寄つて、互に別れを惜しんだ風景は、目のあたりに見るが如くである。

透谷の祖先が眠るといふ寺のある、前川村は、相模灣の海岸の漁村で、蜜柑畠の多い豐饒な谷一つ隔てゝ、國府津の町に、つゞいてゐる。透谷は、その長泉寺の一室を借りうけて、一家と共に引越したのである。現在では字羽根尾と合せて足柄下郡前羽村字前川といつてゐるらしい。恰度、東海道線が、二の宮から西進して、押切川といふ川を渡つてすぐのところ、國府津驛の構内に入る、ちよつと手前のところが、それである。

長泉寺は小高い岡の上にある。小説「春」はこの寺へ移つた當座の透谷の氣持ちを、次のやうに敍してゐる。

「廂が淺くて、暑い寒いを感じ易かつたこれまでの都會生活にくらべると、彼はせゝこましい樹の下を出て、大木の蔭に移つたやうな心地がした。

高い桁のやうな屋根、枝を擴げたやうな軒、葉裏を見上げるやうな天井——何もかも氣に入つた。心地のよい光が、本堂の側にある窓を通して、射しこむ具合も氣に入つた。おまけに、都會に住むとは違つて、新鮮な魚が安く食へる。海岸の空氣が吸へる。蜜柑畠の香も嗅げる。

何故早く斯ういふ場處に引越して來なかつたらう、と青木は後悔した位であつた。それ程、この漁村の生活は、彼の多病な身に適するやうに思はれた……」

二の宮から國府津、小田原へかけての海岸、――たしかにあの邊は、湘南の海岸でも、氣溫の暖い健康地である。緩漫な傾斜の起伏する一帶の地――小山の上、低い谷間、みな青い蜜柑の葉に埋れてゐる。透谷は、さういふ丘や谷々の間をぶら〳〵歩いて、光る葉や、土の上まで深々と垂れ下つた枝を眺めたり、つよい果實の香を嗅いだりするのが珍しかつた。長泉寺の隣には、常念寺といふ寺がある。その寺は、柴田勝家と共に秀吉と戰つて敗れ、のがれて前川村に入り、入道西入と號した瀧川一益の建立したもので、透谷は或る朝、多くの墓のなかゝら、苔むした一益の墓を見出すことが出來た。しかし、こゝに移つて、大いに仕事をやらうといふ抱負は、思つたよりはかどらなかつた。本堂のすぐ横の、明るい牕のある部屋に坐つて、默々として原稿紙に對してゐる彼の憂鬱さうな姿が毎日つづいた。

彼は「國民の友」と「文學界」の註文を受けてゐたが、仕方がないので、兩方共に、短い詩を書いて送つた。「國民の友」には、「雙蝶のわかれ」「文學界」には「眠れる蝶」が、それ〴〵九月號に載つた。

「眠れる蝶」

けさ立ちそめし秋風に
「自然」のいろはかはりけり
高梢に蟬の聲細く
茂草に蟲の歌悲し

林には
鴨のこゑさへうらがれて、
野面には
千草の花もうれひけり
あはれ、あはれ、蝶一羽
破れし花に　眠れるよ

「雙蝶のわかれ」

ひとつの枝に雙つの蝶
羽を收めてやすらへり
露の重荷にうなだるゝ
　草は思ひに沈むめり
秋の無情に身を責むる
　花は愁ひに色褪めぬ

言はず語らぬ蝶ふたつ
齊しく起ちて舞ひ行けり
うしろを見れば野は寂し
　前に向へば風冷し
過ぎにし春は夢なれど
　迷ひ行衞は何處ぞや

同じ恨みの蝶ふたつ
重げに見ゆる四の翼
雙び飛びてもひえわたる
　秋のつるぎの怖ろしや
雄も雌も共にたゆたひて
　もと來し方へ悄れ行く

もとの一枝をまたの宿
暫しと憩ふ蝶ふたつ
夕告げわたる鐘の音に
　おどろきて立つ蝶ふたつ
こたびは別れて西ひがし
　振りかへりつゝ去りにけり

これらの詩に潛むペシミズムは、今までの、「內部生命論」とか「富嶽の詩神を想ふ」などのロマン

チックな評論にくらべると、非常に弱々しいものであり、しかも、一行書いては一休み、又、筆をふるつて、一句を成しては一休み、ごろつと、疊の上に、仰向けに寢て、古い寺の眞黑になつた天井をにらみながら、すぐ萎れてゆく詩興を辛うじて、つなぎとめるのに骨が折れた。

二

はじめの約束では、明治女學校へも、汽車で講義に通ふことになつてゐたが、來て見ると、さうまめに體をうごかす氣にもなれなくなつて、休講がちになつた。そして少しづゝ彼自身にも病識が感じられるやうになつて來た。

九月四日の日記は、彼の日記のうちでも、特に凄壯の氣に充ちたものである。

○九月四日　われこの地に來りてより後も、常に晏如たること能はざるを悲しむ。

われつら〳〵近時の自己を顧みるに、危機にのぞめること久しと謂ふべし。凡そ一時間も書を讀めば、則ち大いに勞れて爲すところを知らず。思想も亦斯の如し。此地に來りてより、評論の爲に一文を爲さんには、凡そ四五日を費せり。斯の如きはこれまで嘗てあらざりしところ、之を以て余は、余が精神の當を失しつゝあるを知るものなり。

然れども萬事必然の因より、余が多年の辛苦も漸くに水泡に歸したり。寸蓄も之を成す能はず。空しく唯だ獨立せざるの事業に苦役す。斯の如くして、余が精神、遂に亂れざるを得ざるべきなり。

余はたしかに精神の不安の原因を知る。而して遂に之を如何ともするなきを知る。余は多くの者に欺かれたり。希望にもライフにも、すべてのもの、余を苦しむるなり。

余は爰に於て、從來のすべての忍耐を甘んじて打破すべしと決心す。

妻に對することも、妻の家に對することも、我が家に對することも、事業に對することも。

而して我は、之よりすべての事に耐久の精神を破りて、自ら好むところ、自ら題するところの外は、必らず之を爲すまじ。

わが獨立のためには、愛をも犧牲にすべし。

最後は三界乞食の境界あれば、卽ち可なり。嗚呼、男兒、何ぞ斯くの如く長く碌々として、遠慮をのみ事とすべけんや」

この日記を見ても、いかに彼が生活上の困苦缺乏に惱まされてゐるかがわかる。「寸蓄も之を成す能はず」といひ、「空しく獨立せざる事業に苦役す」と訴へてゐる。國府津の古寺に引こもつたことも、

大半は生活難を原因としたことが想像される。海には新たな魚介が豊富であり、畑には澤山の野菜がみのつてゐたが、それさへ、購ふには金が必要であつた。金がなくては、目の前にぶらさがつてゐるものでも指をくはへて見てゐる外はない。九月の海には鰹が大漁であつた。しかし、透谷一家の食膳を賑はすことはなかつた。美那子はたまらなくなつて、

「あたし一寸、實家へ行つて來ますよ。お留守居をして下さい」

無論、少しでも、小遣ひを貰つてくるためであつた。透谷は、何と返事していいかわからない氣持ちだつた。やがて、美那子は英を背負つて、蜜柑畠にはさまれた丘の道を越えて行つた。

「このまゝ、行つたきりになるのぢや、あるまいな――」

サツと不安が掠めて、透谷は我破と起上ると、本堂の段々をかけ下りて、妻の姿を求めた。しかし妻はもう、蜜柑の丘の向うにかくれて、影も見えなかつた。

ガランとした部屋に一人つきりのこされると、透谷は急に、ゐても立つてもゐられないやうな、深い寂寞を感じた。部屋の中には、道具らしい道具も置いてはない。古い寺に特有な、黴臭いにほひもする。彼は、むき出しの黒い太い梁を見てゐると、

「一思ひに、首を釣つたらどんなだらう」

と、妙な想像に走つたりした。妻が東京の實家で、みんなに、いろんな嫌味をいはれながら、十圓

か二十圓の小遣ひを借りてゐる光景も、まざまざと目に浮かんだ。

一晩泊りで、それでも妻は歸つて來た。

「まあ、よかつた。鼠に引かれやしないかと思つて、私もオチオチ眠れなかつたんですよ」

と、美那子は、英が貰つて來た、よだれ掛けなどを、夫に見せながら、明るくいつた。美那子の、どこか樂天的な氣質は、今の透谷には絶對に必要のものであり、美那子が歸つて來たので、急に又、魚が水にもどつたやうに、透谷の氣持ちも、生き生きしてくるのである。

「こんな薄汚い寺に住むんだつて、お前が俺の傍にゐてくれるからだ。お前がゐなくなつては、俺は一日だつて、こんな淋しいところには居れん」

と、其の夜、透谷は久しぶりに、東京のみやげの牛肉を、鍋に煮て食ひながら、泪をながした。

藤村が、前川村の寓居を訪れたのは、それから間もない或る日であつた。

二人は、すぐ海岸へ出た。青い海面が、キラキラ光つてゐた。小説「春」には、このとき二人が、國府津の海へ入つて泳いだことが書かれてある。

「……軈て衣服を砂の上に脱ぎすてゝ置いて、ザブリと海の中へ飛込んだ。彼等は押寄せてくる波濤に向つて競爭で泳いだ。

浪は高かつた。

やゝもすると、岸本（藤村）は流されさうに成つた。青木の方は、斯の海邊に生れた丈あつて、友達よりよく泳げる　彼の體力はまだまだ、さう失望したものでないといふことを思はせた。この考へに力を得て、友達と一緒に浮いたり沈んだりしてゐると、何時の間にか、岸には多勢漁夫が集つて、二人の方へ恐ろしい魚鈎（つりばり）を投げてよこす。

鈎は鳴つて來る。それが右にも左にも落ちる。二人は吃驚した。そこ〳〵に、岸へ泳ぎ着かうとしたが、却つて浪のために、あべこべな方へさらはれて行つた。

また〳〵浪が押寄せて來て、渚の方へ二人とも持つて行かれたかと思ふうちに、轟て崩れ落ちるやうな壯大な音響がした。其時、二人は白い泡の中に立つことが出來た。

海には幸の多い日であつた。鈎にかゝつた鰹は、婦女や子供の群に引かれて、幾尾となく陸へ上つた。

斯の光景を眺めながら、暫時二人はそこに足を投げ出して、暖い心地の好い砂を身體に塗りつけた。甲羅を干す積りで、岸本は這ひのめつて見たが、首を傾けると、耳から汐水が流れて出る。同時に、兩國の河岸でよく泳いだことを思ひ出す。青木は自分の膝頭を抱へて、不調和な社會に倦み疲れたやうな目附をした。

終には、其の膝頭へ、額の着くばかりに重苦しい頭を垂れた。而して、じつと目を瞑つて、岸に碎ける浪の音を聞いた――」

こゝは「春」でも特に有名な個處で、いろんなものに引用されてゐるが、若き日の藤村が、透谷と共に、秋の日の壯絶な怒濤の中に泳いだ光景は、恐らく、事實をそのまゝに傳へたものと思はれる。藤村が歸るとき、透谷も久しぶりに體內に活氣の起るのを感じたので、

「今日は僕も明治女學校へ出て見よう」

と、二人はつれ立つて、新橋行の汽車にのつた。汽車は長泉寺の境內の外れを横切つてゐるので、國府津からのりこんだ二人は、すぐ、車窓から首を出して、前川村の踏切に立つてゐる美那子と、その背中の英に、帽子をふつた。

「おーい、おみやげを待つてろ」

と、透谷は車中から呶鳴つた。車輪の音に打消されて聞えたか聞えぬかわからなかつたが、英が小さい手を出して、體をゆすぶつてゐるのが、見えた。こつちへ來てから、一日ましに疲れた顔になつた夫が昨日は海へ入つたり、今日は學校へ出かけたり、急に活氣づいて見えるのが、美那子には、たのもしいことに思へた。思ひなしか、車窓に立つ夫の顔には、美しい血色がほの見えた。この間、自

分が東京から歸つて來た時、うす暗い本堂の奥の柱にもたれて、キョトンとした顔をしてゐた彼とは、まるで別人のやうに思へた。
「別に、體のどこがわるいといふわけぢやない。あの人のは神經なのだ」
美那子は、踏切を通りすぎた長い車體が、向うの丘のかげに姿を沒するまで、ジツと見送りながら、さう思つた。それから又、青い葉の光る蜜柑畠の道を、ポツポツ歩きながら、
英の好きな
「建武のむかし、正成は――」
の歌を、うたつた。

三

十月、十一月。海邊の秋もやうやく闌けた。うすく蜜柑の實が、色づく頃から、靜かな小春日和が打ちつゞいた。長泉寺の周圍は、何處へ行つても、日あたりのいい丘がある。谷といふ谷には、晩秋の香が滿ちあふれてゐる。畠とはいひ條、寧ろ庭園といつていい蜜柑畠の間を、幾筋も散歩に適した細道がついてゐる。透谷は、勢ひこんでゐたエマーソンの研究もすゝまず、註文の原稿も書けない、憂うつな顏をしかめて、蜜柑の葉がくれに、小春の細道を歩きまはつた。

國府津へ來て見ても、透谷一家の生活は、どんなに儉約したところ、月に三十圓はかゝるのであつた。ところが、最近の收入は、殆ど無に近かつた。

「やつぱり、國府津に來たことは失敗だつたね。田舍だからといつて、飯を食はないわけぢやないんだから、最低限かゝるものはどうしても必要なんだ。さういふことだつてわかつてはゐたが、何か、田舍へ引つこめば、助かるやうな氣がして、見透しもつけずに引越したのが惡かつたのだ」

と、彼は後悔した。或る晩は、夜泣きのくせのついた英を、癇癪まぎれに、透谷は抓つた。英はそれで、火のついたやうに泣いた。

「いつそ、暫く、別れてしまはうか。お前は英をつれて、石坂のところへ歸れ、俺は友達の所に、居候になる――」

そんなことも、夫婦の話題にのぼつた。しかし、本心をいへば、透谷は、一時間でも美那子の傍をはなれる氣はなかつた。自分がともかくも、生きてゆけるのは、美那子が自分の側に、伴侶としてゐるからだといふことは、自分にもよくわかつてゐた。別れ話は何度となくくり返されたが、結局、いつも、口先きだけのことに終つた。美那子にしても、今更オメオメ、英を背負つて、石坂の家へ歸れるわけもなかつた。

「私、決心しましたよ。近所の娘さんを集めて、お寺の本堂で、針仕事や手習ひなんぞを敎へるんで

す」

と、或る日美那子が云つた。そして、早速、長泉寺の和尚に交渉して來た。村の娘で、杉原といふのが、その前から時々出入りをしてゐたので、その子に頼んで宣傳係をして貰つた。

「いい和尚さんですよ。どうせあいてゐるんだから、御自由におつかひなさいましつて。お葬ひのある時だけ、休めばいいでせう」

と、美那子は、さうきまると、すつかり乘氣になつて、持前の無邪氣な快活な笑ひ聲を立てた。笑ふたびに、美しい皓い齒の見えるのも、この人の愛嬌であつた。

「これで、お前が弱かつたら大變だが、お前の身體が丈夫なのは、かういふ時、實に力づよいね」

と、透谷は、この頃いよ〳〵若さの熟して來た妻の體を見ながらいつた。夫婦の愛などといふものは可笑しなもので、この頃のやうに、時々別れ話などが出るやうになると、却つて、餘計、執着がつよくなるのだ。國府津へ來てから、夫婦の間には諍も多かつたが、それだけに又、互にひかれる思ひも深くなつた。

「丈夫もいいけれど、御飯を餘計頂くから、私みたいな女は不經濟よ」

と、美那子は笑談をいつたが、

「でも、まつ子さんみたいに、死んでしまへばおしまひね、いくら綺麗でも——」

「ほんとに富井も、この邊の、暖い土地で、療養すりやア、あんなに早く、斃れるやうなことはなかつたのだ」

二三日すると、村の娘達が集つて來た。蜜柑畑を澤山持つてゐる村一番の素封家の娘なども、やつて來た。田舍娘とはいへ、年頃の女たちが集つてくるので、いつも薄暗い、黴の臭ひのする本堂も、にはかに色めき立つて見えるのであつた。

「月謝はきめたのかい」

と、其の晩、透谷が聞いた。

「いいえ、まだ」

「何人來たのだ」

「五人よ。五人ぢやア、まだ、商賣にならないわ。でも、段々ふえるでせう。そのうち、私は、羽根尾の方へ行つて、戸別に引つぱつて來てもいい」

「前川にだつて、娘はもうちつとゐるだらう」

二人はそんな話をした。

「ともかく、私が働くから、あなたは少し、靜養なさるといいわ」

「いや、さうもいかない。エマーソンを引きうけてあるから」

あせつてお疲れになるのよ」

「…………」

しかし、あせらずにはゐられなかつた。子供が段々大きくなつてもまだ、滿足に妻子を養へない自分の生活を省ると、透谷は尻から追立てられるやうな、辛い焦慮にさいなまれるのであつた。

「いよいよ、俺が、につちもさつちもいかなくなつたら、どうする」

「どうするつて」

「さうなりやア、坊主になるか　死んでしまうかだ」

「…………」

「一緒に、ついて來てくれるか」

「ついて行きますよ」

と、美那子は事もなげに答へた。

四

畠には、蜜柑が、黄色く實つて、枝を垂れる頃となつた。枝のまゝ折つて、自分の家へ持歸ること

は禁じられてゐたが、畠で摘んで食ふ分には、咎められる心配のないのが、この邊の習はしであつた。到るところに、甘さうな、熟したのがある。透谷は、路ばたの木に、甘さうなのを見つけると、もぎつて、袂に入れて、其を喰ひながら、谷間や丘を步き廻つた。枯れた草の上に寢ころんで、青天井を眺めながら、甘い蜜柑の汁を吸ふのは、氣持ちのいいものであつた。しかし、これでは、まるで人の畠の蜜柑を食つて露命をつないでゐるやうなものだ、と思ふと、甘い蜜柑が急に酸つぱくなるやうな氣がした。

その頃、彼は、思はぬ行懸りから、これまでの宗教生活と、緣を切るやうな事態が發生した。宗教生活といつても、本質的な信仰上の問題ではなく、いはゞ生活の便宜上、關係してゐた宣教師たちとの關係を淸算することになつたのである。以前にも書いたやうに、明治二十二年、イビー氏の許に出入するやうになつて以來、ブレスウェート、コーサンドなどの宣教師と交際して、飜譯の手つだひや、傳道旅行の同伴をやつて、臨時の收入を圖つてゐたのであるが、二十五年の十二月には、新たに、ウッドウォースと相知り、その飜譯の手つだひをしながら、傍ら「聖書の友」なる雜誌の編輯も引きうけ、若干の報酬を得てゐたのである。

ところが、其の敎會に、多少のゴタゴタが起り、牧師太田某に對する排斥問題が表面化したのであつた。

そのために、彼は再三、東京に呼び出されたが、教會内の紛糾は、すでに、手のつけられないところまで、燃え上つてゐた。

遂に問題は行くところまで行つて、教會關係者全體の意見を徵する「教會會議」がひらかれ、透谷はその議長に推された。しかし、會議の結果は、牧師太田派に、不利の決定を見た。透谷も、太田派に殉じて、アメリカの宣教師たちと、袂を分つことにきめた。「聖書の友」の編輯主任も、自然解任といふことになつた。

その歸り、彼は、會議の席で激昂したほとぼりがさめないので、人力車の上から、膝にかけた毛布を落としたのを知らない位であつた。

いざ、下りようとすると、毛布がない。

「おい、旦那、毛布はどうしたんですね。困るぢやアありませんか」

と、俥夫は怒つて、劍つくをくはしたが、仕方なしに、又、落とした毛布をさがして、車をもどした。

——彼は、國府津へ歸つても、まだ、亢奮がさめなかつた。美那子をつかまへて、一部始終を語つてきかせた。しかし、やめるのはいいとして、教會からの收入がなくなるのは、この不如意の上に、更に一段の打擊といはなければならなかつた。この頃の調子では、教會から入る分を、原稿料で補ふ

などといふことは、到底、考へられることではなかつた。いよいよ、これで、ほんとうに米櫃にはなれた――美那子は、そんな突きつめた暗い氣持ちになつたが、夫の心を慮ると、こゝで自分が泣き事をいつてはならぬと、强い氣持ちになつて、

「もともと、あなたの本當の仕事ぢやないんだし、よござんすよ、かういふ機會に一思ひに、淸算してしまひになるのも――」

と、勵ますやうにいつた。

その翌日、夫が散步に出たあとで、彼女は夫の日記をあけて見た。

○十一月一日。

……引つゞき、敎會の方の苦情やまず、牧師としての太田君に對する反動起り、從て、余も亦、敎會を辭し去らざるべからざるに至れり。

余は之を以て、機會なりとす。

即ち、斷然、從來、三ケ年間執着せし宗教的生涯を打破し、之より、大いに我が意志を貫くべし。

われ多難なる過去を通り來れり。

この頑骨を抂げて面白からぬ仕事に追ひつかはれたり。看よ。これよりの余が猛志を。エマーソ

ンを脱稿するの後直ちに「公曉」に取りかゝらんか。おもしろし、おもしろし……」

美那子はそれを讀みながら、泪なしにはゐられなかつた。自分達を養ふために、いやな仕事を無理じひにつゞけて來た夫が、いとしくていとしくてならなかつた。夫は、「この頑骨を抂げて」と書いてゐる。そして更に勇猛心を鼓舞して、豫定の仕事に邁進しようといふ氣槪を記してはゐるが、實際の夫の健康は、とてもそれを許しさうにないことは美那子にはよくわかつてゐた。それだけに、無理にとつて、忽ち大影響を來たすことも見透されるのであつた。こんなにまでして、愛してくれる夫の愛大言壯語しずにはゐられない夫の氣持ちもまたわかり、敎會をやめたことが、やはり自分達の生活にの深さに、美那子は胸をしめられるやうな苦しい嬉しさを味ふのだつた。

後年、美那子が藤村に語つて、

「國府津時代は樂しうござんした」

と、告白してゐるが、その樂しさは、このやうな複雜な心理を含蓄した樂しさであつたにちがひない。

彼女は、しばらくは、日記の上に突ぷして顏を上げることが出來なかつた。

散步から歸つて來た透谷は、

のうちに、ドンと體を投げ出す音がした。

「どうして、書けないのだらう。あんなに好きな筈の仕事が――」

と美那子は、そ知らぬ顔をしながら胸を痛めた。

「おい、蜜柑を買つて來てくれないか」

「はい――」

美那子はさつきの泣顏の痕を見られないやうに面を背むけて立つた。そして、近くの畑に入つて、人影のないのを幸ひ、五つばかり枝からもいで歸つて來た。

「有りがたう。こいつは大きい」

透谷はさういつて、皮をむき出したが、

「おい、旗をまいて彌左衞門町へかへらうか」

だしぬけに、美那子の手をとつて、引寄せながらいつた。

「あゝ、びつくりした」

美那子は目をまるくして、呼吸をはずませた。

「そりやアあなたが、お歸りになるつて仰有るなら、私に否やはありませんけれどね——でも、もう少し、頑張つて見ちやアいけないでせうか」

しばらくしてから、美那子は、落ちつきをとりもどしていつた。

「頑張るつていつても、私がやつて見るんですよ。村の娘達だつて、あゝして、少しづつ增えても來たし、よろこんで每日通つてくるのですもの」

「それもさうだが——しかし、人間の力にも限りがあるね。僕は世を破る積りでゐて、却つて自分の心を破つてしまつたのかも知れない。それが殘念といへば、こんな殘念なことはない」

透谷の目から、泪のしづくがポタポタ落ちた。

「そんな氣の弱いことを仰有らないで下さい。悲しくなりますから」

いつか美那子は、夫の膝に突ぷしてゐた。

其の夜、彼は久しぶりに、新鮮な詩興の起るのを感じて、「一夕觀」を書き出した。

「ある宵、われ牕にありて橫たはる。ところは海の鄕、秋高く、天朗らかにして、よろづの象、よろづの物、凛乎として我に迫る。恰も我が眞率ならざるを笑ふに似たり、恰も我が局促たるを嘲けるに似たり、恰も我が力なく、能なく辨なく、氣なきを罵るに似たり」

美那子はほんとうに久しぶりに、夫のペンが、よどみなく、紙の上を軌る音を快く聞くのであつた。英も大人しく眠つてゐる。靜かな秋の夜、浪の音も平和なひゞきを傳へた。美那子は、たのまれもの〻とき物をしながら、夫の仕事の終らぬうちは、自分も朝までにこれを片づけてしまふ氣だつた。

五

そのうちに、透谷は机を本堂の方へ持ち出して、しきりにペンを走らせた。

「大分、書けますね」

「うん、書ける」

「あたしも、今夜は、このときものを片づけてしまひますから、御用があつたらいつでも仰言つて下さいよ」

と、美那子は隣りから聲をかけた。

一時間ばかり經つた。

湘南の秋とはいへ、眞夜中をすぎるとさすがに冷えてくる。何となく襟元が寒い。そのうちに又、ガランとした本堂のしめつぽい黴の臭ひが鼻をつき出すと、透谷は急に疲れがやつて來た。頭も痛い。

筋肉や節々が俄かにけだるく、鈍痛を覺えてくる。かうなると、又いつもの癖で、もう一字も先へ進まなくなるのだつた。

「おい、美那」

と、とう〳〵、彼は妻を呼んだ。

「駄目だ、外へ行かう。頭を冷やして來なければ――」

寢てゐる英一人をのこして、ドンドン本堂の段を下りていく良人のうしろに美那子は從つた。彼は踏切を越え、だらだら下りに丘を下りて、浪の音のする方へ歩いていつた。

空には無數の星だつた。彼はふと天の一方を眺めると、暫く彳んだまゝ、妻の追ひつくのを待つてゐた。やがて彼は、妻に星を指していつた。

「漠々たる大空は、思想の廣い歷史の紙だ。あすこに、ホーマーがゐる。こゝに、シェキスピアがゐる。彗星の天系を亂してゆくのは、バイロンか、ボルテールか」

――彼がつひに氣がちがつたと思ひこんだ美那子は、しつかり彼の體にしがみつくやうにして、ついてくる。

「ホーマーがゐたときにも、プラトーがゐた時にも、かの北斗星は、今夜と同じ、光芒を放つたのだ」

と、彼は叫ぶやうにいつて歩いた。浪打際に出た。夜目にも浪は白く、とゞろくやうな大きな響を打返してゐた。彼は、あまりにも偉大な、天地悠久の自然の前に立つて、人事の儚さを感じたので、ほんとうに、その浪の中に呑まれてしまはうと思つたのだ。蒼々として永遠の色を宿す波濤。腕を拱いて、蒼空を察すれば、又、實に茫々乎たる天涯の歴史だ。このとき彼は、「我れ」も「時」も、所詮は一個の襤褸に及ばずと觀じたのだ。

「浪の中へ行かう」

と、彼は、大きく叫んで、矢庭に妻の體を引つぱつた。ところが、妻の體が、そのときは實に、磐石の如く重かつたから不思議だつた。美那子は必死になつて、抵抗して、彼の體に、我武者羅に、しがみついてゐたのだから重かつたわけだ。

「お前には、自然の威力がわからぬのか。水を見ろ。空を見ろ」

と叫んでも美那子には一向通じない。透谷には、浪が大きな口をあけて、自分たちを待つてゐるやうに思はれるのだが、美那子はどうしても承知しないのだ。

「私は厭です、子供がありますから。——今、二人で死んだら、英をどうするのです」

と美那子は、浪の音に齒向ふやうな、高い金切聲をあげながら、夢中で良人の體を抱きとめた。子供と聞いて、漸く透谷もハツと胸をつかれた。見ると、妻は髪も亂れ、裾もはだけて、眞蒼な顔をし

てゐる。濱邊には誰もゐないからいい樣なものの、俄かに自分の目の中にうつされた恥しい妻の姿に氣がつくと、透谷は急に、情けない氣持ちに返つた。

彼は一度に、腰から下の力を失つて、妻の足もとに、崩れるやうに坐つた。美那子もそれと一緒に氣が拔けて、彼の横に、へたへたとなつた。

うすく濕つた砂が、彼の尻に異樣に、冷い感覺だつた。

第十一章

一

そのころは、寺に住むのが流行つたわけでもなからうが、禿木は谷中の或る古寺の一室を借り、透谷は國府津の長泉寺だし、藤村も鎌倉の古い禪寺に住んでゐた。

そこは圓覺寺の境内になつてゐて、苔の生えた石段を登りつめたところに、門がある。住職とも心安く、すぐ前の飯屋から飯をとつて、のんきな一人住居であつた。

秋もやうやく深かつた。

或る日、透谷から雜誌が一冊とゞいた。「評論」の第十六號であつた。「評論」といふ雜誌は、二十六年四月から、巖本善治が、白表紙の「女學雜誌」を廢刊して、その代りにはじめた文藝雜誌であつた。その十六號には、透谷の「一夕觀」がのつてゐる。藤村は、封を破つて、先づ友の文章から讀み出した。

「月は晩くして未だ上るに及ばず。仰いで、蒼穹を視れば、無數の星宿紛糾して、我が頭上にあり。顧みて我が五尺を視、更に又内觀して我が内なるものを察するに、彼と我との距離甚だ遠きに驚く。

　不死不朽、彼と與にあり。

　衰老病死、我と與にあり。

鮮美透凉なる彼に對して、撓み易く折れ易き我れ、如何に赧然たるべきぞ。爰に於て我は一種の悲慨に撃たれたるが如き心地す。聖にして熱ある悲慨、我が心頭に入れり。罵者の聲耳邊にあるが如し。我が爲すなきと、我が言ふなきと、我が行くなきとを責む。われ起つて、茅舍を出で、且つ仰ぎ、且つ俯して、罵者に答ふるところあらんとす。胸中の苦悶、未だ全く解けず。行く行く秋草の深き所に至れば、忽ち聽く蟲聲、縷の如く耳朶を穿つを」

藤村は、讀みながら、友のゐる漁村の有樣を目にうかべた。この晩夏、二人して、怒濤の中を泳いだ時のことも甦つた。なつかしい氣持ちがした。しかし、透谷の文章には、今までにもあつたやうな、鋭い調子の底に、何ともいへない一種の不安が、ザーザーと音を立てゝ流れてゐるやうに思へた。

「こりや、いかん。こりや、いかん」

藤村は、急いで紙に向ひ、この友を慰める言葉を書かなければならぬと思つた。

その手紙がついて間もなく、こんどは透谷が藤村のゐる鎌倉の寺を訪れた。

と、庫裏の方から、長い廊下づたひに、寺男が知らせて來た。きれいに晴れ上つた秋の晩である。
「島崎さん、お客様ですよ」

人戀しく思つてゐる處へ、日が暮れてからの訪問客といふので、藤村は誰だらうと、胸ををどらせて出た。透谷だつた。

「ヤア、よく來たね」

「手紙を貰つたら、急に、君に逢ひたくつてやつて來たよ」

友はさういつて、不相變の調子で、グタツと、行儀わるく坐つた。まくつた羽織の裾が、夜露にしめつてゐるやうであつた。

「どうしてゐる？」

「とう〳〵、別れることにしたよ」

と、透谷は、ぶつきら棒に云つた。

「別れるつて？」

「どうにも、暮して行けないことがわかつたのだ」

と、彼は悲痛な額に、ふかい皺を刻んでいつた。

「しかし、別れるといつても、決して、崩壊を意味してゐるわけぢやない。寧ろ、僕らのは、建設を目的としてゐるのさ。一旦、別れて、しばらく、形勢を見て、再び生活するだけの根據が出來たら、又、一緒にならうといふのだ。昨夜、やつと相談がまとまつたのさ」
「で、子供はどうする。英ちやんは？」
「あれは、妻の方につれてゆく。石坂の家の居候だ。僕は、又、彌左衞門町で、阿母とくらすのさ」
「大丈夫か――」
と、藤村は念を押すやうにいはずには居れなかつた。
「大丈夫つて、何が？」
と一寸反問したが、
「あゝ、君の手紙にもそのことが心配してあつたが、そりやア君、大丈夫さ。僕は、もう死んだりはせん。死んだりはせんと決心がついたればこそ、妻とも別れて、起死囘生を圖らうといふのぢやないか」
と、彼は眉を上げて、答へた。
「さうか」
「君にしろ、平田にしろ、戸川にしろ、みんなさうだ。僕らが、文筆の士として、獨立し得ないとは、

實に情ない話だ。そりやア、硯友社の奴らのやうに、通俗を迎へれば、立ちどころに、生計の道は立たう。民友社のやうに、一面に文を賣り、他面に政事を弄べば、これも又、處世の法さ。しかし、僕ら文學界の一派は、最も醇の醇乎たるものだ。日本でほんとうに、純文藝を以つて世に立たんとしてゐるのは、僕らだけではないか。立たう。絕對に立たう。又是非にでも、世に立たなければいかん。然からざるときは、日本の文學は、遂に、德川の戲作を出でず、通俗蒙昧の賣文學に墮するのみだ。僕はさう思ふとき、僕らの責任を痛感するのだ。愚圖々々しては居られんといふ氣がするのだ」

「君のいふ通りだ」

と、藤村は、はやくも感激性の目をしばたゝく。

「僕は、日記に書いたのだ。わが獨立のためには、愛をも犧牲にすべし。最後は三界乞食の境界に沒入するの覺悟あれば、則ち可なり。——僕は實に、この意氣を以つて、妻と別居するのだ。しかし、ねエ、島崎君」

と、透谷は調子を和げ、

「さういふ僕も、この間は全く絕望してねエ、危く、やりかけたのさ」

「えツ」

と、藤村も思はず驚きの叫びをあげる。

「一夕觀を書いた夜さ。その日は、實に危い寸前までいつたのさ。あのとき、もし、妻に理性が缺けてゐたら、今頃は、二人とも相模灣の藻屑になつてしまつてゐたらう」

藤村はその話を聞きながら、二度も三度も、ゾツと惡感が、背筋を走るのを感じた。透谷は、その夜以來、死への誘引を淸算して、强く生きることを決意し、そのためには、美那子との戀愛生活さへ犧牲にするほどの、堅い信念に到達したのだと、語つてゐるけれども、打見たところ、彼の健康は決して、舊に復してゐるとは思へなかつた。打ち重なる生活難は、少しも前途の樂觀を許さぬ以上、再び三度び、彼が死の誘惑を發作しまいとは、斷言出來ない。この前は、幸ひに、健康な美那子がゐたからよかつた。透谷が、この好伴侶を一度、死へ誘つて果さなかつたからには、この次は、恐らく、單獨で決行しまいとは限らない。「一夕觀」を讀んで危いと感じた藤村の心配は、彼に再び直面して一層その憂ひを深くした。

「君の、さういふ激しい心は、僕にはビンビン、響くやうによくわかるが、しかし、君が、あの快活ないゝ奥さんと別れるのは反對だよ。あの人がゐて、貧乏を貧乏とも思はんやうにふるまつてくれるから、君の生活は、明るくなるのだ。君一人でやつて見給へ、一日だつて、君の神經は、その陰慘な男ぐらしに、耐へられるものか。たとへ、君の意思が、どんなに建設と再生を目ざしてゐるにしても、結果は、やはり自滅だよ」

と、藤村は、向き直つて、心から忠言を吐露しずにはゐられなかつた。透谷はしばらく默つて、考へてゐたが、

「しかし、君、どんなに儉約しても、僕のところでは、月に三十圓かかるのだ。それ以下ではどうしても暮せない。何しろ、美那は、昔から、お附女中をおいてやつて來た女だからね——それが君、米一升買ふのに事を缺くやうな有樣なんだから。あいつもこの頃は、他人の畑のものを、もいでくるのがうまくなつた。しかし、君がそんなに反對なら、僕らも又、考へ直さなけりやならないが——」

と、透谷は苦しさうな顏をした。

「そりやア、ほんとに、愼重に考へてくれ給へ。率直にいふと君からあの奥さんを引いて、何が殘るかね。——さうだらう」

「さうかね」

——といつて、藤村も、この友のために、何かチヤンとした生活のあてを作つてやる力はなかつた。考へると、自分のいつてゐることの無力さに、もどかしいばかりだつた。

突然、透谷は、

「あツ、誰か僕を呼ぶやうな聲がする」

と、言ひながら、兩手を耳のところへあてがつて、首をすこし傾けた。

「何にも、聲なんかしないよ」
藤村は、少し氣味わるくなつていつた。
「どうかしてゐる。君の神經は、疲れすぎてゐるのだ」
「やつぱり、さうだなア――」
と、彼も自分の病氣を感じたやうに、サツと恐怖の色をうかべた。
其の晩は、二人は、一つの蒲團を引つぱり合ふやうにして、寢つきの惡い夜を明かした。
そして翌朝、門前の飯屋で、一緒に飯を食ふと、そのまま別れた。
「そのうち又來てくれ」
「うん、必ず行く。奥さんによろしく」
黑い羽織を着て、帽子も冠らず歸つていく友のうしろ姿は、飄々としてゐた。藤村は苔の生えた石段の上に立つて、ジツとそれを見送つてゐた。

二

君の厚意ある反對の通りに、別居案は撤回した。その代り、二人は又、慘として相對するやうな日を送つてゐる。貪しい食事を共にするときさへ、お互ひの目と目を、合はさぬやうに食ふ時もある。

一方へ向いては、貧乏とは戰はねばならぬ。又、一方に向いては純文學に對決せねばならぬ。更に一方に向いては、英を養はねばならぬ。――そんな悲しい手紙を、透谷は、鎌倉の友人に、書き送つた。

それから又、暫くして、こんどは藤村が透谷の家を訪問した。

そのとき、若き日の藤村は、一夜を品川の遊廓に遊んだ悔いに、頭を剃つて青坊主になり、鎌倉の住職から、法衣を借り、托鉢姿で、無一文の放浪の旅に上つて、東海道を足にまかせて歩き、やうやく國府津に辿りついたのである。

美那子は、俄道心の藤村を見て、ひとごとではないやうな氣がした。良人の透谷も、いつ、どんなことをやり出すかわからないので、決して油斷は出來ないのであつた。何しろ、この人たちの考へることは、人生にも名利にもあたりまへの執着がないのだから、やりたいことがどうしても出來ぬとなれば、いつでも、この世を蹶つて立つといふ氣合が見えるのが、傍にゐる者にしたら、心配でならぬところなのであつた。

「島崎さんのやうになつたら、どうします？」

と、詰るやうにいふと、良人は平氣で、

「俺が、あんなへマなことはするもんか」

と、いつてのけるけれど、實際は信用が出來なかつた。もつと、もつと、思ひ切つたことも、やり

かねない良人の氣性が、恐ろしいのだつた。

しかし又、國府津へ來てからは、良人の自分に對する愛が、一層深くなつて來たことも、美那子には、はつきり感じられた。良人はよく、家庭の束縛が、自分の才能を枯らすのだといふ風に惱んでゐるが、その實、ますます堅く、自分をかき抱いて、放すまいとする氣配がわかるのである。その點では、良人は激しい矛盾に苦しめられてゐるにちがひなかつた。そして、民友社からのエマーソンの傳記は、三分の一ばかりのところで、ピツタリ停つてしまつたし、勢ひこんでゐた戯曲の創作も、構成が出來たゞけで、その儘になつてゐた。始終、頭が痛い、といつてゐる。内部の疲勞と衰弱は、この頃では、もうその表情や目の色にまで、あらはれてゐるやうに思へるのである。それでゐて、友達を相手に文學論や政治論をやり出すと、血色が顏に上つて、とても元氣さうになる。自分を愛してくれるときも、さうだ。時にはまるで、新婚當時のやうな、若々しい烈しい情熱を示すこともある。

どうもわからない。しかし、わからないにしろ、氣は許せない——何時、この間のやうな、發作的な行動に出るかも知れないからだ。英さへゐなかつたら、そりやアどうせ、自分の一生は、良人にすべて捧げつくしてゐるのだから、ついて來いといふ處なら、浪の底でも地の中へでも、どこへでも自分一人はかまはないのだが、何しろ、二人の間には、あの小さい英がゐるのだもの——と、美那子は歎息した。

京橋・彌左衞門町の透谷の母のおゆきも、近頃の息子の健康については、非常に心配であつた。時時、東京へ出ると、ひよつくり數寄屋橋の店口にあらはれる息子の顏は、一二年前とは、見ちがへるやうに、尖々しく蒼かつた。

小田原時代から、がせいに働くことでは、評判もののおゆきは、數寄屋橋の店も、殆ど一人で切り廻してゐた。戸じまりから竈の下の火の用心、火消壺の蓋のしめ具合まで、一々自分で見て廻つて念を押さないと、眠れない方の性質であつた。勝手を働くときは、必ず次男の垣穂に、店の番をたのんだ。垣穂は透谷とはちがつて、きさくな方であつたから、少々ぐらゐ面倒臭いと思つても、嫌な顏を見せずに、母の指圖に應じた。おゆきとすれば、垣穂ばかりが可愛いいわけではなかつたが、何かにつけて、すぐ矛をむけてくる門太郎より、柔順な弟の方が、親しみ易く、遠慮がなかつたのは、當然であつた。門太郎が、女房子をかゝへて、田舍の汚い古寺なんぞを借りて、食ふや食はずの貧乏ぐらしをしてゐるのも、世間ではまるで、親に對して、何かいひ分でもあつてしてゐることのやうに取つてゐるのが、おゆきは業腹であつた。

「だから、いはないこつちやアない。あたしのいふことをきかないからさ――」

といふのが、このごろのおゆきの口癖であつた。大體、はじめから、おゆきは透谷たちの結婚については、强硬な尙早論を唱へてゐた。まだ、自分一人飯のくへないものが、家を持つのは早すぎる。

持つていい時がくれば、息子の方でいはなくても、親の方で持たせずには措かない、といふのが、おゆきのやうな勝氣な母としては、當然の言葉で、それを何でも、一緒になりたいと、母の反對に横車を押した透谷のやり方は、今になつて、それ見たことか、と、母の手きびしい逆襲を受けるのは止むを得なかつた。

それに石坂家が相當知名の家柄だけに、おゆきは餘計つらかつた。緣を結ぶ以上は、先方とも、なるべくは、對等の交際がしたいと思ふのが、親としての自然の情であつた。それを石坂家では、大事な娘を、風來坊のやうな貧書生に、劫奪されたかの如き口吻を洩らしかねないのであつたから、おゆきとすれば、先づその點からして、大體氣に喰はぬ話なのである。そればかりでなく、このごろの透谷夫婦の生活態度については、北村側の親類からも、いろいろな苦情が出てゐた。あんなことをしてゐて、門太郎さんは、先々どうしなさる氣だ。定まつて入るべきものもないのに、子供は出來る、病氣のやうではある。お母さんも、あれを默つて見てなさる法はあるまい――といふやうな駄目も出て來る。

おゆきも氣が氣ではなかつた。若し、このまゝ放つておいて、ほんものの氣違ひにでもなつたら、どうしようと思ふと、さすがに女心の、胸さわぎが靜まらぬ程であつた。氣違ひまでゆかなくとも、いよいよ、食ふに困つたあげ句は、夫婦心中などといふことも、やりかねない氣性だからと思ひ、若

し、そんなことでもされたら、世間に對し、又、先祖に對して、どんなに肩身のせまい思ひをしなければならぬかわからぬと思つた。――もう、國府津の生活がすつかり行詰り、どん底まで行つてゐることは、おゆきには、よく見えてゐた。

本當をいへば、ともかく、一年なり二年なり、夫婦わかれをして、お互に心身の衰弱を囘復するまで、美那子は實家へ、透谷は數寄屋橋に引取るのが、最上分別にちがひなかつたが、そんなことをいひ出したら、息子は、目を血走らし、噛みつくやうに、亢奮して自分を罵るに知れてゐた。事實、今までにも、一寸、その話にふれかゝると息子は俄かに語氣を荒く、

「ぢやあ、何ですか。つまり、お母さんは、別れろといふんですか」

と詰め寄せるので、おゆきは止むを得ず、辯解の言葉を吐いたり、ほかの話に、鋭鋒を反らしたりしなければならなかつたのである。そんならせめて、親子三人を、店の二階に置いて、自分の監視の行き屆く範圍に入れたら、多少は病氣も違ふだらう――といふのが、おゆきの第二案であつた。

「垣穗、ねエ、どうだらう。お母さんは、せめて、さうでもしないことには、門の體は、とても、持たないと思ふんだが――」

と、或日、おゆきは、垣穗に、その第二案を打あけた。

「さうですね。この間、島崎さんに逢つて聞いたんだが、神經衰弱は大分昂じてゐるらしいですよ。

何でも、夜、嫂さんを波打際まで引摺つて行つたこともあるとかつて」

「だから、あたしは云つたんだよ。定收もないものが早く家をもつたら、きつと、そんな、見苦しいことをしなきやならなくなるつて。いくら、美那子が學問があるつたつて、そりやお前、人のくらしの道を立てるなあ別だからね。あたしには、最初から、今日の有さまが、目に見えるやうだつたんだ」

と、おゆきは愚痴でもあれば、痰呵でもあるやうな、いひ方をした。

「まあ、兄さんが歸つて來たにしても、家ん中の、刄物や何かは、かくしておくこつてすね。どこかへ出かけるやうな場合も、誰かうしろから尾行してゐないと、危いですよ。萬一のことがありますからね」

と、垣穗も眉を曇らせていつた。

「まあ、そんなに、神經をとがめてゐるんだらうか」

「どうも、そんな樣子らしいですよ。ちよつと見ると、わからんけれど」

「とにかく、それぢやあ一刻も心配でゐられないよ。お前、明日にでも、國府津へ行つて、よく門太郎と話して來てくれないかねエ。この際、すべて、お母さんにまかして、もう一度だけ、彌左衛門町に、歸つて來てくれるやうにつて」

と透谷は自嘲するやうにいつた。モルヒネと聞いて、おゆきは身ぶるひをした。
「毎晩、寢られないんで、國府津の醫者に一服盛つて貰つたんですよ」
「まあ、恐ろしい。そんなものをのんで、癖になつたらどうしますえ。美那さんも美那さんだ、ちやんと傍についてゐて何故、そんな藥まで、のませるやうな破目にしたんです——」
おゆきはさつきから、それがいひたくてならなかつた。美那子は、默つて、俯いて口少なに、申譯がありませんと答へるばかりだ。
「今夜からは、そんな恐ろしい藥でなしに、もつと、別の睡眠法を工夫しなさい」
「そんなことといつたつて、駄目ですよ。僕の不眠は、とても頑固で、一筋繩でいくやうなもんぢやないんだから」
——そうしてもう、話すのも草臥れるといふ風に、頭の毛をむしり乍ら、さつさと二階へ上つてしまつた彼は、やがて、勢なくションボリついて來た美那子に、
「斯うなつたのも、すべて俺の運命だよ。お母さんなんぞにいはせると、先づ第一、俺たちの結婚は、馬鹿の骨頂だといふんだらうが、僕は斯うなつた現在でも尙、僕の取つた道は間違つて居らんといふ信念に變りはないよ。世間の奴等にくらべて、決して、決して、恥しい結婚をしたのぢやない。結婚がさうなら、その後の家庭生活にしてもどこに、やましい態度があつたか。僕の事業も又然りさ。僕

が文學によつて立たんとする意志は、いよ〳〵詰腹を切る土壇場に於いても、後悔はせん。僕は、僕の意思する通り生きて來た。その結果、まあ、かうして、舊の默阿彌に戻つてしまつた。いはゞ、二の丸も燒けおちて、おい、この御本丸だけが、僅かに落城の日を支へてゐる。まさに、矢盡き、刀折れた。しかし、僕は、泰然として、僕の一生を誇りながら、自滅するね。――どうだ、ここまでくると、人間も、大悟徹底出來るものだらう」

と、彼はしやべり立てた。美那子は、はじめは、又、この人の負惜しみといふ位の氣持ちで聞いてゐたのが、何だか段々に、胸をしめつけられるやうな氣になつて來た。久しぶりに、良人の立派さが仰がれるやうな氣にもなつた。この人のいつてゐることを聞くと、この人はたゞの氣狂ひぢやアない。氣狂ひどころか、立派な魂の持主が、たゞ、世に容れられず、戰略を誤つて、こんな所に追ひつめられてしまつたのだ――そんな氣持ちが、胸に高く溢れて來て、自然と泪が頰を傳はつた。

「わかつてゐます。わかつてゐます。美那子だけはよく、あなたの心がわかります」

さう心でいひ乍ら、美那子は、良人の體に取縋つた。

「でも、まだ、最後といふわけぢやありません。早く身體をなほして、もう一度、鬪つて下さい。そしてあなたの信念を世の中に徹底させるのです」

と美那子も必死に答へた。

「うん、この二階が、當分の足場だ」

彼は右腕に美那子の首を抱きながら、部屋の中をキョロキョロ見廻した。それから彼は、しばらく、美那子を相手に、戰爭に於ける最も壯烈な自爆の話などをしてきかせた。自ら爆彈を投じて、敵を倒すと共に、己れもその硝煙の中に消えてゆく精神の、限りない美しさについて、熱心に語るのであつた。

「敵にずつかり取りかこまれたら、俘虜になるよりは、自殺した方が、男らしいからね」

などともいつた。それから急に、俺は髮床に行つてくるといつて、出て行つた。

あとで、美那子は、このごろの自分がとんでもない誤解をしてゐたことに氣がついた。良人はたゞの生活難による神經衰弱といふやうな、弱々しい女々しいものではない——もつと、逞しい理想を擁して、そのために、俗人生と痛烈な戰ひを挑んでゐたのが、敵にはかられて、動きのとれぬ陷穽に、足を踏み外してしまつたのである。無論、そのことは、前から美那子は、わかつてゐたことではあつても、俄かに良人の樣子が變り、世間からもさういはれると、或はほんとうに、神經が狂つたのではないか、生活苦に壓迫されて、精神が消耗したのではないかと、卑俗な想像で、良人を見る癖が、いつのまにか、ついてしまつてゐたのであつた。良人はそんな弱い人ではない。强い人なのだ。强すぎる程の人なのだ。そのために、却つて、こんなに深い傷手を負つてしまつたのだ——美那子はさう思

ふと何としてでも、良人の體を、昔にかへさなければならないと、決心した。

夕方、良人が歸つて來た。又、不機嫌な顏になつてゐた。

「どうなすつたの？」

「馬鹿な奴だ。俺が床屋へいくのまで、垣穂があとをつけてやアがる。人を氣狂ひあつかひにするのも、いい加減にして貰ひたい」

「まあ――」

それから、彼は、盛んに又、莨をやり出した。狹い部屋がすぐ煙で一杯になり、冬の夕まぐれの、まだ、瓦斯燈に灯の入らない一ときの、薄闇中を、二人は所在なく、煙につゝまれた黑い影のやうに相對してゐた。

「美那さん。少し、お店をたのむよ」

と、階下から、おゆきの聲がして沈默が破れた。それもおゆきが、息子の病を思ふ僅かな苦言の意味を含めたものだつたが、透谷にすれば、見當外れのうるさいおせつかいにすぎなかつた。

夜――久しぶりに盛場に近い土地の騷音に妨げられて彼は一層、神經が冴えてしまつた。二時になつても三時になつても眠れなかつた。彼はソツト床を出て階下へ下りると、母の枕元に坐つて、

「お母さん、お母さん」

と、肩をゆすつた。おゆきは驚いて目をさました。
「お母さん、さつきの藥を――あれがなくちや、駄目なんだ」
「お前まだ、寢られないの」
「だから、早く、おくれ」
と、透谷はおゆきの前へ手を出した。瘠せて細い手であつた。
おゆきはしばらく枕元の合財袋を手さぐりでさぐつてゐたが、やうやく、それを見つけて、默つて息子の手の上に置かうとして、却つて自分の手が、ひつつれるやうに、慄へて、自由が利かないのに氣がつくと、ハツとした。おゆきは、氣を取り直していつた。
「まあ、門の手も、隨分、瘠せたね。子供のころぐらゐしか、ないぢやないか」
「何しろ、こゝ一月ばかりは、毎晩この通りなんですから――」
透谷は勝手もとに下り、冷い水道の水で、白い粉藥を一いきにのみ下した。
午前三時といふので、さすがに新興の都會の夜も、ひつそりと、音無しかつた。國府津なら、耳のはたで、浪の音が強く鳴り出す頃だな、と思ひながら、彼は又、床に戻つた。

四

待ちやれ待ちやれその手は元へもどしやんせ無慘な事をなされまゐ手の指の先にてもこれこの露にさはるならたちまち零ちて消えますぞへ

吹けば散る散るこの花の生命とは悟つたやうな人の言ひごとこの露は何とせう吹きもせずゆうべむすんでけさは消ゆる

草の葉ずえに唯ひとよかりのふしどをたのみてもさて美い夢一つ見るでもなし野ざらしの風颯々と吹きわたるなかに何がたのしくて

結びし前はいかなりし消えての後はいかならむゆうべとけさのこの間もうれひの種となりしかや待ちやれと言つたはあやまちとくとく消してたまはれや

この詩は「文學界」第十一號に掲載されてゐる「露のいのち」といふ透谷の詩である。數寄屋橋の家に戻つて、神經の衰へと、周圍の壓迫に惱まされながら、僅かな餘力を驅り立てゝ書き上げた短章であるが、最後の「とくとく消してたまはれや」といふやうなところにも、既に、透谷の背後に、不

氣味に掩ひかゝつて來た死の翳といふやうなものを、直觀することが出來るものである。「待ちやれ待ちやれ、その手は元へもどしやんせ、無惨なことをなされまゐ」といふ書出しの一句も、何か迫つてくる暗示的な印象がある。彼が、二十六年十二年二十八日夜、彌左衛門町の家の物干場で竟に咽喉を突くに至る前にも幾度か、彼の手は、鋭い刄物を己が咽喉元に擬しながら、「待ちやれ待ちやれ、その手は元へもどしやんせ」と、躊躇逡巡することが屢々であつたのであらう。

——或る日、弟の垣穗が目をまるくして、美那子の所へやつて來て話した。

「嫂さん。僕は驚きましたよ。不相變、マント一つで、歩いてゆくから、いつものやうにソツとうしろをつけていつたんですがね、ドンドン入つて行つたところが、嫂さん、場所もあらうに、品川のお女郎屋なんですよ。僕も、それ以上は尾いてゆけないので、そこから引返して來ました」

「まあ、品川ですつて」

「さうなんですよ。兄さんは、今迄も、あゝいふ場所に、足を入れてたんですか」

「サア、私は知りませんよ。私が來てからは、そんな風は一度も感じられなかつたけれど、それとも、私が、とんまだから、氣がつかなかつたのかも知れない」

と、美那子は、笑談口をきいたが、內心はドキリとさせられた。案の定、その翌日も、夕方になると、透谷は又、ブラツと外へ出てゆく様子なので、美那子は目くばせをした。垣穗も何氣ない風を裝

つて、すぐ、裏口から、彼の背後をつけていくと、やはり又、品川の女郎屋へ上つたといふ報告だつた。透谷の性格のすべてを知悉してゐるつもりの美那も、さすがにこれだけは諒解に苦しんだ。
「このごろは、夕方になると、どこかへお出掛けになるやうだけど、一體どこへいらつしやるんですか」
と、我慢しかねて、美那子は彼を問ひつめた。すると透谷は、ふんと、鼻で笑つて、
「聞かなくつたつて知つてるだらう。若し、知らないなら垣穗にきいてみろ」
と、険しい眉をうごかしていつた。美那子は、あきれて二の句が出ないでゐると、
「あんまり、うるさいから、度肝を抜いてやらうと思つて、品川へ上つたのだ。親切な、いい花魁が出てきてね。お前たちとちがつて、その花魁は、俺を狂人あつかひにはしなかつたぜ」
さういつて、ごろりと、仰向けに寝ころがると、それが癖の、細い腕を枕にした。美那子は默つて、うなだれてゐた。何ともいへない苦々しい悲痛が、胸を襲つてゐた。透谷には、その妻の悲しみもわかつたが、目の前には、もう今日で四日も通ひつゞけてゐる品川の遊女の俤が、ボウツとあらはれてゐた。
その花魁は、昔、小田原で、若鮎づりの女の髮の毛をくれた、おせんといふ呉服太物屋の娘の顔にそつくりであつた。引附部屋の障子をあけて、女が入つてきたとき、彼は、一瞬、目を疑つたくらゐ

であつた。小田原のおせんの家は、隣町の遊女屋への出入を專門にしてゐたので、透谷の母のところへたのみに持つてくる仕立物も、大部分は、花魁の帶とか裲襠とかいふものであつた。久しぶりに、品川の遊女を買つて、透谷は、少年時代を思ひ出してゐた。

ふきの大きい、厚織の裲襠を縫ひながら、指先に、血をふく程あかぎれを切らしてゐる若い母の姿も目に見えた。出來上つた錦襴の帶や、派手な模樣の袿を、衣桁にかけると、せまい汚い家の中が、急に、なまめかしい空氣に包まれて、子供の自分までが、何となく浮々しずにはゐられなかつた當時のことが、なつかしく思ひ出される。

「そのおせんといふ子が、ぼくに、髮の毛をくれたんだ。ぼくの田舍ぢやア、若鮎を釣るには、みんな女の髮の毛で釣つたもんだ。ぼくは、それが手に入らないんで、毎晩、女の髮の夢を見たのさ。それでも、自分の方から、女に物を貰ふなアロ惜しいから、ぼくはしなかつた。すると、暗いお濠端の柳の葉が、女の髮の毛に見えたり、お城下町の夜、行きずりの女の洗髮の匂ひに、頭がボウツとなつたりしたもんだ。おせんが、そのとき、向うから、ぼくに髮の毛をくれるつて、いひ出したのさ」

と、透谷は、花魁をつかまへて昔物語りをした。

「そのおせんちやんて人、あんたに惚れてたんだね」

と花魁も話につりこまれた。

「あとにもさきにも、女の髪を拔いたのは、そのときだけだつた。一本ではたりないんで二本、三本と拔いてつた。おせんは、はじめは、痛いつていつたが、段々馴れてくると、拔くコツも、拔かれるコツもわかつてきたのさ。そしてね、拔き終つてから、おせんが云ふにはね、その代り、あんた、外の女の子のを貰つたら承知しないよ、つて……」

この花魁も、かういふ商賣の女には珍しい、毛筋のいい髪をたつぷり持つてゐた。そればかりでなく、女は何となく世をはかなむ風が見え、物言ひにも捨鉢な調子があつた。不思議に强く惹かれるものを感じた彼は、その翌日も、女の氣持ちを引いて見た。女に若し、その素地(したぢ)があれば、一人ではどうしても死に切れない自分の氣持ちに、はづみをつけて貰へるかも知れないと、思つたのであつた。

五

透谷は、我破(がば)と立上つた。美那子が、勝手元へ行つた留守を伺つて、今日も逃げるやうに外へ出た。暫くして、美那子が二階へ上つていくと、透谷の姿はもうなかつた。又、品川へ行つたんだなと、美那子はすぐ思つた。まさか透谷が、花魁を死の道づれにしようと思つてゐるとは知らなかつたから、今になつて、そんな汚らはしい女にとり憑かれた良人の氣持ちが、全く不可解であつた。理想を唱へ、美を讃へる日頃の文學的主張とは、似ても似つかぬ所行にちがひなかつた。

このことは、小説「春」の中でも、透谷の死後、夫人の感想として、一寸だけ觸れてゐる。
「あの刀騷ぎをする前に、幾晩か品川へ通つたことがありました。――あればかりは、奈何しても私にわかりません」
といふ未亡人の言葉が寫されてゐる。先日、私（筆者）が、未亡人にお目にかゝたつ折も、その話が出た。現在でもまだ、未亡人は、當時の品川通ひといふものに、不審を抱いてゐられる樣子であつた。
しかし、透谷は、妻を死への道づれにすることが不可能と悟つた以上、たとへ相手は遊女でも、一諸に死んでくれるなら一思ひにやつてしまはうと決心したのである。一再ならず刄を握つた自分の手に、もう一息の力を貸してくれるものがありさへすればいいといふ程の、思ひつめた感情に逼られてゐた。
五日目の晩、彼は、いよいよ今夜こそ、それをいひ出さうと思つて、女を待つてゐた。しかし、女は、その晩に限つて廻つてくるのがおそかつた。
彼は、苛々した。しかし、こんなことで、苛々するのでは、とても死ねたりするものではないとも思つた。そのうちに、夜が更けて來た。彼は、置去りにして來た妻の心を思ふと、急に、氣の毒でならない氣がした。

彼は遣手を呼び、今夜はもう歸るからといふと、遣手は、花魁が今、頭痛がするから一寸休んで行きます故待つてゐて下さるやうにといひなさんした、どいふ口上だつた。さういはれると彼は又歸るに歸れない氣持ちだつた。

しかし、それから又、一時間程待ち呆氣をくつた揚句、彼は、そのおせんに似た女に逢ふことなしに、しよんぼり、品川を出た。

「女郎と遊ぶのなら、かうして又、おそくなつても、妻の傍に歸つてゆく。だが、これで若し、ほんとに俺が死んだら、俺はもう二度とかうして、妻の傍へは歸れないのだ。妻は、永遠に置去りにされるのだ――」

かう考へると、彼は、胸を、錐でもまれるやうに辛かつた。

「俺は、生きなければいかん。妻のためにも子のためにも、死んではならんのだ」

と、彼は我が身に言ひきかせた。さう思ふと、今夜、あの花魁に逢はずにしまつたのは、危機一髮のところであつたかもしれぬと考へられた。若し女が、こつちの話に乘つてきて、どうせ生き甲斐のない身體だと、跋が合へば、實際今夜にも、二人は心中騷ぎを演じてゐたかも知れないのだつた。

「おゝ、桑原、々々」

と、彼は襟を縮めた。師走の風が、急に身に沁みるやうに思へた。

もう、鐵道馬車もないので、彼はポツポツ歩いた。一時すぎてゐた。薩摩つ原までくると、やうやく辻車が寒さうに毛布をまいて客を待つてゐた。

「おい、乘せないか、京橋までだ」

「へえ、どうぞ」

車夫が梶棒をあげると、彼は、くらくらと目が昏みさうになつた。

「旦那、どうなすつた？」

「何に、大丈夫だ」

「醉つてなさるなら、ゆつくり挽かうか」

「いや、飛んでくれ、大急ぎだ」

と、彼は答へたが、自分でも、體に無理が來てゐることは、よくわかつた。車は威勢よく走つた。

おそいのに、妻はまだ起きて待つてゐた。

「今夜も品川ですか」

と、妻は落ちついた聲で訊ねた。

「今夜は、ふられたよ。もう、僕は、二度と行かんから安心しろ」

「心配なんかしてやしませんよ」

「そいつは豪儀だね。でも、こんどのことは俺が悪かつた。一寸、魔がさしたのだから、勘辨しておくれ。しかし、一々、俺のあとを尾行したりするのがいけないのだ。家中の刄物をかくしたり、そんなことをするから、俺は、とび出していくのだ」

「それは、ほんとにすみませんでした。でも、みんな、あなたが眠れなかつたりしてゐるので、心配したんですよ。あとをつけたんだつて、悪氣でしたわけぢやないんですから――」

「女郎買ひをするやうな奴に、死ねる筈はないから、安心するんだな」

「でも、ソラ、無理心中つてこともありますからね」

「馬鹿。どうせ、心中するなら、もう少し、ましな相手を選ぶよ」

と、透谷は、いひまぎらした。

「ぢやア、ほんとに安心して、もう決してあなたのあとなんか尾けませんから、あなたも、あたしの傍をはなれないで下さいよ」

人のいい美那子は、それで心から安心したやうに、堅く良人の手を握つた。

深夜――突然、大きな物音が、物干場の方に響いて、美那子の夢を破つたのは、それから、一週間とはたつてゐない暮の二十八日であつた。

一度は家の中の刄物といふ刄物を、すつかりかくしてしまつたのだが、一寸、氣を許してゐた間に、彼は佛壇下の抽斗から、鋭い短刀を取出してゐたのである。

物干のある所は、臺所の上にあつて、二階の鍋町寄りの窓から、すぐにそれへ出られるやうになつてゐる、眞先きに、美那子が寢間着のまゝ飛出していつた。階下からも異樣の物音にびくりした垣穗がつゞいてかけ上つて來た。

物干場には、黑い影が倒れて、呻り聲を發してゐた。美那子は、ふり廻してゐる右利腕にとりすがつて、血のついた刄物を奪つた。その間に、垣穗は、創口をしらべた。血がタラタラと胸もとへ流れてゐたが、動脈を外れてゐることは、素人目にもすぐわかつた。

刄物をとられると、彼はぐつたりして、垣穗の胸にくづれた。出血のために、氣が遠くなつていつた。

おゆきが醫者をつれてかけつけた頃には、傷ついた體は、垣穗と美那子の手で、窓から部屋の中に運ばれてゐた。

醫者は一寸、傷口をしらべたが、

「急所は外れてゐますから、御心配はありません。ともかく洗つて、繃帶をしておきますから、夜が明けたら、東京病院にでも、おつれになつて、診て貰つたらいいでせう」

さういつて、簡單に手當して、鎭靜劑だといふ粉藥を一服おき、立ちがけに、この病人は、外科よりも內科の方ですな、と、味な言葉をいひすてゝ歸つていつた。明け方に、病人は目をあけて、しきりに妻の手を探がした。そして、美那子の手を握ると、又、昏々と深い眠りに入つていつた。

「私の不注意から、とんだことになりまして、申譯ございません」

と、少し落ちついてから、美那子はおゆきにあやまつた。おゆきは何とも答へず、きびしい顏を硬ばらしてゐた。

「でも、大怪我でなかつたから、何よりさ。それに、お父つあんが出張中だつたのが、まあ、よかつた」

と、傍から垣穗が、取りなすやうにいつた。段々、外が白んでくると、透谷の靑い寢顏が、浮き出すやうに鼻筋だけを光らした。白く、大きく、繃帶が咽喉をまいてゐる。それを見てるうちに、美那子は突然、激情に襲はれた。どんなことがあつても、この人を殺してはいけない。若し、この生活がいけないなら、再び、父母の家を去つても、この人の魂を守り通さなければいけない――それが、自分に負はされた責任の一切だ。彼女はさう思ふと、頭の中の血が一度に亢奮して波立つのを覺えた。

「脈も大分靜かになつたやうです。この分ぢやア、お父つあんに、知らせてやる必要もなささうですね」

と、垣穗は手をはなした。脈博は九十二ばかりであつた。

六

翌日の午後、彌左衛門町の家からは、幌を深くおろした二臺の俥が出た。前の車は相乘で垣穗の腕に、傷ける透谷が抱かれてゐる。うしろの車には、美那子が一人、着替へを入れた信玄袋を膝にのせてゐる。師走も押しつまつた寒い日で、おまけに朝から、强い風が吹いてゐた。塵埃が黄色い烟のやうに舞ひ上つて、屢々、車を立止らせた。幌が風にバタバタ鳴り、しまひには、今にも幌が吹きさらはれさうな氣配だつた。

東京病院の病室に運ばれた透谷は、もう、皆のするまゝにまかせて、大人しくベッドの上に橫たはつた。院長の診斷では、入院の必要もない程度であるといふことだつたが、美那子は當分、病院の靜かな環境の中で、傷を癒したいと思つた。出がけに、おゆきの希望もたしかめておいた。おゆきも、日頃の氣性に以ず、昨夜のショックにはすつかり氣負けしてゐた。車が出るときも、いつになくオロオロして、顏の色をなくしてゐた。少しぐらゐ、掛りがしてもいいから、いい病院に入れて、二度と、こんなことが起らぬやうにして貰ひたいとおゆきは思つた。

出來るだけ、事を內輪にして、世間の耳には入れまいとしたが、それでも、どこから洩れるとなく

洩れて、夕方には三四の見舞客があつた。美那子が一々、應待に出て、病人との面會は見合した。客のなかには明治女學校の生徒たちもあつた。

「今ね、明治女學校の方たちが、お見舞ひにいらつしやいましたよ」

と、病人が時々、思ひ出したやうに、目をあける時を見はからつて、美那子が知らせた。

「さうかい。誰々だ」

「松井さんや佐藤さんたちでした」

「齋藤は？」

「お冬さんですか。ゐませんでした。お萬さんの話だと、少し感冒をこぢらして、ずつと寢ついてゐるさうですよ」

「それは知らなかつた」

「でも、富井さんとはちがつて、お冬さんは、あんなに見事な體格をしてゐるのだから、心配なことはないでせう。どうも今年の感冒は、性が惡くて、なか／＼サツパリしないさうですから」

「しかし、年頃だから、樂觀は出來んよ」

病人は、力のない、嗄れ聲でいつた。これは不幸にも透谷の豫感が的中した。齋藤冬の水々しい肉體は、ふとした感冒がもとで、恐ろしい黴菌に蝕まれ出してゐたのである。例の相馬黑光さんが次の

やうに云つてゐる。

『卽ち藤村さんに於ける佐藤お輔さん。透谷に於ける齋藤お冬さん。お輔さんが抒情的な大きな目を持つた色白な美しい人で、しかし極めて穩當で、尋常な婦人であつたのに引かへて、お冬さんは何處までも冴えた人柄、頭腦の人で、實にはつきりした對照をなしてゐました。それでゐて、結局二人とも傳統的な情操、理知的教養から來る諦觀、しかもはげしい情熱に肉體をむしばまれて、二十歲あまりのうら若さで、病んで仆れて行つたところは、やはり同時代の女性の姿、さうしてこれこそは、當年問題になつた明治女學校の戀愛至上主義、プラトニッククラヴの好標本であります』

——まもなく、花屋が花を屆けて來た。今の女學生たちの名が、ローマ字で、カードに書いてあつた。

「そら、お冬さんからのも、ありますよ」

と、美那子が、束になつた水仙の黃色い花を見せた。透谷は、一寸、首をあげようとして、傷口の痛みに眉をしかめた。

「この際、徹底的に病氣を癒して、昔の身體にして頂くわけには參らぬでせうか」

美那子は院長室の椅子にかけて、熱心に院長にたのんで見た。しかし、院長の意見は又別であつた。

「傷口が癒つてしまへば、それ以上、こゝに置いても、何にもならんのですがな」
「あの人の病氣は、傷だけではないのでございます。神經そのものを、癒して頂かなければ」
「それには、根氣が要る。癒す人も、癒さうとする人も、もつと、長い根氣が要る。一週間や二週間、入院したところで、すぐ、どうといふわけにはいかんです」
「さうでございませうか」
「それやアさうですとも。私共としても、家族の方が、よほどその點を承知してかゝつて下さらんことには、うつかりお引受けは出來ない。それに神經々々と仰有るが、現在お見受けしたところでは、醫學上に謂ふ精神病者に該當するものとは考へられない。こんどの事件にしても、單純な精神病的發作とはどうしも思へない。むしろ、もつと、思想的なものに原因してゐる。とすれば、既に、北村さんの場合は、醫學の境域を出てゐるのだといふことも出來る。私としては、要するに、早く且つ完全に、傷口を治癒せしめれば、それで醫者としての仕事は立つ、――さう考へてゐたのです。そして幸ひに、抜糸もすみ、もう、傷口が完全に舊に復したのですから、私共としては、御限院が願ひたい。これ以上に立入ることは、醫者としては、はたして奈何か。――實は、さう考へてをる次第なのです」
と、院長は説明した。
「私は又、傷口ばかりでなく、良人の精神の傷も、お醫者様の手で、癒して頂けるものだと思つてを

りました」

美那子は、醫者にまで匙を投げられた思ひで、がつかりして答へた。美那子は病室へ歸ると、

「院長さんが仰有るにはね、あなたはもう、病人ではないんですつて」

と、透谷の傍に立つていつた。大きな繃帶も、すつかり小さくなつて、申譯ばかり咽喉にまいてある。血色も段々もとへ戻つて來てゐた。

「でも、私は心配ですよ。又、家へ歸ると、どんなことをなさるか知れませんもの」

「いや、もう、決して心配はかけん」

「そんなことを仰有つて、私、信用しませんわ。この間だつて、決して死んだりしないつて、お誓ひになつて、すぐのことだつたぢやありませんか」

「こんどこそ大丈夫だ」

「さア、どうですか」

「それに、歸るなら、彌左衛門町には歸りたくない」

「えゝ、そのことも、昨日、とつくりお母樣と相談したんですよ。お母樣も、こんどのことでは、よくよくお懲りになつたと見えて、門の病氣には、やつぱり、芝あたりの、閑靜なところがいいんぢやないかつて仰有つてるの。銀座の眞中ぢやア夜通し車の音が斷えないんだから、あなたのやうな神經

の過敏な方には、無理にきまつてるんですよ。さうかつて、又、國府津や小田原ぢやア、あんまり遠くて、オイソレと樣子を見にゆくわけにもいかないしつて――」
「芝なら、もとの家は、空いてゐないかね」
と透谷は、昔の借家を思ひ出すやうに、訊ねた。
「さうですね、早速、當つて見ませう。あすこなら、まはりに樹もあるし、夜も早くから、シンとしてしましふし」
――その家は、前にも書いたが紅葉館の裏手に當るところで、飯倉の通りへ出られる細い坂道に接した位置にあつた。土地が高燥で、樹木も鬱蒼とした具合が、彼の性質によく協つてゐる。
「しかし、又、家を持つのはいいが、すぐ降參して、兜をぬぐんでは駄目だからなア」
と、彼は、心細さうにいつた。
「でも、こんどのは、お母樣から、公然お許しが出たんだから、今までのやうに强引にやるんぢアないから」
透谷はそれに答へず、目をつむつた。閉ぢた目蓋の間から、やがてジメジメと、泪がにぢんで來るのを、美那子は氣がつかず、病室を出た。
母と妻の、どうしても調和しきれない一線――それは、透谷の良心を、いつも苛酷に脅かしてゐる

ものであつた。巖本善治氏の「滿州からの通信」なる一文にも、さうした透谷の惱みの一片が傳へられてゐる。曰く、

『一　透谷は非常な親孝行でしたが、口とふだんの行ひに出さず。心に幾十倍思ひせまる質で、其の戀女房と母と同居して、理想的の「ホーム」を作り、母には孝子、妻には良夫となりたといふ、切なる美しき理想に對し吾が思ふ様にならぬことを、俗人ならば、左程苦にも思はぬことを、透谷にとつては、堪へ難き程の苦痛に感じたやうです。

二　透谷が私に語つた言葉で、永久に忘れられぬ印象を私に殘したのは、左の一句です。

（厭世といふものは、家庭の平和の破れたとできなくては起りません。）

三　透谷の論文を讀む人は、透谷が青年時代に尊敬したる社會改革家の愛孃を、「ライバル」に打ち勝つて、（透谷自身の私に話した言葉のまゝ）純潔なる處女を妻としたることを、彼が無上の孝心を捧げんとしたる母に、自分の感ずる程、諒解して貰へなかつた點を、承知して、而して後、彼の論文を讀まば、種々の聯感が、起りませう――」

七

恰度都合よく、芝公園の舊居は、空家になつてゐた。美那子は、すぐ、契約して、病院から、眞直

に、その家に戻ることにした。無論、兩親にも垣穗にも異存はなかつた。その代り、こんど、もしものことがあれば、すべての責任は、美那子が負はなければならなかつた。

しかし、こゝへ移つてからの、病人の樣子は、日ましに薄紙を剝ぐやうによくなつて來た。「文學界」の同人たちも、代る代る見舞ひに來ては、安心して歸つた。透谷も、この頃は、平氣で咽喉の創痕を見せたりした。

「どうも、文學界の人たちは、遠慮がなさすぎて、病人のためを思はないのは困りますねェ。なるべく、これからは、文學界の人たちには、お逢ひにならない方がよろしいんぢやないでせうか」

と、美那子は、時々、苦言をいはずには居られぬ程、その人たちの話はあけつ放しだつた。

「そんなことはない。あいつらの話を聞くのが、一番俺には、ためになるのだ。少し位、神經が疲れても、俺はあいつらの話を聞きたいのだ」

と透谷は主張する。美那子はそれより、宗教方面の人に來て貰つて、なるべく信心深いやうな話をして貰ひ、良人の苛立ち易い精神を鎭めようと考へてゐる。この頃は、自分まで、朝晩、良人の病氣全快を神に祈るやうになつてゐた。

「しかし、どうしても僕には、あんな風に、安易に神佛を信ずる氣には成れない」

と、さういふ宗教家の歸つたあとで、必ず透谷は不滿を洩らした。美那子の心づかひも、この點で

は、全く徒勞にすぎなかつた。

「どうも、奥さんが、あんまり僕らが逢ひにゆくことを好まんらしいよ。やはり、神經が立つてゐるので、逢つたあとがよくないのだらう」

――「文學界」の同人會なぞで、そんな話が出るやうにもなつた。

「といつて、放つとくわけにもいかんぢやないか」

と藤村がいふ。同人の中でもやはり、一番しげしげ見舞ひにゆくのは、藤村と秋骨の二人であつた。

「しかし、奥さんの考へ方にも疑問があるね。あれでいよいよ、北村をして、孤獨の鬼と化せしめるだけだ」

と、冷酷に突放すやうにいふのは、天知であつた。そのうちに、見舞ひに行くと、奥さんが出て來て、玄關を上らせないといふやうな噂も飛んだ。

さういふ或る日、――それは二月初旬の風のつめたい日であつた。玄關のあく音がして、いそいで美那子が出て見ると、その頃の若い女の風俗である厚い毛糸のショールを三角形に肩にまいた齋藤冬が立つてゐた。

「まあ、お冬さん」

と、美那子は、驚いていつた。驚くのも無理はない。冬は一寸見ぬ間に、半分以上も、痩せてしま

つたのである。一體、齋藤冬といふ人は、富井まつ子のやうな華奢な女とはちがつて、背も高く、その背に相應して肉付もいい、がつちりした體格の人だつたが、それが見る影もなく肉落ちて、痩せたといつても、その痩せやうが、まるで骨を磨いたやうに、鋭く、薄く、痩せ切つてしまつてゐた。顔も生き生きとはり切つてゐたのが、げつそりと頬が落ちて、まるで、象牙細工のやうに、透き通つて見えるのであつた。

「どうなすつたの。お風邪でしたの。大層お痩せになりましたね」

「えゝ、もう、自分でも覺悟して居りますの。でも、どうせ死ぬなら、仙臺へ歸りたいと思ひまして、その前に、一目先生にお目にかゝらして頂きたいんで參りました」

と、冬は小さい低い聲でいつた。美那子は當惑した。このところ、折角快方に向いてゐる良人に對して、訪問客はなるべく逢はせない方針にしてゐる。原稿の依頼も、實は透谷には全く知らせずに自分の所で、一切ことわることにしてゐる。現に、昨日も、「文學界」の三月號のことで、わざわざ足をはこんでくれた星野天知と云ひ爭ひをしてしまつた程である。まして、この場合、相手は胸を病んで、誰が見ても、恐ろしい傳染の危険のある病人である。その上、前から、明治女學校で噂に上つてゐる因緣の人である。神經を病む者に逢はして、いい結果のあらう筈はない——さう思ふと、美那子はここで一思ひに、ことわつてしまふ方が、お互のためだといふことは重々わかつてゐるのだが、現に目

の前に、瘦せ細つた佳人の、必死の氣持ちを見てしまつては、おなじ女として、どうしてこのまゝ歸れといふ苛酷な言葉が發しられようか。美那子は、いまゝでの、すべての精進、祈り、深慮が、一度に挫折してしまふ思ひで、冬を病室に案內してしまつたのである。

透谷は床の上に起きてゐた。もつとこつちへ來たまへといつても、冬は部屋の隅にうづくまるやうに坐つて、

「いいえ、私の病氣は、うつる病ですから――たゞ、一目だけ、先生のお顏を見てから、仙臺へ歸りたかつたのでございます」

さういつて、手巾を出して泪をおさへた。

「この間は、ありがたう。君の水仙が、一番あとまで、花をつけてゐた。あれを見ながら、僕は思つた。君は決して、病氣なんぞに斃される人ぢやない」

透谷はいつになく、元氣に云つた。

「いつ、歸るんです」

「明日、迎へが來てくれることになつてをります。向うへついたら、やはり、すぐ、病院へ入つた方が、ようございませうね」

「病院つて、どこです」

「宮城病院でございます。隔離病室を、とつてあるさうですから」

と、冬は冷靜な調子で答へた。その頃はまだ肺病といふものが、必要以上に怖れられてゐたので、初期の患者でも普通の病棟に入ることは六ケしかつたのである。

「先生、二度と、こんどのやうなことは、なさらないで下さいましよ。かうして、私のやうに、病氣に打負かされてしまふ者もゐるんですから、先生なんか、ほんとに、お生命を大切になさらなければ。冬が死ぬ前に、決して、そんな勿體ないことをなすつてはいけませんですよ」

と、冬は心を籠めていつた。透谷は默つて、うん、うんと肯いてゐた。が、

「お冬さん。心配しないでいい。こんな馬鹿な眞似はもう決してしない。久しぶりに、靜養が出來たから、こんどこそ、立直りますよ。もう少し暖くなつたら起きて、大いに書きはじめる。そして、世間の奴らの不健全な思想に、筆誅を加へるつもりです。僕の思想を不健全なりとするものを、逆に、不健全として、大いに戰ふつもりでゐる。あなたの病氣も、もうちつと暖くなりさへすれば、きつとよくなるのだ。さうしたら、又、東京へ出て來なさい。僕もその時分には、明治女學校へ出かけますよ」

と、彼は泪を流しながらも昂然としていつた。

「でも、お元氣な樣子を拜見して、とても、うれしうございますわ。私もこれで、ほんとに、安心し

て田舍へ參れます」

冬もやつと心が落ちついたといふ顏を見せながら、やはり、全身をうごかすやうなスリルに手巾を濡らしてゐた。外では、强い北風が家のまはりの樹々を吹く癇高い音を鳴らした。部室は暗く、對座した病人の二つの影が、黑い輪のやうな印象をのこした。——その晩、冬は第一回の、いよいよどうにもならぬ恐ろしい病狀を自覺させられて、それからどつと惡化した。しかし早晩かうなる運命はわかつてゐたので、無理をしてでも、今日、北村先生に逢つて來たことは、冬の最後の恍惚たる感動にちがひなかつた。

第十二章

一

櫻の咲く頃には、咽喉の創も、もうすつかり、癒つて、醫者の手から離れた。それでも恰度咽喉佛の上に、相當に目立つ創痕が殘つてしまつた。彼はときどき、妻の鏡臺に對つては、咽喉の創痕をしらべて見た。

「どうもこれがあつちやア、うかつに人中に出られまいなア」

「そんなことはありませんよ」

「淺いわりに、隨分醜い」

「さうやつて、鏡の反射で照らし出すから、よけい目立つんですよ」

と、美那子は宥めるやうにいふ。透谷は、まるでそれが生恥を、自分から見せびらかしたやうに思はれてならない。何故あの時、もう一息、手に力が入らなかつたのであらう。ほんのちよつとのことで、咽喉笛を破つてゐたら、血が氣管支へ流れこんで、恐らく生命を絕つことが出來たのだらうに、

――つまりこの創はさういふ看板を出してゐるやうなものだと思へた。

――さう思ふと、自分のやり損ひに、むやみと腹が立つた。死ぬにも死ねない男、くたばり損ひ、――

彼は「文學界」の同人會にも、幾度か出かけようとして中止した。美那子も、稀には氣晴らしに、行つて見た方がいゝとすゝめるが、透谷はいざとなると、勇氣が出ないのであつた。自然、昔にまして、メランコリイにもなつたし、嫌人癖もつよくなつた。

それに、このことがあつてから、收入の道は、ばつたり閉ざされた。明治女學校の給料と、教會からの手當（十五圓ばかり）それに僅かな稿料とが、それまでの彼の月收であつたが、今はどこからも、入つてくるものがない。止むを得ず數寄屋橋から月々の仕送りを仰がなければならなかつた。その頃、たばこ雜貨の商ひの方は、おゆきの丹精で大分繁昌してゐた。そのうちの一部を、芝の方に廻しても、大して苦にならぬ程度だつた。月末になると、大ていは弟の垣穗が、狀袋に入れたいくらかの金を持つて、芝の家を訪れた。

何とかして、自分で生活してゆきたい、といふ彼の苦心は、却つてますます、彼を窮地に追ひこんでいつた。人の世話になりたくないと、あせればあせる程、かうして、手をつかねて、人の扶助を受ける破目になつた。

或る日、金をとゞけに來た垣穗をつかまへて透谷は云つた――

「この金を、狀袋に入れて、お前に渡すとき、お母さんは、どんな顏をするね」
「別に――」
「門太郎も、ソロソロ三十といふに、困つた奴だ。いつまでたつても自分一人で、オマンマが食べられない。一體この先き、どうする氣なんだらう――つて、きつとさういふだらう」
「そんなことはいひません」
「いゝや、云ふ。いふにきまつてゐる。金を惠む人といふものは、必ず、さういふ文句が入用なのだ」
「だつて兄さん。親子ぢやありませんか。親子の間で惠むも惠まぬもないでせう」
「親子だつて、僕のやうに、親の氣に入らぬ女房を持てば、やつぱり、いろんな文句を聞かされることになるのだ」
「そんなことはありませんよ」
「僕はその文句がつらい。つらいから、何とかして、人の世話になるまいと頑張つたが、遂に多年の辛苦も水泡に歸してしまつたよ」
「兄さんは病氣になつて、たゞ、一寸、ひがんでゐるんですよ」
「いや、ひがみなんかぢやない。ほんとうのことをいつてゐるのだ。しかし、いくら文句附のお金で

も、これがなければ、親子三人、干乾しになつてしまふんだから、我々は何ていはれても、感謝はしなければならない。歸つたらよくお禮をいつてくれ」

さういつて透谷は、狀袋を懷に入れて、自分の書齋に入つてしまつた。書齋は、壁に作りつけの書棚がある洋間風で、疊敷ではあつたが、內側から棧が下りると、外からは全く樣子がわからぬやうになつてゐた。大體芝の家は、周圍に樹が多い關係で、濕氣がつよく、閑靜ではあるが、日光が入らないから、隨分陰氣な間取りになつてゐた。中でも、書齋が一番ジメジメして暗ぼつたかつた。その暗い部屋に胡坐をかいて、彼は一日中考へこんでゐるのだ。身體にいい筈はなかつた。

美那子も、透谷をかういふ環境にいつまでも置いておくことの危險には、無論氣がついた。良人の病氣は、もつとどころか、明るいところへ引つぱり出せば、きつとよくなる、と知りながら、しかし先立つものは、お金だつた。

「何しろ、透谷は人の世話になるのがきらひな性分でござんしたからね。まして、石坂の實家から、金を借りて來ることは、どうしても許しませんでした。でも、あとから考へると、いくらきらひな性分でも、默つて借りて來てしまつて、私の一存で、無理にでも、轉地させてしまへば、それでもいやとは、申さなかつたでせう。やつぱり、私が世事にうとかつたので、あゝいふ悲しい目にあはしてしまひましたんです」

と、或る時、未亡人の美那子が、私に往時のことを述懐したことがある。しかし、ほんとうをいへば數寄屋橋の家でも、石坂の家でも、もうその時分の透谷に對しては、實はばづきり見切りをつけてゐたのだ。數寄屋橋では、まだしも月末に生活費を屆けるだけの義理をつゞけてはゐたが、石坂の方では全然無頓著であつた。無頓著といふより彼等は寄るとさはると、透谷への非難に夢中だつた。咽喉を突いたときにも、誰一人、見舞ひに來るものはなかつた。それどころか、あの事件以來、石坂家の冷淡は一層强まつた。とんでもない狂人文士に、大事な娘をくれてしまつた、といふのが彼らの合言葉であつた。透谷にはそれがよくわかつた。結婚以來、透谷はその俗物的な嫌味と鬪ひ、そのために發奮したり、鞭撻したり、焦躁したりして、遂に空しく、最後の土壇場に立至つたのである。

ところが、その頃になつて、透谷はいよいよ恐ろしい懷疑に陷らざるを得なくなつた。それは、石坂家が物質的援助をしないどころではない。もつと恐ろしい計畫をしてゐるといふことが、始終頭の中を掠めるやうになつたのである。

石坂家では、手を代へ、品を代へて、美那子を自分から、取りかへさうとしてゐる――といふことだ。これは透谷の單なる脅迫觀念でも、被害妄想でもなく、事實、その當時の石坂家の人々には、當然あつて然かるべき考へ方だつた。

病人は無力であつた。若し、石坂家の人々が、彼の手中から美那子を奪取しようと考へるなら、全く赤子の手を捻じるやうなものである。自分はその場合、何の抵抗も、何の術策も施すことを知らないであらう。さう思ふと、彼は不安に一刻もゐたゝまれなくなるのであつた。彼は床を蹴つて立ち、狹い部屋を、ぐるぐる歩き廻つたが、もはや、昔のやうに、外へ飛出して友達を訪ねる勇氣もなかつた。まして品川や盛り場を歩いて、氣を晴らす餘裕もなかつた。

二

「美那」

と、結局彼は妻を呼びつけて、

「石坂の家では、お前に歸つて來いと、いつてゐるのだらう。こんな病人の傍に、いつまでも附いてゐるのは、愚の骨頂だと、お前に智慧をつけるんだらう」

彼は妻の手を、永劫にはなさないぞといはぬばかり、力一杯に堅くつかんでゐる。

「さア、はつきり言つて見ろ」

「そりやア、そんなこともいはないぢやありませんけど」

と、美那子は正直に答へる。

「誰がいふんだ」

「お母さんも――父だつて、云ひますよ」

「それで、お前は、よく僕から逃出さうとしないね」

「大丈夫ですよ。そんな、義理しらずぢやアありません。それに、英だつてゐるんですものね」

「歸りたければ歸つてもいゝよ。僕は引きとめたりしない」

「私が若し、歸つたら、あとはどうなさるでせう」

「一人で、立派に病氣を癒して見せるよ。この病氣は、そこまでいけば、自然に癒る病氣だよ」

「それぢやアまるで、私がついてゐるために癒らない病氣みたいね」

「さうかも知れない」

「いやですねエ」

「數寄屋橋では、少くとも、さう見てゐる。門太郎の病氣は、美那子のせゐだ。その點、石坂家と好對照だよ」

そんな風にいひながら、彼の言葉と感情は矛盾してゐた。握つてゐた手が、痙攣するやうにふるへて止まらないのは、頭の中がいひ樣のない嫉妬のやうな苦痛で一杯のせゐだつた。

彼は夜中でもときどき不安になつて、妻の存在をたしかめずにはゐられなかつた。一そ、一思ひに、

妻も子も、殺してしまはうかと思ひなやむことは一再でなかつた。

それが、微妙に美那子の胸にも不安をあたへるので、美那子はその頃から、寢室を別にした。自分は殺されてもいいが、英まで死なすには忍びなかつたからである。

この申出に對して、透谷は案外素直に肯いた。

「もう、看病されるやうな病人ぢやアないんだから、僕は一人で寢るよ。その方が、物を考へるのに、却つて都合がいゝ」

さういつて、その晩から、彼は書齋に寢ることになつた。美那子と英は、隣りの六疊の居間に並んで寢た。

しかし、一人で寢て見ると、彼は、その淋しさに、慄然とするのだつた。かうして、妻も子も、段段に自分から離れていつてしまふのだと、思はずにはゐられなかつた。妻は石坂家へ、子は數寄屋橋へと、結局、ちりぢりになつて、自分から去るのだ。その方が、むしろ妻子のためには仕合せであるとも考へられる。自分が斯うして生きてゐる以上は、妻も自分を裏切つてまで、石坂家へ歸ろわけにもいかない。しかし、すでに、自分といふものを離れてしまつた妻の心は、裏切りも同樣ではなからうか。裏切つた女を、無理に傍に引きつけておいて何になるであらう。さう思ひつめていくと彼は、自分が一番愛してゐるものまでが、いかに自分と甚しい距離の向うにゐるかに氣がついて、愕然とし

た。

そのころ、彼は、二つばかり、石坂家からひそかに美那子のもとに送られた手紙を發見した。それには、無論、透谷に對する憎惡の言葉が列ねてあつた。しかし、透谷は、それに對してもう昔のやうに、直接の怒りをあらはす力はなかつた。たゞ、彼は一日中、陰氣な書齋に、美那子を引きすえて、ジクジク遠廻しに嫌味をならべては、美那子をこまらせた。美那子も、兩方からさう挾打ちにあふと、自分で自分がわからぬのであつた。或は自分まで、ほんきで別れるつもりなのかと、自分にきいて見たいやうな氣がしてくる。若し、本氣で別れると云つたらどうなるか。昔はよく平氣で別居の相談をしたこともあつたが、今、それが現實的な問題になつたら最後、恐らく良人は、自分を殺さずにはゐまいといふ氣がする……。

或日、美那子は、飯倉の方へ、買物に出た。

彼女は、風呂敷包一つで、普斷着のまゝだつたが、そのまゝ、スタスタと歩いて、いつのまにか、虎の門のあたりまで來てしまつた。

「このまゝ、うちへ歸らなかつたら、どうなるかしら」

と、ふと思つた。無論、石坂へは歸れない。たゞ何といふことなしに、このまゝ姿を消してしまふのだ。女中奉公をしてもいゝ。――そんなことも考へながら、またスタスタと歩いた。お濠端へ出た。

彼女はお濠の青い水を見ながら、いつそ英をつれてくればよかつたと思つた。さうすれば、このまま、どこかへ行つてしまへたかもしれない。その方が、良人のためにもいゝ。良人はきつと、自分に捨てられたと思つて、今の氣持ちを取り直し、心機一轉の生活に入ることが出來るかも知れない――さういふことでもない限り、良人の病氣はよくならないのだ。――さう思ふと、自分の存在が良人の病氣を惡くしてゐるといふ強い責任も感じる。しかし、それはたうてい、實行出來ることではなかつた。彼女は、やはり、置いて來た英に心をひかれ、病褥の良人の身に心をひかれて、悄然と踵をかへした。

一時間以上もたつてゐたので、芝の家では透谷が、もしやと、心を戰かせてゐた。しかし、どうやら、妻の歸つて來た樣子にホツとして、書齋を出て來た。

「どこへ行つてゐた」

「少し、運動して來ました。あなたも、毎日散歩をなさるといゝんですよ」

と、美那子は、云ひまぎらしたが、二人の顏の間には、すべてを物語る幾筋かの、心の波が交流した。オヽオ、危かつた――と、二人は、同じやうに、危機を感じ合ひ、それをどうやら切り拔けたことに、ソツと胸を撫でおろした。

――花が散つて、若葉が萠えた。

芝山内の木々の綠も、一日ましに冴えわたつた。透谷の憂欝は、いよいよ最後の一歩手前まで來てゐた。

三

明治二十七年五月十五日。その夜は月のいゝ晩であつた。晝間は、妻を書齋に呼び寄せて、去年「早稻田文學」に出た逍遙氏の「吾が國の史劇」といふ論文を讀ませた。

「大丈夫ですか、こんな御本をお讀みになつて」

と、美那子が用心して訊ねると、

「讀んで貰つて、わかるかどうか、自分の頭を試めして見るのだ」

と彼は答へる。

「そんなこと、なさらなくつても、よござんすよ。今に、體さへよくなれば、いくらでも、お好きなやうに讀めますよ」

「いや、さうではない。自分の頭中の働きを信用出來ないぢや、一刻もたまらないぢやないか――まあ、ともかく讀んでみてくれ。はつきり發音してね」

さういはれて、美那子は、緊張してその論文を朗讀した。

透谷は默つて、少し首を垂れて、聞いてゐた。一區切り讀んで、

「いかゞです。もつと讀みますか」

「やつぱり默目だよ。まるで、頭へ入らんのだ。お前にはわかるかい」

「わかりますよ」

「お前の頭は、それなら、正常なんだ。僕のは、もう壞はれてゐるのだ」

「そんなことはありませんよ。わざと、駄目だ駄目だと、思つてゐらつしやるから、私の聲が、筒拔けになつてしまふんですよ」

「さうかしら」

「さうですとも。もう少し讀んで見ませう」

しかし、次の一章を讀んでもやはり、全然わけがわからなかつた。こんどは美那子も一寸、氣味のわるい思ひがして、あとをつゞけて讀む氣もなかつた。

――そんなことがあつて、透谷の絶望は、遂に來るべきところに來たといふ感じだつた。

彼は、その晩、特に、妻と名殘を惜しむ風も見えなかつたが、宵のうちから、ひそかに心中に決するところがあつたのである。

彼は、例のやうに、妻と子が隣室で、すでに安らかな寢息を立てゝゐるのをきくと、ソツと、書齋

を抜け出した。彼はしばらく、公園地内を、フラフラ歩いた

藤村の顏がうかんだ。秋骨の顏も見えた。二人はやはり、透谷にとつて、かけがへのない友人であつたと思つた。それから、死んだ富井まつ子との思ひ出に、しばらくふけつた。どうせ、今、かうして一人で死ぬ位だつたら、富井と一緒に死んでもよかつたのだと、思つた。おせんの顏が出て來た。小田原の海や山が、まるで幻燈を見るやうに、公園の樹々の間に、はつきり見えた。おせんの顏がいつのまにか、品川の花魁の顏になつてゐた。

彼は歩き疲れて、公園のベンチにかけたまゝ、夢を見てゐるやうに、次から次へと、思ひ出を繰り返した。實に明瞭な記憶の再生であつた。

彼がこのとき、まだ、自分の記憶力が、この通り、ちやんと正常であるといふ自覺を持つたら、彼は、この瀬戸際で、辛くも立止る餘地を感じたかも知れなかつた。しかし、彼は、しきりに過去の追憶にひたりながら、その自覺に取縋るちよつとした常識を忘れてゐた。それが全く、運のつきであつたのだ。妻に讀んで貰つた文章が全然わからなかつたといふことだけが、たゞ無性に彼を絶望させてしまつた。

しかも、その間際でも、彼は自分の胸底に迸る憤りのあるのをつよく感じてゐた。彼をこゝまで追ひつめた俗物達の卑劣な嘲笑に對して、彼の神經は、まだちつとも休まつてはゐなかつた。

自分は、悟つて死ぬのではない。はかなんで死ぬのでもない。人は何と見るにしろ、所謂厭世思想にとらはれて死ぬのではない。たゞ、戰ひ敗れて、自刄するやうなものだ。自分の死は昔の武士が、最後の一戰をして、花々しく討死をするのと、全く同一なのだと自分に云つた。

しかし、これ以上、もう生きる力はない、と觀ずることは、思想の頽廢であらうか、と彼は自ら問うた。

「いや、決して、僕の自殺は、頽廢ではない」

と、彼は明瞭に答へ得られた。彼は、過去の、才能の豐富な名將たちが、武運つたなく、討死する壯絶な場面を思ひうかべた。敵は十重二十重にとりかこんでゐる。自分の病軀はそれと同じやうに、今はもう、逃げて再生を圖ることも、打つて出て、敵を追ひ散らすことも出來ないのだ。かうなれば、誰だつて、自分で死ぬ勇氣だけがのこされてゐる——

彼はそのことを、最後に何かに書きしるしておきたかつた。でないと、世間の奴は、自分の今夜の行爲を、發狂沙汰か乃至は、厭世自殺ぐらゐに片づけてしまふ外はないと、思つたからだ　發狂沙汰はまだいゝ。死を讃美して死んだとか、ペシミズムとかニヒリズムだとか思はれるのは眞平だ。そんな不健全な汚名だけは受けたくないと思つた。

しかし、それも所詮、この世への愚かな未練にすぎないと思ふと、自分の死がどんな誤解によつて、

侮りを受けようと、かまふもんかといふ氣になつた。彼の頭腦は、夜の更けると共に、いよいよ、明晳になつて來た。

若し、誰かゞこのとき、彼に細い紐の代りに、原稿紙とペンをあたへたならば、彼は往年の元氣をとり戾して、忽ち素晴らしいエッセイをものしたかも知れなかつた。彼は最後の、異常な決心によつて、衝動的に、精神の正常を取りもどしたのであつたが、それだけに又、その決心は、强く、逞しいものであつた。それはこの前、咽喉をついた時よりも、遙かに意欲のつよいものであつた。

月は中天にのぼつて、いよいよ明るかつた。彼はベンチを立ち、死場所を選んだ。何も殊更、大きな樹を選ぶ必要もなかつた。一寸、表から入つたところの、割に背の低い杉の木の前に立つて、彼は最後の瞬間に、たしかに健康な北村透谷となつて、死に就くのを見屆けるやうに、目を閉ぢて、おのれの心をうかゞつた。

四

朝まだき。美那子は玄關の戶が激しく叩かれるのに、吃驚して目をさました。

「北村さん、起きて下さい。大變です」

美那子はすぐ、恐ろしい豫感に顫へた。急いで帶をしめ直し、寢間着の上に羽織を着て、玄關をあ

けた。戸の外には、見知越しの近所の女中の顔が見えた。

「大變です。お宅の先生が、裏の木に―

「木―」

「奥さん、大丈夫ですか。おちついてゐて下さい」

女中は、太い手で、美那子の腕をつかまへるやうにして、現場を指した。そこは家から、ものゝ一丁とははなれてゐなかつた。いはゞ庭つゞきの公園地內であつた。しかし、薄い朝霧を通して、木と木の間に、まだそのまゝになつてゐる良人の姿を見たとき、美那子は、膝を失つて、ガクガクと地べたに尻餅をついてしまつた。

「奥さん――」

女中も思はず、美那子の體に取りすがつて、泣き出した。今まではりつめてゐた感情が、一どに破れて、もう、どうすることも出來ないのだつた。

向うから、その女中のゐる家の主人が、やはり、寢卷姿で近づいて來た。偶然、彼の職業は警部であつた。透谷の家から、ダラダラと下つた、小さい坂下の借家に住んでゐた。

「奥さん。お嘆きは無理もありません。しかし、幸ひ、私が發見したのですから、特別のおはからひを致しませう。但し御內密に願ひますよ」と、警部は靜かに云つた。

美那子は幾度か立上らうとして、どうしても腰が上らなかつた。
「いや、奥さんは却つて、來られん方がいゝでせう。私とこれとで運んで差上げますから」
さういつて、警部は女中を促して、又、木立の中へ入つていつた。
美那子は、霧の中で、遠く演じられる夢幻劇を見てゐるやうに、頭が驚きで、馬鹿になつてゐた。
警部は、職掌柄、いかにもなれてゐるやうに、すぐ、木から體を引きおろした。そして、立ちすくんでゐる女中に、何かいひつけながら、うまく、するつと背中におぶふと、木立の中を出て來た。
それを見ると、美那子はやうやう立上つて、いそいで警部のそばへ走り寄つた。
「もう、駄目でせうか」
「駄目でせうな」
「何時間位、經つてゐませう？」
「サア、――やつたのは、夜中でせうから」
その一丁程の道が、いかに長かつたことか。
美那子は歩きながら、腹の底から噴き上げてくるやうな强烈な涙を流した。とう〳〵、死んでしまつた良人の心が、いとしくていとしくてならなかつた。良人の、惡戰苦鬪の人生も、これでいよいよ終つたのだと思ふと、こんな可哀さうな人か、またとゐるだらうかと、胸がはりさけるやうに思はれ

警部の背中に、他愛なくだらりとなつて背負はれてゐる良人の、變り果てた姿に對しても、自分を置いてきぼりにしたといふ恨みよりも、どうしてもこれをやらずには居れなかつた良人の氣持ちに、素直な肯定が感じられる――。

やがて、庭の方から、家の中へ死體は運び入れられた。藻拔けになつた床を敷き直して、北枕を置いた。

警部は、簡單に、生年月日なぞを、手帖に書きとめた。

「別に、昨夜は、何かあなた方の注意をひくやうな素振りはなかつたのですね」

「はい。別に、これといふことはございませんでしたので、私も、全然知らずに居りました。何しろ、書齋は、中から棧を下すやうになつて居りますので、外からは何をしてゐるか、少しもわからないもんでございますから――」

「さうですか。では、すぐ、檢屍の醫者をつれて來ますから――本當だと、檢屍がくるまでは、手をふれるわけにはいかんのだが、近所づきあひで、特別の處置をしたんですよ」

「有りがたうございます」

「幸ひ、誰の目にもまだ、ふれなかつたのは、先生のために、大變よかつた」

る。

さういつて警部が、歸つた頃は、霧も晴れ、四邊はすつかり明るくなつて來た。三十分もしないうちに、制服の巡査がついて、檢屍が來たが、これは警部からの話がきいてゐると見えて、ごく形式的のものであつた。

「かういふ事件の死體としては、大變、體が綺麗ですな。さすがに、注意ぶかく、あとのことまで、考へて居られたのでせう」

と醫者は云つた。さういへば、四五日前に、透谷は美那子を呼んで、

「どうも、變だよ。頭のせゐで、肛門がひらいちやふやうな氣がするんだが」

といつたことを、美那子は思ひ出した。

「そんなことはありませんよ。氣のせゐですよ」

と、美那子は打消したが、そんなことも、今にして思へば悲しい前提だつたのかも知れない。檢屍がすんだので、美那子は、良人の着物を取りかへた。醫者のいつた通り、良人の死體は、どこも汚れてゐなかつた。

それから彼女は、近所の俥屋をたのんで、二通の葉書を、大急ぎで屆けて貰ふことにした。一通は、數寄屋橋に宛て、もう一通は、池の端の戸川秋骨に宛てゝ書いた。

「門太郎こと、昨夜死去つかまつり候。とりいそぎお知らせまで申入候。

何卒、皆様へも、おつたへ下されたく候。

十六日朝

北村美那

戸川秋骨様」

五

偶然、藤村が池の端の下宿に、秋骨を訪ねて、二言三言話しはじめたところへ、この葉書が舞ひこんだのであつた。

二人は、倬夫の手から、奪ひ合ふやうに葉書を受取ると、立つたまゝ、一緒に文面を讀んだ。それから二人は、長いこと對ひ合つて、首を垂れて、一語も發することがなかつた。嚴肅な、悲痛な、殆ど名狀しがたい身顫ひが、二人の身體を通りすぎた。その葉書には、たゞ、死んだことだけが報じられてあつたが、無論、自然の順序に因つて滅びたものでないことはわかつた。

「とりあへず、行かう」

「平田にもすぐ來るやうに、置手紙だけしておかう」

二人はお互ひに顏を見合せると、泣き出さずには居れなかつたので、なるべく、外を向き乍ら、上

野の山下から、鐵道馬車に乘つた。
藤村は「春」の中で、そのときのことを次のやうに描いてゐる。
『操は夫の友達の顏を眺めながら、彼程骨を折つて看病した甲斐もなかつたいふ殘念な面持ちで、前の夜のことを話した。白晝(ひる)のやうに明るかつた月の光りの靜かさは、青木の魂を誘つたらしい。彼は生の荒廢に堪へられなかつたらしい。庭の青葉のかげで、彼は縊れて死んだ。
「餘程私も氣をつけて居たんですけれど、いつのまにか拔け出して行つてしまつたのです」
と、操は嘆息した。
「昨夜は好い月だつたからね」
と、岸本も思出したやうに。（中略）
鶴子は母の傍に据ゑられて、おとなしく遊んでゐた。漸く獨りで步く位の年頃で、父の亡くなつたことも知らずにゐるらしい。その無邪氣な愛らしい顏付が、一層人々にあはれを催させた。
「父さん、ねんね」
斯う、鶴子は片言まじりに言つてゐた。
青木の遺骸は暗い部屋の方にあつた。そこは彼の書齋にして居たところで、窓はわざと閉めて、青葉を通して來る光線が、僅に戶の透間から射し込んでゐる。』

藤村と秋骨は、美那子のあとから、その死體のある部屋に導かれたのだ。美那子は靜かに、良人の顏から、白い帕子を取りのけた。見ると、鼻が少し尖つたといふだけで、愁のふかい神經質な透谷の顏は、生きてゐるときと、まだ大して變りがないやうに思はれる。手は、胸の上に、艱難と鬪ひ通した一生の記憶を掩ひかくすかのやうに、いぢらしく結び合されてゐる。藤村は遂に、淋しく、聲を立てゝ泣いた。藤村の聲に秋骨も泣き、美那子もこらへ切れなかつた。その傍にゐた英も、急に脅えたやうに、強く泣き出した。

暫くすると、はやくも何處からか聞きつけた新聞記者がやつて來た。そのうちに、數寄屋橋からも、おゆきと垣穗が、車をとばして來た。

段々人があつまつてくると、何しろ狹い家だけに、人が入り切れない程になつた。夕方父の快藏も、いつになく、氣六ケしさうな眉を寄せて入つて來た。

「家には家の宗旨がありますが、美那子の希望もあるし、又、故人の生前が、北村家の仕きたりとは、大いに違つたのだから、葬式も耶蘇がいゝでせう」

と、快藏は、おゆきの主張を押へるやうにしていつた。おゆきは、せめて、葬式だけでも北村家の宗旨によつて、堂々とやりたいと考へてゐたのである。さういふ點でも、この親と子がどうしても融和しきれない深い溝に苦しんでゐたことが、藤村達にも察しられた。

夜になると、快藏とおゆきは、英をつれて引上げた。通夜は、藤村たちによつて行はれた。その晚から翌朝にかけて、夕影、孤蝶、柳村、禿木、殘花などの、「文學界」の同人連は、みな集つて來た。明治女學校からも、校長の巖本善治をはじめ、高等科、普通科各クラスからそれ〴〵代表の生徒が、集つた。

翌朝の新聞は、一齊に、透谷の死を傳へた。

中には「やまと新聞」のやうに、「ブランコ往生」といふやうな見出しで、漫罵の記事を書いたものもあつたが、多くの新聞は、眞面目な追憶の記事をかゝげた。よく、苦節を完うした壯烈な自死として、今更のやうに、悼み惜しんでゐる文章を見ると、美那子は何だか皮肉な氣がした。こんなことをするんだつたら、何とかしようもあつたものだ、といふやうな、あとの祭りをいふ親類のものもあつたが、その場かぎりの無責任な言葉にちがひなかつた。透谷は、さういふ出鱈目が一番きらひで、さういふものと、どうしても妥協がしきれなかつたから死んだのだと、美那子は思ひながら、默つて、皆のいふ御託を聞流してゐた。

しかし、それにしても、石坂の家から、まだ誰も、悔み一ついひに來るものがないのには、美那子もさすがに、なさけない氣がするのだつた。

十七日の九時から、キリスト致による葬儀が、芝の自宅で行はれた。會葬者は一杯にあふれて、坂

の小徑まで、ずつと並んだ。

柩は黑い布で包まれ、青い十字架をかけ、そのそばに、白い牡丹の花が飾られた。明治女學校の女生徒たちによつて、悲しい讚美歌が起つた。その合唱の中に、齋藤冬の聲のないことは、一沫の淋しさであつた。

それがすむと、牧師は布を取りのけて、柩の蓋をあけた。人々は最後の別れを告げるべく、傍に寄つた。射しこむやうに入つてくる强い日光に照らされた透谷の死顏には、もう血の色はなかつた。眼は閉ぢ、瞼は重く垂れてゐる。やがて其の上に、再び蓋が閉ざれ釘をうちつける重い暗い石槌の音がひゞいた。

葬式は、芝の家を出た。長い列をなして、飯倉の通りから赤羽橋を渡つて、三田の方へすゝんだ。男は徒歩、女は車にのつて柩のあとに從つた。列は三田通りから右へ折れて、聖坂を上らず、豊岡町から松坂町の裏通をとり、三光町から坂にかゝつて白金臺をのぼつてゆく……。

其の日は初夏らしい暑い日で、まだ、單衣の季節ではなかつたから、皆は汗になやまされた。我慢しきれず、洋傘をさす人もゐた。その列の中には、文學界の同人たちは無論のこと、民友社からも、往年の論敵だつた山路愛山や、德富蘇峯も加はつてゐた。

葬列は、やがて白金の瑞祥寺についた。本堂の横にある大廣間で、一同一寸休憩した。

そのとき、弟の垣穂は、北村家側として、皆に挨拶して廻つた。透谷の死骸は、この瑞祥寺の境內の墓地に埋められたのである。

又、讃美歌が起つた。齋藤冬のクラスからは、藤村の戀人であつた佐藤輔子や、星野亮子も加はつてゐた。彼女たちは、薄小豆色の縮緬の紋付や薄い御納戸の小紋の紋付をきて掘られた穴のまはりにずらつと列んだ。

棺は、穴に沒した。上から土砂がはげしく搔きおとされた。女たちの中には、耐らなくなつて、お互の肩に取りすがるやうにして、泣いてゐるものもある。文學界同人たちの目からも、淚は滂沱として落ちてゐる。

棺の蓋は土中に隱れてゆく。藤村や秋骨たちは、とてもそれを見るに堪へない氣持ちで、ハンカチを目に掩うた。

年少にして、世俗の常識と戰ひつゞけて、遂に、窮地にはまりこんで、自ら生命を絕つた友達の心は、藤村たちには、誰よりもよくわかつた。恐らく、透谷をほんとうに理解し得た人は、透谷の肉親にはなかつたのである。透谷は、はやく小田原時代からして孤獨であつた。彼の父も、母も、弟も、彼にとつてのよき理解者では有り得なかつた。愛すれば愛する程彼との距離を生じた。

更に彼は美那子といふ愛人を得た。しかし愛人さへ結局は普通の人であつた。そして、透谷だけが、

何かにつけて、みんなから不健全視されるのであつた。透谷はそれに抗議し通した。俺が不健康なのではない。お前たちこそ不健康なのだ。俺はむしろ、健全なのだ、と主張したが、その主張は、遂に最後まで容れられなかつた。彼の肉體は、かうして滅びた。滅びつゝ、彼は尙自分を一歩も讓らなかつたのである。明治の靑年層に、若し死を讚美する傾向を生じたことがあつたとすれば、まだあと十年程ばかり、經つてからである。透谷の死が、さういふものと混同され易いのは、これまでの誤解である。

やがて、赤土が盛り上げられ、白木の墓標が立つた。みんなは順々に祈り、水や花を手向けつゝ、尙、泣いた。

六

透谷の死は、すぐ、仙臺にも傳はつた。しかし齋藤冬は、宮城病院の一室で、死ぬまで、遂に透谷の死を聞かされなかつた。

それについては、次のやうな黑光さんの文章がのこつてゐる。

「お冬さんが肺病になつて、もういけないさうだ。仙臺に歸つて死にたいといふので、迎ひに行つた家の人が、汽車を一箱買ひ切つてつれて歸る。今日もう直ぐ、その汽車が着く――といふことを人か

ら聞いて、私が仙臺驛に駈けつけ、いたましく變り果てたお冬さんを、やつと間に合つて出迎へたのは、その二十七年の何月でしたか。私はその時、脚氣を病んで、養生のため、横濱から郷里に歸つてゐたのでございました。

汽車はもう着いたといふので、走つて行くと、驛を出て來る擔架に會ひ、私は胸を衝かれたやうになつて、何も言へずそつと擔架の傍によつて、苦しさうに仰臥してゐる人の顔を見て、たゞ頭を下げました。

お冬さんは背が高く、その背に相應して見事な體格で、それからして人にすぐれて見えたものですのに、僅かの間に、これがお冬さんかと疑はれる程に痩せてしまつて、その痩せやうがまるで骨を磨いたやう、よく例へられる言葉ですけれど、あの病人に特有の、實際象牙のやうな顔をして「よく來てくれたわねえ」と小さい聲でいひ、でも私の心持ちを思ひやるやうにして淋しい微笑を見せました。

お冬さんは、そのまゝ家に入らず、宮城病院に入院して、そこの別室で、靜かに死期を待つてゐました。病院の中とはいふけれど、それは玄關を經ないで、庭づたひに入つて行ける全く獨立した草葺屋根の一棟でしたので、私は毎日見舞ひに行きまして、日當りのよい室にぐつたりとなつて寢てゐるお冬さんをつくづく見ました。

あんなに颯爽としてゐたお冬さんがと思つて、私は子供ながらも感慨無量でございました。

が、それ以上に何か私を考へ深くしてゐるものがありました。氣持ちだけでなら、お冬さはそんなに無殘にたふれる人ではない。病氣なら病氣で、これは精神的に原因してゐるのだといふ。決して鈍感とはいへない私でしたけれど、何か暗默のうちに了解するところがあつたやうであります。

お冬さんは、そんなになつてゐても、「よくなつたら話をするわ」と言つて、やつぱり指導者らしい心持ちが見え、私はほんたうにそのお冬さんのしてくれる話がきゝたくてなりませんでした。たうとうその話は、聞くことが出來ないで終りましたが、もし聞かされてゐたとしたら、私はいま、どんなことを心に刻んでをりましたか。お冬さんは、なやみを人にうつたへるといふたちの人ではないが、或は、その心の中に祕してゐるものを、それとなく示して、私に何をか教へてくれるのではなかつたでせうか。

果してさうしてお冬さんから何をか教へられたとしたら、私はどうなつたか　あの魅力のあるお冬さんのことですから、必ずその言葉は私の生命に、強い働きを殘して、少くとも或一時は私の思想を變化させるやうなものであつたに違ひないと思ひます。

しかしまたその人から聞くべくして聞かれなかつた言葉といふものも恐ろしいもので、私はその後、明治女學校に入つてから、故人と同じ寄宿舍の起臥に、却てありありと故人の心を讀み取ることが出來たのでございます。」（默移）

透谷の死が仙臺に傳はつたとき、この文の筆者の黒光さんをはじめ、齋藤家の人達が期せずして、思つたことは、このことを、お冬さんに知らしてはいけない。知らせると、お冬さんの死期を早めることになる。怪我にも耳に入れないやうに——といふことであつた。だから、お冬さんは結局、透谷はまだ生きてゐる。自分は透谷より先きに死ぬのだと信じて、死んだのである。お冬さんの臨終は六月の二十二日であつたから、透谷の死におくれること、約一ヶ月餘であつた。青葉山に若葉が萠え、廣瀬川に初夏の風が流れる日、お冬さんは、追ふとも知らず透谷のあとを追つたのであるが、このとき、お冬さんの死體を拭き清めようとして、着物をぬがした家人は、その肌に祕められた一枚の手紙の裏に、北村生よりと記されてゐるのを發見した。お冬さんは、遠く仙臺の病舍にあつて、死ぬまで、透谷の手紙を肌身にはなさず、持つてゐたのだつた。しかし、このことは、齋藤家の家人によつて、永遠に葬られたので、殆ど世間には傳はらなかつた。現に、美那子未亡人も、富井まつ子のことは知つてゐるが、齋藤冬のことはあまり詳しく知つて居ない様に見える。蓋し、明治時代の知的な女性達の代表者であつた齋藤冬も、かうしたプラトニックな戀愛に白熱しながら、蕾のうちに世を終つたのである。

「余は多くの者に欺かれたり。希望にもライフにも、すべてのもの、余を苦しむるなり」

と叫び、

「わが獨立のためには、愛をも犧牲に供すべし。嗚呼、男兒、何ぞ斯くの如く碌々として遠慮をのみ事とすべけんや」

と、日記に悲痛な記事をのこして、いはゞボロボロにまで傷いた肉體を、竟に自ら抛つた透谷にも、こんな可憐な傾倒者が、ひそかに思慕の夢を捧げてゐたのだが、それもいはゞ、見果てぬ夢となつて、僅かに薄命の天才の、最後の靜かな明暗を描いてゐるのである。

七

透谷の死について、その當時多くの人々が、追悼の文を寄せた。山路愛山は、國民新聞に「北村透谷君」なる一文を、禿木は「文學界」十七號に「蟬羽子を吊ふ」と題して、殘花は同號に追悼の詩を、「國民之友」二二七號に、追憶の文を掲げた。又「文學界」は當分は彼の遺稿を掲げて雜誌を賑はした。それらの中から、四、五の短章を拔萃して左に紹介して、この傳を終らうと思ふ。

(平田禿木氏曰く)

○　蟬羽子北村透谷君。君が淸高の音なほわが耳にあり、君が獨苦の姿なほ我眼にあり。あはれ死といふもののあやしき。

悲壯君が如きもの、死して何ぞ靜なる。激切君が如きもの、死して何ぞ寂たる。されど勁痔の氣

なほ君が眉宇に溢る。沈痛の氣なほ君が眉宇に溢る。死といふもののあやしき、われは君なきをまことと思へず。

一日、透谷橋畔の家に君を見る。君曰く「大濤怒り、激浪躍るにあらずや。人間何ぞ獨り靜なるを得む」と。またつぎて、「誰か我一生の悲しき事を傳ふるものぞ」といふ。

蟬羽子、君に妻あり、兒あり。君に友あり。なほ獨り自らその悲涙を負ふて、逝くべき處に、逝かざるべからざるか。二十七年五月十五日、夜深くして臥床人なし。月光朦朧、破窓を洩る。蟬羽子獨り庵を出でて、何れにか行きし。

綠樹陰暗く、早や夏虫の聲かすかに、君が心をさそふ者ありしか。君が燈火の如き眸をかき立てて、遙かに嫦娥の光を追ひつゝ、幽林の間、かしこにさすらひ、こゝにさまよひしならめ。

かくて月は西へ〳〵と落ちて、寂として其光の消えし一刹那、曉の風寒く、瘠骨を吹きて、露冷に君の病の袂に落ちし時、君が半生の悲涙と熱血は如何なる狂ひをわかしけむ。(下略)(亡友を弔ふ)

(島崎藤村氏曰く)

○　飄遊を好める面白き男として、彼を知れるもあるべし。俠骨を愛し、慈善を好みたる志士として、

彼を知るもののもあるべし。外面きはめて飄逸にして、内部極めて沈欝なる詩人として彼を知れるもののもあるべし。吾は彼と相知り相慕ひてより、極めて深情ある親友として忘るゝこと能はざるなり。いかに冷たき泥土に覆はるゝとも、いかに重困しき石碑を戴くとも、いかに一點の日光だも通ぜざる暗孔に押込めらるゝとも、子は今や、何の傷むところ、何の羈絆を苦しむところなきか。――今一度人間世界に歸り來つて、舊友と相見ることを欲せざるや。あゝ子よ、子が歩みつゝある死とは、夫れ詩人の歌ふ眠りの如きものか。眠りならば、樂しき眠りにてあれかし。

少年より大人に飛躍せりとは、テインがバイロンを評したる語なり。透谷子の如きも亦然りと言ふべきか。彼が思想上の歴史に於ては、一歩は一歩よりも高く登れるにあらずして、寧ろ、點々飛躍の痕をとゞめたる如し。(亡友反古帖)

(同藤村氏曰く)

○ 透谷の惜しい生涯は終つた。彼は誠意のこもつた戀愛をも、そこから出發した結婚生活をも、すべて疑問として、この世に殘していつた。彼の生涯は結局失敗に終つた戰ひだつた。彼の亡くなつた時は、ふうちやんはまだ極く幼かつた。漸く四才ぐらゐだつた。彼はその一人の力ない愛兒を未亡人の手に殘した。人としての彼にとつて、これが失敗でなくて何であらう。

しかしその慘憺とした戰ひの痕には、拾つても拾つても盡きないやうな光つた形見が殘つた。彼

は私達と同時代にあつて、最も高く見、遠く見た人の一人だ。そして私達のために、早くもいろいろな支度をしてをいてくれたやうな氣がする。

透谷の文學的生涯は、彼の早い結婚と共に開けた。人としての彼が步いた路は、近代の生活を考へるものにとつて、いろ〳〵な暗示を與へる。

彼には天才の誠實があつた。その誠實が彼を導いて、短く傷ましくはあるが、しかし意味深い生涯を送らせたと思ふ。（北村透谷集序）

（德富蘇峯氏曰く）

○　想ふに君は、才情濃かにして、神經過敏に、志望高く、且つ多くして、理性、意力、或は少しく之に伴はざりしものありしならむ。されば常人の眼に於ては尋常のことも、君に於ては、非常の事たりしなるべく、常人に於ては、齒牙に掛けざることも、君に於ては驚心駭魄の事たりしこともあるべく、君は常人の踏みこむ能はざる、天地の祕密に踏みこみたるかは、未だ知る可からずと雖も、常人の喫せざりし人生の苦味は、或は滿盞に之を喫したるなるべし。果して然らば、天才狂に近しとは、君に於ては、無意義の矯言として、之を排すべからざるなり。

君の精神は活動を好めり。詩人の血は君が血管に湧けり。君は、決して陋劣にして利己的なる泣

蟲にあらず。其の高情は、以て鬼神に質すべく、其の熱感は、以て天地に訴ふべし。（明治三十五年十月五日（國民新聞第三千八百五十一號）

（巖本善治氏曰く）

○　透谷が芝山內で死にました時は、私は恰度、北海道に居りまして、其の前後のことは知りませんが、彼の死を單に發狂のためと言うた人のあるのは、誠に殘念です。私は思ふに、芝山內の繁れる森の中の小さき庵室に病を養ひつゝ、不平、厭世、慷慨、美妙、幽遠、樣々に頭をなやましつゝ、夜一人寢て、フト室を出で、折柄の月影を慕ひつゝ、木間々々を吟行しつゝ、突然西行の歌を吟んで、直ちに其の美境に突入するといつた、純一無雜の誠を遂げ得ることが、卽ち彼の本色です（明治文學研究、第一卷第四號）

（戶川秋骨氏曰く）

○　畏友故透谷北村君。君は詩人なりき。思想家なりき。而して又、戰士なりき。君先づ世と戰ひ、人と戰へり。次いで魔と戰ひ、靈と戰へり。終に自己と戰へり。

孤劍陣頭に立ちて、慨然として叱咤したる其風姿、今尙見るが如し。

悲しむべし、幾百年の年を經たりし敵は、君の獨力に動かざりき。君終に仆れぬ。見よ、君が揮ひし鐵槌、玆にあり。君が豁しゝ太刀、彼處にあり。鎧袖ちぎり、兜落ちたり。あゝ想界荒寥草茫茫として、當年は夢の如し。

君世を去る前數日、君が僑居を芝の公園に訪ふ。君談笑常の如し。去るに當り、家人眉を顰めて曰く、君等と談ずる時、しかく樂しきが如し。何の故ぞ、孤獨の時、かの狂亂に似たると。悲慘の事跡、終に吾が腦裏を去らず。（下略）（博文館本透谷全集の序）

（戸川殘花氏曰く）

○　蝶となりし君は何處ぞ桃の花

題簽　佐々木泰南

昭和十七年一月十日印刷
昭和十七年一月十五日發行

北村透谷
定價二圓八十錢（停）

著者　舟橋聖一

東京市麹町區丸ノ内二丁目二番地
發行者　木田開

東京市神田區錦町三丁目十一番地
印刷者　白井赫太郎

東京市神田區錦町三丁目十一番地
印刷所　精興社

東京市神田區淡路町二丁目九番地
配給元　日本出版配給株式會社

發行所
東京市麹町區丸ノ内二丁目
丸ノ内ビルディング五八八區
中央公論社
振替口座東京三四番
電話丸ノ内五二二五　五三三八
會員番號第一一七五〇七號